
リミット

過酸化水素水

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リミット

【Nコード】

N0048L

【作者名】

過酸化水素水

【あらすじ】

友人達と馬鹿をやりながら、高校生活を過ごしている琢真。

ある日、密かに想っているクラスメイトの莉理と、一緒に下校することになる。その状況を涙ながらに堪能していた琢真だったが、その道中、街の女子中高生の間でよく当たると評判の『占い師』と遭遇する。『占い師』は二人に気づくと意味深な表情を浮かべたものの、その場は何も言わず去っていった。

その後、莉理と別れて気分よく家路につこうとしていた琢真の前に、先程の『占い師』が姿を現し厳かに告げる。

「あの娘は近日中に命を落とす」と……。

(死を告げられた少女を、影から必死に護ろうとする少年の話です)

2010/09/18 大幅改訂 — 2010

/10/30 小幅改訂

煌めき（前書き）

学園／青春／ミステリ 色が強い（と作者が思っている）作品です。
友情、^{うれしきもの}笑い（のよくなもの）、感動（かどつかは不明）、なサブ要
素も盛り込んでおります。

このジャンルに興味のある方は、どうか生暖かい目で、ご一読くだ
さい。

2010/09/17 大幅修正を図りました。

【改修内容】人称の変更。若干の構成。不要部分の削除。

ストーリー根幹は変わってませんので、一度最後までお読み下さ
った方にはあまり目新しさはないかもしれません。

煌めき

少女は家路を急いでいた。

帰路途中にある公園にたどり着いた頃には、周囲は夕暮れの橙から夜の紺へと移ろっており、辺りに設置されている街灯も灯り始めている。

いつもなら下校中の学生や帰宅中の会社員などの姿もあるのだが、今日に限っては人っ子一人見受けられない。その事が微妙に焦燥感を煽るのか、自然と足早になってしまっていた。

公園を横断し、出口付近に差し掛かったところで少女は一息入れる。

公園の中央に設置されている時計を見て、どうやら門限に合いそうな事が分かったからではなく、単に息が上がってしまったからだ。

一旦足を止めて、乱れた息を整える。普段あまり運動しないため直ぐに体力が切れる自分の体を、少女は恨めしそうに見つめた。

誰もいない公園に、少女の呼吸音だけが響く。

数度の深呼吸により息を整え、再び歩き出そうとした時に、何か微かな物音が聞こえてきた気がした。思わず立ち止まりゆっくりと左右を見回す。特に変わった様子はない。

気のせいだったと、少女は気を取り直して再び歩き始めようとした矢先。

「
「

急に背後から声を掛けられた。小さな声だったが、シンとした公園に音量を阻害するものではなく、少女の耳にも届いた。

驚きから足は止まってしまっても、悲鳴を抑える事には成功する。
動悸が乱れた胸そのままに、恐々と振り返ろうとするが。
少女に出来たのは、勢いよく迫ってくる煌めきを、視界の端に映
す事だけだった……。

煌めき（後書き）

処女作です

『準備は良いか?』

監視役と称して、一人離れた場所から交信している修司しゅうじの声が、ハンスフリーになっていてる携帯から響いた。

その声を聞いて、琢真たくまは素早く仲間達の様子を伺った。目標付近に控えている仲間は三人。彼らは皆、琢真に向かってGOサインを出していた。それを確認し、琢真と琢真の背後で作業をしていた二名は顔を見合わせ、重々しい表情でゆっくりと頷き合う。作業は終わった。

「ああ。こっちの準備は完了した」

琢真は皆を代表して、厳かに修司に告げた。

『では早速始めてくれ。そろそろ誰かに気取られるやもしれん……』
修司が平坦な口調で言う。それきり通話は途切れた。

琢真は物言わなくなった携帯をズボンの尻のポケットに押し込むと、予定ポイントに素早く移動した。

一歩踏みしめる度に重量を感じる。それもその筈で、琢真の背中にはこの日の為に皆で完成させた、とある装置しやうじが背負われていた。

しかし、琢真がそれから解放されるのも後少しの時間だけである。

「ふう……。じゃあ、行くぞ」

一度深呼吸した後、琢真は前を向いたまま自分の背後に立った仲間達に声かけた。

「ああ……」「……了解」

気迫が内に押し込められた様な返答を聞くと、目標地点を見据えて静かに息を整える。
僅かの後?????

「READY……GO!」

琢真は叫び、それと同時に飛び出すように駆け出した。荷物を背負っているせいか、立ち上がりは遅い。だが、一步一步確かな感触を持って地面を蹴り、足を前へと運ぶ。腕を振り足を振り上げて、更に速度を上げていく。

意識を背後に飛ばすと、自分の後にピッタリとくっ付いている仲間の気配を琢真は感じた。決して離されないという確かな意志が伝わってくるようだ。

今回の作戦行動では琢真と彼らの距離感。全力で走る琢真から引き離されてはいけない。これが最も重要なことでもあった。

何故なら、琢真の背中装置から伸びている紐を彼らはしっかりと握り締めたまま走っているからだ。その紐の先には装置のストッパーが付いていた。ストッパーはそれを外す事により、装置内部の仕掛けを起こす為のものである。

万が一琢真との距離が開いて紐が伸びきり、ストッパーが外れてしまうことは、それは即ち作戦の失敗。強いては大惨事の発生を意味していた。

その為、この作戦行動が成功するかどうかの鍵を握っているのは、背後の二人だと言えなくもなかった。彼らもそれを自覚しており、それが断固たる意志の発揮に繋がっていた。

そんな頼もしい仲間達に応えるように、琢真も集中力を高めていった。

そうして自身をトップスピードに押し上げた頃には、琢真は目標地点を間近に捉えていた。

「今だよっ!!!」

予め目標地点付近に控えていた仲間の合図に、琢真の背後の二人が慌ててブレーキを掛ける。彼らはずんのめりながらも、自分の手に掴んでいた紐を、勢いよく引つ張った。

その抵抗を背中に感じるやいなや、琢真は全力で地面を蹴り上げた。

それにより装置のストッパーが外れ、そこから噴出される液体の勢いを推力として、大幅な距離を跳躍する。

筈だった。

「ぐほっ！」

だが、現実にはストッパーが外れる前に二人の引つ張る力に負け、後ろ向きに地面に叩きつけられている男の姿がそこにはあった。

追い討ちをかける様に、勢いよく琢真の顔に水が降り注ぐ。

後ろに仰け反っている自分を感じた瞬間。背中に背負っていた装置が地面と激突する衝撃を緩和してくれることを琢真は期待したが、何故か直接背中から落ちていた。その所為で息が詰まってしまったが、琢真はそれを何とか落ち着かせると、身を起こしながら痛みを払うように首を振った。そして、自分の傍に居た仲間達を見回す。だが、彼らの目が何かに呆然と視線を送っているのに気づき、ゆっくりとその先を追った。

彼ら視線の先には、今まで琢真が背負っていた筈の装置があった。ただ、視線は下ではなく、上に向けられていた。地面ではなく、空へ。

ああ……綺麗だな、などと。琢真が思ったのはそんな事だった。

校舎の上空まで昇ろうとする装置から、噴出する水の様子がとても印象的で

作戦行動を行っていた仲間達や、周囲でこちらを伺っていた野次

馬達は、皆呆けたようにその光景を眺めていた。

「……飛んだなあ」

仲間の一人である、金子が呟く。その声には作戦は失敗に終わったにもかかわらず、悔恨の調子はない。

ふと、琢真は自分が千切れた紐を握っている事に気づいた。装置を背負うために取り付けた紐だった。どうやら倒れた際に、引き千切ってしまったらしい。

（ああ、なるほど）

装置が飛んでいった原因を、琢真はぼんやりと理解した。

琢真を含めた仲間たちは皆、無言で装置を目で追っていた。

青春。誰の胸にもそんな言葉が浮かんでいた。作戦は失敗に終わってしまったが、それとは別のところに確かな充実感がある。今自分達は限りある大切な時間を過ごしている。それはそんな想いに似ていた。

屋上より高く昇った装置は、やがて万有引力の法則に基づきゆっくりと下降し始めた。空中に緩やかな放物線を描きながら、徐々に速度を増していく。目測では、装置は体育館と東校舎を繋ぐ渡り廊下付近に不時着すると思われた。

だがその前に、不運にも廊下を通りかかった、誰隔てなく優しく接してくれることで生徒人気が非常に高い教頭の背中に墜落してしまった。

教頭は前のめりにぶっ飛ぶ。顔から地面に着地したのが、かなり離れている琢真の位置からでも見てとれた。

突然の出来事に、世界が凍りついたかのような静寂が訪れる。琢真も仲間達も誰も声を発しない。

いつまでも続かれるかと思われたそれは、教頭に付き添っていた教師の悲鳴によって直ぐに破られる事になった。

「きよ、教頭先生！！ 教頭先生！！ ……うわあっ 白目剥いてるっ！」
教師達の悲痛な叫びが校庭に響く。
事態は既に青春のページといった様相から、一気に傷害事件のような様相に移り変わっていた

琢真がその光景を呆然と眺めていると、携帯が慌しく鳴った。視線はそのまま通話ボタンを押し耳に当てる。
『逃げる』

通信者の修司はその一言だけ告げると通話を切った。
ハッと我に返り、琢真は仲間達に呼びかけようとする。も、既に仲間達は琢真だけを残して校門に向かって走り出していた。

(しまった、出遅れた！！)
と、焦った琢真が後に続こうとした直後。

「こらああああ！ またお前かああああ！！」
怒号を上げながら、猛然と走り寄ってくる教師がいた。

その声は琢真にとって聞き覚えがあるところではない。顔を見ずとも教師の正体は分かった。
体育教師の池山いけやまである。

(げっ、気づかれた！！)
琢真はすぐさま駆け出した。

前方を見ると仲間達は丁度校門を駆け抜けている所だった。呼び止める時間も惜しく、琢真は全力で後を追う。

「待たんかああ！！ 芳垣よしがきいい！！」

池山は鬼のような形相で叫び続けているが 悲惨な末路が見ているのに態々待つ訳が無かった。

「きよ、教頭をやったのは、俺じゃない！！」

殺人を起こしながらもそれを必死に否定する犯罪者のような応答を返しながらも、琢真は足は止めない。

「じゃあ何で逃げるっ!? やましい事があるからだろうがっ!」

「そ、そんな顔で追ってきたら、誰でも逃げるわっ!」

「なんだとおお! 俺の顔が変だと言いたいのかああ!」

更に池山のスピードが上がった。三十代後半のおっさんが走る速度ではない。

(や、やばい。このまま校門に向かっても追いつかれる……っ!)

琢真は急遽進路を変え、校門から伸びている通路の脇に植えられている桜の木々の間を突っ切った。そして、校門裏の右手にあるプールの裏側に逃げ込む。

「む、どこに隠れた!? 出てこい芳垣!! この辺に隠れているのは分かっているんだぞっ!」

桜の木が視界を防ぐ事に一役買ったのか、琢真を見失ったらしい池山の声が聞こえてくる。ただ、ここに居ても見つかるのは時間の問題なので、急いで緊急避難場所に移動することにした。

その場所とは、体育館裏のとあるポイントだった。

学校の敷地を囲んでいる塀は長いネットで囲われており、基本的には塀を乗り越える事は出来ない。だがそのポイントだけは、傍目には分からないがネットが破れ、人一人通れる位のスペースがあった。

今のような緊急事態を回避する事が主な使用用途の、学校の一部の生徒達の間だけで語り継がれている、教師達には秘密のスポットの一つだった。

プールは体育館と隣接しているので、ポイントには直ぐに辿り着くことが出来た。一度周囲を伺う。人影は無い。

どうやら池山に捕まらずに済んだと琢真は安心し、ネットに向き直った。

しかし、琢真はそこで思わぬ光景を目撃する。

(ネットが直されている！？)

明らかに修繕された跡があり、スペースは完全に閉ざされていた。引っ張ってみてもネットは微動だにせず、とても抜けられそうに無いことが分かった。

予想外の出来事に動揺した琢真は、慌てて修司に連絡を取った。

『 池山から逃げ切ったのか？ 』

繋がった後の第一声で、修司は琢真の無事を確認してくる。どうやら今の状況は把握しているらしい。それならば話は早いと、琢真は若干落ち着きを取り戻しながら質問に答える。

「 いや、校門が無理そうだったから、体育館裏に移動したんだが

」

『 …… ああ。ポイントが修繕されてて困ってるのか 』

「 知ってたのか！？」

思わぬ返答に、琢真は思わず叫んでしまう。

『 大声出すと見つかるぞ 』

琢真の焦燥とは違って変わって、修司は落ち着いた声だった。自分分は安全圏にいるという余裕からだろう。

「 …… いつの間に修理されたんだ？」

苛立ちを抑えながら、琢真は囁く様にして尋ねた。

『 修繕されたのはごく最近の話だ。ドジを踏んだ奴が居て、教師にスポットがバレてしまったらしい 』

「 なんてこった…… 」

その生徒に琢真は怨嗟の声を上げなくなった。

だが、次に続いた修司の頼もしい言葉によって、そんな不安は払拭された。

『 …… ふむ、俺がここから安全なルートを指示してやるのか？ 』

「 マジで！？ ここからってことは、修司はまだ屋上か？」

『 ああ 』

修司はこの作戦行動の際、見張りと称して一人屋上に待機していた。

上からなら人の動きがよく分かる筈なので、逃げ切る為には願ってもない提案である。

「頼む。今捕まったら間違いないで池山に殺られる！」

「分かった。では、俺の指示に従って移動しろ」

「了解！」

持つべきは親友だった。

『先ずは、急いで体育館の前に移動するんだ』

「え？ そんな現場の目の前に移動して、大丈夫なのか？」

『大丈夫だ。教師の目は校門付近に集中している。俺を信じろ』

「分かった！」

体育館前は教頭が倒れた場所の目の前なのだが、修司の指令を信じて移動する事に決める。そうして、琢真はプールとは反対側を周り、体育館前に飛び出した。

しかし、直ぐに琢真の口から不思議そうな呟きが漏れる。

「あれ？」

人間、あまりに気が動転すると頭の働きが鈍化するらしい。この場で声を出す事は己の破滅を意味していると言うのに。

そこには、気絶した教頭を運ぼうとしている体育教師達が集まっていた。

琢真の声に気づいたのか、体育教師達は僅かな驚きの後、険しい表情を浮かべながら琢真を取り囲む。

「芳垣。堂々と出てくるとは感心だな」

いつの間に合流したのか、池山が指をポキリポキリと鳴らしながら、琢真に近づいてくる。

「あれ？ しゅ、修司君？ こ、これは一体……？」

まだ事態が飲み込めない琢真は池山の気迫に押され、携帯を耳に押し当てたまま後ろに下がりながら修司に確認するが

『犠牲は必要だ』

修司はそう言い切ると、通話を一方的に切った。

「え……。あっ！ き、切り捨てられたっ!？」

琢真がようやくその事実気づいた時にはもう、鼻息荒い池山に取り押さえられていた。万力のような力で琢真は身動き一つ取れない。

「く、くそおおおおお！ あのやるおおおおおおおお!!」

ただ琢真の心からの怨嗟の叫びだけは、空しく校舎に反響するのだった……………。

「失礼しました……………」

琢真は一礼して、生活指導室のドアを閉めた。

池山含む教師達の怒号から解放されたのは、琢真が捕まってから一時間後のことだった。本来ならば説教好きな池山の拘束は、とてもそんな短い時間では終わらない。ただ、目を覚ました教頭が許してくれたのと、今日は教師達の重要な会議があるらしいことから、何とか解放してもらえたのだった。

といっても手放しの解放ではなく、明日までに反省文を提出する事になってしまったのだが……………。

時間こそ短かったがその分密度が濃かったため、琢真はげっそりと疲れ果てていた。

「修司め……………」

次に修司に相対した時の為にあらゆる罵倒を考えながら、琢真は生活指導室から自分の教室に戻る。

放課後で、且つ捕まってから一時間以上過ぎているので、もう誰もいないだろうと思っていた教室には、まだ数名の姿があった。

「トロいわねえ。捕まったのアンタだけでしょ」

教室に入るなり、窓際の机の上に座っていた女生徒が、笑いながら琢真を罵ってくる。どうやら、先ほどの騒動を教室から見物していたようだ。

「……………修司に騙されたんだ」

「だからトロくさいって言ってんのよ。いっつも騙されてるじゃない」

「うるさいな！ そんなこと言うために残ってたのかよ」
いくら付き合いが長い友人だといっても、あんまりな言い草だった。

「心外ね。折角慰めてやろうと思って、残ってあげてたのに」

そう言っつて、女生徒は自慢のこげ茶色のショートボブを大げさに振りながら、嘆くそぶりを見せる。言葉とは裏腹に顔は笑っているので、間違いない嘘だ。

この少女。『愛』は黙っていたら文句なしの美少女……ではある。小さな顔に大きな明るい瞳が印象的で、細身に見えるが主張すべき所は主張し、引つ込むべきところは引つ込んでいる。つまり、スタイルも良い。

写真を撮っつて道行く人に尋ねれば、恐らく十人中九人が美少女と認めるに違いない。なお、残りの一名は特殊な嗜好を持つ人間枠だ。しかし、口の悪さが足を引つ張り、愛の事を良く知る琢真などは、どうにもその印象を感じにくかった。

「琢真君、どんくさいね」

「必死に逃げ惑う姿が良かったよ」

同じく見物していたと思われるクラスメイトの女子達は、笑いながら琢真を貶してくる。それに懽然とした視線を返しながら、琢真は自分の机に向かい帰り支度を始めた。

「大体、ペットボトルを何個も束ねて作ったペットボトルロケットを背負っつて、幅跳び世界記録なんて無理があるのよ」

「……修司に言え」

琢真とて望んでやった訳ではなかった。ただし、いざ作戦が始まると若干ノリノリだった部分があったのは事実である為、あまり強くは言えない。

「無理だつて。まあこっちは笑わせてもらつたからいいんだけどね」
「本当に琢真君つて、期待を裏切らないよね」

「ここからだ、後ろ向きに倒れた時の姿が潰れた蛙みたいに見える
だよ」

その様子を思い出したのか、再び女達は笑い出す。

「くっ……」

言い返したかったが反論が思いつかず、琢真が俯いていて言葉を
搜していると、頭上から優しい声が聞こえてきた。

「大丈夫？ 芳垣君」

その声にハッと顔を上げると、優しそうな女生徒の姿がそこには
あつた。

小ぢんまりとした顔に掛けた淵なしの眼鏡の奥で、若干細目の澄
んだ瞳が、心配そうに琢真を見つめていた。一寸の曇りもない白い
肌の、思わず抱きしめたくなるような細身の体を、僅かに身を乗り
出すように前に傾けている為、セミロングの綺麗な黒髪が、さらさ
らと肩から零れ落ちている。

「い、いや。その、藍田さん……」

琢真は緊張で、徐々に顔の血流量が上がっていくのを感じた。

「頬が少し赤いけど、殴られたの？」

「へっ？ あ、いや、うん。一発ね……」

池山曰く。『教育的指導』だそうだ。

ただ琢真が赤くなっている原因は、恐らくそれだけではない。

「大丈夫？ 保健室で湿布貰つて来ようか？」

「い……いやいやいや、これくらいいつもの事だし……大丈夫だよ
！ ホラ！」

問題ないことを証明するため、琢真はその場でスクワットや腕立
てを行い始めた。

「ぶふっ！」

「くくくつ。一生懸命なんだから、笑っちゃ駄目だよ愛」

横手からそんな声が聞こえたような気がするが、琢真は気にしないことに決めた。

「そう。良かった」

につこり微笑んでくる少女の笑顔に、琢真は思わず腰が砕けそうになるが、机の端を力一杯掴んで、崩れ落ちることを阻止する。

「あ、藍田さんも、さっきの見て……た？」

琢真は当初の予定とは大きく異なり、恐らく無様だったろう自分の姿を、彼女に見られていないかが心配だった。

「あ、私は」

「大丈夫。莉理は席を外してたから」

愛の言葉に、琢真はホッと安心する。

「うん。事情はよく分からないけど、池山先生に叱られてるってことだけ聞いたの」

「そ、そう。それは良かった」

「？」

ちょこんと首を傾げ、莉理は不思議そうな表情を浮かべる。

可愛らしい。と、赤くなつた顔を誤魔化すように琢真は声を張る。

「そ、そういえば、藍田さん。ぶ、部活は今日ないの？」

「え？ あっ本当。ごめんなさい。そろそろ時間だから、私行くね」

時間を忘れていたのか、莉理は教室のクラスメイト達に別れを告げて、足早に歩き去っていった。

その後姿を未練がましく見つめていた琢真だったが、あることに思い至る。

（待て。よく考える。俺のことを心配して残ってくれていたんだ……これは脈があるってことなんじゃないか！？）

そう思つと、一気に気分が昂揚してきたのが、うへへ、と喜びの声が琢真の口から漏れる。

「ちなみに。莉理が残ってたのはクラス委員の仕事のためよ。決し

て、アンタを心配して残ってたわけじゃないから、誤解しないように」

「そ、そんなこと……誤解してないぞ」

琢真は言い返すも、その声に力は無かった。

「ついでに言うと、アタシ達も莉理の手伝いで残ってたんだからね？」

勘違いすんじゃないわよ？ と、その後には続いているのだろう。いちいち癪に障る奴だと琢真は思った。

「まあまあ。苛めちゃ可哀相だよ」

「そうよ。心配してくれただけでも、一步前進って考えないと」

琢真は言葉こそ優しいが、顔は完全に笑っている彼女らの言動は信用しない事に決めた。

「別に前進とか……そんなの関係ないし」

「いい加減、見え透いた嘘はやめなさい」

否定の言葉を、愛に一瞬でぶった切られる。

「そんな事ばかり言ってる……耳がすぐく赤いよ」

「もう気持ちは皆分かってるんだって！ ホント可愛いね芳垣君って」

「でもまあ、アンタにしては頑張った方が……」

違う！ と、琢真は言い返す。が、更に冷やかしの言葉を掛け続けてくる女達に、押され続ける。必死に弁解するも、多勢に無勢。

そもそも口で女には勝てる訳もなく。結局琢真は教室から逃げるように飛び出すことになった。

(3)

3

『金曜日』

昼休みの屋上は閑散としている。

というのも当たり前前の話で、基本的に屋上への立ち入りは認められていないからだ。いつもは固い錠前に閉ざされている場所なので、通常なら誰も外に出る事は適わない。

だが、ある手段を用いればその問題はクリアできた。屋上へ上がる階段の踊り場にあるひび割れた壁の隙間に鍵が隠されているのだ。その事は体育館裏のポイントと同様に、一部の生徒達の間のみで伝えられている秘密の一つだった。

ただ鍵の存在を知っている者達で、稀に利用するものはいても、毎日そこを利用してはいるようなもの好きは一人しかいなかった。

琢真はその人物に会うために、購買で買ったパンを潰れるほど握り締めて、三段抜かして階段を駆け上がる。屋上へのドアを勢いよく開け放つと、開口一番怒声を浴びせた。

「コラアア！ 修司でめえ。昨日はよくも騙してくれたなっ！」

その人物。矢向修司やうしゅうじは、屋上のベンチに足を組んで腰掛けて、手に持っている小説に目を落としていた。大声に反応し僅かに顔を上げ 琢真の顔を確認すると、再び視線を落とした。

「無視すんなっ！」

琢真は怒鳴りながら修司の目の前まで近づいていく。

「電話もメールも無視しやがって……お前のせいで捕まって説教食

らった拳句、反省文を十枚も書かされる羽目になったんだぞ!!」
反省文は大抵の場合二枚で済まされる。十枚というのは異例だった。

昨日の夜から書き始めたが、苦心の末書き終えたのは朝方になってしまっていた。お陰で琢真は今日は一睡もしていない。

「そうか」

そんな琢真の怒りを他所に、修司は全く意に介していないように淡々と告げる。

「そうか。で、済ませるな!」

「うるさいな。読書の邪魔だ。今良い所なんだ」

「うるせえ! 反省を要求する!」

「ああ悪かった」

まるつきり反省の欠片もない棒読みの謝罪に腹が立つ。ただ、修司と付き合うのにこれ位のことと頭にきていたら、毛根が持たない。怒髪天について、毛根を痛めるのも馬鹿らしい。

琢真はお世辞にもふさふさとは言えない父親の頭部を思い浮べて、ふうふうと息を整え、荒れかえった心を鎮めようとする。

「昨日は無様だったな」

「お前のせいだろおおおおお!!」

怒髪天をついた。

「まあ落ち着け。お前の犠牲は必要不可欠だったんだ」

言い換えれば、琢真の犠牲は作戦の内だと言っているのと同じである。

流石にその事には気づいて、琢真は怒りの声が内から湧いて出る。「ふざけんやつ!」

「まあ待て、考えてもみる。もしお前があのまま逃げ切っていたとする」

「ああ、そうしたかったよ」

どうしても皮肉な調子が入ってしまうのを抑えられない。

「だからといって、下手人が誰か判っている教師達の追及が、行われ
ないわけではない」

「む……まあそうだな」

確かに顔見られたし、そうなっていたかもしれない。

「当然。責は今日追及されることになっていただろう」

「そ、そうかもしれないが……」

だからと言って、怒り狂っていた池山の前に自分を差し出す必要
はあったのか？ という疑問は尽きない。

「その場合。教師の追及の手はお前だけではなく、最悪周囲にも広
がった可能性がある」

「そうか……？」

「もちろんだ。教師……特に池山はお前の担任ということもあって、
お前の事を把握しているからな。お前一人であんなものを作るわ
けはないことには、冷静になれば直ぐに気づいただろう」

「つ、作れないけどさ、確かに」

「だが昨日は教師達の会議の時間が差し迫っていた事もあり、また
現行犯だったしな。アイツは脳筋だから、焦りと怒りでそんなこと
には考えが及ばなかった筈だ」

「……………」

昨日の鬼のような形相の池山を思い返して、確かにと頷く。執拗
にいびられたが、仲間の存在を疑うような発言は殆ど無かったから
だ。

「……という事は、だ」

「……………ああ」

「その日の内に叱られておくことで、被害を最小限に留め今日の被
害を減らした今こそ、良策を打ったことで得られた、最良の結果だ

とは思わないか？」

「ま、まあ、そう言われたら……そんな気がする」

何かがおかしい気もしていたが、琢真はそれが何かは分からない。「お前が身を張ったお陰で皆が被害を免れたんだ。渡辺や佐藤達皆、お前に感謝していたぞ。流星、琢真だとな」

「そうかな……？」

「もちろんだ。全部お前のお陰だ。ひゃっほう最高だぞ琢真」

修司の声は平坦である。心が籠って無いのは明らかだったが、琢真は気づかなかった。

(そう言われると……悪い気はしないな)

休み時間に昨日は逃げ延びた渡辺達が、笑いながら肩を叩いてきたのはそういう意味が込められていたのか。琢真はつきり、一人捕まった自分を馬鹿にしているのだとばかり思っていた。

(へっ、アイツら……)

自然に笑みがこぼれる。

「……たわいもない」

「え？ 何か言った？」

「いや大したことはない。それより琢真」

首を横に振りながら、修司は眼鏡を片手でくいつと押し上げる。

「何だ？」

「次はコレをやってみないか？ 昨日テレビで放映されていて、何故かどうも気になってな」

そう言っつて、脇においていた雑誌を開いて、ある特集ページを見せてくる。

「……バンジー？」

そのページには、愉しそうにバンジーをしている外国人の女性達の写真が掲載されていた。

「うむ。そうだ」

「ふーん。面白そうではあるが、どこですんだ？　この辺りでどっかやっつてる所知ってんのか？」

琢真は以前ネットで観た、海外のバンジー動画を思い出しながら尋ねる。その動画では、確か橋の上から飛んでいた。こちら辺にそんな場所があったらどうか、と琢真は記憶を探りながら尋ねるが。

「いや、ここで」

眼鏡の位置を微妙に整えながら、修司は真顔で即答した。

屋上に、乾いた風が通り抜ける。

「い、いや、ここでって、ど、道具はどうすんだ？」

もつと突っ込むべき部分はあったが、動揺している琢真はそんな現実的な質問しか出来なかった。

「それは俺が用意しよう。俺の役割は企画・準備係だからな」

「い、一応聞くが……だ、誰が飛ぶんだ？」

その問いには答えず、修司はジッと琢真を見つめる。

「む、無理無理無理無理！！」

「安心しろ。下にはちゃんとマットも引く」

「……マットって、どんなの？」

期待を込めて琢真は確認する。琢真の脳裏にあったのは、ビルの屋上から飛び降りるスタントなどで使用されるような奴だった。

「陸上部のを拝借する」

琢真は陸上部が使っている、高飛び用のマットを思い浮かべる。

どこの高校にもある普通のマットだった。

「いやいやいや。屋上から飛んで、あんな小さいマットじゃ衝撃殺せないだろ！？」

「大丈夫。ロープもあるんだ。それで勢いは大分殺されるだろう」

「いやー無理無理。仮にそうだったとして、あんな小さなマットの上に巧く着地できるとは思えない！」

飛んだはいいものの肝心のロープが足から解け、落下地点がマッ

トから逸れて、頭から地面に叩きつけられ、散華した自分の姿が脳裏に浮かび　　琢真は慌てて首を振ってそのイメージを払う。

「いや、マジ無理だつて」

「大丈夫だ。それにそもそも上手くいくから、マットの出番はない。安心しろ」

(だからその根拠はなんだ!?)

琢真は修司の意味不明な自信が疑問だったが、口にしたのは別の事だった。

「大体、昨日のペットボトルロケットで走り幅跳び新記録が出せるか実験も、まだちゃんと確かめられて無いじゃねえか。そっちはいいのかよ!」

なお、昨日使用した装置は既に池山に没収された上、分解されてしまっている。

「やはりストッパー作成に手を抜くのではなかったな……まあ構わん。どの道十本程度のペットボトルで、六十キロ超のお前を持ち上げる事なんて無理なことは分かっていた」

「無理つて……分かってたんなら、なんで試したんだよ!」

「なんとなくだ」

修司は昔から何か唐突に思いついたことを、琢真を使って実験してみようとする悪癖がある。最初の頃はお遊びみたいなものだったので、琢真も乗り気で引き受けていたが、最近は徐々に内容がエスカレートしているように感じていた。

思い付きを実行するために必要なことを考える事が出来る頭の良さで、それに費やす意味不明な行動力を持ち合わせていたため、大抵の事は実現できてしまうことが性質悪かった。

「金子にでもやらせろよ!」

「奴では重過ぎる」

酷い言いようだが、琢真はクラス一の巨体を思い浮かべ確かにか
うかもしれないと思ひ直す。

「大丈夫だ。俺を信じろ」

「その言葉が一番信じられん！」

先日、自分を陥れた際の修司の『大丈夫だ』を思い出し、そう断
言する。

琢真とて、いつもいつもその言葉に騙されるわけではないのだ。

修司はそんな琢真を哀れむように見つめる。押し一辺倒だった調
子から一転、嘆くような表情を浮かべながら呟いた。

「ふう、勇気の無い奴だな……」

「……何？」

聞き捨てならない発言だった。

「お前がそんな度胸の無い男だとは思わなかったよ……正直、ガッ
カリだ」

「待て……俺に勇気が無いだと？」

「ああ。俺の知っていた芳垣琢真は、既に死んでいたようだ……」
「なんだと？」

だったら、今ここにいる自分は何なのだろうか？ などと哲学的
な事を考え始めて 琢真は自分がそんな事を考えられる程、
頭が良くない事を思い出した。

「こんなチキン野郎に藍田が落とせるはずもないか……なるほどな」
修司は勝手に想像し、勝手に断定する。

思わず動揺して、琢真は声を張り上げた。

「あ、藍田さんは関係ないだろ……」

「いいや関係ある。度胸のない男より度胸のある男を嫌いという、
奇妙な女もいないだろうしな」

それは確かに。

「くっ……」

思わずうめき声が漏れる。明らかに琢真は劣勢だった。

「あ、やっぱりここだったのね」

突然。二人だけだった屋上に第三者の声が割り込んでくる。

ドアの方を振り返ると、愛が機嫌良さげな笑顔で、こちらに向かって歩いてきていた。

「何か用か？」

今までのやり取りの様子とは一変し、修司は警戒するように尋ねる。

その気持ちは琢真も分かった。警戒しているのは自分も同じだったからだ。

愛が自分達に向かって笑顔を向けるのは、馬鹿にする時、嘲笑する時、からかう時、何か琴線に触れた時、そして、頼みごとをしてくる時だけだからだ。

そして、その頼みごとは、大抵がロクでもないことだった。

「何よ、そんなに警戒しないでよ」

愛はにつこりと二人に微笑みかけてくる。その笑顔に、大抵の男はコロツと騙されるに違いないが、付き合いの長い二人にだけは通用しない。

「ちょっとお願いがあるの」

頼みごとバージヨンのようだった。二人の警戒心が増す。

「だから何だ？」

「今日の放課後、ちょっと付き合っただけなんだけど」

「嫌だ」

琢真と修司の声が、綺麗に重なった。

そう言い放つと同時に素早く身を起こし、屋上から逃げようとしてドアに向かう。

「ちょっと待つてつて。逃げるなら話を聞いてからにしてよ」

愛は二人を瞬時に回りこみ、両手を広げて進路を通せんぼする。

「話聞いたら、無理やりつき合わせる気だろ」

話を聞いた人なら最後まで付き合いなさいよ、という理屈で、二人は今まで何度も苦渋の労働を強いられてきた経験があるので、琢真がそう突っぱねるのは当然だった。

二人は阿吽の呼吸で、それぞれ愛の反対側の横をすり抜ける。

「分かった。もう話聞いたから付き合えなんて言わないから……」

そう言いながら、愛は逃げ出そうとする二人の上着を背後から掴んで、引つ張り止める。ミチミチと服から音がする。

「分かったから離せ。服が破れる。仕方ないから、話だけは聞いてやる」

修司は眼鏡の位置を整えながら、渋々といった様子で愛に向き直る。

であれば琢真一人異論を唱える訳にもいかず、嫌々話を聞くことにした。

「よおし、いい心掛けね」

愛は再び怪しい笑顔を浮かべて、話し始める。

「今日の放課後、『占い師』に会いに行かない？」

「行かない」

再び二人の声が重なる。

踵を返した二人がドアに後一步と近づいた所で、再び上着が引つ張られる。

何とかそのまま力で押し切ろうとするが、その場から一步も動けない。

「最後まで聞きなさいよ！」

「占いなんて、クラス的女子連れて行けばいいじゃねえか！」

「そうだ、それに占いななどナンセンスだ」

三人とも、力を込めるあまりプルプル震えていたので、声も微妙に震えていた。

逃げようとする男二人に対し、逃がすまいとする女一人という図式だったが、力は拮抗している。

「暇な子が誰もいなかったのよ!」

「じゃあ明日行けばいいだろ!」

「その通りだ。占い師は逃げない。明日にしておけ」

面倒な事この上ないので、二人で必死に説得しようとする。
だが。

「アタシは、今日、行きたいのよ!!」

内容に独善的理由が入り込み始めた。大変拙い傾向だ。

「知るか! 一人で行けよ!」

「嫌!」

「たまには我慢する事を覚えろ」

「うるさいっ!」

琢真と修司は後一步が踏み出せず、右足がプルプルと震えながら空中を彷徨っている。

「では、誰か別の男に頼むんだな」

修司が言えば、

「そうだそうしろ! 愛が頼めば、大抵の男は付き合ってくれるさ!」

琢真が同意する。

ただ、愛はその意見に感銘は受けなかったようだ。

「何で暇つぶしのために、気を使う事をしなくちゃいけないのよ!」

「暇潰しだと!?」

「ひ、暇潰しに、俺達を付き合わせるなよ!!」

「いいから、素直に付き合つと、言いなさい!」

もはや無茶苦茶だった。

「断る」

「俺もだ！」

「くっ！！」

三人はそのまま暫く力比べをしていたが
突如愛の力が抜ける。

「うっ」

「ぐあっ！」

急に抵抗が無くなった為、二人して勢いあまって屋上のドア横の壁に激突した。

「いてて……」

「急に離すとは……」

二人は強かに打ちつけた顔を抑え、振り向いて苦情を言う。
「……………」

愛はムツツリと黙り、ジロリと視線を交互に向けてくる。琢真は思わずたじろいってしまったが、それは修司も同じ様だった。

何度も琢真と修司の間を愛の視線が泳いでいたが、やがて固定される。

「な、何だよ……」

どうやら、ターゲットは琢真のようだ。

愛は何やら意味ありげな笑みを浮かべる。琢真の背筋に、何か冷たいものが走った気がした。

「そう……。そういう態度をとる訳ね」

愛は笑顔だったが、言葉から感じる気配は冷たい。

「い、いや、そのなんて言うか。あ、愛も女の子同士で行った方が楽しいだろ？」

「そうね……。でも、アタシは今日行きたいのよ」

（そんなの、お前の勝手な我儘じゃないかっ！！）

と、琢真は叫びたかったが、変容した愛の様子に圧され声帯は震えなかった。

ちらりと修司を伺うと、自分の危機は去ったと安心しているようだった。

(こいつ、自分がターゲットになってないからって!!)

「何か言いたそうね？」

「い、いや。別に……」

「そんなに嫌だったなら仕方ないわ。断ってもいいわよ」

今までの発言と百八十度翻った発言をした愛に、分かってくれたか、と琢真が喜んだのもつかの間。

「断ってもいいけどその場合　　莉理にアンタのことを有る事

無い事吹き込むからね」

とんでもない事を言い出した。

「ちよっ!?!」

無い事はやめろよ、と言おうとしたがそんな場合ではない事に気づく。

「ああ。それともアンタの気持ちを莉理に、全部教えてあげよう……かな?」

「どこでも付き合いますよ!　愛さん!」

琢真は即座に百八十度意見を翻した。

「そう……でも、嫌々付き合われても癩に触るしな……」

愛は上目遣いで怪しく琢真を見つめてくる。非常に癩に障った。

「い、嫌々だなんてそんな……。俺達長い付き合いじゃないですか。そんな事思っはずが無いですよ!」

はっはっはと笑いながらも、琢真の心はさめざめと泣いていた。

「じゃあ、琢真は付き合ってくれ……」と

「……はい」

今の琢真の姿は、小文字のOとRとZだけで表現できるだろう。

「琢真が付き合ってくれるんなら、俺はもういいだろう?」

そう言っただけで屋上のドアに手を掛けた修司だったが、愛の言葉は続いた。

「でも、琢真と二人きりなどを見た人に、変な勘違いされても嫌だしなー。そうじゃなくても誤解している人も結構多いしね。もう一人いてくれると、そういった煩わしさから解放されるから助かるなーなんて」

「お前達が勘違いされた所で、俺は一向に構わん」

そう言い放ちドアを開いた修司の背中に、愛は再度言葉を投げかける。

「そっかー。まあ、アタシも今は狙っている人いないから、そんな噂されても面倒なだけで実害はないんだけど……ただ、この三人の中に一人だけ、絶対にそういう勘違いを広められない人がいるよね……確か」

誰とは言わないけど、と琢真を見てニッコリと笑う。

一見穏やかともいえる微笑である。だが、琢真には愛の背中に邪悪な黒い羽が生え、パタパタと羽ばたいているのが見えた気がした。琢真の体中のいたるところにある汗腺から、汗が猛烈に噴出してくる。

「ふむ……確かにそういう奴がこの中にいたと思うが、そいつが誰にどう思われようと俺には関係ないな」

修司はちらりと琢真を一瞥したが、直ぐに愛に視線を戻して答える。

そして、ドア淵を跨ぎ校内に右足を踏み入れ、続けて踏み入れようとした左足を。

琢真はダイブして、ガツチリ掴む事に成功する。

「離せ」

「い、嫌だ！！ 頼む後生だ！ ここは愛の頼みを聞いてやってくれ！」

修司が頭にゲシゲシと蹴りを入れてくるが、左足首を掴む手は離さない。例え鈍器のようなもので殴られたとしても、決して離さない自信が琢真にはあった。

「俺には何のメリットも無い」

「頼む親友だろ！ 親友のピンチを見捨てるつもりか！？」

「ああ。親友といえど見捨てる」

「修司は相変わらず冷たいわね〜」

修司の言葉を、愛は笑いながら非難する。

誰が一番酷いのかは言うまでも無かった。しかし、今は突っ込むのは控えておく。

この女にいつか恨み晴らしてやる……と、琢真が初めて思った日から既に十年近く過ぎてているが、恨みは積もるばかりで、晴らせた事は一度も無かった。

「じゃ、じゃあ分かった。バンジーやるから！」

苦渋の選択だった。

「何？」

唐突に頭部への攻撃が止む。

「何よ、バンジーって？」

一人意味の分からない愛は首を傾げる。

「ふむ……。その言葉に二言はないな？」

修司は目を瞑り数瞬考えると、念を押すように確認を取ってくる。

「……ああ、ないよ」

琢真はがっくりと頂垂れながら、返事を返す。

「そうか……。そこまで言うなら分かった。次はバンジーで準備を進めておこう」

「ああ……………ううううう」

「ということだ。仕方ない。俺も付き合ってやろう」

修司はようやく了承して愛に告げると、屋上の鍵を琢真に放って、そのまま階段を下りていった。

「よく分からないけど……まあいいや。じゃ、放課後忘れないでね」
そう言って愛も姿を消し、琢真は一人、誰も居ない屋上に取り残された。

「……………」

頬を伝うこの熱いものは何だろう……？

遙か彼方で、昼休み終了のチャイム音が鳴っている気がした。

駅を基点にして南北に伸びるこの時間帯の繁華街は、帰りがけに寄り道している学生の姿で溢れている。

駅北の商店街群から抜けた先には、主に住宅街が広がっており、琢真達の家もそちらにあつた。どちらかといえば駅南側の方が商業的には栄えてるので、もっぱら学生達の寄り道の場はそちらだ。そして、今三人はその駅南側の道を歩いているところだった。

「どこまで行くんだ？」

琢真は意気揚々と前を歩く、愛の背中に向かって尋ねる。既に駅南の商店街を東に通り抜けていた。

この辺りは、場末の飲み屋やスナックなどが点在し、今はそうでもないが夜になるとあまり治安の良い場所というわけではなかった。「もうちよつとよ。しっかり付いて来なさい」

「はあ……」

仕方なく追いかけるが、あまりにもずんずん進んでいた為か、隣を歩くお世辞にも肉体派とはいえない修司は既に息を乱していた。いつもなら既に何かしら毒を吐いている筈だが、キツさの為か恨めしそうに愛を睨むだけで、さつきから口を開いていなかった。

「その『占い師』って、そんなに有名なのか？」

確かに愛は何にでも興味を持つ性質だが、かなり楽しみにしている様子が見受けられ、琢真は若干興味を覚えてきた。

「情報に疎いわねえ……。そんなことじゃ女の子に、つまらない男って認識されちゃうよ？」

「仕方ないだろ。占いなんて女ほど男は興味ないんだから」

こちらを振り返りながら、呆れたような表情を見せる愛に言い返す。

「はあ。しょうがないから教えてあげる」

愛が言うには、その『占い師』はほんの二月程前に街に現れたらしい。商店街の隅の路上でひっそりと占いを営み始めていたところ、偶々遊び心で占いしてもらった女子高生達がその的中率に驚き、思わずその事を他の友達達にも広めたことが切欠となつて、女子高生を中心に主に女性の間で爆発的に広がつていったという訳だ。そう。今ではネットにも情報が出回つていて、近隣の町からも訪れる者がいるらしい。下は小学生、上はOLや主婦までに話は広がり、連日人の列が途切れない程だという。

「なに！？　もしかして並ぶのか！？　そんな列に並ぶなんて嫌だぞ俺は！」

女子中高生の列に並ぶ自分の姿を想像して、琢真は思わず身震いする。

「大丈夫だつて。だから授業終わつて直ぐに飛び出してきたんでしょ」

「そうだけど、絶対浮く！」

「それも大丈夫。彼氏連れで来ている子も多いらしいから、男も珍しくないつて」

「彼氏つて……。今、男は二人居るんですが……？」

修司を見ると、当然の事ながらしかめっ面をしていた。

きつと自分も似たような表情をしているに違いない、と琢真は思った。

「大丈夫大丈夫」

愛はこう言うばかりで、以後何を言つても聞き入れてくれないまま、目的地に到着した。

「やつと着いたわね……。駅から離れているのが玉に瑕ね。何で商店街から、場所を移したのかな……？」

こんなに中心部から離れていても、人の列が出来るといいうのだからか。だとしたら本当に凄いなと思う。

「で、どこなんだ？ それらしい人の列は見えないが……」

ようやく息を整えたらしい修司が、久しぶりに発言する。

確かに、周囲にちらほらと人の姿はあるが列は見当たらない。

「おかしいわね……。どうしょ。てつきり人が集まってると思って、正確な場所までは聞いてないや。……。ちよつと待つて、聞いてくる」

そう言うつや否や、愛は近くを歩いてきた人に事情を知らないか尋ねに行く。

修司といい愛といい、自分の欲求に対する行動力だけは本当に凄い。

性格は正反対の二人だったが、喧嘩はしても長年行動を共に出来ているのは、そういった共通点もあるからなのかと琢真は思わず考えてしまった。

愛は何人目かで望みの回答を得たのか、その人物に頭を下げると、苦い面に戻ってきた。

「どうした？」

「……なんか、今日は店仕舞いしたっぽい」

愛は明らかに不服です、と言わんばかりの表情で聞いた情報を開示する。

「占いつて今の時間帯位からが稼ぎ時じゃないのか……？」

メインの顧客は女子中高生達だと思っていた琢真は、店仕舞いを少し意外に思った。

「いや、いつもならまだやってる時間らしいのよ」

「ふむ……。運がなかったな。では帰ろうか」

我が意を得たり、とでも言うような表情を浮かべ、修司は来た道

を戻ろうとする。

「やってないんじゃないよ、仕方ないよな」

琢真も後を追おうとするが。

「……納得いかないわ」

例によって、愛がまた訳の分からないことを言い出した。

「納得いかないって……どうするつもりだよ？」

嫌な予感で一杯になったが、とりあえず聞いてみる。

「せっかくここまで来たのに、帰るのは癪に障るから直談判してみるわ。占い師のいる場所はさっき聞いたから」

「お、おいっ！」

と、慌てて呼び止めるが、愛はそれを無視してズンズン奥に進んで行く。あるスナツクの前まで移動するとそのまま中に入っていた。

「はぁ……」

「ちっ、猪突猛進娘が」

呆れる琢真と、苛立った声を上げる修司だった。しかし、そのままにしておく訳にはいかず、仕方なしに後を追いかけた。

「愛が入っていったのはここか……」

そのスナツクは、まさに場末のスナツクと言うイメージがピッタリな薄汚れた外装の店だった。ドアの上には『シャボン』という看板が取り付けられている。ドアには『準備中』の札が掛けられており、流石に足を踏み入れるのには緊張したが、覚悟を決めて二人は中に入る。

「お、お邪魔します……」

薄暗い店内には、三十代後半位に見える化粧の濃い女性と、愛、そして薄汚れた出で立ちの七十代位に見えるの老婆の三人の姿しかなかった。恐らく女性がスナツクの経営者で、老婆が『占い師』だ

ろう。

女性はカウンターの中で所在無げに立っており、老婆はその前にあるカウンター席にどっかりと座っている。愛はその老婆の隣に何故か苛立った様子で立っていた。

女性は自分達の制服姿を見て、愛の関係者だと分かったのか、「いらっしやい」と困ったような表情で言った。琢真は女性に返事を返して、戻ろうと愛に声を掛けるが、その声は愛の怒声によってかき消された。

「だからちょっと、占ってくれてお願いしてるだけじゃない！」
「どうやら、占いのお願いは断られてしまったらしい。店仕舞いしているということなのだから当たり前なんだが、どうも愛は納得していないようだった。」

またこの声の感じからすると、愛が激怒の一手手前っていう状態だとも分かってしまった。

修司もそれを感じ取ったのか、軽く目配せをしてくる。

時間にして数秒だったが、二人の間で「お前が行け」「いやお前が行け」と激しい視線の応酬が繰り広げられた。

結局、琢真が担当する事になってしまう。獅子の口の中に手を突っ込むような真似だと分かってはいたが、恐る恐る声を掛ける。

「あ、愛？ 断られたんなら諦めるよ……」

「一回だけやってくれたっていいじゃない、そしたら帰るから！」
完全に無視された。

「何でそんなにもつたいぶってんのよ！」

頼みに来てそんな言い草は無いだろうと思ったが、とりあえず琢真は再考を促す。

「愛。もうやめとけて……」

「黙ってないで、何とか言いなさいよ！……」

「愛、愛。もうやめ……」

「うるさい、黙ってるっ!!」

止めさせようと肩を掴んだのが不味かったのか、目の前を飛ぶ蠅に向けるような目で怒鳴られる。

「はい」

さながら、肉食動物を前にした小動物のような有様で、琢真は震えながら直立して返答する。

隣で修司が頭を振っているのが見えた。

「……やかましい小娘じゃな」

ボソリ と、ずっと何か褐色の酒をロックで飲んでいた老婆が呟く。

しゃがれた小さな声だったが、何故かスツと耳に通った。

「キーキー喚くな。折角の酒が不味くなるわ」

「それが嫌なら、とっとと占いなさいよ!」

何度聞いてもお願いする態度ではない。

ただ、確かに愛は傍若無人な面もあるが、通常はあまり面識の無い人間に対して、ここまで酷い態度をとる事はない。ともすれば、目の前の老婆との相性が最悪なことを本能的に感じているのだろうか。

「今日はもう商売はせん。とっとと失せぬか、猿娘が」

「さ、猿!?!」

なるほど猿娘とは言いえて妙だな、と、修司は感心したように頷いている。

確かに斬新だったので、その案は今後の罵倒用に密かに採用する事にする。

「つと、猿に失礼じゃったか……。ゲエハハハッ」

不気味な笑い声だったが、怒りを煽るにはこの上ない笑いだったともいえる。それを証明するかのようになり、みるみる愛の顔が赤くなっていく。

もちろん、羞恥や照れが原因ではない。

「あ……あ、アタシが猿なんて……目が腐っているのかしら……。ま、まあ仕方ないわよね婆なんだし……」

震えながらも矜持を保とうと、愛は必死で言い返す。頑張っている。

「占い師と言う商売はな、目が何より大事なんじゃ。必須と言ってもええ。カモになりそうな相手を、見定める必要があるからの」

「へー、そう。だったら、婆さんはへボ占い師ってことじゃないの？」

愛はなんとか相手より優位に立とうと、老婆を嘲笑するが、

「ゲエハハハハツ。そうじゃな、そうかもしれん！」

婆さんはその言葉に怒るところか、笑い声を上げて肯定する。

つばに入ったのか、そのまま大笑いに移行し、戸惑う他の三人を尻目に暫く笑い続けた。

「……………」

一方愛は、自分の意見を肯定された事に、警戒の目を向けている。

「あー、笑ろつた笑ろつた。そんな事を言われたのは久しぶりじゃつたわい」

老婆はようやく笑い終わると、持っていたグラスを机に置き、愛に向き直る。

「よう笑わせてもらったお礼に、そこまで言うなら一つ、占ってやるつ」

「え、あ、そ、そう。じゃあお願い」

突然了承されたことに驚いたような愛の様子だったが、勝ったとでも思っているのか、顔には笑みが浮かんでいた。

「そうじゃな。まずお主の干支を聞こうか」

「干支？ アタシは……………」

干支占いとは意外だったのか、愛は一瞬驚いた表情を浮かべ言葉を詰まらせる。直ぐに気を取り直し、自分の干支を答えようとするが。

「ああ。聞くまでも無かったの……。お主は申年じゃった。なんせ猿娘じゃからの」

そう言つて、老婆は再びゲエハハハツと、怪鳥のような声で笑い出す。

暫し呆然とした後、ようやく言葉を認識したらしい愛は、先程とは比べ物にならないほどの形相になる。

「こんの……クソ婆！！ もういいっ！！」

この界限中に響くのではないかと言う大声を上げて、愛は肩を怒らせたまま店を出て行った。

あまりの音量に、琢真はママと二人、頭をふらつかせる。歳のせいで耳が遠いのか、老婆はなんともなさそうな様子で笑い続けている。

「一度上げてから落とす……。王道だが、呼吸が抜群だったな」

予め耳を塞いでいたのか、修司はやはり何ともなさそうな様子で、妙なところに感心していた。

「やりますな、と老婆に声を掛けています。」

「おいつ、そんなことしている場合じゃない！ 早く後を追わないと」

大変な事になる。主に自分達が。と、慌てて修司を促し、頭をまだふら付かせているママさんと笑う老婆に頭を下げて、急いで店を飛び出そうとする。

「小僧。お主女難の相が出とるぞ……」

琢真がドアノブに手を掛けた時に、そんな言葉を後ろから投げかけられる。

えっ、と振り返るが、老婆は再び酒を飲み始めこちらの疑問に答える様子はなさそうだった。

思わず修司と目を合わせるが、今は気にしない事にしてそのまま店を出た。

周囲を見渡し愛の姿を探すと、遙か前方にその後姿を見つけることが出来た。

だが、その直後に道を曲がってしまい姿が消えてしまったため、走って後を追いかける。

修司はぶつくさ言っていたが、それでも足は止めなかった。もちろん、そうしなかった時の後が怖いからだ。

愛が曲がった交差点を、長打を打ったバッターが二塁を目指す時の一塁上でのターンの様にククツと曲がりながら駆け抜ける。そうしてようやく、少し前に愛の後ろ姿を捉える事が出来た。

ただ、おかしいことにいつ合流したのか、愛の隣に別の少女が歩いていて。制服を見る限りはうちの高校の生徒のようだ。

徐々に近づいていき、近距離まで間を詰めたところでハッとする。
(藍田さん!?)

何故こんな所にいるのかは分からない。ただ、隣の少女は莉理の様だった。後ろ髪が風になびいている。

まさかの事態に琢真の緊張が高まっていく。どう話しかけようか困っているうちに、修司が追いついて来た。

「はあはあ……。猿娘め、ようやく追いついたか……」

早速『猿娘』を活用していた。

「ん？ 隣の女は……藍田か？ 何故いるんだ？」

「分かんないが、とりあえず藍田さんに被害がいくと拙い。愛はこちで引き受けよう」

そう返すと、意を決して「愛！」と声を掛ける。

だがまだ怒っているのか、完全に無視して反応しようとしなない。

「おい、愛！ いい加減落ち着けよ！」

仕方なく肩を掴んで呼び止め、こっちを振り向かせる。

「頼むから落ちついて……」

宥めようとして 時が止まる。振り向かせた愛の顔が、まさに猿のような顔になっていたからだ。

「むう……。怒りが限界を超え、猿顔になってしまったのか……」

修司も額から汗を垂らしながら、呻くように呟く。

「はぁ？ 何んなの？ 何肩触ってんの？」

「えっ、何？ ナンパ？ 超ウケル」

そう言ってこっちを向いた隣の莉理の顔は、犬顔になっていた。正確に言うとブルドック顔だ。

予想を超える超事態に、琢真達は完全に固まってしまっ

「何、知り合い？」

犬莉理が尋ねる。

「いいや、知らねー」

猿愛が否定する。

その時。天啓のようにある考えが琢真の脳裏に浮かび、口をついて出た。

「わ……。わるい。人違いだった……」

その言葉に女達は露骨に顔をしかめてチツと舌打ちすると、不快そうな顔のまま歩き去っていった。修司と二人で、呆然と突っ立つたまま見送った。

「何だあれ……」

「……どうでもいいが、好きな奴を間違えるなよ」

「お前だって、長年の友人を見間違えただろ……」

後姿だけは、本当にソツクリだった。

「……ん？」

修司が声を上げたので飛んでいた意識を戻すと、ツカツカとこちらに近づいてくる存在を視界に捉えた。

今度こそ間違いなく愛だった。今にも湯気が出そうなくらい、カ

ンカンに怒っている様子がここからでも見て取れる。

琢真が一言声を掛けようとしたその前に、一方的に怒号を浴びせられた。

「遅いっ!! いつまでチンタラ歩いてんのよっ!! 直ぐに追いかけてきなさいよっ!!」

「わ、悪い。でもそれが今……」

「うるさいっ!! 何だつて言うの!? アタシをこれ以上苛立たせないことより重要な事が、今あるつて言うのっ!?!」

言い訳をしているように聞こえたのか、更に怒りに火をくべてしまったようだ。

ただ何とか今の出来事を伝えて、怒りを静めようと琢真は頑張ってみた。

「い、いや。今そこに、猿顔のお前と……」

気づいた時には、琢真は路上に寝そべり空を見上げていた。

夕暮れの空には、近くの電柱とそこから伸びる電線、そして呆れた様な修司の顔が映えている。当然、愛の姿はどこにも見当たらない。

そして、どうしようもなく顎が痛かった。

「……イチゴのタルト、ダースは必要だな」

呆れたような修司の顔は、呆れたようにそう告げる。

「……半ダースじゃ駄目か?」

「一発殴られる覚悟があるなら、それで持つて行け」
嫌だった。

「ふむ、女難の相か。当たっていたな」

「……あの婆さん意外と本物かもな」

もしそうなら、漠然とした内容ではなく詳細を教えて欲しかった。

「ありがとうございました〜」

会計を終えて、客が店内から消える。この時間帯は会社帰りの社会人が多い。ただ、今ので丁度店内の客が途絶えていた。

それを悟って、琢真は隣のバイトに話しかける。

「そう言えば、前に止まってた自転車。あれ、木村さんのですか？」

「おっ！ 良くぞ聞いてくれました！ ずっと欲しかったんだけどね。ようやく資金が貯まって、この前ようやく買えたんだよ〜」

木村と呼ばれた男のバイトは、嬉しそうに話す。木村はこのバイト先において、琢真よりも数歳年上の先輩であった。

琢真が自転車のことを話題にしたのは、店の前に停められていたのが前に乗っていたママチャリではなく、高そうなクロスバイクになっていたからだだった。

「へ〜。あれ高かったんじゃないすか？」

「そうなのよ……だから今月は金欠でさあ。店長に頼んでバイトのシフト増やしちゃったよ」

泣きそうな顔で木村が言う。

「は〜〜大変つすね……」

ただ、確かにあのバイクは格好良かった。

いつか一度乗せてもらおう、などと琢真が考えていると。

「それより、芳垣ちゃん。あの話考えてくれた？」

木村が唐突に話題を代える。

ちなみに、あの話とは合同デートのお誘いのことだ。

木村はバイトを始めたばかりの頃は色々教えてしてくれた人でもあり、気持ちの良い人なのだが、女好きで合同デートやコンパの人数が足りないと、やたらと琢真を誘ってくるのが玉に瑕でもあった。「いや、無理つすよ。俺その人らの事知らないし……」

客観的に判断して、琢真は自分の事を人見知りではない方だとは思っている。だが、大学生で至極真つ当な嗜好の木村が誘う相手は必然的に大学生だったので、気後れするのも事実だった。

「大丈夫だって。ちゃんとフォローするから、ね？ 頼むよ」
両手を合わせ、こちらを必死に拜んでくる。

お世話になつた人でもあるから、助けるのはやぶさかではない。ただ、以前一度だけ付き合つて散々な目に合つた事があるので、琢真はこの系統のお願いだけは何としても断るつもりだった。

「すみません。やつぱり無理つす」

「あれだよ？ 以前のようなことを心配してるんだつたら大丈夫だよ？ 今回の子は間違いなく普通の可愛い子だから」

「いやー……」

「頼むよ〜。芳垣ちゃんも彼女いないんでしょ？」

「ええ、彼女はいませんが……」

その言葉に何やら感じるところがあつたのか、木村は訝しげに琢真を見つめた後、にやりとした表情を浮かべる。

「な、何すか？」

「芳垣ちゃん……。もしかして好きな娘いるの？」

琢真の脳裏に莉理の笑顔が浮かぶ。

「ま、まさか。そんなの居ませんよ!!」

慌てて想像を振り切り否定する。つい力が入り、声が大きくなつてしまった。

「い、いやそんなのつて……居ないほうがおかしいだろ？ ほら、お兄さんに教えてみ？ どんな娘？ どんな娘？」

力一杯の否定に驚いた表情を浮かべるも、木村は一段と増したに

ややや笑いを顔に貼り付ける。琢真が何度否定しようと木村は信ぜず、その追求は客が訪れるまで執拗に続けられたのだった。

やがて、琢真のバイトあがりの時間になった。

「じゃ、お先失礼します」

「お疲れ様ー……。あ、芳垣ちゃん」

「いませんよー！」

くどい、と言わんばかりに先手を打ったが、その事ではなかったらしい。

「違う違う、そうじゃなくてこの紙を表に貼つといてくれない？」

裏に両面テープを貼った紙を手渡してくる。

「え？ 痴漢撲滅……？ 何すかこれ」

「んー、俺も良くわかんないんだけど、店長に頼まれてたの忘れてさ」

内容を簡単に要約すると、最近この界隈の住宅街で痴漢や下着泥棒の被害が多発しているから気をつけましょう、というような内容だった。有志による自警団の見回りのようなことも行われるそうだ。「性質の悪い奴もいるもんすね」

琢真は思わず、顔を顰めてしまう。このような身勝手な犯行は、生理的に受け付けなかった。

「だなー。下着は女性が身に着けているからこそ、意味があるのにな」

琢真の言葉にうんうんと頷きながら、木村は賛同の意を示す。だが、その意見に対しては賛同しかねて、琢真は適当に言葉を濁した。「あー。ドアの横の壁にでも貼つとけばいいんですか？」

「うーん、特に指示されてないから、それでいいんじゃない？」
相変わらず適当だった。

「じゃあ、そこに貼るときますね」

張り紙を持って外に出ようとすると、背後から声が掛けられる。

「お願いね。じゃ、お疲れー。話はまた今度聞くからね」

(忘れてなかったのか……)

とりあえず、最後の一言は聞かなかったことにする。

「……失礼します」

無然とした挨拶を終え、店の前に出てドアの横に紙を貼りつける。店の前に止めておいた自転車に跨り、一度木村の自転車を羨ましそうに眺めた後、琢真は家路についた。

6

『月曜日』

「芳垣君、さよなら」

鈴の音が響くような優しい声に、琢真は授業で疲れきっていた精神が癒されていくのを感じた。

莉理は優しげに微笑むと、教室をゆっくりと出て行った。

「あ、ああ……。藍田さんまた明日……」

と返すが、既に彼女の姿は無かった。

彼女に別れの挨拶を言ってもらった。その事実だけで、日々の嫌な事柄によって溜まった鬱憤が晴れていく。

特に、愛のご機嫌直しの為に購入したイチゴのタルトのダースには、懐に壊滅的打撃を与えられていたので今までもずっと憂鬱極まりなかったが、それすら取るに足らないことだと思いはじめていた。

更に言うと、そこまでして身を削ったのにもかかわらず、殴られ正座させられ罵倒され『猿』という音を(単語ではない)二度と使わないように約束させられるまでしないと許してもらえなかった事などは、もうどうでもいいことだ。

ただ、そんな夢心地のまままでいられたのは

「おいっ 芳垣！ お前、進路希望調査の紙まだ出してないだろ！？」
むさいオッサン担任によって、強引に進路指導室に連行されるま
での話だった。

夢から強制的に現実に戻され、再び夢の世界に逃げ込もうとする
も、再度引つ張り込まれるようにして無理やり現実を突きつけら
れると、もう夢に戻る力すら湧かなかった。何とか解放され携帯の
時計で確認すると、連れ込まれてから既に三時間が経過していた。

琢真はフラフラの体で教室に戻り、鞆を持つと校門に向かう。校
内にはもう、部活動生の姿しか見つけられなかった。

この時間帯は、いつも利用している東門が既に閉められているの
で、正面門から下校する事になる。

どこからか聞こえてくるプラスチックバンド部の演奏の音を聞きながら、
精神的に疲れきった体に鞭打つてようやく正門前にたどり着く。

池山に散々進路の事でいびられた所為か、一歩進むたびに人生に
絶望したくなる。しかし、それらと必死に戦いながら歩みを進める。
そんな琢真を天におわす神々が哀れんだのか、天の使者を琢真の
元に遣わせてくれた。

「あれ？ 芳垣君？」

数時間前に別れたばかりの使者は、正面玄関から現れたらしい。

小さな顔に驚きの表情を貼り付け、どうしたの？ と声をかけて下
さった。

「あ、藍田さん！！ いや、その……進路希望調査の事で、池山に
……もとい池山先生に呼び出されてて」

「そうなんだ。それは大変だったね」

「あ、ああ。その……藍田さんも今帰り？」

鞆を持って校門を出ようとしている時点で、そんな事は当たり前
だった。瞬時に馬鹿っぽい発言をしちまったと後悔するが、莉理は
微笑んで肯定してくれた。

「帰りが一緒になるなんて、珍しいね」
「そ、そうだね。俺は帰宅部で、藍田さんは部活入ってるしね……」
莉理は文芸部に所属している。本がとても好きなようで、休み時間に友達と話している時を除けばいつも何かの本を読んでいた。窓際の彼女の席で、風に髪を揺らしながら静かに読書している姿はまさに、深層の令嬢といった様相だった。
その姿を思い出し、琢真は少しトリップしてたが、彼女の声で瞬時に我に返る。
「じゃあ、帰ろっか？」

7

喉が水分を要求してくる。確かに今日はいつもより暑かった。ただ、もちろん原因はそのためではない。

「帰ろっか？」と言葉には、『一緒に』という意味合いが含まれていることを理解するまでには数秒の時間を費やすことになり、了承の返事を返すまでは更に数秒の時間を費やしてしまった。

予想外の思わぬ幸福に歓喜を通り越して、今は恐怖に似た感情を抱いていた。

(な、何話せばいいんだ!?)

莉理に対してだけは、普段愛を始めとするクラスの女子達に振舞っているのと同じようには、どうしても出来なかった。

必死に何か言わなきゃと、琢真が脳をフル活性させようやく出てきた言葉は。

「きよ、今日はいい天気だね」

という、当たり障りの無い言葉だった。

ただし、それは若い男女の会話には稚拙すぎ、確かにいい天気だが今はもう夕方であった。

(何を言っているんだ、俺はあああ!?)

琢真は自分を、なんか金属バットのようなもので撲殺したくなる。「そうだね。特に最近暑いから、直ぐに汗をかいちゃって嫌だよね」莉理はそう言っただけで困ったように微笑みながら、半袖の上着の襟元をちょこんと掴んでパタパタと仰ぐ素振りをする。

自分の馬鹿発言を全く意に介さず話を続けてくれる彼女に、琢真は更に思慕の念が湧きあふれた。

「そ、そういえば、藍田さんは進路はもう決めてるの？」

彼女を見つめていると、何故か先ほどの面談という名の監禁を思い出し、ふと口から出てきた。

琢真の周囲の友人達は皆大学に進学すると言っていた。彼女はどうかののだろうか？

「え？ 進路？ う、うん……まだ二年生だし、ハッキリって訳じゃないけど……漠然となら決めてるよ」

「そっかああ……。俺なんか全然思いつかなかったから『大金持ちって調査表に書いて出してたら、お前は小学生か！ って三時間も監禁されてたよ……』」

「それは怒られるよ」と、莉理はクスクス笑う。

「でも……。芳垣君ならきつとそうなるよ。そんな気がする」

突然の贅辞に、琢真は嬉しさよりも慌てふためく。

「い、いやいや。俺なんて勉強が出来るわけでもないし、運動神経はまあ良い方だと思うけど部活やってる奴らには負けるし、全然だよ」

「そうかな？ でもきつと芳垣君は、いつか大物になる気がするよ」

思っても見なかった持ち上げに、嬉しさよりも恥ずかしくなり、琢真は慌てて彼女に水を向け返す。

「あ、藍田さんの決めてる進路って、どんなの？ やっぱり国立大とか？」

「う……そう改まって聞かれると恥ずかしいけど……」

莉理は照れくさそうに微笑んで、綺麗な人差し指を口元に当てながら言った。

「み、皆には内緒だよ？」

俄然琢真の心が沸き立つ。皆には内緒ということは、つまり二人だけの秘密ということだ。慌しさを増した動悸の音を感じながらも、一言も聞き逃さないように全神経を耳に集中する。

「その……進学するかどうか自体まだ決めてないの。私はね、将来直接人の役に立てる仕事がしたいなあって思ってた……ってやっぱり何か恥ずかしいね」

頬を上気させ言葉を濁すように笑うが、琢真は全然恥ずかしい事だとは思わなかった。

「恥ずかしかる事なんて無いさ！ 立派だよ！！」

「あ……その、ありがとう。で、でも！ その、いくつか候補はあるんだけど、まだどの道に進むかは迷ってるし……私なんて、全然まだまだだよ」

「そりゃあ進路なんだから迷って当然だよ。でも、自分の方向性が漠然とでも見えているのと、そうでないのとじゃ、色々全然違うと思うー！」

身を乗り出し力説する琢真に戸惑っているような気配を感じ、我に返り謝罪する。

「あ、その、ごめん。なんか興奮しちゃって……」

「え、ううん、その、真剣に聞いてくれて嬉しかったから、謝らないで」

「う、うん。ごめん」

謝罪すると、急に恥ずかしさがこみ上げてきて黙ってしまふ。莉理も同様のようで、恥ずかしそうに俯いていた。

「だ、だから、どの進路に決めてもいいように、今は勉強を頑張ろうって思ってるの。きっとそれは無駄にはならないと思うから」

莉理の定期試験の成績を思い出す。彼女は毎回確実に上位に名を

連ねていた。

「そうかぁ……。やっぱり凄いな……」

ただ漠然と進学したいという理由で勉強するのではなく、将来を見据えて勉強しているというのは、凄く立派な事だと琢真は思った。口だけではなく彼女はそれを実践しているのだ。

それに引き換え自分はどうか？ と考えると、あまりに惨めで情けなくなってくる。

それから暫く互いに無言で歩き続ける。突然、莉理が何かを思い出したかのように微笑みながら言った。

「何か……不思議だね」

「え？ 何が？」

何のことか分からず、琢真は間抜けな声を上げてしまう。

「その、今まで芳垣君とこんな話をした事は無かったのに……。まだ、誰にもしたことがない話までしちゃうなんて」

「あつ、そ、そうだね」

「こんなに二人だけで話をしたのも、久しぶりだよな」

「う、うん」

琢真の脳内ではいつも会話していたが、直接こんなに話をしたのはいつ以来だろうか。

「小学校から、ずっと同じ学校なのにね……」

その言葉を発した表情が、寂しそうな色を帯びているように感じられたのは、琢真の願望の色眼鏡の所為だろうか。

「その……でも、同じクラスになったのは初めてだし」

「ふふつ。酷いなあ。小学校低学年の頃は、同じクラスだったよ」

「うえっ！？ あ……そ、そういえば……そうだったね。その、ごめん……」

琢真は記憶のページを必死にめくる。そういえばそうだった気がする。

地面に着くほど頭を下げて、必死に詫げる。

「ふふふつ、いいよ許してあげる」

そう言って、につこり笑う莉理の笑顔に、琢真は全身に衝撃が走ったように緊張したまま、暫し見惚れてしまった。

それから駅前に出るまで、今まで話をしてこなかった時間を取り戻すかのように話が弾んだ。

例えば、家の事。例えば、部活での事。莉理は文芸部で詩を書いたりしているらしい。見てみたかったが、それは顔を真っ赤にして断られてしまった。

いつもは、家から歩いて三十分程度もかかる通学時間が煩わしくて仕方がなかった。しかし、今だけは例え一時間以上掛かったとしても、決して琢真は文句は言わないだろう。

莉理の家は、学校から三十五分程度の距離にあり、琢真の家からは少し離れている。学校から真っ直ぐ家に帰るのであれば駅前は通らないのだが、駅前にあるお菓子屋に用事があるとのことで、恐縮する莉理を説き伏せ、琢真は付き添っていた。

莉理が出てくるのを、店の前で待つ事数分。申し訳なさそうに出てきた彼女と、再び帰路に着こうとした矢先。どこかで見た老婆がこちらに向かって歩いてきた。

(? どうかで見たような……。どこで見たんだっけな?)

老婆は始め、こちらには全く意識を向けていない風だったが、どこで見たのか思い出そうとジロジロ見ていた琢真の視線に気づいたのか、何じゃ? とでも言うようにジロリを睨んでくる。

しかし、隣を歩いている莉理に視線を向けたかと思うと、突然立ち止まった。

そして驚愕しているような表情を浮かべる。

「え? あ、あの……?」

莉理も老婆の視線に気づいたのか、困惑しているような声を上げる。

「……………」

ただ老婆は特に何を言うわけでもなく、視線を戻すとそのままいずこかへ歩き去っていった。

「な、なんだったのかな？」

「さあ……。何か忘れ物にでも気づいたんじゃない？」

「ふふふつ、私の顔を見て？ 何か思い出させるような顔してるかなあ……………」

「あ、いや、その……………」

慌てて弁解しようとする焦っている琢真の様子を見て、莉理は朗らかに笑う。どうやらからかわれたと気づいたが、腹は立たない。どこるか、彼女の新たな一面を見られた事が嬉しくなり、思わず琢真も笑ってしまう。

彼女は「笑うなんてひどいなあ」と怒ってみせるも、声は笑っている。そんなやり取りを行いながら、二人は再び歩き始めた。

その頃には、流石の琢真もある衝撃的事実に気づいていた。

(俺は今、青春している！！)

ということに。

8

永遠に続く事柄など無い様に、全ての現象はいつか終わりを迎える事になる。永遠に続いて欲しい下校時間もまた、然りだった。

そう。琢真達は、莉理の家への道と、琢真の家への道の分岐点に立っているのだ。

「じゃあ、今日は付き合ってくれて、ありがとう」

「い、いや、こちらこそありがとう」

琢真は咄嗟にお礼を言ってしまう。それくらい充実した下校時間だったからだ。

「え？ どうして芳垣君がお礼を言うの？」

「あ、いや……その、なんとというか」

本心は当然言えないので、琢真は口籠ってしまふ。

そんな心境を知ってか知らずか、莉理は楽しそうに微笑んだ。

「ふふつ。じゃあ、帰るね……。また明日」

「うん、また明日学校で……」

穏やかに笑い、バイバイと小さく手を振って、彼女は帰っていった。

その後姿が小さくなるまで見送っているうちに、何とも言えない寂しさが琢真を包み込んできた。

だがそれも僅かな間のことと、直ぐに嬉しさの衝動が湧き上がってくる。

（藍田さんと、楽しく下校してしまった！！）

思わずスキップしてしまう程に、琢真の体も心も弾んでいた。ルンルンと、恐らくにやけているだろう笑いを浮かべながら自分の家方向に歩き出そうとした。

しかし、足が止まる。

「おい、小僧」

と、背後から誰かに呼び止められたからだ。

振り返ると、さつき駅で見かけた老婆が、琢真を険しい顔で見つめていた。

「何だ婆さん、何か用か？」

駅から付いてきてたのかと思うと気味が悪かったが、表面上は平静を装って尋ねる。

「……………」

呼び止めたものの、何か言いたいことがあるが言ってしまったいいものかと逡巡しているような様子を老婆は見せる。

(でも、やっぱりどっかで見た覚えがあるんだよね……どこだった?)

お互い黙り込む。

だが、思い出せないなら大した事じゃないと直ぐに思い直し、
「用が無いなら、俺は行くぞ?」

琢真は再び背を向け歩き出そうとする。

「……待て」

老婆は何かを観念したように深い溜息を一息吐くと、再び険しい表情に戻し話始める。

「先ほど、お主と一緒にいた娘は……」

そこで一度話を切る。

娘というのが莉理を指しているのが分かり、琢真は老婆に警戒の目を向ける。

少しの間の後、老婆はしゃがれた声で告げた。

「先程の娘は………近日中に命を落とすことになる」

『火曜日』

「琢真……琢真」

「……………」

「琢真ったら！ おいつ琢真！！」

「……………」

「こらあああ！！ 琢真ああああああっ！！」

「どわあっ！！」

驚きで椅子から転げ落ちたままの姿勢で、琢真は声の主を見上げる。声の主は何やらお冠のようで、腰に手を当て覗き込むような体勢で不機嫌そうに睨んできた。

「あ、愛か……驚かせるなよ」

「ったく……はあ」

愛は溜息を吐くと、表情を和らげ姿勢を戻す代わりに、呆れたような視線を琢真に向ける。

「どしたの？ 授業中ずつとポーとしてたでしょ、何かあったの？」

「ん？ あ、ああ。いや何でもねーよ」

珍しく、本当に珍しい事に、愛の声には琢真を心配するような響きがあった。

明日は雪が降るかもしれない。

「何よ……あ、まさか莉理と何かあったの！？」

「ばっ、馬鹿！ 違いーし、声がでかいよっ！！」

突然とんでもない事を叫ぶ愛の声を、覆い隠すように声を被せる。

周囲のクラスメイトが、一体何事かと二人を伺っていた。

幸い、莉理は席を外していたようで、最悪の事態は免れることが出来た。

「なんだ……莉理と何かあったんじゃないんだ、つまんない」

「あ、当たり前だろ」

つまんないとは何だ、という気持ちを込めながら言い返す。が、昨日一緒に帰った時のことが脳裏に浮かび、琢真はついドモってしまっただ。

「……ほんとに莉理と何も無かった？」

その様子に何か感じるところがあつたのか、愛の瞳は疑いの色を強くする。

付き合いが長いだけにちょっとした動揺を見抜いてくる……やっかいこの上ない。

「だから違つて！」

「まあいいわ。そうじゃないなら何があつたのよ」

愛は訝しげな様子で尋ねる。

「いや。別に……」

そう否定しながらも、琢真は昨日の事を思い出していた。

2

「は？ 命を落とすつて……死ぬつてことか？ 誰が？」

「……………」

「先程の娘つて……藍田さんのことか!？」

『先程の娘』が、莉理のことを指しているというのは雰囲気から分かつてはいたが、どうにも彼女と『死』が繋がらず、琢真は確認してしまう。

(いきなり現れて、何とんでもないことを言い出すんだ、この婆さん!?)

不謹慎にも程があると、咎めようとした直後に、老婆が重そうな口を開く。

「お主と一緒にあった娘じゃ。もうそれほど長くない……………」

「死ぬつて…………。何でそんな事がアンタに分かるんだよ!? 不謹慎だぞいい大人が!」

「冗談でも口にして良いことではない。ましてや、事もあるつに莉理のことだ。琢真は余計に怒りがつのは。」

「ふんつ。別に信じてもらおうとは思わん。ただ、教えてやっただけじゃ」

老婆は顔を僅かに顰めながら、吐き捨てるように言う。

その時、琢真の脳裏に閃くものがあった。

(この婆さん…………昨日の『占い師』か!?)

その事にようやく気づき、改めて顔を見直すが…………恐らく間違いない。

「まあ、ワシあ信じぬでも良いがの……………」

老婆はそう言うや否や、琢真に背を向け歩き出す。

「お、おいっ」

静止の聲が思わず口から出るが、琢真に言いたい事がある訳ではなかった。

そのまま数歩進み、老婆は一度だけ足を止める。

「……………早くて今週。遅くとも来週中じゃ」

そう一言だけ発すると、以後は振り向きもせずそのまま歩き去った。

「……………何なんだよ」

全く意味が分からなかったし、発言を信じる気もなかった。でも何故か、琢真の耳に残った。

「はあ、そんな顔して何もなかったなんて信じられないわよ。ほら、アタシに言ってみなさい。何かあるでしょ？ ほら、ほら」

自分の様子を心配しているというより、愛は何か面白いことはいかと暇潰しの材料を求めているだけだったという事を、琢真はこの時点で把握する。

このまま無視しても煩いので、状況は伏せたまま昨日『占い師』と出会ったということだけ教えてやった。

よっぽどこの前の出来事が腹に据えているのだろう。『占い師』と言う単語を聞いただけで、急速に表情が曇る……というか雷雲だった。

「アタシの前で、あのクソ婆の話題を出すなって言ったでしょっ！」

自分で何があったか聞き出そうとしたくせに、あんまりな言い分だった。

「俺も話題に出したくなかったよ！」

昨日の発言から、あの占い師に不信感を持っているのは琢真も同じである。

(よりもよって、藍田さんが死ぬなんて、そんな馬鹿なことを言うとは……)

「ふんっ、気分が悪くなった」

「……ああ、俺もだよ」

「アンタの話で気分を害したんだから、昼食はアンタの驕りよ」

「ああ……って、何でだよ!？」

琢真は思わず賛同してしまい、慌てて拒否するが認めてもらえず、結局奢らされる羽目になった。

ただ、そんなやりとりをしながら騒いでいる内に、昨日の事は自然と記憶の片隅に追いやられていったのだった。

(2)

4

『水曜日』

午前の授業の時とは違い、午後の授業は集中して寝る事が出来たので、とても充実した時間を過ごせた。はっきり言って『漢文』の授業が今後の人生でなんの役に立つのかは、全く疑問だった。

いつも連るんでいる金子達は部活や用事があるらしく、HRが終わるなり皆慌しく教室を出て行ってしまった。

(さーて、俺は何すっかなー)
今日はバイトもなくこの後は暇だったので、琢真はこれから何をしようか思案する。

愛もどうやらクラスの女友達と遊ぶようで、数人連れ立って騒がしく教室を出て行った。

(仕方ない、今日は家でまったりするか)

そう決めると、残っていたクラスメイト達に別れを告げて教室を後にする。

東校舎一階にある玄関に向かい、靴に履き替えて外に出ると、同じく出てきた修司と鉢合わせる。

仲の良いメンバーの中で、唯一修司だけはクラスが違っていた為、こういうことが時々起こる。

「何だ、お前も今帰りか」

「ああ、見れば分かるだろう」

相変わらず可愛くない友人だった。しかし、丁度良い。

「今からお前ん家行つていいか？」

「ふむ……。まあ構わん」

暇つぶしの相手を早々に捕まえることができ、琢真は少し嬉しくなる。

年頃の男が部屋に二人つきりですることと言えば、決まっている。

そう、もちろん。

ゲームだ。

修司はいつも本ばかり読んでいる男だが、それでいて中々のゲームマーマーでもある。プレイジャンルは、RPGからSLGまでジャンルは多岐に渡り、最短ルートでクリアしたらゲームをやめる琢真とは違い、ゲームを隅々まで楽しむ……。やり込み派でもあった。

そして今、二人はあるゲームに嵌っている。

それは携帯機のACTRPGだった。通信協力プレイも出来る奴なので、週二の割合で修司の家に集まり一緒に遊んでいた。

このゲームを最初に二人に勧めた張本人が別にいるのだが、始めこそ音頭をとって一緒にプレイしていたものの、早々に飽きたようでは全くプレイしていない。

そのため、現在は二人だけでまったりと進めている。

「そうと決まれば、とっとと帰るか」

「ああ」

並んで東門に向かっていると、莉理が後ろから二人の脇を通り過ぎようとした。

「あ、藍田さん」

思わず琢真は声を掛けてしまう。莉理はそれに気づいたのか、何か急いでいた風だったのにもかかわらず、律儀にも立ち止まった。

「ご、ごめん呼び止めちゃったね。急いでるんでしょ？ 気にしないで行っていいよ」

別段用事があるわけでもなかったので、申し訳なく思い琢真は詫
びる。

「あ、うん、ごめんなさい。ちょっと用事があったって急いでて……」
莉理は恥ずかしそうに、顔を上気させて弁解する。

「よ、呼び止めてごめん……。また明日」

「うん、さようなら」

小さく頭を下げ、莉理はそのまま再び早足で去ろうとする。

しかし。

「危な——いつ——！」

突然。数名の叫び声が校庭に響く。「きゃっ」
発信元と思われる地点に視線を向けようとするも。

琢真は視界の端に、白い小さな塊がこちらに向かってかなりのス
ピードで近づいてくるのを捉えたため、一瞬体が固まってしまふ。

どうやら、それは自分には当たらないということを瞬間的に把握
し体が弛緩する。だがその数瞬後、進路上に莉理の姿があることに
思い至り、ドクンと心臓が跳ねた。

そんな刹那の時間で出来る事は何もなく、無常にもその塊が莉理
の居る場所に向けて落下した。

「藍田さんっ——！」

塊が落下したのとほぼ同時に、琢真の体の奥底から悲鳴が湧き上
がる。

最悪の事態が脳裏に浮かんだのは、その一瞬の間だけだった。

「あう、転んじやった……」

可愛らしい呻き声が聞こえてくる。

どうやら、莉理は塊が直撃する前に運良く地面に躓いて転んでし
まっていたようだ。

だが、そのお陰で塊を避ける事が出来たのだらう。打ち付けたら

しい膝を押さえながら、ゆっくりと莉理が立ち上がる。どうやら、今何が起こったのか分かってはいないようだ。

琢真がその事に思わず安堵の息を吐くと、どこかに跳ね返ったのか塊　野球の硬球だった　が足元に転がってくる。琢真はその硬球をゆっくりと拾い上げる。当然硬い。

これがあのまま莉理にぶつかったかと思うと、恐怖が湧いてくる。彼女が偶々転んでいなかったら、恐らくそうなっていたのだ。

「すみませんーん。大丈夫でしたかー？」

当たらなかつた事が分かったからか、若干暢気な口調で声を掛けてくる野球部に、琢真は激しい怒りを覚える。

「ふざけんなー！！　もう少しで彼女にぶつかる所だったろうが！！」
瞬時に怒りがマックスまで到達し、琢真は声を掛けてきた部員に掴みかかった。

その剣幕に慌てたのか部員は態度を改め、申し訳なさそうに再度詫びてくる。

ただ、それぐらいで許せるわけが無く、今の球を打った張本人も呼びつけ詫びさせるために、琢真は怒鳴り上げようとする。

しかしそれは、修司から今の事情を聞いたらしい莉理によって慌てて止められた。

「あ、あの！　大丈夫、私は大丈夫だから気にしないで！」
「でも！」

「わざとだった訳じゃないし、これは不可抗力だよ。ね？　だから大丈夫気にしないで」

前半は琢真に向かって、後半は野球部員に向けて発していた。

申し訳なさそうに、彼女に向かって「すみません」と、野球部員が再度謝罪する。

莉理は「気にしないで」と、にっこり笑った。

「本人がいいと言ってるんだ、お前が怒る筋合いはないだろう」

今までずっと静観していた修司が、琢真を咎めるように言う。その目は暗に、何様だと語っていた。

確かに彼女が許している以上、悲しいが何の関係もない自分が怒っているというのも変な話だ。琢真は一度深呼吸して怒りを沈めると、持っていた硬球を部員に投げ渡した。

部員は球を受け取ると、帽子を取り一礼して元の場所に戻っていた。

「あ、あの……芳垣君。その……ありがとう」

「え？」

何のお礼か分からなかったので、琢真は思わず間抜けな声を上げてしまう。

「私のために、その、怒ってくれて……」

「あ、いや……」

何と返そうか慌てていた琢真に、莉理は天使のような微笑を浮かべる。

何となく、お互いそのまま見詰め合ってしまう。

「藍田、時間はいいのか？」

「あっそうだった！ ごめん、私行くね！ さようなら」

無粋な声で割り込んできた修司の声により我に返った莉理は、琢真達に別れを告げると、慌しく走り去っていった。

「さよなら……」

莉理が去った後には、彼女の後姿が見えなくなるまで見送る琢真と、その様子を見て呆れたように嘆息する修司の姿だけが残された。

修司の家は、学校から歩いて凡そ三十分程度の距離にある、洋風建築の一軒家である。琢真の家からは歩いて二・三分位しか離れていない、所謂ご近所さんだった。

修司一家は、二人が四歳の頃にこちらに引っ越してきており、付き合いはその頃にまで遡る事が出来る。ただ、越してきたばかりで修司の両親はこの土地についてよく分かっていたのだろう。この辺りの子供が通っている幼稚園とは違う幼稚園に修司を入園させたため、二人の仲が本格的に深まったのは小学校に入ってからだった。

ちなみに、愛との本格的な付き合いも小学校からだ。初めて出会ったのは入学より少し前の事だが。

三人の初めての邂逅は、今でも忘れる事の出来ない強烈な思い出としてそれぞれの脳に刻まれている。それはまあ置いておくとして、ともかく三人の付き合いはそれ位長かった。

当然。その家族のことも必然的に良く知っており、浅からぬ付き合いもある。

という訳で、学校帰りにそのまま向かって暖かく出迎えてくれた修司の母親に、琢真はいつものように談笑交じりで挨拶すると、修司の部屋にそそくさと向かった。

琢真はいつもの定位置である、部屋の中央にあるテーブルの前に座る。修司は机の椅子に腰を落として、ゲームを起動していた。

ゲームが立ち上がるまでに所在無げに部屋を見渡すが、相変わらず殺風景な部屋だった。ベッド、机、テーブル、本棚……これらだ

けしか置かれていない。ポスターやタペストリー等はもちろんのこと、CDラックやコンポの類すら全く見当たらなかった。

あんまりゲーム機を顔に近づけても目に悪いので、琢真は適度に距離を置く。

ゲームが立ち上がったので早速ゲームを始めることにした。腕なりに簡単にミッションから進めて行く。徐々に指が暖まり、難しいミッションをいくつこなしている内に琢真はふと思い出したことがあり、修司に意見を聞こうと口を開く。

「修司お前さあ……。占いって信じる？」

唐突にゲームとは関係ないことを話しかけてきたのを怪訝に思ったのか、修司は目を落としていたゲーム機から僅かに目を上げる。

「俺はそんな非科学的なものは信じない」

そう言うとは思っていた。修司は科学主義の傾向があり、科学で証明がつかないこと一切合財に対して、いつも否定的な意見を述べているからだ。

「何だ突然？」

修司は何を今更と言う面持ちで、琢真の真意を確認しているようだった。しかし、何かに気づいたようにゲーム画面に目を落とすと、呆れたような表情が代わりに浮かんだ。

「このゲームの影響か……」

恐らく修司は、今二人が話しながらも進めているゲーム内で、特定のアイテムを渡す事で『占い』をしてくれるゲームキャラクターのことを指して言っているのだろう。確かに占いのことを思い出した切欠はそのキャラからだったが、今のはそのキャラから連想した、この前の占い師のことが脳裏に浮かんだ事による発言だった。

「いや、違って……。何つつたらいいんだろうか……」

琢真は何と切り出そうか言葉に迷う。

「……占い……予言……予知、そうだ！ 予知って実際に可能だと

思つか？」

「単なる妄想に過ぎん」

何とか取っ掛かりを見つけ尋ねるが、修司は即断で否定する。

「でもさ……あ、いや、なんでもない」

何と続けたかったのか、どういう答えが欲しかったのか、琢真は自分でも分からなかった。

途中で言い止めたのが気になったのか、修司が何か口を開こうとするが。

「くつらいわね〜」。男二人で部屋に閉じこもって携帯ゲーム!？」

突然の訪問者が豪快にドアを開け放ち、二人の様子を見て能天気
に明るい声で罵倒してきたため、口を噤んだ。

「勝手に入ってくるな」

修司の咎めにお座なりに返答しながら、愛は琢真の持っているゲ
ーム機を強引に取り上げ画面を覗き込む。

「小母さんに了解は取ったわよ。あ、これアンタ達まだやってたん
だ!？」

二人をこのゲームに嵌めた張本人が、驚きの声を上げる。

その言葉の裏には「もう旬でもないゲームやってるなんて」と、
どこか馬鹿にした調子が含まれている。

「止めたお前には関係ないだろう」

修司がペースを乱されぬように、冷静に反論する。

「まあ、別にいいけどさ」

どうしても良さそうな様子で、愛は首を竦める。

愛は暇を持て余している時などに、こうして修司の部屋に訪れて
くる事があった。ただしそれは、そこに琢真が居る事を確認してか
らである。琢真と言う緩衝材がないと、二人が喧嘩せずいられない
事は自分でも分かっているのだろう。

実は修司の家に着く少し前に、琢真の携帯に所在を確認してくる

メールが届いていたので、愛の到来は予測済みでもあった。なんでも、友人達との約束がおじちゃんになったらしい。

そんなことより、と愛は修司のベットに腰掛けながら、喜色満面の様子で琢真に視線を向けた。

「今、なんか面白そうな話題が聞こえてきたんだけど、何話してたの？」

「何でもない。邪魔だから帰れ」

愛は無然とした表情で言い切る修司をムツとした表情で睨みつけた後、再び琢真に視線を向け問いかける。

「なんか、予知とか聞こえたんだけど」

どうやらさっきの発言を聞いていたらしい。話を逸らそうかとも思ったが、こういう話題の場合は修司より愛のほうが向いているかもしれないと思い直し、今度は愛に向けて同じ質問を投げかけた。

「もちろん可能よ！」

話を聞くなり、愛は燃えるような瞳で拳を握り締め断定する。修司とはまるつきり逆の意見だった。

修司があざ笑うような表情を浮かべる。

「下らない……。その根拠は何だ？」

「雑誌とかにも載ってるし、テレビとかでも時々やってるじゃない」
この時点で修司は、あざ笑う様な、から、はつきりとした嘲笑いに変える。

「はっ、マスメディアに踊らされる馬鹿な人間など実際はいないと思っていたが、こんな近くにいたとはな！ 呆れて物も言えん」

「何だど〜」。中には実体験の話として挙げられてる話もあるのよ！？」

徐々に二人がヒートアップしてくる。

「ますます下らない！ そんなものはマスコミがでっち上げた作り

話に過ぎん！」

「何でアンタにそんなことが分かるのよ！」

「百歩譲ってその体験話とやらが本当だったとしよう。だがそんなのはその人物の錯覚に過ぎん」

「はあ！？ 何でそう断定できるのよ！」

既にお互い立ち上がり、相手に掴みかかろうとするような姿勢で言い争っている。琢真はテニスの試合場での観客のように、首を左右に振りながら二人の応酬を見て、止めるタイミングを計る。いつもの事ながら、本当に相性が悪い二人だった。

その後、数十分に渡り二人の言い争いは続けられた。途中から心配している自分がアホらしくなり、琢真は再び一人でゲームに勤んでいた。

「ちっ、埒が明かないわね……ちよつと琢真！ アンタはどう思う？ どっちの味方！？ まさか、このロマンを全く理解しようと思わない堅物の味方ってことはないわよね？」

「ふん、他人に意見を求めるとは……まあ良い。琢真、お前からこの女に言っつけてやってくれ。当然、お前は浪漫と愚行の違いが分かる男のはずだと俺は思っているぞ？」

あと少してボスが倒せるという時に突然水を振られ、琢真は慌ててゲームを仕舞い二人に向き直る。

二人の言葉尻に、ありありとこちらを威圧してくる気配を感じた。

「えーと……」

「アンタはアタシと同意見よね？」

「お前はそんな低脳女とは違うだろう？」

こちらにズイッと顔を近づけて、二人は琢真を自分の仲間に入れようとする。

琢真はどう言ったものかと言葉に詰まる。どっちを擁護しても角が立つからだ。愛はもちろんの事だが、修司も拗ねさせたら色々と面倒なのだ。

「そういえば、莉理との仲は最近どう？　いまいち進展しないなら、アタシが仲を取り持ってあげてもいいんだけどな？」

「何やら裏工作が始まったようだ。全くどうしようもない……が。」

琢真の体が無意識に愛の方に向く。それを見た愛が、修司に向かってニヤリとした笑いを浮かべる。

「お前！？　くっ姑息な真似を……そういえば琢真、バンジーをするのが金子という案。考えてもいいぞ」

（金子……お前の犠牲は決して無駄にはしない）

無意識に琢真の体が修司の方に向く。それを見て、修司が愛に向けて冷笑する。

「アンタ……汚いわよ！？　そんな汚い手で、琢真を取り込もうって言うの！？」

「その言葉、そのままそっくりお返しする」

ぐぬぬっ、というような唸り声を上げながら、睨み殺そうかという程の視線を交わし始めた二人を見て、琢真は険悪さが危険なレベルに達したのを確信する。

とりあえず何でもいいから話を逸らそうと、琢真は内容を考える前に声を上げた。

「あ……あ……そ、そうだ！　この前の占い師の婆さんはどう思う！！？　本物だと思うか！？」

何も考えずに口から出た言葉だった。しかし、二人の意識を引く程度の効力があったようだ。揃って怪訝そうな顔を向けてくる。

「下らない。占い自体がナンセンスなんだ。本物も偽者もない。強いて言うなれば、占い師などを職業にする輩は等しく偽者だ」

「だ、か、ら！　何でアンタが偉そうに断定してるのよ！……だけれどもあ、あの占い師についてだけは同感よ。アイツは偽者」

一方は凝りに固まった意見で、一方は明らかに私情が込められている。

とはいえ、特に否定する材料も無かったので、どちらかの意見にという訳ではないが、とりあえず琢真は肯定した。

「そうだなー。俺もそう思うわー」

少し棒読みになってしまった。ただ二人は気が削がれたのか、睨みあっていた顔をフンツと逸らすと、そのままゲームを再開したり漫画を読み漁ったりし始めた。

どうやら、何とかこの場は収まったらしい。全く面倒な奴らだった。

琢真はホツとしながら、自分もゲームを再開しようとは画面を見ると、ポスに惨殺された操作キャラの死体が中央に横たわっていた。

中断するの忘れてた……。

『木曜日』

キーンコーンカーンコーン。

二時限目終了のチャイムが鳴り、ようやく難解な事この上ない数学の時間が終わる。机にうつ伏せて、頬をひんやりとした机に当たっていると、もうこのまま動きたくなくなってくる。

「あつ皆。次、科学室だつて！」

クラスの女子が入り口から、教室内に向かって大声で伝えている。めんどくせー、と言いながらも、移動を開始し始めたらしいクラスメイト達の声を聞き、仕方がないので琢真ものっそりと起き上がる。

教科書とノートを引つ張り出すと、そのままクラスメイト達の群れにくっ付いて、科学室に向かった。

ふと斜め前方を見ると、仲の良い友人二人と楽しそうに談笑しながら歩いている莉理の姿があった。特に他意なく後ろからその笑顔を眺めていると、唐突にドンツという衝撃が背中を襲う。

「いてっ！ 何だよ、愛！」

姿を確認しないまま、苦情の声を上げる。こんなことをしてくるのは、愛だけだと思っただからだ。

果たしてその正体は やっぱり愛だった。

「何ニヤニヤしながら、莉理の顔を見つめてるのよ！」
にんまりしながら、邪推してくる。

「別に……見つめてた訳じゃない」

琢真は本心を言ったつもりだった。しかし、愛には納得がいく答えではなかったのか、形の良い眉を八の字に顰めながら溜息を吐いた。

「アンタねえ……。いい加減観念しなさいって！ 全部分かってるんだから……。いい加減聞き苦しいわよ？」

「だから、ちげーって！ 何でもかんでも、そういう話に持っていかうとするなよ」

自分では至極まともな反論だと思っただが、愛は肩を竦めると「はいはい」とだけ返してきた。なんか癩に障ったものの、藪をつついて蛇を出すのも馬鹿らしいので、琢真は気にしないように勤めた。

科学室は、西校舎四階の端にあった。琢真のクラスは東校舎二階なので、校舎間の渡り廊下を通って、階段を二階分上がらなくてはいけない。琢真達の教室からは、恐らく学校内で一番遠い場所に存在する教室なので、中々の距離だ。

その微妙に長い道中、愛の下らない雑談に適当な返事を返しながら相手をする。そのまま、西校舎三階の階段を上り終えて、四階への階段に差しかかるまでそれは続いた。

虫の知らせとでも言うのか、ふと何か気になって、琢真は少し前方を歩く莉理の後姿を見つめる。

特に何も無い。

そりゃそうだ、と自分でも呆れていたが、何故か目が離せない。

隣を歩いていた愛が、急に前方を見つめ始めた琢真の視線を追い

何を見つめているかを悟ったのか、喜色を浮かべた顔で口を開いた時にそれは起こった。

四階の階段を上り終えたばかりの莉理の体が、突然ぐらりと傾き、後ろ向きに階段の方へ倒れこんできたのだ。

それを見ていた誰もが突然のことで、咄嗟に動けない。隣にいた莉理の友人達も、そして莉理自身も、何が起きているのか分かつ

ていなかったろう。

そのままゆっくりと、階段の下に向かって落ちて

「莉理っ!!!」

愛の叫び声が、階段に反響する。

いち早く硬直から解放された愛だけがアクションを起こした。だが、それでも叫び声を上げるのが精一杯なようだった。

他の誰もが、意識していなかった突然の出来事だったためか、反応できていなかった。

琢真を除いて。

一人彼女を注視していた琢真だけは、事態に対して固まることなく体が動き、愛の叫びから一瞬遅れて、倒れこもうとしていた彼女の背中を支える事に成功した。

「っと、間に合った~~~~」

琢真の心からの呟きに、緊張で固まっていたクラスメイト達の時が戻る。

「大丈夫、莉理!？」「大丈夫!？」と、慌てて周囲の女子達が思わず座り込んでしまった莉理に駆け寄る。

「あ、足が滑って……。も、もう、大丈夫だよ」

莉理は引きつった顔で呼吸を荒げていたものの、気丈にも立ち上がり、落ちた分の階段　といっても三段くらいだったが　をゆっくりと上りきった所で、再びペタンと尻餅をつく。

極度の緊張から解放されたせいで、腰が抜けたらしい。

心配するクラスメイト達に「大丈夫」と笑顔で返しながら、友人の手を借りてようやく立ち上がることに成功する。

そして、少し後ろでその様子を眺めていた琢真に向き直る。まだ若干恐怖の色が抜けていない表情で、それでも「ありがとう」とにっこり微笑んで頭を下げた。

「いや……あの……その、たまたまだから、気にしないで……とい
うか、無事でよかった」

しどろもどろに答える琢真を、周囲のクラスメイト達が囁し立て
る。

「ヒューやるねえ!」「愛の力ね!」「株が上がったかあ〜?」
等と。ちなみに、一番大声で囁しているのは愛だった。

その輪の中で、莉理は顔を赤らめて、恥ずかしそうに俯いていた。
「う、うるせー!」

今のこいつらに何を言っても無駄だというのは分かっているので、
琢真は一言叫ぶとそのまま科学室に向かって走り去った。

それから僅かに時を置いて、穏やかな笑い声が科学室内に聞こえ
てきた。

今日の授業も、ようやく後一時間で終わる。午後一は体育だったので、残りの時間がダルいことダルいこと……。

これは時間割に、問題ある気がしてならない。これをクラスの重要課題として問題提起し、教師たちに再考を願う などという気はさらさらなかったので、いつものように頬を机につくけるようにして机にうつ伏せたまま、琢真は何となく周囲を眺めていた。

適当にぐるりと教室を見渡してみても、まず視界に写るのは金子の巨体だった。金子のでかさは半端ないため、クラスのどこにいてもその姿を決して見失う事はない。ちなみに、金子のでかさは縦にではなく横に、である。

更にゆっくりと視界を下げていくと、愛の姿が目映る。

なにやら女友達と、下らない話に興じているようだ。何を話しているかは聞き取れないが、『男』だの『顔』だのいう単語が断片的に聞こえてくるので、話題は言わずもがなだろう。

しかも、愛は机の上に腰掛け、ただでさえ校則ギリギリの短いスカートを履いているのにもかかわらず、その上で足を組んでいるので、その深奥を見ようとすると周囲の男子達の密かな熱視線を一身に浴びていた。

(うおっ！ 相変わらず吉田は、アグレッシブだな……あれはバレるぞ)

だが、恐らくどの角度からも見えそうで見えない絶妙な組み方をしているのだろう。男達が何食わぬ顔で必死にポジショニングを模

索している。

以前、琢真はそれとなくこのことを愛に注意したことがある。曰く、どうやらあれはワザとやっているらしい。決して中を覗かせるつもりはないが、男達在必死こいて覗こうとしてくるのが、馬鹿っぽくて楽しいんだそうだ。

なんとという悪女。

だが、男達の行為も決して褒められたものではないので、お互い様だろう。

そのまま琢真が視線をパーンしていくと、莉理の姿が視界に入ってくる。

恐らく、次の時間の予習をしているのだろう。穏やかだが真剣な表情で、教科書を広げノートに何かしら書き込んでいる。

やはり彼女は偉いなあと、琢真は感心しながら見つめていたが、ふと何か違和感を感じた。

何だろうと、彼女を凝視して　そして、ハタと気づく。

(腕に、包帯を巻いているだど!?!?)

慌てて飛び起き姿勢を正して見つめる。どうやら見間違いではない。

午前中までは、間違いなく巻いてなかった。とすれば、昼休みから午後の間に何かあったことになるが……。

後で誰かに聞く、などと悠長なことは出来ず、琢真は咄嗟にこんな時のための友人の名を叫ぶ。

「愛っ!!!」

叫んだ後で後悔する。思った以上に力が入ってしまい、教室に響き渡るほどの大声になったからだ。

「うわあっ!!! な、何よ!?!? 人の名前を叫んだりして……」

突然でかい声で叫ばれた愛は、驚きで体勢を崩し机の上から落ちそうになったところを堪えて、琢真を振り返り苦情を言う。

教室中のクラスメイト達も、何事かと琢真を見つめていた。当然、

莉理の驚いたような目も琢真に向けられていた。

「あ、いや、大したことじゃないんだ……ははっ」

琢真は無数の視線に対して笑いで誤魔化しながらも、愛に手招きをする。

何やら不服そうな顔だが、愛は渋々近づいてくる。

その背後で、愛と静かな戦いを繰り広げていた吉田達が、鼻を押さえながら琢真に向けてグーサインを出していた。何のサインだろう？

「で、何よ。下らない用事だったら、許さないわよ」

自分はいつも下らない用事でこき使うくせに、とはもちろん言えるはずも無く……。

琢真はとりあえずその発言は聞かなかった事にして、莉理の包帯の理由を知らないか尋ねた。

「ああ、あれね……。ったく。そんなに気になるんなら本人に聞きなさいよ！」

そう言つて、「莉理〜」と彼女を呼び寄せようとする愛の口を慌てて塞ぎ、知ってるならお前が教えてくれ、と琢真は頼み込む。

「はあ……。しょうがないわねえ、貸しーよ？」

アレだけ人にタカつておいて……と、怒りで声が震えそうになる。しかし、何とかそれを押さえ込み、教えてもらう。

「あれは、バスケで痛めたのよ」

愛曰く、午後一に行われた体育の授業で行われたバスケットボールで、味方からのパスボールを受け損なって、手首を挫いたのが原因とのことだった。包帯はしているが、アレは念のため、特に大した怪我ではないのだそうだ。

「あの子勉強は出来るけど、それ以外では本当にどんくさいわよね〜」

キャハハと笑う愛。

（お前は、運動以外何も出来ないだろうが!!）

学生の本分としては、勉強の方がウエイトは上である。

「定期試験の結果で、常に上位にいる藍田さんを寧ろ見習え、猿娘
！！」

と、言ってやりたかった。もちろんそれは胸に留めておく。琢真に自殺願望はないからだ。

なお定期試験の学年首位は、入学当初から一度も変動無く修司の定位置となっている。琢真と愛は、ドングリの背比べといった感じだった。

事情が分かるとホッと安心する。

ただどうも今日、先日から立て続けに彼女の身に不幸が起こっているような気がして、琢真は心配になった。

『先程の娘は……近日中に命を落とすことになる』

唐突に、先日の老婆の言葉を思い出す。

(アレは戯言だ！！)

琢真は脳裏にベッタリと染み付いたように残るその言葉を振り払うと、最後の授業が始まるまで、そつと莉理の姿を見つめ続けた。

帰りのHRが終わり、クラスメイト達は散り散りに教室から散って行く。琢真は同じく外に出ながら、今日は何しようかと考えていた時に、教室の前でバツタリ修司と遭遇する。

またかよ、というような表情がチラリと修司の顔に浮かび上がる。ただ、帰宅部の身には他に選択肢も多くないということで、これまた昨日に引き続き修司の家でゲームに勤しむことになった。

ゲームの話題を話しながら肩を並べて歩いていたが、東門に差し掛かるうという時に琢真は突然の緊急事態に襲われた。

体中に溜まった水分が、外に出たいと痛切な声を上げているのである。簡単に言うと、尿意に襲われたとも言おう。

このまま我慢しようかとも迷ったが、自分の膀胱と相談した結果、修司に一言詫びて急ぎ校内に戻る。気持ち内股なのは言うまでも無い。

琢真は靴のまま一階のトイレに駆け込み用を足した。

そうして、えもいわれぬ開放感に浸りながらも、東門に向けて急ぎ戻ろうと駆け出す。

だが玄関を出たところで、視界の端に何か人影が見えたような気がして、琢真は何気なく校舎の端を見る。

見間違いではなく、そこには何やら怪しげな女性生徒二人組がいた。校舎の端の壁に隠れるようにしながら、その奥を伺っている。

(あれは……)

何をしているのか興味が湧いたので、琢真は背後から近づき、声を掛ける。

「おい、何してるんだ？」

急に背後から声をかけられて驚いたのか、二人は声にならない悲鳴をあげた。

慌ててこちらを振り返り、声の主が琢真だということが判ると、物凄い形相で首根っこを掴んで校舎の壁に押し付けた。

あまりの早業に、琢真は苦情の声を上げる暇も無かった。

そのまま二人は、冷酷な視線を琢真に向け、押し殺した声で一言「黙ってる」と告げる。その後、再び校舎の影から僅かに身を乗り出し何かを覗き始めた。

(何なんだよ)

仕方ないので、二人の背後から同じように校舎の裏を覗く。

(あれ……は!?)

「どういうことだ!？」と、声を上げようとして、それに気づいた二人に強引に口を塞がれ、その場に押さえ込まれる。

琢真はモガモガと抵抗するが、思った以上に二人の力は強く抜け出せない。抵抗の無駄を悟り、そのままの体勢で再び前方に視線を送った。

琢真の視線の先には、莉理の姿があった。

少し顔を赤らめたまま、若干恥ずかしそうに俯いている。ただそれだけなら可愛いなと思うだけで、特に何も言うべき事は無い。

しかし、その儂げな少女の前には、一人のもっさりとした男子生徒が立っていた。もちろん、もっさりというのは琢真の私情が込められている。

男の方も幾分緊張した面持ちで、頬が上気しているのが分かった。視線は莉理から逸らさず、じっと彼女を見つめている。

(ああ、なるほど……)

「そうか、二人は睨めっこをしているんだな」

一人納得してそう告げる琢真に、二人は何か物悲しい表情を浮か

べて首を横に振る。どうやら違つようだった。

「ああ、じゃあどっちが長く息を止められるか、の勝負とか？」
再び二人は首を振る。

「判った。あの男が何か面白いギャグを言ったから、彼女が必死に笑つのを堪えている……」

残り最後まで言わせようとせず、ポンと琢真の肩を叩き二人して首を横に振りながら、

「いい加減、現実逃避はよしな……悲しすぎるよ」

高橋が哀れむように告げる。後ろでは、田中が目元をハンカチで拭っていた。

(ま……まさか、まさかまさかまさかまさか!!!?)

「逢引してっっっ!!? ……はが……ほぐっ」

琢真が現実に絶望して大声を上げようとしたところで、田中が持っていたハンカチを丸めて琢真の口の中に押し込んだ。

「ちよつと、黙ってたって!」

再び二人して琢真を上から押さえ込んだ体勢で、前方に視線を送る。

「安心しろ、アレが逢瀬になるかどうかは、この結果次第だから」
頭の上で、高橋がそう囁く。

(どういうことだ……? まだ逢瀬じゃない?)

「つまり、今まさに告白中ってこと!」

高橋よりも頭一個程度上方くらいから、田中の声が聞こえてくる。声は何やら楽しげな調子が含まれている。

が、琢真にとってはそれどころではない。

「フォ、フォツヒガ、フォツヒヒ!? (ど、どっちが、どっちに!?)」

これが目下、最大級の懸案事項である。

口に入れられたハンカチを吐き出すのも忘れ、二人を見上げながら確認するが……。

「さあ、どっちが告白してる側だと思っ?」

と、高橋がニンマリ笑いながら答える。田中も同様の表情だ。困った事に、このクラスメイト達はいつもこんな調子だった。何故こんなに性格が捻じ曲がって、莉理のような心の綺麗な女の子と親友関係なのかはどうしても謎だ。なお、二人が愛と親しい事は言うまでもない。

(ちつ、こいつら答える気ねえな！)
ということを知り、琢真は問いかけを無視して前方の二人を凝視する。

琢真の視線に怪光線の力があつたら、今頃莉理達は穴だらけになつて居ることだろう。

じつと見つめるが……判らない。

互いの緊張具合上気した頬具合を見ただけでは、どちらがそうでもおかしくないように思える。

では、互いの釣り合いから判断しようとするが……彼女はもちろん不足しているなんてことはありえないので、自然男の方を値踏みする目で見つめる事になる。

娘の連れてきた彼氏を、見定める父親のように　といつても、悲しいかなそんな状況に出くわした事が無いので、あくまで想像だが　そんな厳しい視線を琢真は送る。

だがしかし、どこから見ても好青年然としており、外見だけを見ると悔しいが不足しているようには見えなかった。

(い、いや、問題は中身だ！　実はああ見えて、変態に違いない)と、琢真が穿った視線を送っているのに気づいたのかわからないが、即座にそれを否定せざるを得ない内容が頭上から聞こえてくる。

「あいつ……確かF組の『尾登』だったよね？　翔子？」

高橋が、田中に対して質問する。ボーイッシュな高橋に比べて、如何にも女子高生然としている田中は、男子事情にも詳しいようだ。

「うん。ハンサムって訳じゃないけど、顔立ちも爽やかだし、運動神経も性格も良いらしいから、F組の女子の間でも中々評判いいよ」
琢真は知らなかったが、どうやら同年の男子だったらいい。

その情報は、モテナイ男からすると腹立たしいものだった。ただ確かに告白したにしろされたにしろ、相手からじっと目を逸らさずに真摯に構えている姿からは、その情報がデタラメだと判断できる材料は無いように思えた。

尾登の『言動』のうち、『動』は及第点としてやることにして、『言』で判断してやろうと、琢真は耳を傍立てる。だが、視線の先の二人は言葉少なげに、静かに会話をしているので内容は全く聞こえてこなかった。

「う〜ん、何言ってるんだろ？ もうちょっと近寄れないかな〜」

田中が琢真の心の声を代弁する。

「馬鹿、動くなって！ 覗いてるのが、ばれちゃうだろ！」

高橋が声を怒らせながら咎めるが、思いは恐らく同じなのだろう。琢真の背中をぐいぐい押していた。

そうしたまま、どれくらい時間が過ぎたのかわからない。遂に動きがあった。

男の方が爽やかに笑い莉理に一礼すると、琢真達が潜んでいるこちらとは反対側に、悠々と歩き去っていったのだ。

冷静に考えると莉理が男を振ったように思える。しかし、琢真には男の告白が受け入れられて、喜びのあまり歩き去ったようにも見えた。それを裏付けるかのように、莉理は男の後姿が校舎の影に消えるまで、優しく見つめていた……。

男の姿が消えると、やがて彼女はこちら側にゆっくりと歩いてくる。

「ま、まずい！」

高橋の声で琢真は我に返り、ぺっとハンカチを吐き出すと、二人を押しつけるようにして玄関に向けて走る。

「あつ、こら！ 一人だけずるいぞ！」

「押すなんて酷い！」

と、苦情の声が聞こえたが、完全に無視する。

二人も直ぐに起き上がり、後を追いかけてきている足音が聞こえたが。

「那奈美？ 翔子？」

という驚いたような声に、揃ってピタリと足を止めたようだった。ちなみに琢真は、声が聞こえた瞬間校舎に沿う様に植えられている樹の影に飛び込んで、身を潜めることに成功していた。

「は、ハイ、莉理。こ、こんな所で奇遇ね」

「莉理。こ、こんな所でどうしたの？」

(……それはきついで)

逃げ出していたのを見られておいて、今居たことに気づいたかのように白を切っていた。もちろんそれが通用する筈もなく、莉理の掛けている眼鏡が妖しく曇った。

「二人で……覗いてたのね？」

何という怒気。物凄いプレッシャーが彼女の方から発せられている。

その冷たい圧力に押されたのか、二人はそこから逃れる術はないのかと、周囲を探り始める。だがその行動すらも気に障ったのか、

莉理から発せられる気配が一段と低下する。もはや冷気だった。

「あ……いや……その……」

冷たい冷気で覆われているのにも関わらず、高橋は汗をダクダクと垂らしながら必死に言葉を探そうとしている。

一方、田中は

「い、いや、違うよ?」

まだ粘ろうとしていた。

冷酷な視線が、田中の全身を刺す。「ひっ」と田中は短い悲鳴をあげた。

琢真は一人安全圏にいる余裕で、「馬鹿な奴だ、嘘を吐こうとするからそういう目に合うのだ」と、修司っぽく思っていたが。

「ふ、二人じゃなくて……。さ、三人だよ?」

「三人?」

(田中ああああああああああっ!!)

事態はあらぬ方向に向かっていた。

(こういう場合に、真実を述べてどうする!!)

数瞬間とは全く逆のことを心底から思い、田中の後姿を視線で刺し殺すかのごとく睨みつけた。

「……………」

田中の言葉に莉理はキョロキョロと周囲を見渡す。だが、何も見つけられなかったのか「ふう」と溜息を吐くと、ようやくプレッシャーは静まった。

「もう、二人とも。覗いたりしちゃ駄目じゃない」

咎めてはいるが、いつもの柔らかい雰囲気に戻ったのが分かったのか、高橋達は緊張を解いて、「ごめん」と苦笑いを浮かべている。莉理は、そんな二人にゆっくりと近づいて行く。

結局、真相は分からずじまいだったが、それは後で高橋にでも確認すればいいと思い直す。それより琢真は今のうちにその場を離れ

ようと、ゆっくりと移動を開始する。

そして、彼女の目がこちらを向いていないタイミングを見計らい、走り出そうと両足に力を込めた。

いざ飛び出そうと最後に彼女を振り返った瞬間

。 琢真の中から、爆発的な声が発せられた。

「来るなっ!!」

突然の怒声に、莉理はその場で身を竦め立ちすくむ。高橋と田中も驚きで、「ひゃあ」と小さな悲鳴をあげていた。

その直後、莉理と高橋達の丁度中間地点に、何かが落下する。ガシャン。

大声からの時間差で発せられた目の前の異音に、再び三人は身を竦める。

琢真は急ぎ上を見上げる。特に何も無い晴天が広がっていた。次は無さそうだったので、まだ驚いている三人を尻目に、走って近づいて異音の正体を見定める。

それは植木鉢だった。

落下したそれは地面で完全に割れて、小さく多い花びらの黄色の花が根ごと飛び散っていた。

琢真は再度頭上を見上げ、少しずつ後ろに下がりながら、二階三階と順番に視線を上げていく。そして、四階まで上がったところで目的の物を見つける。

ベランダで数個の植物が風に揺れていた。

「あそこから、落ちてきたのか……」

いつの間にか琢真の隣にいた高橋が、合点が言ったという風でそう呟く。

(落ちてきた？　これが？　風も無いのに?)

そう思ったが、特にこの場では何も言わなかった。

「あの、芳垣君……」

自分に呼びかける小さな声に気づき、琢真がそちらを向くと、莉理が若干驚いているような申し訳無さそうなそんな表情で礼を言った。

「有難う、芳垣君。声を掛けてくれなかったら、当たってたかもしれない」

まだ少し驚きが残っているのだろう。いつもの完全な微笑みではなかったが、莉理は穏やかに笑う。

「そ、そだね……。これは当たったらやばかったね。やるじゃん芳垣」

「そうだな。昨日の事といいコレといい、最近冴えてるな」

田中と高橋がそう言うて場を明るくしようと茶化してくる。ただ、他の事に気を取られていた琢真は「ああ」と返すだけで、まともな反応は出来なかった。

「また助けられちゃったね……。……芳垣君？」

そんな琢真を怪訝に思ったのか、莉理は心配そうな顔でどうしたのかと尋ねる。

それには答えず、琢真はもう一度壊れた植木鉢と、そして四階を見上げて　　決めた。

「ごめん！俺ちよつと用事があるから行くわ！」

琢真は三人に一方的にそう言い残して、全力で東門に向かった。後ろから呼び止める声が聞こえたような気もしたが、今はそれどころではない。

今言われたばかりの三人の発言が、頭の中をグルグルと回る。

休み時間に聞いた愛の発言を思い出す。

昨日の階段の出来事も脳裏を過ぎる。

一昨日の野球のボールの事も浮かんだ。

程度の違いはあれど、立て続けに彼女の身に危険が襲っているのは事実だった。

特にさっきの植木鉢が、もし頭にも当たっていたら、最悪の事態も考えられた。

『先程の娘は……近日中に命を落とすことになる』

占い師の言葉がフィードバックしてくるが、今度はそれを振り払うことは出来なかった。

(分からないが、何か大変な事が起きてるんじゃないか?)

琢真はその考えで頭が占められていたため、東門で琢真の戻りを苛立ちながら待っていた修司の前を素通りしていたことに気づいたのは、背後から怒りの声が聞こえてきてからだだった。

「貴様……これだけ人を待たせておいて、素通りとはいいい身分だな

……」

「……………ん？ ああ、修司か」

その返答が気に食わなかったのだろう。修司は眼鏡を押さえながら怒りを押し殺した声で呟く。

「ほうほう。俺の周りでそんな傍若無人な人間は、愛だけかと思っていたが、考えを改める必要があるな……。もしそうなのであれば、俺も今後相応の対応を取らせて貰う事に……」

修司はそこまで言いかけて、琢真が話を全く聞いていない事に気づいたのか、怪訝そうな表情を浮かべる。

「なんだ？ らしくもない、真面目な顔をして……」

何か失礼な事を言われた気がしたが、今はそれどころではない。

修司の問いには答えず、その代わり琢真は短く一言だけ発する。

「占い師の婆さんを探しに行く」

予想していない言葉だったのか、修司は明らかに戸惑いの様子をみせる。だが、直ぐにもち直すと当然の疑問を投げ返した。

「ふむ……。何で探すんだ？」

占い師の言うことが本当ならば、一刻の猶予も無い。一分一秒も惜しいので、それにも答えず急いで歩を進める。

目指すは、以前占い師がいたスナックだ。

「何だ一体？ …… はあ、仕方がない」

琢真の背後で修司がそう呟くのと共に、足を速めたのが分かった。

「駄目だ、ここにはいない」
以前占い師がいた、スナック『シャボン』にはママの姿しかなかった。

準備中であつ明らかに客でない自分にも明るく対応してくれたママに、居場所を知らないか尋ねたところ、店の前に居ないのであれば今日は商店街に出ているのではないか、という回答が得られたので再び駅前に戻る事になった。

息を切らしている修司は、無駄足だった事にショックを受けていた。

間違いなく、体力的な問題が原因だろう。

だが、修司がそんな状態だと分かっているにも、足は止められない。ここまで来た勢いそのままに、琢真達は通ってきた道に戻った。

駅前に戻り、人の列が出来ている所がないかを探す。

表通りでは流石に商売は出来ないだろうから、裏通りを重点的に駅南の繁華街を、駅を基点に修司と手分けして、扇形に探索していく。琢真は大きめの弧を描くように、ゼイゼイ言っている修司は小さな弧を描くように見回る。だが、どちらもそれらしい列を発見する事は出来なかった。

駅北でやっているということも考えられたので、早速北に上がり、南側と同様にして探索していく。が、それでも影すら見つける事が出来ない。

街は徐々に、夕日の色に染まり始めていた。

(まさか、今日は占いをしていないのか?)

だとしたら最悪だった。あんな小さな老婆を、この人ごみの中から探し出すのは至難の業だからである。

いつもならもう諦めて、とつくに家に帰っているに違いないが、今回だけはそうする訳にはいかないと直感めいたものを感じ、琢真は一向に意欲は衰えたりはしなかった。

だが、それは危機感のような感情を抱いている琢真だけであつて、何故占い師を探しているかすらよく分かっていない修司にとっては、その限りではない。先程からしきりに、今日は諦めると再考を促していた。

琢真は申し訳なく思いつつもその案は棄却して、引き続き探索を進める。

今度は今まで老婆と遭遇したところのある場所を、廻ってみることにした。

10

それから数時間経つが、まだ見つからない。情報すら得る事が出来なかった。

今は流石に疲れて、駅北の大通りから少し東に出たところに建っている病院の敷地の外にある、バスの停留所の前で息を整えていた。修司は、病院の塀にもたれ掛るようにして座り込んでいる。目も空ろで、先程から全く口を開いていなかった。恐らく何で走っているのかすら、もう分かっていないのではないだろうか。

そんな修司を見て、このまま連れ回すわけのも申し訳なく感じ、琢真が今日は解散しようとして口を開きかけた時だった。

病院の奥の裏路地に、人影が入っていくのが見えた。

遠目だったためこの暗さではつきりとは捉えられなかった。が、見覚えのある小柄な老婆のようにも見えたので、琢真は飛び出すように後を追いかけた。

人影が入った裏路地を飛ぶように駆け抜け、そのまま真っ直ぐ進むと一斜線の車道に出た。周囲を見渡すがそれらしい影は無い。

(何か見落としたか?)

と、再び裏路地に戻る。途中左折できる細い道があるのを見つけ、迷うことなく入っていく。そのまま周囲を見回りながら、奥に奥に進む。

暫くそうしていたが、やがて琢真は見失った事を悟りその場に立ち止まる。

途方にくれ、諦めの気持ちで満たされていた時、後ろから掠れる様な声と共に足音が聞こえてきた。

「おい……琢真……」

どうやら、ようやく修司が追いついてきたようだ。

琢真は今日は止めにしようと思いついたところ、修司が一人ではないことに気づいた。

「占い師……捕まえたぞ……」

力尽き倒れこんだ修司の傍らに、しかめっ面をした老婆が立っていた……。

倒れた修司を抱え、病院の近くに隠れるように存在する小さな公園に移動する。

既に辺りには夜の帳が下りていた。公園の中央に立っている街灯の薄暗い明かりが、公園内を不気味に照らしている。

何故こんなところに建てたのかと言いたくなるような場所だった。公園から周囲を見回すと、どの方角もビルの壁しか見えない。

昼はそれなりに繁盛しているのだろうか？　ともかく、今は人通りは全く無い。

場所的に琢真の家からそこまで離れていない筈である。だが琢真は、こんな公園があることは今の今まで知らなかった。

まあ、これから話そうとしている内容からすると人気がないのは都合がいい。

修司を敷地の片隅にあった薄汚れたベンチの上に寝かせると（潔癖症の修司は嫌がったが）、早速本題に移ろうと老婆に体を向ける。「婆さん。この前言っていた事なんだが……。悪いが詳しく教えてくれないか？」

と、切り出し返答を待つ。

老婆は暫し無表情で沈黙していた。根気よく待つとようやく口を開いてくれたが、それは琢真が期待した言葉ではなかった。

「何のことじゃ？」

予想していなかった返答に、琢真は呆然とする。

「はっ？　いや、この前俺に予知のような話をしてくれたじゃないか！！」

「ゲエハハハッ。何のことやら分からんが、人違いじゃないかの？」

まさか、と少し不安になりかけたが、これは惚けているのだと思
い直し、琢真は徹底交戦することに腹を決めた。

「いいや、俺に予知してくれたのは婆さんだ！ 第一そんな特徴的
な笑い声、間違えるはずがねえ！」

老婆が笑っていたのはスナックでだったが、まさか予知した老婆
と別人という事はないだろう。こんな小汚い目つきの悪い迫力のあ
る老婆は、そうそういるものじゃない。

「知らんの〜。ワシあこれでもとつくに七十過ぎ取るからの〜
寄る年波には勝てんわ」

どっからどう見ても、七十代を超えている事は分かる。どこに『
これでも』と言える要素があるかは、琢真には分からなかった。

老婆はあくまで白を切る気のような。

「なあ、婆さん本当の事を言ってくれ」

「だからワシは、忘れたと言っとる！」

どうやらこの老婆は、怒りやすい性質の様だ。嘘ぶっこいている
のは自分の筈なのに、もう苛ついていて。愛が会ったばかりであん
なにも好戦的だったのは、同属嫌悪という奴だったらしい。

このまま言い続けても、このタイプは埒が明かないのは長年の経
験から分かっている。なので、琢真は攻め方を変えることにした。

「じゃあ、忘れててもいいから、俺の話を聞いてくれ」

「……はあ？ 何でワシが……」

突然ボケを肯定したのに驚いたのか、ピクリと眉が動いたが態度
は変えなかった。話を拒否しようとしていたが、そんな老婆の声に
覆い被せるように話を続ける。

「昨日から今日に掛けて、藍田さん……この前婆さんと会った時に
俺の隣にいた女の子が、立て続けに怪我をしそうになった」

そう言っただけ老婆を見ると、今までの誤魔化そうとしていた時の表
情は消え、再び元の無表情になっていた。

それを見て、琢真は更に話を続ける。

「最初は野球部の打った硬式のボールが、あと少しで当たるところだった。当たり所が悪ければ、打ち身というだけではすまなかったと思う」

その時の様子を思い出しながら、意識して淡々と告げる。

「次は、階段の上からあわや転げ落ちる所だった。その次はバスケットボールで手首を挫いて、最後は誰もいない校舎の上の階から落下してきた植木鉢だ。俺が声を掛けなければ当たっていたかもしれない……」

残りを一気に畳み掛けるように語る。老婆を見ると、やはり無表情のままだった。

「ほんの短い期間で、これだけの不幸が彼女を襲っている……婆さんが言っていたのはこの事なのか？」

老婆は何も答えない。

「俺には、占いとかが予知とかの真偽は良く分からない。けど婆さんの言うように、彼女に危険が襲っているのも事実だ。それも立て続けに」

今のところは、それでも直接死に繋がるような事態は起こってはいない。

だが、直感めいたものが、しきりに琢真に警鐘を上げているのだ。このままでは、いつか大変な事が起こる……と。

「それに、婆さんは凄腕の占い師だということを聞いた。だからお願いだ、何か気づいた事があるなら教えてくれないか？」

老婆の無表情だった顔に、こちらを探るような目の色が浮かぶ。

「あ、もちろん占い料金は払う、幾らだ？」

そう言いながら、琢真は懐から財布を取り出し中身を確認した。

（三千元か……）

「悪い、今はこれだけしか手持ちが無いけど、足りないのなら後で絶対に払う」

取り出したその三枚の千円札を、じっと老婆は見つめている。

（足りないのか……？）

こんなことで拒否されるのは悔しい。何とか、後で必ず払うという誠意だけでも伝わるように、琢真は真剣なまなざしを向けた。

「予知なんてあり得んが……プラス五千円だ」

いつの間にか起き上がったのか、背後に立っていた修司の手に千円札が五枚握られている。

「修司……お前……」

「当然。後で返せ」

何とも言えない嬉しさと溢れる。「ああ、もちろんだ」とその金を受け取り、合わせて老婆に差し出す。

「これでも足りないか？ それなら後で必ず払うから！」
深々と頭を下げる。

琢真はそのままの体勢で暫く固まっていた。

やがて老婆がクツクツと笑い始めたので顔を上げた。次第に老婆の笑いは大きくなり、例の怪鳥のような大笑いに発展していく。

戸惑う二人を余所に、老婆はひとしきり笑うと、面白がっているような視線を向けて言った。

「安心せい、お主らのような餓鬼からは……」

同じく笑ってはいたが、表情はいつもの皮肉気なものに戻っている。老婆はゆつくりとこちらに近づいて目の前まで移動してくると、手に持っていた札を一枚だけ抜き取った。

「これだけしか貰っておらんわ……。まあ、その分金持ちからは多く頂くがな」

ニヤリと笑いながら、老婆は抜き取った札を懐に仕舞いこむ。

「じゃあ頼む。婆さんの知ってる事を教えてくれ」

「……その前に、一つ聞いてもよいかの」

琢真は思わず身構える。

「何故そこまであの娘を心配する？ あの娘は小僧の何じゃ？ いい人か？」

とんでもない事を老婆が言い出した。

「いい人……って恋人ってこと！？ い、いやいや、ち、違う、違うわー！」

全力で否定している自分が空しかった。

「残念ながらいい人ではなく、片思いの相手だ」

背後から、修司が余計な告げ口をする。

「小僧お主……悲しい奴じゃの」

今の言葉で何を悟ったのか、老婆は哀れむような生暖かい目で琢真を見つめる。

「ち、違うって！！ そんなんじゃない、そんなんじゃないって彼女は……」

琢真は慌てながらそこまで言いかけて、

『一緒に、頑張ろう？』

遠い昔の記憶が脳裏をよぎった。それは、恐らく生涯忘れることのない、琢真の大切な記憶だった。

不意に黙り込んだ琢真を、二人は訝しげに見つめる。

そんな二人に向かって、今度は乱れる事の無い確かな口調で告げた。

「……彼女は、俺の恩人なんだ」

その言葉に何か感じ入るところがあっただのか、老婆も修司も何も言わなかった。

ただ、老婆は一息溜息を吐くとゆっくりとベンチに向かい、その中央にドカッと腰を下ろす。

そして

「立つとるのは疲れたわ……。こっちに来て、話してやろう」
琢真を真面目な顔で見つめながら、そう言った。

「あの娘のことを話す前に、まずワシの力を話しておく」
老婆は小さく細い目に光を灯しながら、静かに話し始める。

「お前さんらは、ワシの話を『予知』と捉えておるようじゃが……」
「違うのか？」

「いや、ある意味はそうなのじゃが、予知と言いつ切るにはある問題を抱えておる」

(的中率が凄く低いとかか？)

そう思ったが、琢真は何も言わずに老婆の話を待った。

「まずワシのソレは、いつでも自在に出来るものではないというのが一つ」

ゲーム風に言うと、パッシブ能力と言う事だろうか。

「齢十八位までの子供のことしか視えないということが、一つ」
それは確かに微妙な制限である。

「次に、詳細は分からないと言う事が、一つ」
「ちよつ、ちよつと待ってくれ。詳細が分からない!？」

黙って最後まで話を聞こうと思っていたが、聞き捨てならない台詞だったので琢真は思わず口を挟んでしまう。

「実際に事が起こる直前に『視る』事が出来れば、詳細な事も分かるのじゃが……そう都合良く『予知』できるわけでもないからの」
それでは対応策が練れないんじゃ、と考え込む琢真を置き去りに老婆の話は続く。

「人の生死に関わる事しか分からないというのが、一つ」

それがどういふ事かはいまいち想像できなかつた。ただ、言い換えれば予知してみたものは全部人の死に繋がっているという事であ

る。それは、とても辛い事に思えた。

「そして

僅かに間を挟んだ後、老婆はどこか空ろな瞳で告げる。

「これまで予知した者は……皆すべからく死んでおる、ということじゃ」

思わず息を呑む。

（皆死んでいるだって！？　じゃあ藍田さんはどうなる！？）

「最後の一つは、どうして『予知』ではないということに繋がるんだ？」

衝撃を受け黙り込んだ琢真の背後から、我関せずというスタンスを取っていた修司が老婆に疑問を呈した。

予知どうこうと言うより、理屈が合わないということが嫌なのだろう。

「皆死んでおると言うことは、皆防げなかったと言う事じゃ。防げない『予知』に、『予知』の意味があるかえ？」

老婆は自嘲のような笑いを浮かべ、即座に返答する。

修司は「なるほど」と、納得の声を上げるとそのまま静かになった。

だが、琢真はそれどころではない。

（防げない？　じゃあどうすれば！？）

心が焦燥感で占められる。琢真は対応策はないかと老婆に縋る様な目を向ける。それに対して老婆は何も言おうとはしなかった。

「ワシの『予知』の能力は分かったかの？　では、あの娘の話に入ろう」

聞きたい事はあったが、莉理の話ということなので琢真は黙って話を待った。

「まあと言つても、この前以上の話がそれほど出来るわけでもない

んじゃが……」

いったん話を区切り、老婆は苦々しい表情を浮かべる。

「まだはつきりとした確証はないが、分かっている事だけを挙げるとするかの」

「ああ、頼む……」

「あの娘は早くて今週、遅くとも来週中に命を落とす」

以前聞いた話だったが、その時とは琢真の姿勢が違ったためか、改めて衝撃を受けた。

期間だが……今日はもう数に入れなくても良いだろう。明日は金曜日だから、後八日という計算になる。それを乗り切れば……。

「恐らく場所はどこかの路上じゃ、少なくとも家の中ではないと思う」

それは喜んで良い情報なのだろうか。

「死因はよく視えんかったが、恐らく外傷による死で間違いないじやろう。事故か、あるいは……。後は……無いのう。少ないが、分かっているのはこれだけじゃ」

琢真は外傷の要因となりそうな事柄を考えるが

無駄な為

止めた。

今のご時世には、そんな要因など腐るほどある事に気付いたからだ。

(……藍田さんが、死ぬ?)

彼女から大量の血が溢れている様を想像し、青ざめる。

それは最悪の想像で、必死に振り払おうと頭を振るが脳裏に染み付き払えない。

(彼女には将来の夢だつてあるんだ……)

そんな馬鹿なことがあつてたまるか、と憤る。

しかし、何に対して? 何に怒りをぶつければいいのかが分からず、その想いは霧散していった。

外傷。出血。防げない。必ず当たる。そして死。

それらの単語がグルグルと頭の中を回り、やがて琢真の脳裏を埋め尽くしていく……。

（俺は彼女に何もしてやれない？ 受けた恩すら返せないのか？ あの時の恩を、あの時の誓いを、俺は守れないのか！？）

胸を染め覆いつくした絶望感で、心が沈む。

「心停止等ではなくて、良かったと考えるべきじゃないのか？」

そんな琢真を見かねたのか、修司がそうぼそりと口にした。

（あ……そ、そうだ。確かにそうだ！ 心停止ではどうしようもない所だった）

琢真はどうしようもない、先のない真っ暗な深淵の底に思うっていたが、修司の言葉に一筋の光明が見えた気がした。

そして、それは一気に琢真の心を照らし出す。

（そうだ、まだ諦めるの早い！ 弱気になるな！ 今度は俺が彼女を守るんだ！）

藁をも掴む心境だった。しかし、その藁は決して沈む事のない生命線である気がした。

心が沸き立ってくる。

感謝の意を込めて送った視線に気づいたのか、修司は僅かに照れた調子でそっぽを向いた。

そんな二人を、どういった気持ちで見っていたのかは分からないが、老婆が更に明るい材料を増やす。

「皆すべからく死んでいるとは言ったが、それは予知の話をした今までの相手が一樣に、ワシの言葉を信じようとはせず、防衛策を何も講じようとしなかったと言う点も原因に挙げられる、かもしれん」
琢真は思わず顔を上げ、老婆を見つめる。

「もし対策を練って行動したら……正直ワシにもどうなるかは、はっきりと分からない」

（対策を練れば、彼女は助かるかもしれないのか……いや、助ける

んだ！)

今、琢真は固くそう心に誓った。

「対応策を練るとして、お前は どうするつもりだ？」

冷静な声で修司が問いかける。

(そうだ、きちんとして対応策を考えないといけない)

「外傷で間違いないんだよな？ 婆さん」

琢真は念のためにもう一度老婆に確認し、肯定を得る。

「だったら話は簡単だ、彼女を護衛すれば良い」

片時も離れることなく傍に控えていれば、凶弾から彼女を身を挺して守る事が出来る筈だ。

と、琢真は意気揚々に答えたが、修司は呆れた目を向ける。

「気持ちが悪くしているのは分かるが、冷静になれ」

咎めるような言葉に、「俺は冷静だ」と琢真は不服の声を上げる。

「どこがだ馬鹿。お前、護衛の理由をどう説明するつもりだ？」

そう言われて 思い至る。確かにどう説明すればいいか…

…。

「まず、今の話を馬鹿正直に話したところで、まともな人間なら信じようとはしない。せいぜい気味悪がられるだけだ。それに、お前は雰囲気にもまれて信じ込んでしまっている様だが、まだその老婆の言う事が真実だという保証も無い」

修司は、老婆の話をまるつきり否定するようなことを平然と言う。

琢真は気を悪くしているのではと老婆を伺った。しかし、意外にも老婆自身がその意見を肯定した。

「そうじゃな。行き成りこの話をして信じるような馬鹿は、ようおらんじゃろつて」

笑うように話しており、気分を害したようには見えない。

「残念ながら、藍田はそんな馬鹿な人間ではない。まあ、お前が彼女の恋人だというならまだ話は違っただろうが……」

莉理は賢く、優しそうに見えるが芯はとても強い。

例え琢真が彼氏だったとしても、話半分には聞いてくれるかもしれないが、頭から鵜呑みにしたりはしないだろう。

だが、それでは意味がない。
だったら。

「彼女を、隠れて影から護衛する」

琢真は、はつきりと言い切った。傍で護れないなら、影から護るしかない。

「分かっていると思うが、それは傍から見たらただの……変質者だぞ？」

そうかもしれない。だが、それしか思いつかない。

「分かっている。それに、彼女に変に伝えて無駄に怖がらせたくない。確かにお前の言う通り、婆さんには悪いが話が本当かどうか分からないしな。それも含めてそうするのが一番いいと、思う」

彼女には、いつもの穏やかな様子で居て欲しかった。

それが、その日常を護る事こそが自分の使命だ、と琢真は思った。「あまり浸るな。……だが、そこまで言うなら、俺はもう何も言わん」

自分に酔うなと一言忠告した後、修司はもう何も言う事はないという様子で、言葉通り口を閉ざした。

「どうなることやらじゃな……よっこらせ」

自分達のやりとりをどこか楽しげに見ていた老婆だったが、話が一応決着したからなのか、ベンチからゆっくりと腰を上げ公園の出口に向かって歩き始めた。

「……何か用があるなら、またシャボンまで尋ねて来い
すれ違いざまそう呟く。

「その時は、よろしく頼む。あと、今日は話してくれて助かった」
公園を出ようとしていた老婆の後姿に向けて礼を言う。

「……ふんっ、料金を貰った以上話をしないわけにはいくまい。勘

「違いするな」

琢真にはその声にはどこか、照れているような調子が含まれている気がした。

そのまま、老婆は振り向くことなく闇の中に消えていった。

「俺達も、もう帰ろうか」

帰宅を促しながらも、琢真の頭の中は明日からの事で一杯だった。どんな事になるのかはまだ分からなかったが、やるべき事は決まっている。

彼女を護る、ただそれだけだ。

琢真は、ビルに囲まれた小さな夜の公園から見える小さな星空しほごうに向けて、そう誓っていた。

(1)

1

『金曜日』

昨日の自分の密かな誓いに従い、琢真は早速今朝から行動を開始した。

寝坊しないように、目覚まし二つに加え携帯アラームもセットしていたことが功をそうしたのだろうか。夜更かししてゲームをしなかったのが良かったのかもしれない。いつもならまだ眠りの底にどっぷりと浸かっている時間にもかかわらず、何とか目を覚ます事ができた。

もはや、時間通りに琢真を起こすのは半ば諦めかけている母親が、起こす時間よりも二時間も早く起きてきた息子に、一体何事かと驚愕の視線を向けていた。

それは軽く無視して朝食そこそこに、琢真は飛び出すように家を出た。

空は雲ひとつない晴天で、朝方だったが日差しがとても暖かかった。まだ人通りの少ない朝靄の降りた道路を駆け抜け、目的の場所に向かう。

もちろん、莉理の家である。

莉理の家は、幼い頃に一度だけ訪れた事があるだけで、それ以後一度も訪れた事は無かった。だが、決して忘れてはいけな場所の一つとして、琢真の脳に刻み込まれている。

莉理が琢真より遅く学校に来る事はある得なかったもので、彼女がいつも何時ごろに学校に着いているか全く分からない。そのため、

十分に余裕をもって彼女の家に向かう必要があった。莉理の家を張り込んだものの、既に学校に行った後だった、と言うのでは間抜けすぎるからだ。

八分程度掛かり、ようやく彼女の家が見えてくる。

家の場所は、街でも高級な住宅が多く並んでいる地区で、莉理の家もご多分漏れず立派な庭の付きの家だった。街の中心部に向かってなだらかな傾斜を描いている坂の中腹に建てられており、自転車では行きは良くても帰りが辛そうな感じだった。

ただ、家の前には二車線の道路が通っているので、交通の便は良いことだろう。

長い坂を駆け上がり、琢真は莉理の家の前に到着する。

そうして、気づいた。

(これから、どうしよう!?)

莉理が家を出る前に張り込むということに気を取られて、実際にどのようなして待つかまでは考えていなかった。

咄嗟に琢真の脳内コンピュータが慌しく対策を練り始める。

一、このままインターフォンを押し彼女を出迎える。

あり得ない。それが出来るのであれば、今頃はもつと違った関係を築けていたはずだ。琢真にとって、悲しい関係だった可能性が高いが……。

二、このまま堂々と家の前に立ち続け、彼女が出てくるのを待つ。ある意味『益荒男』と言えなくもないが、出てきた彼女に引いた顔をされるのがとても怖いので却下。

三、このまま家の前に立っている街路樹の陰に隠れて、彼女が出てくるのを待つ。

どう見ても変質者です。お疲れ様でした。

四……と、いう具合に案を挙げては棄却を繰り返して、案八十五を数えようとしていた時、突然彼女の家のドアがガチャリと音を立てて開いた。

(やばい!!)

琢真は慌てて腰をかがめた姿勢で家の前から走り去り、近くの物陰に隠れて様子を見る。

数分待っただろうか。ガラガラと開いた車庫から一台の車がゆっくりと出てくる。運転席をチラリと見ると、ダンディな男性が座っていた。どうやら、彼女の父親だったらしい。そのまま、特にこちらに気付く事も無く走り去っていった。

琢真はホッと一息ついて、家の前に戻ろうと体勢を起こそうとした時に、道路を挟んで彼女の家の向かいに立っている家が目に飛び込んでくる。

周囲の家と同じくらいの敷地だったが、こんな高級住宅街に建っている家だとは思えないほど荒れており、一目に空家だということが分かった。鎖錠で嚴重に封鎖されている門の隣に、薄汚れた『売家』の看板が貼られているのを捉える。

(これは都合がいい!)

莉理の家を見張るのに、これ以上の場所はない。

これぞ天の助けとばかりに、琢真は早速移動しようとして身を起こしたところで、不吉な音が聞こえたきた。

グルルルルルルルル。

(何だ?)

発生源は背後からだった。そのまま振り返ろうとして、首を半分程回したところで、ある注意書きが琢真の目に入ってくる。

『猛犬注意』

嫌な汗が額からタラリと一滴流れ出た。ゆっくりと、体ごと首を回して背後を確認する。

グルルルルルル。

琢真は今気付いたが、逃げ込んだ場所は隣の家の敷地内だったらしい。

流石に高級住宅街なことにはあった。ドーベルマンだった。

期待を込めて犬の首輪を見るが、残念な事に案の定鎖はついていない。

(こんな犬を、放し飼いにしているのかよ!!)

と、琢真は声を大にして叫びたかった。が、刺激しかねないので止めておいた。

代わりに『お犬様』に向かって愛想笑いをした後、一息吐く。
そして。

弾かれるように琢真がその場を飛び出したのと、獲物を前にして柵を外された獅子のように猛犬に飛び掛られたのは、ほぼ同時だった。

服一枚牙が掠めたが、なんとか初撃をかわすことに成功し、文字通り泣きながら『売家』まで走り去る。

火事場の馬鹿力か、『売家』の高い塀を一瞬で乗り越えて庭に降り立つと、琢真はすぐさま門から犬の様子を伺う。

やはり賢いのか、犬はその家の敷地から離れたら襲い掛かって来ようとはしていなかった様で、警戒するように数度家の前をうろついた後、再び家に戻っていった。

琢真は思わず脱力する。

ただまあ、色々あったがようやく安住の地を得て、莉理が家を出るのを待つ事にした。

そして、待つ事数十分。ようやく莉理が家の門から出てきた。

今日も相変わらず、清楚とした雰囲気ですていしかった。

莉理はそのまま街の中心部に向かって歩き始めたので、琢真は物陰に隠れながら彼女から二十メートル程離れて後を追うことにした。

彼女を見張り始めて二十分後、ようやく大通りの通学路に入ったので、隠れることなく大っぴらに背後を歩くことができていた。この時間帯の通学路は学校に向かう生徒の姿が少なくない上、この辺りは自分の通学路とも被っているからだ。

しかし、人をつけるというのがこれほど大変だとは思わなかった。莉理が振り向く素振りをみせたら、直ぐに隠れなければいけない。彼女の一拳一動に注意し、常に神経を張り巡らせなければ見つかってしまう。

したがって、自ずと自分の周囲の警戒にはおそろかになってしまい、道行く人に何度もぶつかったり、溝に落ちたりすることも一度や二度ではなかった。

拳句、琢真は自転車に乗ってる人に轢かれたりもした（ちなみに、それは木村さんだった）。衝撃で自転車から振り落とされたのか、何やら言っていたようだが申し訳なく思いながらも琢真は無視させて頂いていた。

まあそんなこんなで、教室に着く頃には琢真は精も根も尽き果てていたのだった。

机につつ伏していると、登校して来たクラスメイト達が皆必ずと言っていていいほど驚きの声を掛けてくる。そして、これまた図つたかのように全く同じ内容だった。

それは。

「何でお前が、こんなに早く、学校に来ているんだ!？」

琢真の脳内の言葉を代弁するかのようになり、たった今教室に入ってきたらしい山口と佐藤が揃って驚きの声を上げた。

(うるせえよ、静かに俺を休ませてくれ)

完全に聞こえないふりをして、琢真はそのままの姿勢を維持する。

二人は、「今日は雪が降るぞ」と失礼極まりない事を言いながら離れていった。しかし、教室内の喧騒は静まることを知らなかった。

正直、全く休めない。

(そんなに珍しい事じゃないだろ！ 半年に一度位はある！ 全く失礼な！)

と怒鳴り散らしたかったが、琢真にそんな気力は沸きあがってこなかった。

悶々としたまま時が過ぎ、ちらりと時計を見るとHR開始まで後一分という所を針が指し示していた。

担任の池山は遅刻には非常に煩い。

遅刻回数が三の倍数になる度にアホに……もとい、説教と反省文が科せられる事になっている。なお、男子生徒には漏れなく拳骨も追加オプシオンで付いてきてしまう。もちろん、拒否は出来ない。

それを恐れて、皆遅刻だけはしないように気をつけている。ただ、琢真クラスになるともうそんな事は些細な事だった。

反省文も最近では書き慣れてしまい、今では連載小説風な続き物を書いて提出している。池山はともかく、国語の教師達には中々好評のようで、次（の遅刻）はいつだ？ と催促されるような事態になっっている程だった。

それはあくまで特例であり、他の皆は普通にそんな事態を敬遠していたので、今も騒いでこそいたが難癖付けられないよう自分の席に座ってHRを待っていた。

一名を除いて。

その一名は、朝のチャイムが鳴り終わろうかというタイミングで慌しく駆け込んできた。ゼイゼイと荒い呼吸を繰り返しながら、ゆっくりと琢真の斜め前の自分の席に移動しようとする。その途中、まるで過呼吸に陥ったように急に息が止まった。

ふと嫌な予感が琢真を襲い、飛び起きるように身を起こす。

一瞬の時間差で、拳が机に突き刺さっていた。

「何すんだよ！！ 危ねえだろうが、愛！！」

琢真は当然の苦情を上げる。が、それを完全に無視して、理不尽な怒声を浴びせられた。

「うるさい！ アタシがこんなに朝から疲れているのに、琢真の分際で偉そうに余裕こいて寝てんじゃないわよ！！」

急いで走ってきたのだろう、愛の自慢の柔らかい髪が乱れている。額に滲んでいた汗をポケットから取り出したハンカチで拭いながらも、琢真を睨むのは止めない。

「ひでえ……」という善良な呟きが離れた席から聞こえてきた。だが、愛に横目で一睨みされると「ひっ」怯えたような声を上げ押し黙った。

チャイムが完全に鳴り終えてしまった為か、愛は納得のいつていない顔のまま、しかしそれ以上は特に何も言わずに席に戻っていた。

その直後、教室の扉が勢いよく開き池山が現れる。教卓の前に大

股で移動すると、挨拶もそこそこに点呼を取り始めた。一目見れば、皆居る事は分かりそうなものだが、わざわざ点呼を取るのは何故だろうか。

(趣味か?)

そんなことを琢真が思っている間にも点呼は続いていた。

「隣堂」

「はい」

「矢野」

「はい！」

「芳垣」

「はい」

「ちっ、芳垣はまた遅刻か!! たくしょうがない奴だ。じゃ最後、吉田」

「は、はい……」

「ちよつと待て!!」

思わず琢真は突っ込んでしまう。これが釣りだとしたら、匠と言わざるを得なかった。

「あ? ……ぬおつ! 芳垣!? なんでお前がここに居る!?!」

池山は冗談ではなく、本気で驚いているようだった。

それこそ冗談ではない。どんな予定調和だ。

「最初から居ただろ!! 点呼も返事したじゃないすか!!」

「む、むう。そうか? ……なあ、あいつ最初から居たか?」

琢真を警戒するように見ながら、教卓の前の席の女子にほそぼそと尋ねていた。聞こえないような音量に抑えているようだったが、丸聞こえだった。

どうやら肯定されたようで、池山は何かを誤魔化すように一度咳払いする。

「芳垣! お前がいつもちゃんと来ないからこういう誤解をされるんだ! これに懲りたら明日からもちゃんと来い!!」

何故か叱られた。

が、言っている事も一理あるので、悔しいが琢真は言い返すことはできなかつた。せいぜい「ぐぐぐ」と呻くのが精一杯だつた。

それから、池山は逆切れしたような調子で今日の予定を告げると、肩を怒らせたまま出て行つた。

誰か教育とは何かを奴に教えてやってくれ、と琢真は切実に思う。こちらを振り返つた愛の目が、「ざまあみる」と語っていた。

「アタシよりも先に来た罰だ」とも語っていた。

「今度偉そうにアタシよりも先に来てたらただじゃ置かない」とさえも語っていた。

(このアマ……)

この憤り、どうしてやろうかと憤然としながらも、琢真は何とか心を落ち着かせようと莉理の姿を盗み見る。

彼女の慰めるような目が、ささくれ立った心を癒してくれるのを期待して。

だが、莉理は前の席の田中に話しかけれ、何やら楽しそうに談笑していた。

そして、琢真を気にかけてくれるような素振りは全くなかつた。

(まあ、そうですよねー)

(3)

3

頭が痛い。

と言っても頭痛的なものではなく、あくまで外傷的なものだ。前も後ろも鈍い痛みがあり、無事なのは側頭部だけだった。

机に倒れている、と言う表現が一番正しいだろう。疲れた体を少しでも休めるように、机の上に体を投げています。

決して柔らかくない机の表面は、優しく包み込んでこそくれなかったが、「肩なら貸してやる」とニヒルに呟く渋いオッサンのような労りで、今日の一日で負った傷やら何やらを癒してくれるようだった。

そんな琢真を、呆れたを通り越してもはや哀れむような目で見ている男は、止めを刺す気なのか、深い溜息を吐いた後重い口を開いた。

「お前自身気づいているとは思って」

(言うな、その先は聞きたくない)

「お前のやっている事は、ただの自爆だ」

4

話はまず一時限目の休み時間に遡る……。

琢真の少し前方で、莉理が高橋達と談笑しながら歩いている。

老婆の話では、事件が起こるのは『路上』ということだった。ただ、琢真は念のために学校内でも護衛する事になっていた。

気をつけるのに越した事はないからだ。

何食わぬ顔で彼女の後ろにつけながら、琢真はどんな切欠も決して見逃さないという警戒を全神経を動員して行っていたのだが。

果たして、その成果は顕れた。

次の時間は特別教室での授業のため、教室から皆で移動中だったのだが、彼女が以前同様、階段の踊り場で足を滑らせ体勢を大きく崩したのだ。

そのままでは、階段の上から落下する可能性がある。

（させるかっ！！）

琢真は電光石火の勢いで、彼女の落下を体で受け止めようと飛びついた。

が、彼女は隣にいた高橋に支えられ、特に何事も無く周囲の友人達に「どん臭い」とからかわれながら、そのまま階段を上っていった。

一方、その様子は視界に入ったものの飛びついた勢いを殺せず、彼女の代わりに階段下に向かって転げ落ちている男がいた。琢真だった。

「池田屋階段落ちだ……」

様子を見ていたらしい最近歴史ものに嵌っている金子が、そう偶然と比喻しているのを、後頭部を打ち付け薄れゆく意識の中で琢真は聞いていた……。

5

体育の授業中。

痛む頭を抑えながら、琢真は運動場でサッカーをしていた。体育は二クラス合同授業なので、今は別クラスとの試合中だった。

男達の楽しそうな騒々しい声が聞こえてくる。

だが琢真はそれらには積極的に参加せずに、「パス」だの「シュ

ート」だの大声が飛び交う中、校庭の反対側でソフトボールを行っている女子達の姿を眺めていた。もとい、凝視していた。

無論。桃色思考からではなく、莉理の無事を確認するのが目的だった。と言っても、もちろん目の保養になったことは否定しない。ただ、女子達は全体的にだらけた空気を漂わせているように感じた。

そんな中、ピッチャーの愛のはしゃぎっぷりだけが異彩を放っている。

本来、愛は率先してだらけるタイプの人間だったが、恐らく少し前に貸した野球漫画の影響だろう。一人張り切っていた。

（分かりやすい奴だ）

そうして十五分程過ぎただろうか、バッターボックスには莉理の姿があった。

重そうにバットを素振りしている。残念ながら、あの振りでは蚊すらも殺せないだろう。

（はっ！？ まさか藍田さんにボールが直撃するのでは！？）

愛の無駄に速い速球を見ながら、そんな予感が琢真の脳裏をよぎる。

一度気になってしまつと、どうにもその想像を消す事はできなかつた。

出来ることといえば、愛に呪詛の念を送る事のみ。

（怨怨怨怨怨怨）

固唾を呑んで見守る中、愛が振りかぶる。

愛は別に本職でも無いのに、それまではずっとウインドミルモーションで投球していた。だが、何故か莉理の時はスリングショットモーションで投げようとしている。

（こんな時に余計な事を！）

得てして、こういう時に事故は起こるのだ。

そんな琢真の焦燥は伝わる事なく。そのまま愛は勢いよく腕を後ろに振り、投球した。

(藍田さん!!)

「琢真いつたぞ!!」

動向を一瞬たりとも見逃さないように琢真は見続けていたが、突然名前を友人達に叫ばれ意識を戻す。

事は出来なかった。

「へっ?」

急に視界の前に黒い影が現れ、次の瞬間にはそれが痛烈に顔面を殴打したからだ。

「ぶへらっつ!!」

意味の分からないまま、琢真は何も出来ずに地面にぶっ倒れる。

だが、何故か聞こえてきたのは琢真を心配する声ではなく、同じクラスの男子達から熱い叫びだった。

「顔面ブロックか! くうくう皆! 琢真の犠牲を無駄にするな!

カウンターだ!!」

『おおおおおおおっ!!』

勇ましい男達の声が徐々に遠のいていく。

「い、いや、違う……。だ、誰か助け……」

薄れ行く意識の中、琢真は涙のカーテンで覆われた世界の向こう側で、愛の緩やかな山なりボールを、全て振り遅れて三振している少女の姿を捉えた気が……。し……。……。た。

昼休み。

速攻で購買に行きパンを買って教室に戻るまでにかかった時間は、凡そ三分。

購買の前の溢れるような人の群れを、千切っては投げ千切っては投げ　と、そんなことはどうでもいい。

そうして手に入れたパンを片手に、琢真は教室の自分の席に座って莉理の様子を横目で見守る。彼女は何やら騒いでいる田中と高橋を見て、穏やかな微笑みながら昼食を取っていた。

その優しい笑顔に、琢真は自分の目的も忘れ見入ってしまった。パンを咀嚼する時間すら惜しく、机にパンを置いてうっとり眺める。時を忘れるという言葉は、こういう時に使われるのだろう……。

そんな風に琢真がトリップしている所に、別のクラスの友人が声をかけてきた。

「よお琢真。この前借りてたDVD、返しに来たわ」

「ああ……」

どうやら琢真が貸していたDVDを返しに来たらしいが、琢真はその声を聞いているようで聞いていなかった。

そんな琢真の様子を少しは疑問に思ったものの、友人は大して気にせず話しかけ続けた事に不幸は生まれた。

「お前の言ってた通り、すげえ面白かったぞ!!」

「ああ……」

「なあ、続きってまだあるのか!？」

「ああ……」

「おお！ やった、もしかしてお前それも持ってたりする！？」
「ああ……」

「頼む！！ 持ってるなら続きの奴、全部貸してくれ！」

「ああ……」

「よっしゃあー！！」

「ああ……」

「はあ、楽しみだな〜。……つとそう言えば、まだ昼食取ってな
かった」

「ああ……」

「ん？ 琢真、そのパンもう食わないのか？」

「ああ……」

「じゃあ、それくれよ。今さ、金ねえんだよ。ちよっとでも貯めと
かねえと……」

「ああ……」

「おお、ラッキー。じゃあはい、このDVDと交換な」

「ああ……」

「あ、食わねえなら、そっちのも貰っていい？」

「ああ……」

「やった！ これで一食分浮いた！」

「ああ……」

「じゃあ、サンキューな。続きのDVD、近いうちに頼むな」

「ああ……」

（はあ、可愛いなあ……）
ぐぎゅるるるる〜〜〜。

琢真の腹が盛大に合唱する。そこでようやく琢真は意識を戻した。

（はあ、可愛いけど、腹減ったな……。パン食うか……）

「はがっあっ！！」

さっきまで食べていたイチゴジャムパンの、ありえない硬度を歯
で受けて琢真は一気に意識を覚醒させる。

口内に突き刺さっている、固すぎるパンの小さな破片をペツと吐き出す。プラスチックだった。

(何でこんなものが……?)

琢真は驚愕しながらも、イチゴジャムパンを検めるべく視線を移すと……。

「あああああ!？ 俺の大切なジャック・ウアーがつ!？」

そこには、琢真の大切なDVDパッケージが無残な姿を晒していた。

7

その後も色々な災難？ が琢真を襲い、もう身も心もボロボロだった。

そんな満身創痍の自分を捕まえて、『自爆』と言い切る修司は鬼だと琢真は思った。が、確かにその言葉が真実を言い表している事は琢真も分かっていた。

莉理を朝からずっと護衛していたが、結局のところ放課後まで彼女が傷を負う様な出来事は、一度も起こっていない。

にも関わらず、琢真は何故か体中に傷を負っている。

完全に迷走している。修司でなくともそう言いたくなるに違いない。

「俺は別に、あの老婆の言葉を信じたわけではないが……」

修司はそう前置きして続ける。

「何か起こるのは路上だと言っていたらどう？ お前が『予知』を信じるのであれば、その事も信じてみたらどうなんだ？」

確かにそうかもしれない。修司の言っていることは正しいと、琢真は思う。

(だが、それでも俺は)

「心配なのは分かるが、このままでは肝心な時に失敗するぞ?」

修司が忠告のような労りのような言葉を掛ける。

その通りで、念のための学校内での護衛で力尽き、肝心な外での護衛に支障をきたしているのでは全くもって意味が無い。

「ん？ 藍田はどうやら、今日はそのまま帰るようだな」

決して良い趣味だとは言えないが、恐らく琢真のために莉理の発言に耳を傾けていたのだろう。修司が彼女の動向を教えてくれる。

莉理は残っていたクラスの友人達に別れを告げて、教室を出て行った。

そのキツカリ三十秒後、意欲を奮い立たせるため頬を両手でバシツと叩くと、琢真は傷ついた体をおして立ち上がり、その後を追った。

男二人で少女の後をつける……。

それだけを聞くと完全に変質者以外の何者でもなかった。とは言え、二人の内一方……つまり琢真は非常に真摯に真剣だった。

一緒に帰っている修司には全く顧みる事は無く、視線は完全に少し前を歩く莉理とその周囲に向けている。不審なモノの接近を絶対に許さないという使命に燃えた瞳で、端然と警戒の根を張っていた。肝心の護衛対象は、校門を出る時に合流した恐らく別のクラスの友人と肩を並べて歩いている。その女子生徒は琢真は見たことのない顔で、隣の修司も知らないとのことだった。

遠目に見たところ、どうやらかなり大人しい少女のようで、どちらかと言うと大人しい筈の莉理が率先して話題を振っているように見えた。気にはなつたが、莉理の友人に悪い人はいないだろう、と琢真は判断する。

その友人の事はいったん置いて、引き続き周囲の警戒に入ることが、
「な〜〜〜に、してんのよ!!」

何者かが大きな声を出しながら、琢真達の背中を激しく殴打してきた為、中断を余儀なくされた。

莉理の警戒に夢中で、自分の警戒が疎かになっていたようだ。殴られた二人して、そのまま前につんのめる。

「あいつかわらさず二人つきりで……。アンタ達怪しいわよ?」

(そつちこそ毎回毎回、同じような登場をしゃがって……)

どう怪しいのかは琢真には分からなかった。だが、いつも通り突然現れた愛に苦情と警告の目を向ける。

「この……」

修司は今の衝撃で、かけていた眼鏡が吹き飛んでしまったようで、それを拾い上げながら恨みの籠った目を愛に向けていた。

一方の愛はその様子にもどこ吹く風で、「喫茶店いかない？ アントの奢りで」とふざけた事をのたまわっている。

チラリと様子を伺うと、眼鏡が破損していないかを確認した後、ゆっくりと眼鏡をかけ直している修司から不穏な気配が漂ってくるのを琢真は感じた。

このままでは拙いと直感で感じたので、琢真は何とか空気を換えようと、莉理の隣にいる少女について知らないかを愛に尋ねた。

「アンタ……」

愛は前方に莉理が歩いているのには気付いていなかったのか、その姿を視認すると、琢真をまじまじと見つめる。

「莉理のことが気になるのは分かるけど……ほどほどにしとかなないと、ヤバイわよ？」

犯罪者を見るような目つきだった。

言い返したかったが、彼女をつけているのは事実なので、琢真は何も言えなかった。

「はあ。まあいいわ。え〜と、あの娘は確か……」

愛は小さな溜息をついた後、少女をじっと見つめる。

「う〜ん……。あの娘は確かF組の子だった筈よ。名前は知らないけど、確か莉理と同じ文芸部だったと……思う」

（なるほどそつち繋がりが、通りで大人しそうな訳だ。しかし

）

「何か、曖昧な感じだな」

推測に推論を重ねているような物言いが引っかけかり、琢真は指摘する。

すると、愛は僅かに苦々しい表情を浮かべながら「仕方ないじゃない」と吐き捨てた後、質問を投げ返してくる。

「アタシと、仲良くなれそうなタイプに見える？」

言われて見れば確かに、愛とは一線を隔てている女の子に見えた。どの角度から見ても、男と話したり遊んだりするのが得意な感じには見えなかったからだ。琢真は思わず納得してしまう。

愛はそんな琢真を訝しげに見ながら、

「アンタ……あの娘に乗り換える気？」

人が必死で空気を変えようと話題を振ったのにも気付かずに、下らない事を言い出した。

「ちげーよっ！」

そんな訳はないし、そんな場合でもない。琢真は怒りを込めて否定する。

「じゃあ、何よ？ あ、分かった。莉理に直接は無理だから、外堀から埋めていこうと……」

何も分かっていなかった。

もう否定し続けるのも面倒なので、昨日老婆から聞いた話を一部分を除き教えてやる事にした。隠したのは、『死』云々の部分だ。その部分は、『不幸が起こる』というニュアンスに変えて伝えた。一応愛も女の子なのだ。『死』の話などを聞いて気分良くはいられないだろう、と言う判断だった。

まだ悪感情を抱いているのか、愛は老婆を話題に出した途端に機嫌が悪くなっていった。

だが、話が彼女を『不幸』から護るためにこっさり護衛しているという部分に至ると、啞然とした表情に変わる。

「それ、ストーリーカーじゃん!!」

今まで、皆がオブラートに包んでいた単語を、愛は大声で叫ぶ。分かってはいたが、琢真は少しへこんでしまった。

「アンタ分かってる!? それストーリーカー以外の何者でもないよ!」

呆れ、恐れ、そして心配を滲ませた目で、愛は再度警告してくる。「分かってるよ……。でも、そうする以外にどんな方法がある?」

「いや、隠れないで隣で護衛すればいいじゃない」

「何て言って護衛するんだ？ 近々『不幸』が起こるから……とでも言えばいいのか？」

愛は何だかんだ言って心配して言ってくれているのは分かってはいたものの、つい琢真の語気は荒くなる。

「まあ、冷静に考えて頭のおかしい奴だと思われるだろうな」

ずっと黙って後ろを歩いていた修司が、フォロー？ を入れてくる。

「た、確かに、そうかもしれないけど……」

琢真の苛立ちに本気さを感じたのか、愛は少し怯えたように口籠る。

「そ、それに、その『予知』って当てになるの？ デタラメかもしれないじゃない」

「それに関しては同意する」

愛のもっともな意見に、修司が頷く。

「確かにそうかも知れない。でもここ最近、藍田さんに色々起こっているのも事実なんだ。お前も知ってるだろう？」

いくつかの出来事を思い出したのか、愛が何か言おうとするがそれは声にはならなかった。

「あの婆さんの言う事が、デタラメだったとしてもいいよ。というかそっちの方がいい。それに、そんな何ヶ月も護衛するわけじゃない。期間は来週までで、念の為にするだけだ」

今日は金曜日なので、あと一週間と一日だ。その八日間に何も起きなければ、ただ笑い話になるといっただけである。

やってて損はない筈だ、と琢真は思っていた。

そのまま暫く三人とも黙ってしまった。やがて、愛は何かを吹っ切ったような溜息を吐く。

「はあ、分かった。もう何も言わないわ。でも絶対！！ バレないようにね」

『絶対』の部分に、非常に強く力を込めていた。

言われなくても分かっていた。琢真も莉理に嫌われるのは御免だった。

神妙に頷く琢真に、愛は「よしっ」と小さく頷き返す。

「まあどうしても困った事があつたら、『貸し』で、手伝ってあげるわ」

貸しで、と言う部分に引っかけかりを覚えなくてもなかったが、滅多にない愛の優しい言葉に、琢真は不覚ながら感動してしまう。

修司も背後で「馬鹿な」と、うめき声を上げていた。

(何だかんだ言っても、愛も本当は優しく思慮深い女の子なんだ…)

と、改めて見直していると

「じゃあ、そういう訳で今から喫茶店に行かない？」

琢真を腰砕けに脱力させるような事を、愛は笑顔で言ってきたのだった。

「……確かに、手伝うとは言ったわ」

目の前の人物の静かな怒気を、琢真は身を縮めるようにして真つ向から受けていた。

周囲には二人以外の人影は無かったので、逸らす事も出来なかった。

「ええ、確かに言った……。だから、手伝うのはやぶさかではないわ……」

彼女はベンチに腰掛けて、背もたれに重心を置いた姿勢でゆつたりと足を組んでいる。

上下揃いの青色のジャージの、チャックを全開に開けた上着の下に、ピンクのタンクトップが覗いている。腕を組んでいるため全景は見えないが、巨乳ではないものの十分に豊かな胸の自己主張が、目に毒だった。

「ねえ、聞いてる？」

そんな琢真の視線を知ってか知らずか、咎めるように聞いてくる。いつもは明るく大きな瞳が、今は細められて冷たい輝きを放っていた。

「もちろんです」

思わず琢真は敬語になってしまう。今の力関係からするとそれも当然だった。

琢真はベンチの前で正座しているので、上から見下ろされている格好になっている。

「そう……じゃあいいわ」

琢真の言葉を認めてはくれたものの、依然として、言葉の冷たさ

は消えない。

「なあ……。一体、何が気に食わないんだ？」

今日顔を合わせてから、ずっとこの調子だった。

昨日何かしたかな、と思いついて返してみるが……。特に何もなかった筈である。

どうしても分らないので、勇気を振り絞って確認してみたのだが。

「あ？ 『気に食わないんだ』？」

視線の冷たさが一気に増した。体感温度は既に、氷点下を下回るうかというところだった。命が惜しいので即座に琢真は言い直す。

「あ、いえ……。一体、何が気に食わないんでしょうか？」

「ああ、そう……。分からないんだ……」

静かに目を瞑りながら心を落ち着けて何事か思案している風だったが、更に増した冷気がそうではない事を明確に物語っていた。

そんな空気の中、チュンチュンと、雀の啖きがどこからか聞こえてくる。

少女はゆっくりと立ち上がると、綺麗な人差し指をピンと伸ばしある方向を指し示す。

急に立ち上がられたので思わず頭を庇って伏せてしまった琢真だったが、立ち上がったのはそういう意図ではないことを知り、彼女の示す方向に視線を送った。

その先には、一本のモニUMENTが鎮座していた。

「あの、モニUMENTが何か……？」

あの建造物が、一体何のメッセージを伝えるものなのか……。モアイ像や、ストーンヘンジのような類のメッセージなのだろうか。今の状況との因果関係はさっぱり分からなかった。

琢真の言葉に僅かに柳眉を顰めると、少女はくいつと顎を上にかす。

上を見ろということだろうか？ ゆっくりと視線を上げていく。

モニュメントの先端には、時計が埋め込まれるようにして取り付けられていた。

琢真は吸い付けられるように、その時計を見る。そして気付いた……。

あの時計には秒針がない。

慌ててその事を告げたが、絶対零度の瞳が返ってきた。どうやら違つたらしい。仕方なくそのまま時計を見るが、七時前を指し示しているだけで、他は何もなかった。

だがそれでもじつと見続けていたら、ふと天啓のようにソレが閃いた。

自分と照らし合わせてみるが恐らく間違いない。

「朝ご飯が、まだだったんです?」

「時間が早過ぎるつつつてのよ!!」

怒号と共に、琢真に右ストレートが飛んできた。

10

『土曜日』

それから数十分。朝の公園には、琢真の呻き声だけが響いていた。周りから見たら間違いなくリンチされている様に見えるだろう。暴行の嵐が続いたが、ようやく大人しくなってくれた。

ただ、怒りが収まったのではなく、恐らく腹が減つたのだろう。琢真としてはどちらでも良かったが。

(冗談で死にそうになった……)

「で、何を手伝えって?」

殴りすぎて手を傷めたのか、愛は軽く手を振りながら再びベンチに腰掛けて尋ねてくる。怒りの色は完全には抜けていないという感

じだったが、ソレを押さえ込む事が出来る位には怒っていないようだ。

「藍田さんと、今日一日遊んでくれ!!」

琢真は直球で要求を述べる。

「はぁ? 何ですよ?」

愛は、何言っただこいつ、という目で見据えてくる。

「どうやら、昨日の話を忘れてるようだ。」

「昨日話しただろ? 『予知』について」

「ああ……あれか。はぁ、まあ莉理と遊ぶのは別に問題ないけど」

意外とあっさり了承してくれたので、琢真は驚きつつも喜びで溢れる。

「ホントか!? 良かった」

「でも、莉理を護るって、何すればいいのかわかんないんだけど?」

「とりあえず、家の外に出さないようにしてくればいい」

問題は『路上』だ。老婆も家の中は危険は無いようなことを言っていたので、それなら大丈夫だろう。と言っか、それを信じる以外にない。

これは昨日の夜ずっと考えていた対応策の中で、最も効果的で安全な案だった。

平日は学校があるので外出を防ぐ事はできないが、休日なら話は別だ。誰かを莉理の家に送り込んで、一日家の中で監禁、もとい遊んで貰えばいい。

問題は誰を送り込むかで、琢真や修司は論外として、最も効果的な人物は高橋と田中だった。しかし、あの二人には理由をなんと説明したらいいかわからない。日頃よく話すと言っても、修司や愛ほどではない。予知の話など、話半分にも信じてもらえる自信は無かった。

ともすれば、消去法として愛が残ったという訳だ。

愛ならば莉理と友達だし、事情も少しは理解してくれてるので琢真も頼みやすい。

ただ、琢真がこの案を思いついたのは昨日の深夜だったので、愛に連絡しても返事が帰ってこなかった。(さっきは、この件でも殴られている)

仕方ないので朝かけなおす事にしたのだが、あんまり遅すぎて彼女が外出してしまったら元も子もない。それで、ちよつと早過ぎだとは琢真も正直思っていないながらも、朝の度重なるコールによって何とか愛を叩き起こす事に成功し、先程のやりとりに至っていたのだった。

ただ、恐らく怒っている事は分かっていたので、ちよつとしたコミュニケーションを図ろうなどと余計な事を考えた所為で、もう少しで琢真は気絶してしまう所だった。用事を伝える前にそうなっは泣くに泣けない。

「家の中で一日遊べって？ 何すんのよ一体。莉理はゲームとかしないのよ!？」

修司と遊ぶ時は大抵ゲームで遊んでおり、しかも一日ずっとゲームしていることもざらだったので、愛の苦悩を共有する事はできなかった。

だが、それを言うとまた殴られるのは分かりきっていた為、琢真は頭を下げて「頼む」とだけお願いした。

愛は暫く苦虫を押し潰した様な顔をしていたが やがて面倒そうに数度頭を掻くと「分かったわよ」と渋々承諾してくれた。

「ただし、この貸しはデカイからね」

と、釘を刺してくるのは忘れなかったが。

「じゃあ、藍田さんが外出する前に、とつとと向かってくれ」

「え〜、ちよつと一眠りしたいんだけど……」

琢真の真剣さが、イマイチ伝わっていないようだった。

「……………」

なので、琢真はジツと悲しげな視線を愛に送る。

「分かった、分かったから。行くわよ。行けば良いんでしょ」

途端に嫌そうな顔で、降参とばかりに愛は両手を挙げた。

琢真としては直ぐにでも向かって欲しかったが、流石に愛も女の子なのかこの格好では無理と頑なに固辞したため、着替えた後で向かって貰う事になった。

デートでも無いのに一時間近く支度に費やす意味は琢真には全く分からなかった。ただ、莉理には既に連絡済みということだったので、特に何も言わなかった。

「じゃあ、これから向かうけど……アンタも来る？」

準備を終えた愛（正直服装以外何が変わったのか分からない）は再び公園に戻つてくると、早々にぶっ飛んだ事を言い出した。

「藍田さんの家に……俺が!? そんな……でも……まてよ……いや……しかし……」

驚き、苦悩、悲しみ、喜び、期待、といった様々な感情が琢真を襲う。

脂汗が湯水のように溢れて、そして地面に水溜りを作っていく。

「ああ……ごめん。……やっぱ、アタシだけで行くわ」

琢真の様子に何を感じたのか、愛は申し訳無さそうな瞳を向けて前言を撤回する。

「あ、ああ……。そ、そうだな、そうしてくれると……助かる」
何かとても大きなチャンスを逃した気がしたが、仕方ない。

「アンタは、今日どうするの？」

愛は公園の出口に向かっていたが思い出したように振り返り、今日の予定を聞いてくる。

「もちろん、何かあった時に直ぐに行動できるように、俺はここで待機しておく。だから何かあったら直ぐ連絡してくれ!!」

莉理の家の向かいの『売家』で待つてようかとも考えたが、今日はここで大丈夫だろうと判断した。

というような葛藤はあったものの、愛が不安にならないように、

琢真は力強く言い切る。

愛は引きつったような顔を浮かべて「分かった」と頷くと、公園を出て行った。

（愛は行ったか……さあて俺は）

「……何してよう？」

時間は余るほどあった。

中心部に建てられているモニュメントの時計の針は、『8』と『2』を示そうとしていた。公園内の昼から夕方にかけての喧騒も既に収まり、ようやく静けさを取り戻している。

今、敷地内にあるのは琢真と、犬の散歩をしている中年、それとジヨギングしているらしい老人の姿だけだった。

琢真はベンチに座って、愛が戻ってくるのを待っていた。

最初は、愛にはそのまま彼女の家に泊まって欲しいと真剣に思っていたが、何でも彼女の家は二十時が門限らしく、それ以後は外出する事はないと言うのが愛の主張だった。それ聞いて琢真は少し安心する。

莉理が親の言いつけを守らないなど考えられなかったからだ。

だから、今日はもう安心だと琢真も確信していた。

と言うことで、莉理の家から帰宅しようとしている愛にお礼と、更にお願いをしようと、琢真はこうして待っているのだった。

少しして、公園の入り口に人影が現れる。人影は公園の中まで歩いてくると、琢真の姿を認識したのか、近づいてくる。中央を通った際に電灯に照らされ、愛の顔が浮かび上がった。

闇から露になったその顔は、僅かな驚きの表情に包まれていた。「聞いてはいたけど、あんたほんとにまだ居たのね……」

公園に待機し始めてから、既に十三時間以上が経過している。昼も飲まず食わずだったため、先程から琢真の腹の虫がしきりに鳴いていた。

「ああ、そんなことよりどうだった？ 何かあったか？」

自分の事よりも、大事なのは莉理の事だった。家の中は大丈夫だと言われているにも、やはり心配は完全には消せなかったのだ。

「な〜〜〜〜にも、起きなかつたわ。平和なもんよ」

愛の言葉を聞いて、琢真はホツと脱力する。

「心配しすぎよ」

琢真の大げさな安堵に対して愛は呆れたように苦笑している。琢真はそれには何も返さないで本題に移る。

「で、愛。明日の事も約束してきてくれたか？」

明日は日曜日。

今日と同じく愛に監視をしてもらう予定だったが。

「あーそれ無理。何か、明日用事があるんだって」

あつけらかんと、愛は何でも無いことのように言ってきた。

「用があるなら時間は作ってくれるって言ってたけど、何か悪いし断つといたよ」

更に、聞き捨てなら無い言葉を続ける。

大事な話の最中だと言うのにもかかわらず、愛は髪の毛先が何か気に食わないのかしきりに弄っていた。

当然、琢真は心穏やかでいられる筈もなかった。

「ちよっ！！ 何だそれ！？ どういうことだよ！！」

予定の企画段階からの躓きに焦り、口調が荒くなってしまう。その為か、髪を触るのを止めて愛が不機嫌そうに顔を顰めた。

「知らないわよ！！ そんな事言うならこっちも言わせて貰うけど、何にもする事の無い五時間の辛さが、アンタに分かる！？」

愛が彼女の家に向かってから、累計十二時間経過していた。

最初の七時間は色々することがあって楽しい時間だったらしい。だが、残りの五時間で話題もすることも尽きたようで、居たたまれなくなつた愛は、何度も琢真に「もう帰っていいか」というメールを送りつけてきた。

それを何とか宥めこんで、時間までは居てくれるようお願いし

ていたのだった。

「いや……それはその。悪いと思うけど、でもそれは……」

「うるさい！ もし莉理に用事が無かったとしても、連日は絶対無理よ！ 変に思われるし、何よりすること無いわよっ……！」

よほど五時間がきつかったのだらう。最後の部分に一番力が込められていた。

「それにアンタが心配なのはわかったけど、あの子にも日常ってものがあるのよ？ アンタの都合だけで、それをどうこうしていい筈がない！」

その言葉に、思わず琢真は呻いてしまう。愛の言う通りだと思っただからだ。

莉理を護っているのは決して自分の都合という訳ではない。だが、それでも彼女には与り知らぬ事。彼女の自由や日常を歪めていい筈がなかった。

もちろん、百パーセント彼女に危険が起こることに間違いが無いのであればその限りではないが、生憎琢真自身もまだ、老婆の予知にそこまでの信頼は抱けていなかった。

「……その、アンタが自分勝手に言ってるんじゃないってことは分かってるけどさ、あの子ことをそういう目線でも考えてあげなよ」
黙りこんでしまった琢真をどう思ったのか、愛は声量を少し抑えて諭すように言う。

「そうだな……その通りだな。分かった。後は俺が何とかする」

もう、愛にも莉理も負担は掛けられない。

愛に力強く頷き、琢真はそう答えた。

「何とかするって……。どうするつもり？」

「今までと変わらない。彼女を影から見守る」

琢真の言葉に、愛は心配そうに顔を顰めるが、特に何も言おうとはせず、

「流石に疲れたからアタシは帰るけど、アンタもあんまり無理しな

いようにね」

と言い残し、公園の前に建っているマンションに向かって歩いていった。

が、数歩進んだ所で立ち止まり、振り返る。

「忘れてた。アンタさあ……。護衛はちゃんと莉理にバレないようにしてるのよね？」

「何だ突然……。まあ、多分バレてはいないと思うぞ？ もし気付いてたら何か言われてるだろ」

愛は琢真の答えに「それもそうね」と頷くと、そのまま何も言わずに歩いて行った。

愛の言わんとしていた事は分らなかったが、その後姿が消えるまで見送ってから、琢真も家路につく事にした。

『日曜日』

シーチキンマヨネーズパンを片手に頬張りながら、琢真は『売家の庭から対面の家の様子を探っている。

昨日の教訓を生かして、今日は張り込む前にコンビニで食料を補充していた。流石に十時間以上飲まず食わずは辛いということをも、身を持って知ったからだ。

本来、今日はバイトのシフトに入れられていた。なので、昨日の夜バイト先を訪問し、店長に何とか来週終わりまで休みにしてもらえないか、と頭を下げをお願いした。小言も言われたが、休み明けに休んだ分を取り返すことを約束すると、何とか納得して貰えて今日に至る。

既に太陽は真上に移動しており、周囲はその日差しで熱されている。せめて帽子を被ってくれば良かったと、今は少し後悔していた。昨日の愛の話だと、莉理は今日何か用事があるらしいとの事だった。ただ、朝八時頃に彼女の弟と思われる少年が制服姿でどこかへ出かけて行っただけで、他の家族は家の外には一度も出てきてはいなかった。

家の周囲も特に何も変わりはない。強いて気付いたことを挙げるならば、交通量が思っていた以上に多いという事と、大きな貨物トラックが数台通ったということ位だ。

昨日あの後何を思ったのか、愛がそれとなく今日の予定が何時頃

かだけ莉理から聞き出してメールしてきてくれた。

厳しいことを言われた後だっただけに意外だったが、琢真はありがたくその情報を貰い受けた。

改めて琢真がお礼を返信すると、『別に』と短く一文字だけ返ってきた。

それまでのレスポンスとは明らかに間が開いていたので恐らく照れていたのだろう。そう思うと可愛らしく感じた。しかし、それを本人に言おうものならどんな目に合わされるかは容易に想像できたので、琢真は心の奥で思うだけに留めた。

愛の情報によると、莉理の予定は昼過ぎということらしい。

なので、昼前から監視すればいい筈だった。ただ、念のために琢真は朝から待機していた。

流石にただジツと様子を探るだけというのは、探偵でもない琢真にとつては苦痛でもあったし、何より退屈で集中力を維持する事は難しかった。

そうした何度目かの脱力を行っている、ようやく彼女の家のドアが開き、ようやく莉理が外に出てきた。

莉理は自転車を押して、家の前の道路に出てこようとしている。

麦藁帽子に薄手の淡い水色のワンピースという服装がとてもよく似合っていた。

琢真は周囲のゴミを丸めて無理やりポケットに押し込み、莉理が家の前の坂を下り始めたところで門を乗り越え、後を追いかけた。

相手は自転車なので離されなかが心配だった。しかし、莉理はスピードが出過ぎないように気をつけているのか、時折ブレーキを掛けていたのでその心配は無用だった。

後は見つからないか……だが、莉理は下り坂で後ろを振り返るよくなことはせず、前をずっと見据えていたため、それに関しても安心できた。

駅前の街の中心部までゆっくり下り終えると、次は通りを東に向

かつて進み始める。それから五分以上過ぎただろうか、莉理はある公共施設の敷地内に乗り入れると駐輪場に自転車を止め中に入ってしまった。

街で唯一の図書館だった。

学校の体育館よりも大きい建物で、蔵書もかなりの数に上ると言う話だ。

生憎琢真は利用した事は無かった。修司に付き添って何度か訪れたことはあったが。

琢真にとっては退屈極まりない場所だったものの、修司にとっては居心地の良い場所らしい。恐らく、莉理にとってもそうに違いない。

ともかく、危険な出来事が起こるような場所ではなかったため琢真は安心した。

琢真は莉理に少し遅れて中に入る。日曜の図書館は平日の倍以上の人がいたため、姿を見失わないようにするのが大変だった。

莉理は帽子を脱ぎ手に持って、人の間をすり抜けるように移動する。流石に慣れているのか、人が多くてもスムーズな動きだった。

彼女はいくつかの棚から数冊の本を抜き取ると、それを持って机のある読書スペースに向かった。そして、空いている場所に座ると持っていた鞆からノートを取り出し、本を読んではノートに何か書き込む、といったことを繰り返し行い始めた。

（勉強してるのか？）

遠目なので琢真の位置からは何をしているか詳細は分からなかったが、問題ない。問題は莉理の身に危険な事が起こるかどうかである。

そういつた目で観察すると、莉理の周囲には老人と子供しかおらず、怪我をするようなものもなかった。危険は全く感じられなかった。

莉理の一心不乱な様子から、当分は動きは無いだらうと判断し、

琢真は一旦この場から離れる事にした。本棚の影に隠れて莉理を見つめていた琢真を、不思議そうに見ている少女がいたからだ。

とりあえず、にこやかな笑みを少女に返して誤魔化しながら、琢真はその場を立ち去った。

手ぶらで除いているのは怪しすぎるのかもしれない。何かカモフラージュと暇を潰すことを兼ねて、琢真は自分にも読める本を探すことにした。

と言っても、琢真に読める本などは決まっている。漫画か、せいぜい雑誌だけだ。ただ最新の漫画が置いてあるわけも無く、琢真が幼児の頃に流行ったような漫画しかなかった。仕方なくそれで妥協することにした。

シリーズものだったのでとりあえず三冊だけ持って、彼女の姿がギリギリ見える読書スペースに移動する。

読書スペースはそれなりに人で埋まっていたが運良く条件に合う場所を確保でき、莉理の様子を伺いながら漫画を読み始めた。適当に取ってきた漫画だったが、読んでみると中々面白く、つい夢中になってしまう。

琢真は持っている分をたちまち読み終えてしまった。なので続きを取りに行く。そうして、以後は彼女の姿を注視しながら続きを取ってきては読む、を繰り返した。

それを何度行っただろうか、不意に琢真の視界がぼやけ始める。恐らく連日の緊張による疲れからか、猛烈な睡魔が襲ってきていた。

琢真は頭を振り、腕をつねってなんとか堪えながら『読書』を続けていたが。

いつしか、意識を手放してしまった。

「……………んあつ!?!」

何か物音が聞こえたような気がして、琢真は静かに目を開ける。

(眠ってたのか……………)

とても嫌な夢を見ていた気がする。そのせいか、寝汗でTシャツがじっとり濡れていた。気持ち悪さに辟易する。ゆっくりと琢真が立ち上がると胸の上に置かれていたらしい漫画が、どさどさと地面に落ちた。

それを拾い上げながら辺りを見回すと、寝る前に見た様子とは異なり、人影は疎らで、その人達も席を立とうとしているようだった。ピンポンパンポン。

その時、上がり調子のチャイムが鳴り響き、童謡をBGMに校内アナウンスが聞こえてくる。

『当館はまもなく閉館いたします。まだ館内にいらっしやるお客様は
』

そこまで聞いて 琢真は唐突に意識が覚醒する。

(しまった!! 藍田さんは!?)

慌てて莉理が座っていた場所を見る。もうその付近には誰もいなかった。

(まずいつ!!)

寝起きと緊張で頭が全く回らなかったが、ともかくまず急いで外に出ることにする。

「あの、すみません。これ頼みますっ!!」

手に持っていた数冊の漫画を棚に戻している時間も惜しく、見回っていた職員に強引に押し付ける。琢真の形相に恐れたのか、その女性職員は圧されたような表情で何も言わずコクコクと頷いた。

そのまま走って外に出る。同じく外に出ようとしている人達の中に彼女の姿がないか見回す。この中には居ないようだった。

(……………自転車?!)

駐輪場に急いで回り込み、莉理の自転車がないか探る。

今置かれているのはママさん自転車と子供用の自転車が殆どで、それ以外は黒色のものばかりだったのでこの中にはないと判断した。莉理の自転車が何色だったかは注視してなかったせいで琢真は覚えてなかったのだが、彼女と黒色の自転車のイメージがつかなかったからだ。

(くそっ! どうすれば……………と、そうだ! 誰かに電話で確認して貰おう!)

琢真が直接掛けられたら一番いいのだが、生憎莉理の番号は知らない。

誰かに助けを求めようと脳内検索を行った結果、愛に居場所を電話で聞いて貰うのが一番早いと考え至った。

しかし、一応コールするので電源は入っているようであるものの、そのまま何コール待っても愛は出なかった。

焦りから汗ばんだ指先で何度もコールするが、一向に繋がらない。「出るよ!! 何やってんだ!?!」

琢真は思わず携帯に向かって怒鳴ってしまう。

そのまま掛け続けても仕方ないので、事情を説明しづらかったが背に腹は変えられないと思い、琢真は高橋に連絡することにした。

が、高橋も愛と同様でコールするが繋がらなかった。その後には掛けた田中も同様だった。

「くそっ!! どの時もこいつも友人が大変な時に何やってんだ!」

そんなことは皆預かり知らない事だというのは分かっていた。し

かし、琢真は毒づくのを止めることも出来なかった。莉理の番号を知っていそうな人間の連絡先は、その三人以外には知らなかったからだ。

(やばい、どうすればいいんだ!?)

莉理の姿を見失ったという事が、琢真に最悪の事態を連想させてしまい、完全にパニックになってしまっていた。頭は真つ白だったが、琢真の手は無意識の内に、そんな時の参謀役に電話を掛けていた。

『何だ?』

数コール後、修司の音が携帯から聞こえてくる。

「修司!!! 大変だ、どうすれば!?! 自転車なくて。藍田さんも居なくて!」

琢真は縋る様に思いを伝える。ただ、慌てていたため支離滅裂になっていた。修司は一通り話を聞いてから、呆れたような声で『いから、落ち着け』と琢真を宥める。

(……そうだ、慌てていても仕方が無い)

修司の声で冷静さを取り戻し、琢真は何度も深呼吸する。ようやく落ち着いてきたので、今の状況を修司に説明して助力を請うた。

『ふむ……。なら先ず藍田の家に行って、彼女の自転車があるかどうかを調べたらどうだ?』

(そうだ、まず彼女がどこにいるかを知ることが先だ!)

もし彼女が家に帰ってるのであれば安全だからだ。慌てるのはそれを確認してからでいい。

修司の話を聞いてそれしかないと思い込み、琢真は御礼も言わず携帯を切る。

そして莉理の自宅に向かって、全力で走り出した。

図書館の敷地内を飛び出し、来た時のように駅まで出てなどと回り道をしないで、琢真は文字通り真っ直ぐ莉理の家を目指す。

この辺りは琢真の家も近く、自分のテリトリー内なので裏道は熟知していた。

ただ、運動は得意と言っても、毎日走っている部活動生達とは違うため、直ぐに息が切れてしまう。周囲の気温の高さもあって汗が溢れ出し、既にTシャツ全体が水分を含んでしまっていた。

足も重たくなっているのを自覚していたが、琢真はそれでも足は止めなかった。

頭の中で、莉理に危険が襲っているという想像が消せなかったからだ。

(もしそんなことになったら、俺の責任だ……！)

彼女を護るべき自分が眠りこけて見失うなんて、自分自身が許せない気持ちで胸が埋め尽くされる。だがその怒りも原動力となり、速度を落とすことなく足を進められていた。

(藍田さん……頼む無事でいてくれ……！)

その願いも込めて、長い坂道を一気に駆け上がる。体の痛みも、酸素を欲する苦しみも、今は関係なかった。

そうして、ようやく彼女家の前に辿り着く。

急に立ち止まろうとした為か、勢いを殺せず倒れてしまい疲労から起き上がることが出来なかった。とめどなく溢れる汗が、地面に水滴の雨を降らせている。

だが、それでも琢真は扉に捕まり、よじ登るようにして身を起し、彼女の家の庭を確認する。そのまま自転車があるか隅々まで見渡す。しかし、見える範囲には見当たらなかった。

車庫か？ とも思ったが、朝は自転車を押して出入り口から敷地の外に出てきていたので、あるとすれば庭の筈だった。自転車の置

き場をコロコロ変えたりはしないだろう。

場所が悪いのかもしれないと、塀を這うようにして移動し、違う場所からも覗き込む。塀は琢真が真っ直ぐ立ってギリギリ中が見えるという位の高さだったので、疲れた体では思うように覗き込む事が出来ず、その事だけでも手間取ってしまった。

その為、ガチャリと音を立てて家のドアが開いて、中から莉理の母親が出て来た時にはまだ、自転車の存在を琢真は確認出来てはいなかった。

予期せぬ事態に慌ててその場を離れようとしたが、力の入らない足ではそれも適わない。琢真は塀の外に出てきた母親とすっかり目が合ってしまった。

汗びっしょりに濡れた服を着て、息を荒げながら人の家の塀にもたれ掛つているという怪しい格好のまま……。

琢真は、莉理の母親の顔は小学校の頃に何度か見たことがあったので、既に知っていた。

当たり前かもしれないが、莉理と彼女の母親は顔立ちが似ている。ただ、莉理が物静かな印象を与えるのに比べ、母親の顔は派手……と言うと言葉が悪いが、どこか華やいだ印象を受ける。

だが、相手の事を知っていたのは向こうも同じだったらしい。

琢真の顔を見るなり、額に手を当ててじっと目を瞑り暫し何事かを考え込んだ後、ハツと目を開けるとポンと手を打った。

「君確か、莉理と同じ小学校だった……えーと」

そこまでは思い出したらしい。ただ、どうやら琢真の名前は覚えていないようだ。莉理の母親はそのまま考え込んでしまった。

琢真と莉理が同じクラスだったのは小学校でも一・二年生の間だけだった。それ以後は、今の学年になるまで一度も同じクラスだった事はない。その為、彼女の母親とは会う機会もなかったため、琢真の事を覚えてないのも無理はない。

琢真も当時一方的に見ただけで、特に顔を合わせたりはしていなかった。

「あ、よ、芳垣と申します」

そのまま考え込ませておくのは忍びなかったため、琢真は自分から名乗る。

「ああ、そう！ 芳垣君ね！ そうそう、そうだった！」

母親の声に喜色が浮かぶ。意外にも琢真の名前は頭のどこかに残っていたのか、嬉しそうに声を上げてくれた。

一方、琢真は何と言えいいのか言葉に詰まっていた。息は大分整って来たものの、全身汗まみれの男が扉にもたれ掛っていたのだ。怪しまれないと考える方がおかしい。意外にフレンドリーだった様子に緊張が解れていたのも僅かな時間の間で、再び琢真の動悸が激しくなってくる。

だがそんな琢真の焦りとは関係なく、母親はフレンドリーさを維持したまま笑顔を浮かべた。

「大きくなったわねえ……見違えたわあ」

そう言っつて、汗に汚れているのにも構うことなく、琢真の肩をポンポンと数度叩いてきた。莉理と比べて、かなり明るく気さくな方だった。

照れくささと緊張で、琢真はアガッてしまっていた。

「今は、どこの高校に行ってるの？」

「どうやら、その事は娘からは聞かされていないらしい。」

琢真は少しショックだったが、まあそれも当たり前だと思い直し、同じ高校に行っていることを告げた。ただ、同じクラスだという事は伏せておいた。

それに特に何か意味があった訳ではない。何となくだった。

「まあ、そうだったの！ あの子ったらそんな事をちつとも言わないで……」

残念ながら特別親しいという訳でも無いので、莉理が強いて言う事でも無いだろう。琢真はそれが悲しくもあつたが、それを知らない風な母親の憤りが面白くもあつた。

「それで今日はどうしたの？ あ！ あの子に用事？」

いえ違います、と言いかけて、彼女の在宅を知る絶好の機会だと思ひ直し、あいまいに返事はばやかしたまま、琢真は莉理が家に居るかどうかを尋ねた。

「え？ うん、さつき外から帰ってきて、今部屋に居るわよ？」

母親はあっけらかんと告げる。

それを聞いて、ようやく緊張が解け、琢真をどつと安心が襲ってくる。そのあまりの襲撃に気を張っていた足が力を失い、思わずその場に崩れ落ちてしまう。

（良かった……本当に良かった）

「ど、どうしたの!? 大丈夫!?!」

突然しゃがみ込んだ琢真に、母親が心配そうに近づいて顔を寄せ
る。

「い、いえ、何でもありません。ちょっと足がもつれただけなんです……」

十分に回復したとは言えなかった。しかし、琢真はそれでも何とか立ち上がり、笑顔に努めた。

「そう。良かった。気をつけてね」

琢真の言葉を特に怪しむことなく、莉理の母親はそのまま信じてくれたみたいだった。

それにホツと胸をなでおろし、とりあえずこの場を去ろうと口を開きかけたが

「じゃあ、折角なので上がっていく? ちょっとあの子呼んでくるわね」

という言葉によって、僅かに開いた琢真の口の隙間から「あえっ!?!」という奇声が漏れ出た。

「い、いえ。も、もう自分は帰りますから!!」

家の中に戻ろうとしている母親に声を掛ける。しかし、「気にしないでいいのよ」と言うだけで行動を止める事はなかった。

家のドアを開いて「莉理く〜」と大きな声で呼びかけている。

（ま、まずい!!）

琢真の口からは泡……ではなく「あわあわ」という意味不明な声が漏れていたが、そんな場合では無い。事態はもう一刻を争う。

「ほ、本当に結構ですから、すみません!!! し、失礼しますく〜」

足がどうか、体がどうか、言っている場合ではなかった。

残りの力を振り絞り、まだ家の中に呼びかけ続けている母親にその一方的に告げる。琢真はこちらを呼び止める声を無視して、振り返る事無く坂下に向かって駆け下りたのだった。

僅かの後、そんな琢真を咎めるかの様に、遠くからあのドールベルマンの猛烈な吠え声が聞こえてきていた。

『月曜日』

体中がギシギシと音を立てている。少しでも移動のルーチンワークから逸れようものなら、その罰として全身に針を突き立てるかのような痛みが走ってしまう。

簡潔に言つと、筋肉痛だった。琢真は日頃全く運動しないと言つわけではないのだが、流石に昨日の暴走は体への負担が大きすぎたようだった。

通学路を歩く生徒の波に隠れ、少し前方を歩く莉理を見つめる。今日の護衛は、特に大変だ。なにしろ肉体的苦痛を常に強いられるのだ。

加えて、彼女が母親から自分の事を何か言われていないか、という事を考えるだけで恥ずかしさでのたうち回りたくなるということも、疲労の要因の一つに数えられるだろう。

しかし、学校に着けば筋肉痛だけは何とかなる。なにしろ、座つていられるのだ。莉理を視界に入れながらも、琢真はその事にずつと想いを馳せていた。

「おーす！ 何よ辛気臭い顔しちゃって!!」

『て』を言うのと同時に、ドンという衝撃が琢真の背中に走る。

「いてっ!! はう!! あう!! のう!!」

最初の『いてっ』は背中を殴られたことに対しての苦痛の声だった。

次の『ほう』は、その衝撃で前につんのめった際に、倒れまいと踏み出した右足の筋肉の悲鳴。

『あう』は、その緊張の走った右足を慌てて元の位置に戻そうとした時の、背筋の嘆き。

最後の『のう』は、背筋の痛みに耐える際に、力が入ってしまった尻筋の挙げる苦悩の声だった。

それらを何とか宥めすかし首だけを回して、悲痛な顔を横に並んだ愛にむける。

「何しやがる……殺す気が……」

押し殺した声だが、もちろん怒りと言うより筋肉への配慮だった。

「何よ、気持ち悪い。それより、昨日連絡してたみたいだったけど何か用事だったの？ 莉理のこと？」

そう言えばそんな事もあった。

「お前、何で昨日出なかつたんだよ」

もう解決したことなので琢真は別段気にはしていなかった。だが、それでつけ上がられるのも嫌だったので表面上は苛立ちを滲ませた顔を作っていた。

ただ、時折走る筋肉の痛みのせいで、琢真が思っているほど上手く作れてはいなかったが。

「いやさあ〜。電話かかってきてた時、那奈美と翔子とカラオケに行ってたのよ。だから全然聞こえなくて気付かなくて……。ごめんごめん」

（くっ、それでか。高橋も田中も繋がらなかったのは！）

ごめんといいながらも全く謝罪の気持ちは籠っていない愛だった。まあ、それはいつもの事なので気にしないことにする。

だが、逆に愛が琢真に苦情を言うてくる。

「アンタも、あれからこっちがかけ直してやったのに、全く繋がらなかったわよ!？」

「携帯の電池が切れてたんだよ」

適当なごまかしのようだが本当の事だった。携帯の充電をし忘れるというのは琢真にとってさほど珍しい事ではない。それは愛も知っている筈なのだが。

「はぁ！？ アンタそれでも現代人！？ 高校生！？ 緊急の連絡があつたらどうするつもり！？」

昨日自分は緊急の電話に出なかつた事を完全に棚に上げて、愛は琢真に罵声を浴びせてきた。言い返したかつたが、そうした場合更に口撃を受ける事は目に見えていたので、琢真はむっつりと罵声を受け続けた。

一通り琢真を罵ると、愛はどこかスッキリした満足気な顔で「次は気をつけなさいよ？」と偉そうに締めた。

悔しかつたが、精神衛生上良くないので、琢真は話題を代える事にした。

「……それより、お前今日はやけに早いな」

愛は大抵遅刻ぎりぎりか、ぎりぎり遅刻のどちらかの時間に駆け込んでくるのが日常となつているので、少し意外に思っただけだが。

「アンタのためよ」

「はぁ？」

凡そ愛が発する言葉とは思えなかつたので、琢真の口から疑問の聲が自然と上がる。

「だから、どんな連絡が分からなかつたから、こうして朝待つてあげたんじゃない」

(い、いや、お前は俺の後ろから来たじゃないか?)

とは思つたが、琢真はそうは言わずに「そりゃあ、どうも」とだけ返した。

「莉理のことだったの？ 何か問題があつた？」

「ん、あーまあ、そうだが。もう解決したから気にしなくていい」
待っていたという話の真偽はどうであれ、心配していたのは本当

だったのだろう。愛は少しホツとした表情をみせた。

「ふーん、何？ 何かあったの？」

今度は先程とは違い、単に興味が湧いたという様子で聞いてくる。特に隠す事でもなかったので、琢真は昨日の一部始終を話してやった。

一通り話し終わると、愛は大笑いする。

「逃げないで、そのまま入っちゃちゃえば良かったのに」

「ふざけんな」

「別にふざけてなんかいいわよ〜？ でも、小母さんも相変わらずね」

莉理の母親の事を頭に浮かべているのか、愛はにこやかに笑う。

「良い人そうだよな」

「ええ、良い人よ。見たまんま」

愛が人の性格を褒めるのは珍しい。つまり、本当に良い人なのだろう。莉理が誰にでも優しいその土台には、あの母親の影響がありそうだった。

そのまま人の母親を思いやり笑い合っていた二人だったが、愛が唐突にニヤケ笑いを顔に貼り付ける。琢真は非常に嫌な予感がした。「でも、小母さんはアンタの事を、莉理に話しちゃったのかな〜？」

「うっ」

忘れていたかった、嫌な事を思い出させる。

「もし、話しちゃったとしたら、一体莉理はその事をどう思っているのかな〜？」

心の不安をブスブスと、鋭利な言葉の槍で刺激してくる。

「うっ」

「何なら、アタシが上手く伝えてあげよっか？」

うめき声を上げるしかない琢真だったが、突然の思いもよらない提案に嬉しさのあまり声を上げる。

「ホントか！？ 頼む！！」

愛はその言葉を聞いてニンマリ微笑むと、ひらりと綺麗な右手を琢真に向かって差し出した。手のひらは上を向いている。

「金とんのかっ！？」

琢真とてタダではなく何かしら要求されるとは分かっていた。だが、貸し一つとかだとばかり思っていたので、直球で金銭を要求してきた愛に啞然とした表情を向ける。

「昨日、色々使いすぎちゃって」

てへっ、と舌を出して笑う愛に、何も知らない周囲の男子生徒の数名が身悶えていた。もちろん、琢真は残念ながら同じ心境にはなれなかった。

どころか、苛立ちが湧き上がっているのを感じていた。

「あー。嫌ならいいのよ？ アタシは別に……」

ニヤニヤ笑みから白けた顔に変え、あさつての方向を向きながら愛は呟く。それも計算だと分かっているので非常に癢に障っていたが、琢真に選択肢など始めから存在しない。

結局涙を流しながら、財布から取り出した札を一枚その手のひらに乗せる事となった。

修司は雨の日以外、昼休みにはいつも屋上で食事を取っている。琢真は修司が屋上へ向かう道中、教室の前を通りかかった所を捕まえる。そして、自分の前の席に座らせて、昨日の事と今朝の愚痴を延々と聞かせていた。

修司は何を言っても「ああ」とか「ほう」とか言うだけで、ちゃんと自分の言う事を聞いているのかどうかは不明だった。だが、そんなことは琢真としてはどうでも良かった。誰かに鬱憤を聞いて貰っているというその事実だけで、溜飲が下がっていくのだ。

琢真がようやく一通りのことを話し終わると、修司はいつの間にか読んでいた小説を閉じて、感心している様に言ってきた。

「お前もよくやるな」

始めは何の事が分からなかったが、直ぐに莉理の事だということに思い至る。

「当たり前だろう、命が掛かっているかもしれないんだぞ？」

まだ、『掛かっている』と言いつ切る事は出来なかった。

しかし、そんな琢真の言葉に何の感銘も受けなかったのか、修司は変わって呆れた表情を浮かべていた。

「ふん……まあいい」

やはり修司は『予知』のことに關して、琢真以上に信じていないようだ。

琢真の意欲を削いでも悪いとでも思ったのか、恐らく否定的な事を言いかけて、最後は言葉を濁した。

「それより琢真、その『予知』の事を藍田に告げてみたらどうだ？」

案内信じて言う通りにしてくれるかも知れんぞ？」

修司は突然、今までの苦労を台無しにするような事を言ってくる。ただ、琢真は腹を立てたりはしなかった。確かにその事は何度も考えた事だからだ。

彼女は優しいので、琢真が真剣に訴えればもしかすれば話半分にも信じてくれるかもしれない。

だが、半分にも信じるということは、それは『死』が迫っている事を莉理自身が認識するという事だ。それだけはどうしても避けたかった。

琢真としては莉理には心穏やかに日々を過ごして欲しいからだ。彼女の笑顔が曇ったところなど、見たくもないし考えたくもないのだ。

それに、老婆の話の真偽もまだ不確かなままである。デタラメなのに莉理に余計な心配を与えた言うのでは、それは本末転倒だ。

しかし、もし真実だった場合、果たして今の形がベストだろうか？ どのみち、後ほんの一週間程度の話なのだ。その僅かな間だけでも彼女に全てを話して警戒してもらおう。いや、学校を休んでくれるように説得すれば一番安全なのだ。それは間違いない。

琢真が深刻な表情で考え込んでいたからだろうか、修司は「いや、悪かった」と、ポンと琢真の頭を軽く叩く。

「……あまり思いつめ過ぎるな」

僅かに目を伏せてそう指摘すると、席を立ち教室を出て行った。

琢真は一人、その後もずっと考え続けたが、結局答えは出なかった……。

「莉理ー、今日はこれから部活？」

教室を出ようとしていた莉理に、愛が自分の席から質問を投げかける。

琢真はチラリと愛を伺うと、一瞬目が合った。どうやら、琢真の為に確認してくれたようだ。「助かる」と目でお礼を言うておく。

「うん、そうだよ」

莉理は愛の質問を肯定し「じゃあ、またね愛ちゃん」と別れを告げ去っていった。

(藍田さんは部活か……)

文芸部の活動場所は図書室だった。当然文芸部の部活中にも他の生徒も入室は可能である。しかし、流石に部室まで張り付いていくのも怪しすぎるので、終るまで時間を潰さないといけない。

文芸部の活動がどれくらいの間行われているかは分らなかったが、一時間そこらということは無いのではないかと考え、この前進路相談で三時間拘留された後に莉理と帰りが重なった事を思い出す。

最初の二時間は教室に控えておき、東門が閉じられるそれ以後は、正門付近で張っておく事に決めた。

(しかし、その間何をしようか……)

金子達はまだ教室にいたが、彼等は部活動やバイト等で忙しいので、暇潰しの為に拘束する事は出来ない。

愛や修司も最近助けてもらってばかりなので、緊急時以外にはなるべく煩わせたくなかった。

そして、今日はいつも鞆に入れている携帯ゲーム機を家に忘れてきていたため、それで暇つぶしする事も出来ない。加えて、万が一莉理が一時間程度で部活が終ってしまった時に備え、東校舎玄関口を注視しておく必要があるの、教室から離れる事も出来ない。

なので、こういうのも鬼の霍乱と言うのだろうか。

琢真は何となく今日の宿題でもやるうかと思ってしまう、空いている窓際の席に座り、問題集とノートを広げた。

何と言うか新鮮だった。琢真にとって宿題とは、人のノートを写すものだからだ。

(たまには自分でやるのも悪くない)

そう思っていた時期が、自分にもありました。

ものの十分も経たない内に、琢真は早くも頭を抱える事になった。それはそうである。いつも勉強なんてしない琢真がそんなスラスラ解ける訳が無い。

そうして一人呻いていると、急に頭を抱え始めた琢真を疑問にでも思ったのか、金子達と雑談していた吉田が近づいてきて……。まるで兄と思っていた兄弟が実は姉だったという真実を知ってしまった時の様に、顔を歪め、そして驚愕の声を上げる。

「ば、馬鹿な！？ た、琢真が、誰に何も言われずに、勉強しているのだと!？」

その言葉を聞き咎めたのか「ナニイ!？」と愕然とした声を上げ、金子達までもが近づいてくる。

「た、琢真君！ 熱でもあるの!？」

と、でかい凶体を震わせながら金子が本気で心配してくる。

「琢真!! 誰だあ!？ 誰に脅されたんだあ!？ 誰に脅されてそんな事をやらされている!？」

怒りに燃えた瞳で琢真が脅迫されていると信じ込み、ありもしない真実を聞き出すようにしてくるゴツイ男は佐藤である。

「琢真！ 頭は大丈夫か!？ どこかにぶつけでもしたのか!？」

スポーツマン風でいて、その実やはりサッカーマンの山口は、琢真が何らかの理由によって頭を強打したせいで、記憶の混乱があるのではと疑っているようだ。

「琢真……いくら藍田に想いが通じないからって……そんな……」

何かふざけた想像をしているらしい似非イケメン渡辺は、溢れる涙を懸命に袖で拭っている。

「おい、お前ら！ 何を好き勝手な想像をしてやがる！ 俺はただ普通に宿題をしているだけだ」

正直。琢真は既に宿題をする気力はなかったが、彼等の手前見栄を張ってしまう。

だが当然の如く「ありえん！」と信じない連中に声を荒げて続けた結果、何故か次第に取っ組み合いに発展してしまい、互いの首を絞め合い始めることになった。

始めこそ一対四の構図だったものの、いつの間にかバトルロワイヤルになっている。

金子だけは何とか琢真達を止めようとオロオロしていたが、興奮していた彼等にその声は届かなかった。

そのまま力尽きるまで格闘は続く 　　かと思われた。

しかし、教室に残って友人と雑談していた愛に、「うるさい！！」と一喝され（吉田だけは何故か殴られた）ようやく収まる。

「何騒いでるのよ!？」

理由を聞かれ、琢真が憤然としながら理由を答えると「紛らわしい真似をするな!」と、鉄拳を浴びた。

（理不尽すぎる……）

「アンタ達ももう部活やらバイトやらの時間でしょ？ さっさと散りなさい!」

矛先は吉田達にも向けられ、愛のお叱りにしょんぼりしながらそれぞれ散って行った。

愛は皆が去るのを待って、琢真を振り返りながら尋ねてくる。

「莉理が出てくるまで残ってるつもり？」

「まあ、な」

「はあ……。アンタも頑張るわね」

呆れ半分、称え半分に、昼休みの修司と似たような事を言う。
「……………」

琢真は昼間の葛藤を思い出し、何も答える事が出来なかった。それをどう取ったのか、愛は鮮やかな微笑を浮かべ、

「ま、しつかりね」

そう言つと、愛は残っていたクラスメイト達を連れ立って教室を出て行った。

これで、教室に琢真一人残された形になる。

溜息を一つ吐くと、再び窓際の席に腰掛け、屋外からの部活動生の掛け声だけが響く教室から、ぼんやりと外を眺めた。何を見ているわけでもない。ただ、他にする事がないだけだった。

だが、愛達が出て行って数分後、それは思わぬ事態によって中断されてしまう。

突然、肝心の護衛対象が教室に戻ってきたのだ。

教室のドアが開くところを、琢真は実際に見ていた訳ではなかった。

色々物思いに耽っていた琢真が、莉理に気付いたのは、いつ間にか間近まで接近していた彼女に声を掛けられてからだ。

全く警戒していなかったため、椅子から飛び上がるようにして「うひゃあ」と叫び声を上げてしまう。琢真が慌てて振り向くと、その声に驚いている莉理の姿があったので、もう一度「あひゃっ! ?」と、奇声を上げる事になった。

二人して驚き合っているという妙な状態が続いたが、先に持ち直ったのは莉理の方だった。

「よ、芳垣君。こんな時間まで教室に残って、どうしたの?」

首をチョコンと傾げ、眼鏡の奥で不思議そうな瞳が覗いていた。

「あーイーえーと、その……」

想像だにしていなかった事態だった為、咄嗟に言い訳が浮かばなかった。

「あ、もしかして、また進路相談?」

だが、彼女の方が勝手に誤解してくれたので、それに乗っかる事にする。

「え、ああ、そう、そうなんだ! いやあ、池山の奴しつこくてね」

琢真は完全に焦っていたため『先生』を付けるのを忘れてしまったが、彼女は「大変だったね」と気遣いの目を向けてくる。

池山の生徒指導の熱心ぶりは周知の通りなので、特に疑うことなく信じてくれたようだった。意外なところで役に立った池山に心の中で敬礼しておく。

「そ、そういえば、藍田さんはどうしたの？ 部活はもう終わったの？」

まだ帰りのHRから一時間も経っていない。当然の疑問だった。

「うん、今日は部員が二人しか来てなくて……顧問の先生も来れないみたいだから、二人で相談して解散する事にしたの」

「なるほど……」

琢真は頷いたものの、少し疑問が残る。

「あ、でもどうして教室に戻ってきたの？」

と言う事だ。

彼女は苦笑いしながら「実は忘れ物しちゃって……」と、自分の机に向かった。しかし、机の中を覗き込んでも、目当てのものは見つからなかったらしい。そのまま「うーん」と考え込んでしまった。

「もしかして見つからないの？ 探すの手伝おうか？」

琢真はここぞ関係を深めるチャンスとばかりに提案するも、やはりと首を振り断られる。

「あ、ありがとう。でも、その、人に見られるとちよつと恥ずかしいから、気持ちだけ受け取っておくね。それに多分家に忘れてきたんだと思うから……」

琢真は彼女の『人に見られると恥ずかしいモノ』と言うフレーズには不覚にも少し興奮を覚えてしまった。だが、彼女が困っているのに不謹慎だと慌ててその煩惱を頭から消し去り、脳内で数瞬前の自分をタコ殴りにした。

莉理は再度机を覗き込んで、お目当てのものが無いことを確認すると、

「じゃあ、そろそろ帰ろうかな」

と、鞆を持って立ち上がった。

「お、俺も、帰るところだから、あの、一緒にか……帰らない？」

近隣の惑星にまで力を借り、全生命力を動員しながら細かい声で

提案した琢真に、莉理は優しく微笑んだ。

19

成功者になるためには、努力と忍耐、そして勇気が必要だ。勇気を持ってどんな物事にも恐れず突き進めば、大抵の事は何とかなる。それが十七年程度の人生で培った、琢真の人生哲学とも言えるものだった。そして、今まさに勇気の結果の末に得られた幸福を感受していた。

等と、柄にも無く難しげな事を考えながらも、琢真は不意に訪れた先週に続いての二度目の青春を謳歌しているのだった。

正直、琢真は提案した時は護衛の事は全く考えていなかった。

そういつた純粹な気持ちで挑んだ事が、成功に繋がったのだろう。と思っておく事にする。

「そ、その、文芸部の人とは一緒に帰らなくて良かったの？」

冷静になると同時に、自分の誘いが友人との付き合いを邪魔したんじゃないかと思い立ち確認したが、その友人は「何か用事があるって先に帰っちゃった」との事だったので、琢真はホッと安心する。特に得るものはない会話だったものの、そんな短いやり取りでも一言交わすと緊張はすっかりナリを潜めてしまった。

「そう言えば芳垣君。昨日私の家の前でお母さんと会ったって本当？」

と爆弾を投下されるまでは。

『息も出来ない』という言葉はこういう時に使うのだろう。

その爆弾の余りの威力に、心肺機能と脳がごとごとく破壊され既に焦土と化していた。だが、力を振り絞り必死に琢真は一言だけ発する。

「愛には何も聞いていない?」と。

「愛ちゃん? ううん、聞いてないよ。どうして?」

(あんのアアアアアアアアアアツ!!)

今度という今度は完全に琢真の堪忍袋の緒が切れた。

(あの女は人から金を強奪しておきながら、この始末!! まさに外道の極み!! 一体どうしてくれようか!!)

力づくに訴えたところで返り討ちに合うのは分りきっているため、攻めるなら精神的ダメージを与える方向しかない。

あの女は小癩にも苦手とするものが殆ど無く、ホラーは大好物。スプラッタも平気。黒板をキーとやるアレにも動じず、人の目を集める事も快感という、男以上にタフなハートを持つ女だった。しかし、長年の付き合いのある琢真は唯一とも言える弱点を知っていた。それはある昆虫だった。そう、万人が嫌がる例の黒い、時には茶色のアイツだ。

恐ろしくも、蜘蛛やら蛇だって素手で掴める女だが、その昆虫に對しての嫌悪感を表す様はもう尋常なものではなかった。

元々綺麗好きと言うのが理由なのだろう。それを見たときの女は、暴れ憤りを全て周囲……主に琢真や修司に向けてくるため、二人が居る時にその存在の徘徊に気づいた時には、あの女には気付かれないうちに迅速に始末する事が二人の不文律となっている。

(でも、もうそんなの関係ねえ!!)

その後どんな仕打ちが自分に待っているのかは分っていたが、奴が苦しめばそれでいい。

(はっはっは、そんなの知るか、万歳アタックだ! 絶対に反省させてやる!)

どこか虚ろな笑みを浮べて、例の昆虫をあの女の頭上にばら撒いて、あの女が悶え苦しむ様を脳裏で想像していた琢真だった。

「……芳垣君、どうしたの?」

どこか怯えながら呼びかける莉理に気付いて、はっと我に返る。

(そつだ、あのアマのことなんて想像している場合じゃない。何か良い訳を考えないと……ってそつだ！)

「アマ！ じゃ無かった……愛！ 愛に命令されたんだ！」

「えっ？ 愛ちゃん？」

「そつなんだ」と頷き返した時には、琢真はもう全て愛に擦り付ける気満々だった。

「えーっと……そつだ、そう！ 犬……を見て来いって言われたんだ」

出だしはもたついたが、以後は如何にも愛が言いそうな話を流暢にでつち上げる。

莉理の家の近所にドーベルマンが放し飼いにされているという話を愛から聞いたが、そんな事はないと馬鹿にしたところ、怒り狂った愛が琢真を殴りつけ、今から走って確かめて来いと命令してきたので泣く泣くそれに従って、何とか犬を確認した後戻ろうとしていた時に暑さに力尽き莉理の家の前で倒れていたところを、彼女の母親に目撃された。

とまあ、大体こんな内容だった。

口からの出まかせだったが、愛が言っている様が目に浮かぶ。と言うか、同じ事を言えば多分その通りになる気がしていた。

「ああ、ジェリーちゃんね！ あの子はとっても賢くて優しいのよ。怪しい人を見たら吠える事はあるけど、人を自分から襲うなんてしないし噛むなんて絶対に無いし、近所の人達であの子を怖がってる人なんて誰もいないのよ！」

彼女の中の何か琴線に触れたらしい。莉理は嬉々とした表情であるドーベルマンについて熱く語りだす。

そのままジェリーの話は止まらず、如何にジェリーが優れているかから、ジェリーが以前泥棒を吠え立てた事で捕まえる事が出来たこと、朝時間に余裕がある日はわざわざ坂を上ってあの犬に挨拶してから学校に行っていると言うこと、本当は自分は犬を飼いたいが父

親が動物嫌いのため飼えないことまでを、熱心に語り続けた。

「どうやら、莉理は動物が好きらしい。特に犬が。」

それはとても似合っていて可愛らしかったが。

（でも藍田さん。アイツ、俺のこと噛もうとしてきたんですが……？）

言おうかどうか迷ったが、ここで水を差すのは空気の読めない男の烙印を押されかねないので、琢真はとりあえずニコやかに笑いながら相槌を打っていた。

ひとしきり莉理が語り終えた頃には、琢真の緊張はすっかり解れており、この時ばかりはあのワン公に感謝していた。

「でも、愛ちゃんと芳垣君、とそれに矢向君はとっても仲が良いよね。なんか信頼してるって感じがするし、見ていてちょっと羨ましいくらい」

先程の自分の取り乱しを誤魔化すかのように笑いながら、ただ本当にそう思っている目で、莉理は突然琢真達の関係について言及してくる。

琢真は莉理の言う事であれば、彼女が白と言うのなら白でも黒と言い切れる位の信頼を彼女に対して勝手に抱いていた。だが、こればかりはそうはいかない。

「違うよ！ ただの腐れ縁なだけ！」

そして、今度は先程とは攻守を入れ替え、琢真が莉理に向かって切々と語る。

「そう、如何にあの二人がデタラメなのかを。」

修司がいつも琢真を犠牲にして自分だけ教師の叱責を免れている事。愛が何か機嫌が悪くストレスを晴らす相手が居ない時などに、強引に呼び出されストレス解消に付き合わされる事。または琢真でストレス解消する事。修司と愛が場所を考えず言い争う所為で出禁になっている飲食店がいくつもある事等等など。一度語りだしたら

もうその鬱憤の噴出は止まるところを知らなかった。

莉理はそんな火の付いた様に語り始めた琢真を、最初は目をまん丸にして驚いていたが、最後まで相槌を打ちながらキチンと聞いていた。

しかし、琢真が話し終わると「あははっ」と可愛らしく声を上げて笑って「やっぱり仲が良いんだね」と慈愛に満ちたような顔で頷いた。

「いや、全然違うよ！」と再び琢真は訴えたものの、笑うばかりで聞き入れて貰えず、挙句「愛ちゃんもこの前同じ様な事を言ってたよ」と、更に笑いは広がった。

(藍田さんが喜んでくれているのは嬉しいが……)

アイツ等と同格視されるのだけは嫌だった。

「俺たちの事羨ましいって言ってるけど、藍田さんと高橋と田中だつて凄く仲が良いよね？」

「うん、もちろん。親友だもん」

何とか話題を逸らそうと、莉理に水を振った琢真だったが、全く動じずに即答される。余りにもきっぱりと言いつつ切った姿に、何だか自分達の関係が間違ってる気にされてしまった。

「もちろんどつちの関係が良いという訳じゃないけど、でも芳垣君達の関係は私達のは全然違う、どこか不思議な……魅力的な関係に見えるよ」

再び矛先を向けられる。言葉にからかうような調子はなかったため、琢真は「そんないいものじゃないけどなあ……」とだけ返した。

すると、彼女は顔を歪め、

「それも、愛ちゃんが全く同じ事を言ってた」

と、再び声を上げて笑った。

琢真は愛に対して何か一言言つてやりたい気持ちになった。当然、感謝ではなく罵倒の言葉を。

「きつと、矢向君も同じ事を言うんじゃないかな？」

ようやく収まった笑いの後、莉理はそんな事を言ってくる。

「いや……どうだろう、でも……うーん、そうなの……かなあ」
ハッキリとそれを認めるのは気持ち悪く、曖昧に肯定する。だが、恐らく修司も全く同じ事を言うだろうことは、琢真にも容易に想像出来た。

もちろん、修司の場合はもっと毒の籠った表現をする筈だが……。そのままでは何か心が非常に落ち着かなかったので、莉理の前だったが琢真は少し口汚く二人を罵って心の平穩を保った。

「ふふっ、やっぱりとっても仲良しに見えるよ」
と微笑んだのだった。

「あれ？ 芳垣君の家ってこっちじゃないよね？」

莉理がそう切り出してきたのは、彼女の家路の道中にある公園に至った時だった。琢真は何時そう指摘されるかを内心警戒していたものの、やはりイザとなると動悸は抑えられなかった。何て答えるのがベストか言葉に迷う。

少しの間が空いてしまったが、何かないか周囲を見回して愛の家のマンションが視界に入ってきた事で、言い訳が閃いた。

「あ、愛に呼びつけられてて……」

と答えた瞬間、自分の失策に気付く。

(しまった、それじゃあここでお別れになっちゃう!!)

予想通り、その言葉に納得した莉理は「それじゃあ、ここまでだね」と別れを告げた。

(まずい！ くっ、こうなったら……俺の中の勇氣よ、猛れっ!!)

「あ、その……も、もう、遅いから、家までおく、送ってく、よ……」

「言えた!!」と琢真は内心歓喜する。自分を褒めてあげたかった。

琢真は顔がかなりの熱を持っていたので、恐らく真っ赤っかになっっているだろうことを悟る。なので、夕日の色で隠せている事を期待していた。

莉理は琢真の言葉に一瞬驚いた顔をした。直ぐに笑って首を横に振った。

「ふふっ心配してくれてありがとう。でもまだ周囲はこんなにも明

るいから平気だよ」

その言葉に上を見上げると、まだ当分夜の到来は訪れなさそうな空が広がっていた。

琢真としては『遅いから家まで送っていく』と言う言葉は、男が女を家に送ろうとする場面の常套句だとばかり思っていたので、その中身を分解されて返答されるとは全く予想していなかった。確かにその通りだと思い何も言えなくなる。

だが、それで納得するわけにも行かず、初めにその常套句を考え出した人間に呪いをかけながらも必死に理由を考えた。

そんな琢真の焦りを知らずに、莉理は「じゃあ、また明日学校で」と別れの挨拶を言い、この場を去ろうとしていた。

天の助け、とはこういう事にも言うのだろうか。

直後、突然のつそりと現れたどう見ても天の使いには見えない人物によつて。どちらかと言えば……いやきつぱりと地獄の使いに見える人物によつて、彼女は呼び止められていた。

「え？ はい？」

と振り返った彼女が、想像もしていなかっただろう人物に驚いていた。

それはそうだろう。

恐らく面識の無い、こんな形相の鋭い小汚い婆さんにいきなり声を掛けられたのでは。

そう、占い師の老婆だった。

訂正。そう言えば以前一瞬だけ、彼女も顔を合わせた事があった。ただ、あんな僅かな時間では記憶には残っていないだろう。

推測の通り、彼女の目が若干不安そうに琢真に向いて『誰？ 知ってる人？』と尋ねていた。

「あー。藍田さん。警戒しなくてもいいよ。この婆さんは俺のちよつとした知り合いで、街で占い師をやってる婆さんなんだ」

「……ふんっ、偉そうな口を聞く」

取り成そうとしていた琢真に老婆は憎まれ口を叩く。

イラツときたが、琢真も老婆が突然現れた理由は気になっていた
ので、気にしない事にした。

「街で、占い師？」

その言葉が何かの記憶に触れたのか、何かを思い出すように考え
込んだ数瞬後。莉理はパンと両手の平を合わせ、不安そうな表情か
ら一転して喜色を浮かべた。

「もしかして、今街で噂になっている占い師の方ですか!？」

楚々としていっていると聞いても、やはりそこは女の子なのだろう。

一オクターブ上がった声で、憧れの人物に出会ったという風で老
婆に尋ねていた。

「街で噂に……? ふむ。それは良く分らんが、確かにお前さん位
の娘が最近よく訪ねて来るのう。」

老婆の言葉に、莉理は「やっぱり!」と一段と増した笑顔を浮か
べる。

「私、一度お会いしてみたかったです!」

建前ではなく本当に会いたかったのだろう。琢真からするともう、
莉理の笑顔は眩しすぎる程だった。

琢真は正直、莉理のその反応に驚いていた。彼女が占いを頼みに
する女の子だとは思っていなかったからだ。

老婆はそんな莉理の様子に気分を良くしたのか、ゲエハハハッと
不気味に笑つと、

「そんなに言うてくると、ワシも気分がええ、これも何かの縁じ
や占つてやろうか?」

と、以前の愛の時とはまるっきり逆の対応をした。

「是非お願いします! ……あ、お幾らになりますか?」

財布をポケットから取り出した莉理に、「本格的な事は出来ない
から金はいらん」と、琢真も驚愕するようなことを言って、恐縮す
る莉理を尻目に彼女の左手を手を取った。

「え? あの……?」

「本来はタロット占いなんじやが、今は道具をもっておらんでのじやから手相占いをしてやるう」

そのまま、彼女の小さな左手の平を上に向かせたところで琢真はそれを止めさせた。

「何じや？」

邪魔されて苛立ったのか、言葉に剣呑さが含まれている。

が、琢真も黙ってはられない。莉理に「ちよつとごめんね」と告げると、老婆を少し離れた場所まで引っ張っていく。

「何じや、お主も占って欲しいのか？」

老婆は怪訝そうな顔でそんな事を言ってくるが、当然違う。

「婆さん一体何しに来たんだ！？ 彼女に何を言うつもりだ！？ まさか全部話す気じやないだろうな！？」

これが最も重要な問題である。彼女を無駄に不安がらせるのは絶対に許容できなかった。

だが、矢次に畳み掛ける琢真を、老婆は煩そうに「ふんっ」と一蹴する。

「ええから、お主はだあつとれ！！」

そう怒鳴りつけると、琢真を無視して再び莉理の下に戻っていった。仕方ないので、琢真も後を追う。

莉理は事態がよく分かっていない風だった。しかし、老婆が目の前に立つと再びおずおずと左手を差し出した。老婆はそれを皺くちゃの手で受け止め、何も言わずに暫くじつと見つめ続けた。

胡散臭い老婆だったが、そうしている様子は本当に凄腕の占い師の空気を醸し出していた。琢真は思わず生唾を飲み込んでしまう。見ると莉理もかなり緊張しているようだった。

やがて、老婆はゆっくりと口を開く。

「中々立派な手相をしておる」

リップサービスなのだとすれば意外なこと極まりない。

老婆はそのように前置きしてから、占いの結果を静かに語り始め

た。

「まず、金運じゃが……。これは当面は変化ないのう。じゃが、今から数年以内に大きな転機がありそうじゃ」

「転機？」

「おう、その時の選択次第ではかなりの財産を築けると出てる」「選択が違ったら、どうなるのでしょうか？」

「その時は……貧乏とは言わんが、同じほどの財産を築くのは難しいじゃろつて」

「なるほど……」

莉理は神妙に老婆の言葉に頷いている。その様子からは、疑いという要素を持つてているようには見えない。

老婆の占いは続いた。

「次は仕事運じゃが、お前さんの場合は学業運じゃな……。ほう、これは立派なもんじゃ。今のまま続けていけばええ。将来はそれで身を立てる事が出来るじゃろつ」

「本当ですか！？ 良かった」

莉理の夢を聞いている琢真には、彼女の喜びが分った。彼女の行日々の勉強つている事は間違っていないと告げられたようなものだ。喜びも一人だろつ。

莉理の笑顔によって、琢真までも顔が綻んでしまっていた。しかし、次の老婆の言葉にだらしなく緩んだ表情が引き締まった。

一言も聞き逃さないように耳を済ませる。

「次は恋愛運じゃ」

「……………」

ここで、莉理がチラリと琢真の方を見る。恥ずかしそうに伏目がちに琢真を見上げている。

何を言いたいのかは分った。が、ここはあえて気付かない振りを

した。

「……………」

莉理の恨めしいような視線が琢真を襲う。

(だがしかし、俺は決して負けない!!)

最低な男だった。

老婆もそんな莉理の表情に気付いたのか、琢真に向かって呆れた顔で絶望的な通告をした。

「小僧、お主邪魔じゃ。向こう行っておれ」

琢真は泣く泣く二人から離れた。

耳に全神経を集中して聞き耳を立てる。だが、老婆の小さな声はまるつきり入ってこず、時折莉理の反応の声が断片的に聞こえてくるだけだった。

今までで最も長く五分以上の問答の末、ようやく莉理が琢真を見てコクンと頷いた。どうやら、恋愛運については終わったらしい。

近づいて彼女の顔を盗み見るが、先程までとは異なり喜び溢れるという様子ではなかった。

何か良くないことでも言われたんだろうか？

しかし、そんな莉理を見つめていられたのも、僅かな時間の間だけだった。

「最後は……生命運についてじゃ」

老婆がそう切り出したからだ。

「ここだ、と感じた。恐らく老婆はこの事を言うために、今日現れたのだらう。彼女と、それともしかしたら琢真に対して。

一体何を言うつもりなのか全く分らなかったで、彼女を不安にさせるような事を口にしたら、力づくでも止めてやろうという決心を胸に秘め、琢真は固唾を呑んで二人の様子を見つめていた。

「お主の生命線じゃが……。そう、その線じゃ。とても長いのは自分でも見て分るじゃろう?」

「はい」

琢真はチラリと横手から彼女の生命線を見たが、とても長いのが分かった。

それを見る限りでは、莉理に危険が差し迫っているとはとても思えない。

「お主の生命線はとても力強く、きつと健康なまま長生きする事じやろつて」

顔が綻ぶ莉理を尻目に、琢真は疑いの目を強くしていた。

まさか、あれだけ言い切っていた『予知』の結果が変わったという事は無いだろう。と言う事は、彼女を安心させるために、気休めを言っているのか？

それが良い事かは分らなかったが、ひとまず安心する。彼女を無駄に怖がらせる事にはならなかったからだ。

しかし、そんな琢真の思惑とは裏腹に、老婆の話は続いた。

「じゃが、今現在……。特に今週辺りか。線に揺らぎが感じられる」「線の揺らぎ？ 生命線の、ですか？」

言っている内容がピンとこなかったのか、莉理は疑問を瞳に浮かべている。

「そうじゃ、なるべく今週から……。そうじゃな来週頭まではあまり外は出歩かず、家でゆっくりしておくがええ」

莉理が内心、それをどう受け止めたのかは分らなかった。彼女はただ神妙に頷いた。その反応を見て、老婆は「うむ」と一言だけ言うつと、

「そろそろ用事があるので、これで失礼する……。じゃが、詳細に占いたくなったら来週以降に、ワシの所へ尋ねてくるがええ。優先して占ってやろつ」

そう莉理に声を掛けて、踵を返した。

「あ、あの、有難うございました」

慌てて礼を言う莉理の言葉を背に受けながら、老婆は振り向かずに歩いていく。

琢真は老婆が公園を出る前に後を追いかけて、莉理の事を護衛する自分にとっては、恐らく最良の言葉を掛けてくれた事に対する礼を言った。だが、老婆はそれには何も答えず、その代わりに強い目で琢真をジッと見つめて歩き去っていった。

『出来る事はしてやった、後はお前がしっかりやれ』
その目はそう告げていたように感じた。

莉理の下に戻ると、彼女は「今の占いは結局喜んでいいのかな？」と悩んでいた。

「全般的に良い結果だったんだよね？ 喜んで良いんじゃないかな？」

琢真のその言葉に安心したのか「そうよね」と、莉理はようやくにっこり笑った。

「じゃあ、あんまり歩いちゃ駄目ってことだし、もう帰るね」
莉理は冗談っぽく微笑むと、心なしか軽やかな足取りで老婆とは反対側の出口から出て行った。

折角の口実が出来たのに、家まで見送ることを告げるタイミングを見出せないまま、琢真はその後姿を目で追う事になってしまった。
(仕方ない……影から護衛するか)

老婆の話からすると、やはり今週が山場のようだ。何とか今週を乗り切れば、彼女に対する生命危険疑惑は払拭されるのだ。そうすれば、こうしたストーカーじみた事はしなくてもよくなる。

(決して彼女を死なせたりしない。必ず護ってみせる)
その改めて燃え上がった決意を胸に、琢真は莉理の後を追いかけたのだった。

しかし、だから琢真は気付かなかった。

公園から出て行った二人を、睨みつける様に凝視していた存在があったことを。

琢真は常に冷静に周囲を警戒しておくべきだった。が、この時の

琢真は気持ちばかり逸り、その事に気付けていなかった。そうすれば、この後の展開は異なっていたかもしれないのだ。

だが、それに気づいた時にはもう。事態はどうしようもない所まで進んでいたのだった。

『火曜日』

今日は珍しく莉理の登校が遅かった。

と言つても、莉理自身の問題ではない。彼女はいつも通りの時間に家を出ていたのだが、道中に道に迷つていた人と遭遇し、親切にもその人を目的の場所まで送り届けていた為だった。

生憎まだ大通りに出る前だったので、琢真はそれを手伝う事が出来ず、後方の物陰で様子を見守るだけに努めていた。

いつもとは違う出来事に、何か起こるのではと緊張したものの、特に何事も無く学校へと向かう事が出来た。

大通りに出ると、既に登校している生徒は疎らで少し早足で向かったほうが良い時間帯だった。莉理もそれは分っている様で彼女なりに早足で進んでいたが、タツパの違いか、琢真の一步と莉理の二歩が同じという有様だったので、校門を抜ける頃には遅刻ギリギリという時間になっていた。

琢真は玄関で莉理に追いつき、偶然を装って挨拶する。白々しくも「今日はどうしたの？ 遅いね」という言葉をかけながら。

莉理は恥ずかしそうにしていた。しかし、先程の事は言おうとせず「ちよつと色々あつて」とはにかむだけだった。

そんな莉理と肩を並べて教室へ向かう。

二階とは言え朝からの階段はきつい。特に運動音痴の もとい、運動があまり得意ではない莉理はかなり辛そうだった。

ただ何とか、チャイムの鳴る前に教室の前の廊下に辿り着く事ができ、「良かった間に合つたね」と微笑み交わす二人だった。

だが、どうも教室がいつも以上に騒がしい事に気付く。クラスメイト達の何事か、怒鳴りあうような声が外に漏れてきている。二人して怪訝そうに顔を見合わせながらも、ゆっくりと教室のドアを開いた。

2

開いた瞬間、皆急に黙り込んでしまい、教室の外まで漏れていた騒音も一気に静まった。それと同時に、クラスメイト達の微妙な視線が莉理、そして琢真を貫く。莉理には何か気遣うような視線で統一されていたが、続く琢真への視線は複雑さに彩られていた。

その大部分たるものが、一言で言えば警戒。そんな表情からの視線だった。その他は、嘆き、怒り……何れにせよ良い感情からの視線では決してなかった。

それらは、主に女子生徒達から向けられていた。男子生徒達は皆一様に戸惑っている様な、そんな表情だった。

「何だ？」

朝いきなりそんな視線を向けられては、当然浮かぶ疑問である。

だが、その琢真の問いには誰も答えようとはせず、視線を強くするだけだった。

莉理も琢真も、驚きから教室のドアの所で立ち止まってしまっていた。異様な雰囲気になれ、一歩も動けない。そのまま、暫し時間が経過する。

彼らがこんな目を向けてくる理由がピンと来ず、琢真は愛に事情を尋ねようと思ったが、残念ながらまだ登校していなかった。

仕方なく、琢真は心配そうに自分を見つめていた金子に「どうした？」という視線を送った。

「あ……いや、その……」

金子は口ごもるばかりで、明快な答えを返してはくれない。

続いて吉田、山口に視線を送るも、同様の反応が返ってくるだけだった。

よく分らなかったが、そのままでもしょうがないので、琢真は自分の席に移動しようとする。だがそれは、意を決してという態度で近づいてきた高橋によって止められた。

「待ちなよ、芳垣」

高橋は琢真に近づいてくると共に、傍にいた莉理の手を掴んで自分の背後に隠すように引いた。

「きゃっ、ど、どうしたの那奈美？」

莉理は焦ったように声を上げる。高橋はそれには答えずただジッと睨むようにして琢真の顔を見上げた。

「どうした？ そんな怖い目をして」

「……………これ、どういうこと？」

琢真の問いにも答えず、ただある数枚のA4用紙を教卓の上に叩きつけた。

(何だよ…………)

と思いつつ、琢真は視線をそれらに移し 時が止まった。

恐らく携帯か、デジカメで隠し撮りしたのだろう。A4サイズの紙に印刷されたそれには、二人の人間の姿が写されていた。

被写体ははぶれており、ハッキリとした詳細までは捉えられていない。しかし、琢真にはそれらが誰なのかは一目で分かった。

それには、莉理の後を付ける琢真の姿が写されていたのだった。

一枚だけだったら、ただ同じフレームに入っただけという事も言えただろうが、場所も違い、服装も違う、そんな何枚も見せられずには誰もが同じ結論に辿り着いたに違いない。

琢真が莉理をストーリーカーしている、という結論に。

ただ、莉理の顔はブレている割りに比較的ハッキリ映っているものもあったのだが、琢真のものはかなり遠目から撮影されいるよう

で、親しい者でない限り、顔を判別するのは難しいだろう。

だが、このクラスには琢真の親しい人間の大部分が集まっている。ようやく琢真はクラスメイト達の視線の意味が理解できた。

琢真はまず莉理の様子を伺った。

彼女も同じ見解に達したのか驚愕の表情で息を呑んでいる。ましてや、自分の顔が盗み撮りされているのだ。衝撃は決して少ない事だろう。

だが、琢真にはそんな彼女を心配する暇は与えられていなかった。高橋が再度同じ質問を投げかけてきたからだ。クラスメイト達も一人残らず、同じ事を問い正したいという目で琢真を見つめていた。「今朝教室の黒板に貼り出されていたらしいんだけど……… どういうこと？」

不思議と琢真は落ち着いていた。

こういつた時の為に、何とか誤魔化し通せるような策もいくつか考えていた。しかし、この写真の前ではどの策も全く意味の無いものになっていた。

なので、余計に慌てても良さそうなものだったが、これは焦りが限界を超えたという事なのだろうか。ならば、少しでも長くこの心境でいたいものだと、琢真は思っていた。

そんな超然としている琢真をどう捉えたのか、少し怯えるような色を僅かに覗かせて、もう一度高橋が質問した。

「なあ、どういふことなんだこれは？ ここに写ってるのは芳垣……だよな？」

質問してはいるが、恐らく高橋にも分っているんだろう。

この写真に写っている男が誰なのかということとは。ただ、それでも質問せずにはいられなかったのだろう。

琢真のクラスメイト達は他所のクラスと比較して、格段にクラスメイト同士の仲が良い。同性同士だけでなく、異性間でも。もちろん、それでも喧嘩したりすることもある。ただそういった場合、

直ぐに誰となくそれを取り成してくるために、関係が悪化する事もなく寧ろ仲が深まることに繋がるほどだった。

でも、だからこそだろう。琢真を疑いながらも、何か理由があるのではないかと、最後まで信じようとしてくれている。

だからこそ、琢真もそんなクラスメイト達に嘘をつくことは出来なかった。

「……ああ、そうだな」

息を呑む声がクラスメイト達から聞こえてくる。

だが、彼らは何も言わずに高橋から続いて発せられるだろう質問を待った。琢真も次に何を聞かれるかは既に分かっていた。

「……何でこんなことしてたんだよ？」

当然の質問だった。

だが琢真も当然。その質問に答えることはできない。今本当のことと予知のことを告げても、逆に猜疑心を深めるだけだ。

そのまま黙って答えようとしない琢真に、高橋は苛立ちの様子を見せ始める。

「何で黙ってるんだ？」

「……………」

「……じゃあ、一体いつからこんな事をしていた？」

その質問も、問い続けられると予知の事に繋がっていくのが分かったので、答えることは出来なかった。

だが、そんな葛藤などは知る由も無いクラスメイト達には、それが琢真のやましさに繋がっていると考えたのだろう。高橋を始めとする……それまではずっと黙っていたクラスメイト達も徐々に憤りを露にしていった。

「……何で答えられないんだ!? 答えられないって事は何か本当にやましい事があるって事じゃないのか!？」

「今までずっと藍田さんを、そういう目で見てたの!？」

「最低! 莉理の事を監視していたのはアンタだったのね!！」

「みんなの事をずっと騙していたのっ!？」

「まさか覗きとかしてないでしょうね!？」

一度決壊したら歯止めが利かなかったのか、次々に怒声、罵声を浴びせられる。

悲しかった。が、これらも皆莉理のことを思っているのだということを考えたら、何とか耐えることが出来た。

それらの言葉を一身に受けながら、琢真はゆっくりとクラスメイト達の様子を見回す。

高橋も、田中も、女子達は殆どが莉理に同情し、琢真を非難していた。

男達は特に何も言っただけでこなかった。ただ、皆何か言いたそうな、そんな表情で琢真を見ている。特に琢真と仲の良い金子達は、琢真以上に悲痛な顔をしていた。

琢真には何も言う事は出来ないの、ただ心の中で彼らに謝罪した。

一通りの罵声が浴びせられ僅かな間断できた時に、ポツリと声が掛けられた。

か細い声だったが、皆その人物に注目し一様に押し黙る。

「芳垣君……どうして?」

莉理の悲痛な声が琢真の耳を打つ。

他の誰から罵倒されても、怒鳴られてもそれはそのまま受け止めるだけの覚悟はあった。だが、彼女だけは例外だった。彼女の悲しげな声が、琢真の意志を根元から揺さぶっていた。

そして思い至る。

自分は彼女を悲しませないため、不安にさせないためにこんな事をしていたんじゃないのか、という事。

その自分が、今誰よりも彼女を苦しめている、という事。

だとしたらこの茶番劇は一体何なんだ、という事。

そして。

(俺は……一体何してるんだ?)

「……………あ」

彼女に対して、無意識に何か言い訳じみた事を言おうと言葉が溢れ出しそうになる。琢真は寸前のところでそれを堪えた。一体何を言うつもりだったのか、自分でも分らなかつた。ただ、思わずそうしようとした自分の弱さがたまらなく嫌だつた。

そのまま、クラスはシンと静まり返つてしまふ。

誰も一言も発しない。だが、非難の視線だけは鋭く琢真に深々と突き刺さっている。

その時唐突に、場違いな校内放送のチャイムが鳴り響いた。

こんな時間に放送が入るのは、何か行事でもない限り異例のことだつたが、何の放送なのかは直感で悟つた。直後、琢真は自分の考えが正しかつた事を知る。

『……………芳垣琢真、居たら直ぐに生活指導室に来なさい』

数度その内容が繰り返され、放送は切れた。

呼び出された理由は明白だ。この事がどこからか教師達に漏れたのだらう。

ただ、クラスメイト達は、皆その放送に戸惑っている様だつた。

いつもの馬鹿騒ぎの騒動とは違ふ。ここですっぽかすと、自分にとつて最悪の事態が待ち受けている事は容易に想像できた。

「琢真君……………」

金子だけが自分を心配そうに見つめる中、それに何も答えられな
いまま、琢真は一人教室を出ていった。

「黙ってないで、質問に答えんか!!」

あの後、教室を出た直後に琢真を探しに来ていた、担任で生活指導員の池山。同じく生活指導員の広沢。学年主任の野村の三人に捕まり、強引に生活指導室まで連行されていた。

どうやら教室で見せられたあのA4用紙は、職員室にも同様のものが貼り付けられていたらしい。同じものが琢真の目の前に広げられている。

写っている生徒が誰であるかは池山の言で発覚し、たちまち教職員の間で問題となったが、とりあえずは公にはしないでまず琢真を尋問しようと言うことになったそうだ。

男子生徒が女子生徒をストーカーしていたと言っても問題なのに加え、しかも同じクラスである。事によっては学校の責任問題となりかねない。

と言う様な事を、琢真はやたら声が大きく煩い広沢と、嫌みっちらしくネチネチと詰問してくる野村の口から聞かされた。

そして今、彼等が焦点にしているのは、何故琢真がそんなことをしていたかという事だった。

しかし、クラスメイト達に答えなかったものをこんな奴らに答える筈も無く、琢真はずっと押し黙っていた。

元々、彼等はいいつも問題を起こしている琢真のことは毛嫌いしていて、事ある毎に難癖を付けてきていた。彼等に言わせると、学校で起こる問題の七割は琢真の所為らしい。今まで何度琢真は濡れ衣を着せられたか分らない。だが、真相が分かり琢真が犯人でない事が明らかになっても、彼等が琢真に謝罪したことは、ただの一度も

なかった。

当然、琢真もそんな彼等に良い感情を持っている筈も無く、そうした反感感情も伝わっているようで、お互いに嫌い合っているのを知っていた。

だからこそ、今回の事は琢真を処分できる格好の材料だとも思っているのか、二人は時折いやらしい笑みを浮かべながら、琢真を詰問しているのだった。

ただこの中で一人だけ、琢真を庇ってくれている存在が池山である。

度を越した罵倒をしてくる二人を諫めながら、琢真を何とか庇おうとしてくれている。いつもは口煩く、指導という名の暴力を辞さない池山だったが、それでも生徒に嫌われていないという事実が明かすように、今はただ真摯に琢真の擁護を続けていた。

何か理由がある筈だと。

琢真はそんな池山だけには申し訳ない気持ちを抱いていた。しかし、こればかりはどうしても教える事は出来なかった。

「いい加減何か話せ！……ちっ、このままじゃ埒が明きませんな」

「やましい事が有ると言う事なのでしょう。まあ何れにせよ停学は免れないでしょうね。いや、事によっては退学かもしれません」
処分を口に出しさえすれば、動揺して口を開くとも思っているのだろうか。

正直、琢真はそんなことはもうどうでも良かった。

先程からずっと、脳裏を莉理の悲しげな顔が埋め尽くしていたからだ。彼女を悲しませてしまった。その事だけが琢真の胸を激しく執拗に締め上げていた。

そんな感情に埋め尽くされていた琢真を、必死に弁護する池山の声が聞こえる。

「いや、待って下さい！それはあまりにも処置が重過ぎる！こ

いつはそういう事をする奴じゃないんです！ 何かきつと理由がある筈ですよ！」

「担任だからコイツを庇いたいと言うのは分かりますが、じゃあこいつは何故その理由を言わんのですか？ ストーカーしていたと言うのが真実だからでしょう！？」

「だから……。それには何か理由が……」

「池山先生。もう理由は関係ないのです。もし仮に何か理由があったとしても、ここまで騒ぎが大きくなった以上、何らかの処分を下さないのでは他の生徒に示しが付きません」

「そんな……。見せしめのためにコイツを処分すると言うのですか！？」

「池山先生……。そもそも、被害にあつた女生徒は先生のところの生徒でしょう？ こんな生徒を庇い立てするよりも、そちらへのフオローの方が優先されるべき事なのではないですか？」

「くっ……。いや、それは……」

琢真を庇い立てする池山だったが、被害者……。つまり莉理の事を考えるという発言には二の句が継げないようだった。

ただ、その意見には琢真も賛成していた。池山には自分の事なんかよりも、莉理のことを重要視して欲しかった。今は傷ついたであろう彼女の心を癒す事が、何より優先すべき事なのだから。

「……これ以上尋問しても意味が無さそうですし、あの写真を見たままが事実だったと言うことで職員会議に回しますか」

「そうですな、仕方ないでしょう」

仕方ないと言いながらも、広沢の顔には笑みが浮かんでいた。野村も同様の表情である。琢真を処分できる事になりそうなのが嬉しいのだろう。

「待ってください！ まだそうと決まったわけじゃないでしょう？ ちゃんとコイツから話を聞きだして……」

「はあ……。池山先生。何度も同じことを言わせないで下さい。それにこれは学年主任の私と生活指導員の広沢先生の両方の一致した

見解です。いくら先生お一人が何と言おうと、それが変わることでありませぬよ」

「それにソイツは何にも喋らんじゃないですか！ 心苦しいですが処置も止むを得ないですな」

縋る様に他の二人に再考を促す池山だったが、コイツらそれを認める筈が無いだろう。

池山もそれが分かったのか、矛先を琢真に代え必死に訴えかける。「なあ、芳垣。頼む。頼むから何か言ってくれ！ このままじゃ大変な事になってしまいかもしれないんだぞ？」

池山は琢真の両肩をガツシリ掴み、視線を同じ高さに合わせて語りかけるように話す。

互いの目が交差する。

「……………」

琢真は何も言わずに、ただ決して目を逸らそうとはせずに池山見つめていた。そんな琢真をどう感じたのか、池山は僅かに口調を緩めながら言った。

「俺にはどうしても、お前が何も理由無くこんな事をするとは思えないんだ。絶対そこには何か理由がある筈だと。そう思えるんだ……」

「池山先生……何を馬鹿なことを言っているんですか」

呆れたような野村の声が聞こえてくる。それを無視して池山は話を続けた。

「……………言いたくないのなら良い。ただ……………一つだけで良い。これだけは教えてくれ……………」

僅かに言葉を切り、

「これは……………その写真の行動は、お前の……………そう、お前の信念に基づいた行動なのか？」

と、そのまま琢真の目を瞬きすらせず、池山はジッと見つめる。

そんな池山に琢真は

やはり、何も答える事は出来なかつ

た。

「……………芳垣」

池山の表情に浮かんでいるのは落胆か、はたまた悲しみか。俯いた琢真にはそれを知る術は無かった。

「これで分かったでしょう？ さあ、もう行きましょう。事情は私から教頭に伝えてきます。放課後には例の件もありますから、緊急職員会議が開かれる筈です。何かあるのであれば、後はその場で聞きましょう」

「芳垣！ お前はそのまま家に帰って自宅謹慎してる！ 大人しく処遇が下されるのを待っているんだな」

二人はそう告げると生活指導室から出て行こうとする。が、その前にまるで壊すような勢いで突然ドアが開かれた。

「琢真っ！！」

校舎中に響き渡るかと言う程の怒声と共に現れたのは、愛と、口を開いてこそいないが静かな怒りを瞳に宿した修司だった。

その登場に室内の誰もが驚く。

そんな面々に向けて、愛が机の上に置かれた紙を指差しながら叫ぶように訴える。

「琢真は無実です！！ そんな……………写真から判断できるような内容で尾行してたんじゃありません！！」

その叫びに最も強く反応したのは池山だった。

「お前……………理由を何か知ってるのか！？」

琢真から離れ、薫をもすがる様に愛の肩を掴む。

愛はその池山にも睨むような目を向けながら、一言だけ答えた。

「知ってます！」

その台詞に他の二人が嫌らしそうに顔を歪める。

「ほう、じゃあその内容を教える」

「彼は何も話そうとしないんですよ。先生達も困っていてね、君が

知ってるなら教えて下さい。彼に何か正当な理由があるのならね」
二人とも、明らかに愛の言葉を信じていない様子が端々から伝わってくる。

「それは……っ！」

元々、愛もこの二人の事は琢真以上に嫌っている。

その言葉に激昂しながら答えようとしたが、背後にいた修司に肩を掴まれ寸前の所で口を閉じた。

修司の目は「その事は言わない方が良い」と語っていた。

「どうしたんです？ ……やはり答えられないのですか？」

「そもそも、どうしてお前がそんな事を知っている！？ お前もこれに加担してたんじゃないのか！？」

矛先が愛にも向こうとしていた。だが、愛は悔しそうに二人を睨み返すだけで何も言おうとはしなかった。更に畳み掛けようとしていた二人を、修司の声がやんわりと抑える。

「彼女は、芳垣を助けたいあまり、口から出まかせを言ったに過ぎません。先生方もあまりお気になさりませんよう……」

「矢向……」

「矢向君……なるほど、そうでしたか」

修司は入学以来学年首位を走り続けている事もあり、学校ではその秀才ぶりのためかなりの有名人だった。教師達で修司の事を知らない人間は居ないだろう。しかも表向きは教師に従順する様を見せられているので、教師達の受けも非常に良く、特に成績で生徒のことを差別するような輩達には絶大とも言える信頼を受けていた。

修司は背中を愛を抑えながら、にこやかに応答している。しかし、その心境は如何なものだろうか。

何故なら、三人の中で最もこのような教師を嫌っているのは修司なのだ。このような機会でもない限り、自分から会話をするようなことは決していない。今も表面上は穏やかに微笑んでいる様に見えるが、その眼鏡の奥の目は全く笑っていなかった。

「ふんっ、紛らわしい事を言って教師を困らせるんじゃない！」

二人は修司の答えに納得した様で、愛に吐き捨てるような視線を送ると、A4用紙を持ってそのまま生活指導室を出て行った。

後には、その後姿を見送る微笑を冷笑に変えた修司と、憤り冷めやらぬ愛。その様子を冷静に見ていた池山。そして琢真が残された。

「何アレ!! ホンツと腹立つわ!! ああ~~~~ム力つく!!」

二人が居なくなった途端に愛がわめき出す。あまりの怒りに池山の事は視界に入っていないようだった。そのまま聞くに堪えない罵詈雑言を吐き続けている。

「……矢向。お前が今言った事は本当のことか？」

「もちろん、そうですが？」

いつも大抵の教師の前では猫を被り続けていた愛が、いつもとはまるつきり違う本性を見せているのには全く構わずに、池山は修司に向かつて真剣な表情で尋ねる。だが、修司の返答は取り付く島も無かった。

「……そうか」

修司の不言の意志を感じたのか、それ以上池山は問おうとはしなかった。

「琢真はこのまま謹慎処分を受けるのですか？」

黙りこんだ池山の代わりに、修司が口を開く。

その言葉に、騒いでいた愛もハッと我に返り池山をジッと見つめ言葉を待った。

「……恐らくは、そうなるだろう」

一瞬、池山は言葉を濁そうかどうか逡巡していた様だった。結局、溜息と共に言葉を吐き出すように言った。

「そんな!! 琢真は……っ!!」

愛の弁護の続きは、それまでずっと黙っていた琢真が制した。

「愛……いいんだ」

「でもっ!!」

「こんな事になったんだ、そうなるのは当然だ」

「琢真……」

神妙に語る琢真を、愛と修司は静かに見つめる。

二人とも分かっているのだろう。理由が言えない以上。いや、正しくは理由を言っても信じて貰えない事が分かっている以上、何を言っても無駄だと。

だが、それでも納得がいかないのか愛は声を荒げる。

「本当のことを本気で言えば、きっと誰か信じてくれるよ!!」

愛の希望的意見だったが……それは無理だ。

琢真の心の声を修司が引き継ぐ。

「それは無理だ、愛。確かに正直に話せば信じてくれる奴も居るだろう……」

修司は、ちらりと静かに彼らの話を聞いている池山の姿を見て、続けた。

「だが、こんな騒ぎになってしまった時点で、もう誰か一人二人が信じてくれた所で全く意味が無い。お前もまさか、教師の過半数が信じてくれるとは思ってないだろう?」

「それは……」

「教師達の過半数の賛同が得られない以上、琢真に処分が決まる事は避けられない。それはもう決定している事だ」

「……………」

「出来ることがあるとすれば、教師達の少しでもを説得し、その処分を少しでも軽減する事ぐらいだが……」

今の状況では難しい。

当の本人が何も言おうとしないのだ、心証は最悪だろう。それに、もし仮に琢真が理由を言ったとしても同じ事である。

つまりこれはもう、抜け道の無い袋小路なのだった。

その修司の言葉に、池山が何かを決心した表情を浮かべた。

「心配するな、それは俺が絶対に何とかする。お前達が真実を話してくれないのは残念だが……」

そう言つて、琢真に強い視線を向ける。

「……俺も、俺の信念に基づいて行動する事にする」

それまでの神妙な池山はなりを潜め、いつもの池山に戻つたように瞳から強い光を発する。そして、ドシドシと生活指導室のドアに向かった。

「芳垣。お前はもう今日はこのまま家に帰るんだ。後で、俺が決まつた事を連絡する。……いいな、今日は絶対に大人しくしておくんだぞ!! あと、二人ももう教室に戻るんだ」

出て行く間際にそう言い残し、池山は職員室の方に向かって歩いて行つた。

それを見送つて、琢真は二人に声を掛ける。

「そうだな、お前達はもう教室に戻つてくれ」

二人は僅かに逡巡する。

「……ああ、分かつた」

「……………」

修司は納得してくれたが、愛はやはり納得がいかない様だつた。

そのまま黙つて 何か閃いたように声を上げる。

「そうだ！ 莉理にこの事を説明して分かつてもらえばいいんじゃない!? 被害者が納得してるんならあんな紙ツ切れ、言つてみればプリクラと一緒にゃん!!」

「愛……愛！ それだけは頼むから止めてくれ」

「どうしてよ!!」

愛が琢真の拒絶に憤る。

「そんな事をしたら、藍田さんの心に更に負担を与えてしまう。以前だつたらまだ良かったかもしれないが……。もう、今となっては遅いんだ」

そう、もう全てが遅かつた。

悩んだりせず、もっと早くきちんと説明していればこんな事にはならなかつたかもしれない。だが、それは琢真の行いの結果だつた。自業自得である。

「でも、そうしないとアンタが!」

「俺の事はいいんだ。それにその事を伝えるとすると、今の状況ではお前にもその場に同席して貰って力を借りる事になる。彼女が信じてくれたのなら良いけど、もし仮に信じてもらえなかった時は…
…最悪だ。俺がもう彼女を守れないんだ。どうしても、お前の力を借りなくちゃいけない。その肝心のお前が不審がられていては、もうどうしようもないだろう?」

「でも……あの子なら。……信じてくれるかもしれない」

「そう。信じてくれる『かも』だ。そんな定かじゃないことに賭けるのは駄目だ。そんな万が一に備えて、彼女には真実を告げないほうがいいんだ。……それに、そんな事以上に、俺は」

(彼女に『死』を連想させたくないんだ)

琢真としては、その事だけで理由としては十分だった。

「……………」

琢真の言葉に愛は何か反論したそうだった。しかし、声にはならなかった。

「愛、だからお願いだ。俺の事を考えてくれるのなら、頼むから彼女に伝えるのだけは止してくれ」

「……………」

「愛!」

「……………分かった」

ようやく愛は頷いた。納得はしてなく、渋々という感じではあったが。

それでもこれで勝手に暴発して莉理に真相を告げる、というような事はしないだろう。

「悪いな……………」

「……………」

「修司も悪いが、藍田さんの事を頼む」

琢真は自分の事はもうどうでも良かった。その事だけが気がかりだった。

「ああ、そっちは俺達で何とかしよう」

あっさりと修司は約束する。

予知の事は恐らくまだ信じている訳じゃないだろう。だが、こういう本気のお願いを修司は違えたりはしない。

これでもう安心だった。修司なら自分よりももっと上手く立ち回ってくれるに違いないからだ。

「すまん」

琢真は一言だけ礼を言う。一言だけだが、全ての謝意を込めたつもりだった。

ならば、もう琢真に伝えるべき事はない。

鞆を手にとると、二人を残してそのまま生活指導室の外に出る。

修司の表情の見えない目と、愛の後姿が琢真を見送る中、琢真は静かにその場を立ち去った。

そして、生活指導室を出て十歩程度離れた時に、

ドカン。

と、何かを思いっきり蹴りつけたような音が部屋の中から聞えてきた。

しかし、琢真がそれを気にする事はなかった……。

学校の正門から外に出る。

東門は開いていたが、校庭で体育の授業を行っているクラスがあった為、琢真はそちらを通るのは、心理的に避けたかったのだ。

東門側と比べて正門付近は静かなものだった。今は授業中なので当然であるものの、少しそれが新鮮に感じられた。

それからは琢真は特に何も考えず、ゆっくりと家に向かった。

処遇はどうなるのかとか。クラスの皆にはもう嫌われてしまったのかとか。このまま帰って母親には何て言おうとか。考える材料は沢山あった筈だった。

しかし、不思議と何にも頭に浮かばなかったのだ。放心している、という言葉が最も近いだろう。

だから。

琢真が莉理の事を護ると誓った公園を、再び訪れていたのも特に何か思つての事ではない。筈だった。

公園には、まだ朝だからだろうか？ 人影は無かった。

琢真は公園を横断し、薄汚れたベンチに腰掛ける。そのまま、ただ公園をじっと眺めていた。どれくらいの時間そうしていただろうか。琢真には数分の様にも思えたし、数時間の様な気もしていた。

ザツ、と何者かが琢真の前で足を止めた音がした。その音に、放つていた意識を取り戻し、琢真はゆっくりと顔を上げる。

そこには、小さな体躯に薄汚れた格好をした白髪の老婆が険しい顔で立っていた。

ドクン と、琢真の心臓が一度だけ大きく跳ねた。

それを皮切りに、一気に鼓動が荒々しさを増してくる。心臓が一度収縮して血液が循環させられる毎に、様々な感情が一緒に吐き出され始めた。

ここまで、意識的に考えてこなかったことが、次々と琢真の脳裏に浮かび出す。

それは次第に脳を埋め尽くし、必死に振り払おうとするが無駄だった。夜の闇の到来を防ぐ術が無いように、どんなに足掻いたところで実体の無いソレは、琢真のちっぽけな心ではどうすることも出来なかったのだ。

そして、脳を支配下に収めたその思考は、琢真の体内から無理やり外に出ようとする。一色に染められた琢真には、もうそれを防ごうとする意識は無かった。

それは、琢真の口から吐き出されるようにして湧いて出る。

「なあ婆さん……何でこんな事になったのか……分かるか？」

「……何がじゃ？」

老婆は怪訝そうな目で琢真を見つめる。

分からないか……まあそうだろう。

ただ、その事が更に琢真の感情を逆撫でする。

「分からないか……ははっ、そうか……。だけど俺もそうなんだよ」

「……………」

「なあ、婆さん。教えてくれよ……アンタの言ってた予知って本当は……嘘なんだろ？」

老婆は何も答えない。黙したまま、琢真を見つめるだけだった。

「なあ……なあ！？ 答えてくれよ。デタラメなんだろ？ 婆さんの話の後で藍田さんに色々あったのも偶然で、俺に話をしたのだったただ金を儲けるためのいつもの手口だったんだろ？ 不安に思った俺が占いに手を出そうとするように」

「……………」

「藍田さんが死ぬってのも嘘なんだろ！？ そうだよな！ 予知っ

て何だ？ 意味分かんねえ！！ そんなものが有るわけねえじゃねえか！！」

一度話し始めたら、もうそれは堰を切ったように奔流となり、もう抑える事など出来なかった。いや、琢真に抑えるつもりもなかった。

ただひたすらに、胸に積もった不満、不安、後悔、怒り、そういつた感情を老婆にぶつけ続けていた。

「俺が護衛し始めてから、藍田さんは一度もそんな危ない目に合った事なんてねえんだ！ 最初のは偶然が続いただけだったんだよ！ ！ そうだ意味ねえんだよ、護衛なんて！！」

「……………」

「なのに、何だこれは！？ 何だよこの状況！！ デタラメに踊らされて藍田さんに嫌われるわ、クラスの奴らに嫌われるわ、拳句謹慎だつて！？ 分からねえ！ 意味分かんねえよ！！」

琢真にも分かっていた。老婆に責はない事は。これが単なる八つ当たりであることも。分かっていた。分かっていたが、どうしても感情を抑えることはできなかった。

それは、分からなかったからだ。

善意からなる行動の結果に対して、どうして自分がこんな事になっているのか。どうして胸が張り裂けそうに痛んでいるのか。分からなかった。何故莉理が悲しそうな顔をしていたのか。どうしてそうだったのか分からなかった。

分からなかったので、更に感情の吐露は続く。

だが、そんな狂ったような激しい罵倒の中、老婆は一言も口を開かなかった。弁解も、謝罪も、慰めも、反論も、何一つしようとはしなかった。

ただ、感情の見えない瞳で、琢真を見つめ続けていた。

「なあ、どうなんだよ？ これで満足か？ 婆さん……………なあ、おい」

「……………」

「なあ！！ 何とか答えろ！！ 黙ってないで答えてみるよ！！」

二人以外は誰もいない公園で、琢真の怒鳴り声と荒い呼吸音だけが存在感を主張している。

老婆は、息をしていないのではないかと思うほどに微動だにしていなかった。

そのまま、僅かばかりの時間が過ぎ。 。
ずっと琢真を見つめていたその瞳が、僅かに揺らめいたかと思うと、老婆は静かに告げた。

「あれからまた視えた……。あの娘は、今週中に路上で……。その体を何かの金属に貫かれて……。死ぬ」

その言葉に……。琢真は完全に頭に血が上ってしまった。

「ふざけんな！！ まだ言ってるのか！？ それはもういいって言うてん……」

溢れる怒りをそのまま垂れ流すように吐き出そうとするが、琢真は最後まで言い切ることはできなかった。

何故なら、老婆が苦悶の表情を浮かべて苦しみ始めたからだ。

だが、その場に倒れるように座り込み、顔中真っ青になり、脂汗を浮かべて荒い息をしながら苦しそうに呻く老婆を見ても、琢真はそれでも、それは都合が悪くなったから演技しているんじゃないのか？ と疑いの目を向けていた。

冷静になれば、本当か演技かは直ぐに見抜ける筈なのに。

だから琢真は、それを暴く意味で「直ぐに救急車を呼ぼう」と冷めた目で提案する。琢真の予想通りなら老婆は必ずこの提案を断る筈だった。演技なのに病院に連れて行かれるのだ、どんな人間も焦るだろう。

なので、老婆が提案を断ってきた時には、琢真はやはりか、という疑いを強くする以外なかった。

「よ……よ、呼ばんで……ええ……」

この短い言葉を発するだけでも、老婆はかなり辛そうである。

まあ、そう見えるように演技しているので当たり前だろう。

「こ……この発作は……直ぐに……治まる……」

言葉とは裏腹に、一向に苦しさが増和していつている様には見えない。ますます汗が滲み出ている。

流石に手馴れている。

「そうか」

老婆が苦しみの中搾り出した言葉に対して、琢真が返したのはそれだけだった。既に、琢真の中では演技であるということは確定に近い。

だがそれでも、この後に続いた言葉には、僅かに心が乱された。

「……そんなことより」

そんな流れるほどの脂汗を滲ませながらも、自分の苦しみには一向に構おうとせず、老婆はただただ、ある事を必死に琢真に頼み込んでくる。

「あ、あの娘の事を頼む……今週を乗り切れば……大丈夫な、筈じやから」

この期に及んでもまだ、そのような言葉を吐いていた。

その言葉は昨日までの……いや、ついさっきまでの琢真が言っていた台詞だった。以前は自分が老婆に助力を願っていた。しかし、今は逆に老婆が自分に頼み込んでいる。何とも滑稽な話だった。

傍からはどう見えているだろう。苦痛で地面に座り込み呻く老婆の脇に、それを助けようともせず突っ立っている男。

老婆が男に、土下座しているようにも見える筈だ。

そんな体勢で、まるで『頼む』という単語しか知らない人のように、繰り返し繰り返し力ない声で呟いている。

（何なんだ、これは？）

琢真は全く訳が分からなくなった。

この状況も分からなかったし、この前は傍観者を振舞っていた老婆が何故そんなにも莉理の事を自分に頼み込んで来るのかも分からなかった。

自分が何でこんな所にただ突っ立っているだけのかも分からなかったし、何故自分が老婆にそんな事を必死に頼まれる側になっているのかも分からなかった。

老婆の『予知』が嘘なのかどうかも分からなかったし、老婆の行動が全て芝居だったという、ほんの少し前まで確信していた筈の事が、もうどうなのか分からなかった。

少なくとも昨日までは分っていた筈の事が分らない。

何が本当で、何が嘘か。何をしなくてはいけないくて、何を止めるべきか。

分らない。分らない。分らない。

そして何より 何故老婆の姿にこんなにも心が痛むのかが分らなかった。

そのまま暫くして、発作が治まった老婆が静かに立ち上がった。

「……年甲斐もなく、取り乱してしまったの……… すまんかった」
そう言って琢真に詫びた。俯いているため琢真からは表情が見えなかったが、自分の行動を恥じている様子にも、悲しんでいる様子にも聞こえる声だった。

再びゆっくりと顔を上げた時には、老婆は元の強い光を瞳に宿していた。

「じゃあ あの娘の事だけは……… 本当に頼む。残念ながらワシだけでは、どうすることも出来んのじゃ……… どうしても、お前さんの助けが必要じゃ………」

その瞳で琢真に助力を願い、頭を下げた。

琢真には分からなかった。

自分の力がどう役に立つのか、どう力になればいいのか。

もう自分は莉理の傍にいることは出来ないのだ。近寄る事も、隠

れて護衛する事も無理だ。今度見つければ謹慎どころでは済まないだろうからだ。

何より彼女に深い傷を付けてしまう。それだけは決してしてはいけないかった。

そんな自分に一体何が出来るというのか。分からなかった。

だから琢真は。

老婆には何も答えず、そのまま公園から逃げるように、走り去ったのだった。

もし途中で振り返っていたら、逃げ去る琢真の姿を、本当に悲しそうな目で見つめている老婆の姿を捉える事ができた筈だったが、一心不乱に逃げ去っていた琢真がそれを見る事はなかった。

昼休みの屋上は閑散としている。

と言うのも当たり前前の話で、このクソ暑い中直射日光を浴びてまで外で昼食を摂ろうとする気概のある者などいないからだ。

残念ながら自分はそんな気概のある人間ではない。

自分は誰よりも快適さを好む性質だ。ビバクーラー。ビバ日陰である。

ではどうして、自分が毎日屋上で食事をしているかと言うと、単にそこが人の居ない場所だったからだ。別に人間嫌いなニヒリストでもなければ、孤独を愛するスナフキンを気取っている訳でもない。単に静かに読書がしたいだけだった。

図書室で読めばいいのにと、屋上に居る理由を話した人には必ず言われる台詞だが、それは出来ない。

図書室に見るのも嫌なほど嫌いな人間がいるから　　なんて理由ではなく、自分は周囲に人が居るとどうしても読書が出来ない性質というだけの話だ。

ただ中には例外もいて、家族や、そして琢真の前では別段平気だった。

だが、それは昨日までの話だ。

今自分が屋上に居るのは、雑念に煩わされず一人になりたかったからだだった。

そして、今日だけは人間嫌いの看板を首に下げて歩いていた。

今、二年の生徒達の間で、今朝の琢真の話が噂として猛威を振るっている。

どこを歩いていてもその話題で持ちきりで、内容自体も誰の手によるものかかなり脚色されており、チラリと聞いたただだったが、正直聞くに耐えなかった。

当然、琢真を弁護する声など皆無だ。

まあ、自分も彼らの立場だったとしたら同じ様な事を言っていた可能性もある。しかし、事情を知る自分からすると、そんな噂も噂に踊らされる連中も鬱陶しくて仕方がなかった。

しかも、自分が琢真の友人であると言う事は同学年ではかなりの人間が知っているのか、皆自分が通ると気まずそうにコソコソと離れているのも余計に癪に障った。

と、言う様な事を内心考えながら、修司は一人屋上に佇んでいる。パンを頬張る手もどこか荒々しい。

無責任な噂を流す輩も、それを伝達する者も、等しく修司の癪に障っていた。

ただ、そんな空気の中でも、気軽に修司に近づいてくる人間もいた。

その中の一人が。

今屋上のドアを蹴り開けて、こちらに向かってズンズン歩いてきた女である。

表情を見るまでもなく怒っているのが分かる。足を踏みしめるたびに埃が舞い上がっている。

その女は修司の目の前まで来ると、屋上内に唯一存在するベンチ（修司が手配した）に座っていた修司を力づくで押しつけて、代わりにドカッと腰を下ろした。

「何をする！」とはとても言えない雰囲気だったので、仕方なく修司は何も言わずに譲った。こんなでも琢真の事に関して、今の学校で唯一相談できる相手だったからだ。

本当に遺憾だが仕方がない。無い者ねだりは出来ないのだ。

「ホンつつつつつつつつつつつつと！！ 腹立つつつ！！」

その女 愛が屋上来て最初に発した言葉がその怒声だった。

愛も修司と同じ様な状況に囲まれているのだろう。ましてや、愛は琢真と同じクラスである。心労もかなりのもの筈だ。恐らく、琢真とクラスメイト達との板挟みの様な事になっているのではないだろうか、と修司は察する。

あの時生活指導室で、修司達が琢真とは無関係だという話はその教師達には通じた。だが、同じ効果を生徒達に期待するのは無理というものだった。

こういう時は、学内の中で有名人の修司や愛は非常に都合が悪いと言えた。

生徒達は修司達三人が、どれほどの仲なのかを傍目からだが知っているからだ。露骨に態度に表したり非難してくるものはいなかったが、内心どう思っているかは知れない。

愛はただひたすら『腹立つ』という単語を繰り返すだけで、何に對して腹が立っているのかは言っていない。何となく想像はついたが、それをわざわざ確かめるほど修司は空気の読めない男ではなかった。

なので、ベンチの隣の屋上のフェンスにもたれ掛って、愛の鬱憤の発散が治まるのを待ちながら、修司は午前の授業中ずっと考えていた事柄について、再び思考の海に潜る事にした。

2

今朝の事で最初に修司が気になったのは、琢真の姿が写されていた貼り紙の事だった。

聞くところによると、あの貼り紙は職員室の殆どの窓、琢真達の

教室の黒板、そして2・Fの教室の黒板、の三箇所には貼られていたそうだ。

真つ先に思い浮かぶ疑問は、『誰がそれを貼ったか』である。

まず、学校関係者と外部の人間の場合を考えてみる。単純に考えたと学校関係者と言うのが妥当だが、外部の場合と考えると別におかしいという事はない。

だがここは可能性の問題で、より無理のない学校関係者の犯行という事で考える事にする。

学校関係者と一概に言っても、細かく分ければいくつに分類分出来る。

教師、一年生、二年生、三年生、事務員、購買食堂関係者。
消去法で考えていくが。

事務員、購買食堂関係者は除外していいだろう。

琢真と多少でも関係が有るのはその中では購買の女性だけだが、関係と言っても毎日昼食を買っているというだけだ。そんな生徒は修司を含めて大勢いる。そんな薄い関係性まで気にしていたのでは推測は建てられない。

次は教師が消える。

琢真のことが嫌いな教師が琢真を追い出すためにやったとも考えられるが、そうするといくつか問題のある行動があるのに気付く。

職員室に貼り紙を貼るまでなら分かるが、生徒の教室に貼ったのはデメリットの方が大きい。生徒達の口から親達に広がりPTAやマスコミに伝わる可能性があるからだ。それを考えると、教師達にとってこの行動は都合が悪く、教師の仕業だとは考えにくい。それにそもそも、教師の場合は身元を隠す必要性はあまり無い。

次は一年生、三年生が消える。

もちろんあくまで消去法で考えた場合の話で、事情によっては再浮上する可能性もある。

だが、琢真は中学高校と部活には入っていない為、下級生上級生

の付き合いも殆ど無い。なので関係は薄く、どうしても案としては弱いように修司は感じる。

残ったのは、二年生……つまり同級生になるが、まあそれが妥当だろう。

では二年生だとして、男か女か、単独での行動かそれとも複数での行動か、という疑問が浮かぶ。が、これらは判断材料が少なく正直修司にはまだ分からない。

次に考える事は、琢真の行いを知ったその貼り紙を張った人物は『何故それを貼ったのか』、という事だ。

- 一、莉理の事を助けたかったから。
- 二、琢真の事が嫌いで貶めたかったから。
- 三、単に愉快犯的理由から。
- 四、それら以外

これらが理由に挙げられる。

『一』は、一番有りそうではある。

注意をしたいが表立っては嫌、または怖いと考え、ただ何とか止めさせようと貼り紙という手段を取ったと推測でき、女生徒や気の弱い男子等が候補に挙げられる。何れにせよ、琢真とはあまり親しくない人間だろう。

友人という鼻肩目があるかもしれないが、琢真は決して乱暴でも狭量な人間でもないと思っっている。顔立ちが整っているとは言い難い。ただ、それでも決して初対面の人に恐怖感を与えるような人相をしている訳でもない。明るく強い目が特徴といえれば特徴でどこか人懐っこさを感じる顔立ちである。

体格も普通の男子高校生をしており、威圧感を与えるほどのガタイの持ち主という事も無い。

そんな感じで、琢真は知り合いが注意するのを躊躇うような要素は持っていないため、知り合いならばまず琢真に口頭で止めさせようとする筈だ。

ただこの案の場合、ある疑問も浮かんでしまう。

何故『2・F』に張り紙を貼ったか、という事だ。

琢真の事を問題にしたいだけなのであれば、職員室と、一步譲って琢真の教室だけでいい筈だ。『2・F』に貼る、という行為だけが浮いているように修司は感じる。

特に『2・F』を狙ったと言う訳ではないのかもしれないが……。まあどちらにせよ職員室と琢真のクラス以外に貼る意味は少ない。

『二、』はどうだろうか。

琢真はあまり敵を作るタイプではないと修司は思っていた。しかし、このような事態になっている以上誰かしらの恨み、妬み、といった悪感情を抱かれていたという事だ。

ただ、琢真は馬鹿ばかりやってるが（この場合誰が企画担当かは関係ない）人に迷惑を掛ける様な事はしてこなかった。

一応仲間以外の人の手を借りた事はあるものの、その場合はその人物を悪巧みに取り込んで皆で楽しくやっていたから、少なくともその事で勝手に恨まれていたと言う事はないだろう。

男同士の付き合いに関しては琢真は非常に優秀だ。好かれこそすれ、嫌われていると言う事は殆どないと考えていい。

もし、それでも嫌われている可能性が考えられるとすれば女関係だが……琢真は確かにクラスの女生徒達とは仲が良い。だが、それはあのクラス全体が仲が良いのであって、琢真一人が特別と言う訳ではない。

そんな周囲の目に留まるほど親しく接している女生徒などは……
………一人居た。

修司がちらりと隣を見ると、その人物はまだ鬱憤発散作業に勤んでいる様だった。

確かに愛との関係を妬まれている可能性は高い。愛は学校でも一二を争う程の男人気を誇っているからだ。

ただ、その容姿の良さだけは流石に修司も認めているが、性格は破綻しているので、人気の程は理解出来なかった。

後考えられるのは、莉理の事を想っている男が居たとして、その男が偶然琢真が付けているのを知って、その行動が許せないと憎まれた場である。

有りえない話ではない。有りえない話ではないが、可能性としては『愛案』より低いと言わざるを得ない。

琢真は『恩が有る』らしいから例外とする。ごく客観的に見た場合、莉理は男にそんな行動を執らせる程の容姿の持ち主と言う訳ではない。性格が良いのは修司も認めているが、それ以外は成績の良い優等生というイメージしかない。

修司の知っている限りでは、琢真以外で莉理の事を『可愛い』と表現している男は一人もいなかった。

『恩』云々の話を聞くまでは、琢真がどうして彼女の事をそこまで想っているのかは、修司ですらずっと謎だった程だ。

なので、余程のことが莉理との間にあったと考えられる。

とまあこれらの点から、この可能性は低いと言えるだろう。

それはさておき。

琢真に対する恨みから三箇所に貼って回ったという事なのだが。

そう考えると何故三箇所なんだ？という疑問は残る。

恨みを持つているのであれば、それこそ二年とは言わず全教室に貼るか、または全校生徒の目が入る校内掲示板にでも貼っておけばもっと人の目に触れ、噂の流布に繋がった筈だ。

『三』は無いとは思うが、今のご時世学生でもどんな暗い本性を持つているか分からないので、完全に棄却は出来ない。

この案は特に恨みなどは無く、偶々莉理を付けている琢真を知り、面白がって晒そうとしただけというものなのだが、これもやはり何故三箇所だけなのかという疑問は浮かぶ。

『四』という可能性もある。
だが、それを考えるのはまだ情報が足りない。

(2)

次は、それらの貼り紙を『いつ貼り付けたのか』という事を考える。

考えられるのは二択しかない。

昨日の夜か、今日の早朝だ。

琢真の教室、2-Fの教室に関しては、どちらの間でも貼り付ける事は容易だった筈だ。なので、あまり考えても仕方がない。

問題は職員室だ。

学校の夜間の警備は警備員は駐屯しない機械警備で行われている。部活をしていない修司には関係のないことなので人伝に聞いた話になるが、機械警備への移行時間は、午後九時半から午前六時半だと言われていた。どちらの間も当番の教師が職員室に控えている筈だ。

夜は当番の教師が帰る際に職員室には鍵を掛けるらしいので、凡そ忍び込むのは不可能だろう。

では朝なのかとも思うが、朝も当番の教師が来るまでは鍵が開いていないので、合鍵でも持っていない限り貼るのは不可能だった。

だがそれでも貼られていたと言っただから、どちらかに抜け道がある筈である。しかし、こればかりはもう少し調査が必要である。

次は、その貼り紙を張った人物は『何故その三箇所を選んだか』という事を掘り下げてみる。

職員室へは、琢真の事を問題にするために貼ったと考える以外ないだろう。職員室の殆どの窓に貼っていたというのだ、絶対に問題にしてやるという意志が感じられる。

琢真の教室を選んだ理由は、三通りの考えがある。

一つは、琢真自身に警告するため。お前の罪を暴いてやったぞと教えるためだ。

一つは、莉理に琢真の事を警告するため。またはつけられている事を教えてやるため。

一つは、莉理に琢真の事を教えて怖がらせるため。前の考えと違うところは、琢真だけではなく莉理にも悪感情があると言う点だ。

2 - Fを選んだ理由は、二通り考えられる。

一つは、特に2 - Fを選んだのではなくどこでも良かったというもの。

一つは、何かそうせざるを得ない事情があり2 - Fを選んだというものだが……これはまだ理由は分からない。

ここまで考えて。

修司は結局何も確定的なことに気付けていないのに気づく。

分かったのは、『恐らく琢真に恨みを持つ、恐らく二年生』という事だけだ。

材料が少なすぎるのだ。何か取っ掛かりになるものがあれば、もっと落とせていけると思うのだが……。

せめて、あの貼り紙が欲しいところだった。

修司は生活指導室で机の上に置かれていたのを見ただけだったので、現物をもっと詳細に調べる事が出来れば、何か分かるかも知れないと思っていた。

そして、修司がこうも、貼り紙の事を気にしているのには訳がある。

それは、この貼り紙の貼った人物の本当の狙いが何なのかが気になったからだ。危険視していると言い変えてもいい。

狙いが琢真を貶めることであった場合は、ある意味問題は無い。

その人物の思惑通り、琢真は謹慎処分を受ける筈で信用も地に落ちた。例え謹慎処分が終わったとしても、以前と同じ様に学校生活を送る事は二度と適わないだろう。

なので、これ以上その人物が何かをするとは思えない。これでの事件は終わりだ。

だが。

もし、その人物の狙いが琢真ではなく莉理だった場合、それは一気に深刻さを増す。ただ不安にさせるのが目的だったというのであれば良いのだが、残念ながらそれは無い。

それだけが目的ならもつと他に良い方法があった筈だし、何より莉理をストーカーの魔の手から助けるような行動をとるとは考えにくいからだ。

という事は、その人物は莉理に悪感情を抱いているのにもかかわらず、彼女をストーカーから助けたという訳の分らない行動をとっている事になる。

しかし、こう考えればその行動にも説明が付く。

莉理に何かするのに琢真の存在が邪魔だった 場合だ。

つまり、その人物は彼女に何かをするつもりだったものの、その周辺を常にとろついている琢真の存在に気付き、まずはその邪魔者を排除してから事を成そうとしているという訳だ。

そして、周辺をとろついている琢真に気付いたという事は、その人物もその周辺にいつも居たということになる。

決してそれは修司の根拠の無い妄想という訳ではない。実際、琢真が莉理を護り始めてまだ数日しか経っていない。金曜から月曜まで……その内土曜日は琢真は護衛していないので、琢真が彼女の周囲に居たのは実質三日だけだ。

偶々琢真の尾行に気付いたとして、たった三日でストーカーだと断定できるものだろうか。

別に夜道をつけていたと言う訳ではないのだ。如何にもストーカーといった風体だったとしたらそれでもおかしくは無いが、琢真の外見は普通だ。ストーカーと直結するのは難しいと思う。

だが、その人物もいつも周辺に居たというのであれば話は別だ。

それならば断定も可能だろう。ただ常に周辺に居たということはない。つまりそれはその人物も莉理の事を尾行していたという事に他ならない。

尾行していたというのには何か理由があるに違いなく、何なのかは分からないが善行ではない事だけは間違いないだろう。そして、その人物にとつての邪魔者琢真は既に排している。後は『何か』を実行に移すだけだ。

もしもこの推測が正しければ、あの老婆が言っていたような命の危険とまでは言わないが、莉理の身が少なからず危うい状態だと言わざるを得ない。

その為に、修司は貼り紙を貼った人物の特定を最重要視しているのだった。

修司は一刻も早く人物を特定する為に、まずは少しでも情報を集める事が必要だと考えていた。特に貼り紙の入手はかなり重要だった。

ただ、貼られていた現物は全て教師に回収されているとの事である。

ちなみに当初教師達は、それが職員室にしか貼られていないと考えた所為で若干回収が遅れたらしい。

その為、琢真のクラスと2-Fの物を回収した時には、琢真の事は既に生徒の周知の事となってしまうていたそうだ。琢真のクラスメイト達が吹聴するとは思えないので、恐らく2-Fから噂が漏れたのだろう。

(さて、どうするか……)

修司がふと横を見ると、愛はようやく鬱憤発散が終わったのか、叫ぶのを止めて一心不乱に購買で買ってきたらしいパンにかぶりついていた。

とりあえずそれを全て食し終わるのを待つ。その後、特に愛から

期待する答えが返ってくるとは修司も期待していなかったが、念のために貼り紙の事を尋ねてみることにした。

「ああ、あれ？ 当然あんなものその場で全部破ってやったわよ！」

期待はしていなかったが、相変わらず修司の予想の斜め上に行く女だった。

「はあ……それでそれはどうしたんだ？ 教室のゴミ箱か？」

だとしたら都合がいい、そうならば可能性は低いが回収されていない可能性がある。ゴミ箱を漁るのは嫌なので何とかこの女に回収させようと、修司はその為の案を練り始めていた。が、流石に予想を超える女は違っていた。

「何でそんな事気にすんのよ？ ……あれは……えーと、あ、そうだ！」

そう言つて、愛は自分のスカートのポケットからビリビリに破かれ強引に丸められた張り紙を取り出した。

「……グッジョブ」

恐らく愛によって、クラスの皆の目の前で散々に破かれたので、先入観から既に捨てられたものと教師に伝えられマークから外れていたのだろう。

この時ばかりは、修司は愛の短慮に最大級の賛辞を送った。

3

「それって、マズインじゃないの……!？」

それから修司が最初に行った事は、急ぎ自分の教室の机に戻り鞆からテープを持って来る事だった。

その後、ベンチの隅に破れた紙片群を乗せ、パズルの要領で紙片を組み合わせる作業の傍ら、修司は愛に先程まで自分が考えていた事を話しておいた。

愛は最初は考えすぎ、と信じていないようだった。しかし、ふと思い立ち老婆の話を合わせて伝えたところ、愛は割とすんなりと事態の深刻さを信じた。

琢真は何を考えてか、愛に『予知』の一部を歪曲して伝えていたが、今の危機感を認識して貰うべく老婆の話の真実を伝えたからだ。すると脳内で『藍田が死ぬ』、『ストーカーの存在』という具合に結びつけが行われたのか、既に愛は貼り紙を貼った人物が犯罪者だと信じ込んでいるようだ。

その事も有つてか、愛自身あの老婆の事は怪しんでいた筈だったが、その『予知』については信じる事にしたらしい。

その思考は全く修司には理解できない。

修司は『予知』などは有りえないと思っている。だが、こういう場合に用いる事の有効性についてだけは再考の余地がありそうだった。

ともかく、その事が愛の叫びに繋がっていた。

「その通り、事態は中々に深刻だ。もちろんまだ推測の段階だが、真実と考えて行動するようにした方が良い。何かあつてからでは取り返しが付かないからな」

今はまだハッキリとした像は見えていない。ただ、愛も貼り紙を貼った人物の特定を大事と考えたようで、修司の言葉に頷くと、今後どう自分達が動くべきかを尋ねてくる。

「まず藍田に関しては、俺達で家まで送り迎えして護衛する事にしよう。老婆の話ではないが、狙われるとしたら人気のない通学路の路上だろう」

修司は自分の考える最善案を伝えたつもりだったが、愛は激しく非難してくる。

「そんな悠長な事してる場合！？ 命の危険があるかもしれないよ！？ 池山とか小母さんに伝えて送り迎えした方が良いんじゃないのー!？」

確かに短い期間での事を考えるのであればそれでも良い。しかし、残念ながら根本的解決にはならない。

もし、教師や保護者に護衛されて送り迎えされた場合、当然その間は貼り紙を貼った人物……『犯人』と呼称するが、その『犯人』には手が出せないだろう。

そのまま諦めてくれればいいのだが、もしそれでも諦めずに警戒が緩むのを虎視眈々と待ち続けられていたら、それはとてもじゃないが『犯人』がやろうとしている事を防ぐのは難しい。教師や保護者だろうとも、これから卒業までずっと登下校付き従うなんて事は出来ないだろうからだ。

根本的解決をするには、『犯人』を特定して捕まえなくてはいけない。

ならばどうするか。

それは、誰にも伝えず自分達で莉理を護衛し、『犯人』の事をあんな程度絞れた段階で、ワザと護衛に隙を見せ、あえて彼女を襲わせた所を押さえるのだ。もちろん莉理に何かされる前に自分達で防ぐと言っるのは当たり前の話である。

保護者達に付き添われては、そのタイミングを計れないので駄目なのだ。

それを行うのは少しでも早いほうが良い。ようやく琢真という障害を除外した『犯人』が、新たな妨害者の登場に焦りを覚えない筈がない。その焦りが続いている間に隙を見せてやることでより襲わせやすくなるのだ。あまり時間をかけると『犯人』がかえって落ちていてしまう可能性がある。そうなればもう『犯人』押さえるのも護衛するのも困難になってしまう。

ずっと彼女に張り付いていられないのは、修司達も同じだからだ。当然、『犯人』の事を調べて特定できる可能性もある。ただ、この問題についてはそれが出来なかった時の事を考えて動くべきだと修司は考えていた。

これらの事を愛の発言への反論として述べたが、猛反発された。莉理を困にするような真似は認められないというのが理由だった。そういう反応を愛がしてくるのは分かっていたので、修司は説得できる話も当然考えていた。その話をすれば、愛は渋々だろうがこの案に乗ってくるだろう。

果たして愛は やはり乗ってきた。

見れば苦渋に満ちた表情だった。しかし、その後も自分の決断を取り消したりはしなかった。

「はあ……その話は分かったけど、ただ私達が護衛するにしても莉理には何て説明しよう？」

「琢真には悪いが、ここは琢真の事を理由にするのが良いだろう」「……どうということ？」

別に大した話ではない。

琢真が今回のこの処遇を恨みに思っただけで莉理を襲ってくるかもしれないが、自分達が一緒なら琢真も無理な事はしないだろうと言うものだ。琢真については護衛を続けている間に何とか気持ちを落ち着かせるから、という話も合わせて行う。

莉理は修司達が友人関係にあるのは良く知っている。仮に話は信じなくても護衛については認めてくれる筈だった。友人を心配する気持ちを無下にしたりする様な人間ではないからだ。莉理の優しさにつけ込んでいると言うのは否めないが。

「……まあ、仕方ないわね。琢真はちよつと可哀相だけど、莉理を護る為なんだからアイツも納得するわよ」

愛は苦笑いしながらその案を肯定する。

それに頷き返しながら、修司は次の対策を話す。

「藍田の事に関しては以上だが、それ以上に大切なのは、先も言ったがその人物……『犯人』を特定する事だ」「そうね」

「だから先ずは情報収集だ。お前は今日これからどんな些細な事でも良いから『犯人』に繋がるような情報を探れ。特に藍田本人に確認するのは忘れるなよ?」

「ちよつ、ちよつと待ちなさいよ! 何でアタシがそんなめんどい事を……それにアンタは何するのよ!?」

「俺は俺で色々調べる事がある……この紙片も修復しなくてはいけないしな。ん? まさかお前が修復してくれるのか?」

そう言つて、修司はまだ一枚しか形になっていない紙片に顎を向ける。

愛は手加減というものを知らないのか、それぞれがかなり小さくなるまで破られていた為、全てを修復するのはまだ当分時間が掛かりそうだった。

それほど怒りが深かったという事なのかもしれない。

「……………はあ、分かったわよ。やれば良いんでしょ! やれば!」
投げやりに情報収集する事を認める愛だったが、修復作業も面倒だと思つたからに違いない。

自分でやつておいて勝手な奴である。

「とりあえずは今日はそれで行動してくれ。後、放課後になる前に藍田に護衛の事を話しておけよ」

「つるさいわね!! 分かつてるわよ!!」

やるべき事が定まつたからか、愛は徐々に元の調子を取り戻しているようだ。

その愛は勢いよくベンチから立ち上がると、そのまま肩を怒らせながら屋上から出て行った。それを背中で見送ると、修司はチャイムが鳴るまでずっと修復作業を続けたのだった。

放課後、修復の終つた貼り紙を鞆に仕舞い込んで、修司は東校舎

玄関にて愛と莉理が出てくるのを待っていた。

午後の休み時間中に確認したところ、愛は既に了解は得ていると言ったので、修司はこれから莉理の家まで付き添う事となる。

『犯人』に対しての準備はまだ出来ていないので隙を見せてはならず、しっかりと護衛する必要があった。

だが、余程の馬鹿でなければ莉理の警戒が最も強い筈の今日。何かしてくるとは修司には思えなかったので、必要以上には構えてはいないのも事実だった。

待っている間、これから彼女を送り届けた後に一度三人で集まる必要があるという事を修司は思い出す。不安に思っているだろう護衛の事と合わせて伝えようと、修司は琢真の携帯に電話した。

ハコールを数えたところで、ようやく繋がる。

「俺だ。今日この後の事なんだが……………」

少し様子がおかしい気がしたものの、まあいくら琢真だとてあんな事があった後ではそれも仕方ない事だろうと修司は思い直す。それには触れず、いつもと同じ調子で莉理を自分達で送っていく事を伝える。

この事が目下琢真の中で最も気になる問題だろう。恐らくこれです少しは不安材料が消える筈だと修司は考えていた。

だが

「……………何だと？ 今なんて言った？ おいつ琢真！？ 琢真！！」

電話口から返ってきたのは、安堵の声でも歓喜の声でもなく。

『後はお前に任せる』と言う、投げやりな返答とそれに続く電子音だけだった……………。

「……後はお前に任せる」

『……何だと？ 今なんて言った？ おいつ琢真！？ 琢真！！』
修司が電話口で自分を呼び止めていたが、琢真は気にせず電話を切った。

リダイアルされても今は応答する気になれなかったので、携帯の電源を切ってからそれをポケットに仕舞い込む。

あれから真つ直ぐ家に帰る気にはなれず、琢真はブラブラと繁華街をうろついていた。幸いにも警官と遭遇したり不良に絡まれたりする事もなく、一人静かに時間を潰す事が出来た。

特に何かを考えていた訳ではなかった。と言うより、寧ろ何も考えないように努めていたと言う方が正しいだろう。それで心の平穏を取り戻そうとしていたのかどうかは、琢真は自分でも分からなかった。

だが、それももう終わりにしないといけない。

修司の電話から授業が既に終わった事が分かったからだ。なので恐らく今頃は職員会議が行われている事だろう。それで琢真の処遇が決まる。

その後池山から家に電話が入る筈なので、琢真はそれまでには家に帰っておかないといけない。自分の処遇などどうでも良かったが、あれだけ弁護してくれた池山の恩を仇で返すような真似は、琢真はこれ以上は控えたかった。

今は駅北の繁華街に居た。ちらほらと下校中の生徒の姿が見受けられる。

大っぴらに移動して自分の事を知っている人間に会うのも馬鹿らしいので、琢真は人目の付かない路地裏を移動して自宅に向かう。

ゆっくりと帰路を辿っていた最中、ふと琢真の視界にある張り紙が目に入ってきたので足を止める。電信柱に貼り付けられていたそれは、今週末にこの駅近辺で祭りが行われるということを知らせるものだった。

(そう言えばもうそんな季節か……)

この街に住んでいるものなら誰もが行った事があるだろうそれには、当然琢真も毎年足を運んでいた。

祭りのメイン行事は街の外れにある神社周辺で行われる。

小学生以下の子供や大人達はそれらを『祭り』として捉えているだろうが、琢真達の年代での『祭り』と言えば、その祭りに合わせて駅の南北にある繁華街を中心にブラツと並ぶ、屋台を冷やかす事を指していた。

去年、琢真は修司や金子達と繰り出し大騒ぎしていた。その当日は非常に大変だったが、今思うととても楽しかった事に琢真は気付く。

愛はクラス女の子同士で行っていた為別行動をとっていた。しかし、琢真は現場で捕まって無理やり奢らされた。

莉理も高橋達と行っていた。琢真は直接話す事は出来なかったものの、遠目に見かけた浴衣姿がとても似合っていて、今でもその光景が脳裏に刻み付けられている。

今年は殆どの親しい人間が同じクラスに集まっているので、去年以上に盛り上がった事だろう。だが、残念ながら琢真は不参加になる。

仮に週末に謹慎が解けたとしても、琢真が参加したところで皆気まずいだけだ。ましてや今となつては誘われるか自体怪しい。

修司や愛は気にしてくれるかもしれないが、二人にも二人の付き合いがある。自分に煩わせるのは良くないので、早々に不参加を表

明しておくことにしよう」と琢真は決めた。

そう決めると、琢真はその場を離れて再び帰路に付く。

そして、もう二度とその張り紙に意識を向ける事はなかった。

その後、琢真は家路につきながら、今後の事を考えていた。

莉理の事は、修司達に任せておけば大丈夫だ。

予知については今の琢真以上に信じていない二人だったが、こうなった以上自分の代わりに莉理を護ってくれるに違いなかったからだ。

きっと二人なら、何か起きたとしても何でもない事のように乗り切ってしまうだろうと琢真は思っている。なのでその問題はもう決着しているのと同じ事だ。

(そうだ、これ以上は考えなくていい)

なので、琢真は安心して謹慎に入る事が出来る。

謹慎が果たしてどれくらいの間になるかは分からなかった。だが、その間は大人しくしていようと思っっている。

ただその期間次第では、バイト先に連絡をしないといけない。今週末でなら既に休みを貰っているので問題ないが、それ以上となると事情を説明せざるを得なくなる。最悪、謹慎処分を受けた人間などはバイトを辞めさせられる事になるかも知れない……残念だが仕方ない。

木村に恩を返せないという事だけは、琢真の心残りだったが……。

その事はともかく、謹慎処分が終ればまた再び学校に通う事になる。

だが果たして、加害者と被害者……琢真と莉理が同じクラスのままに居られるかは怪しかった。琢真が別のクラスに移されることも十分にありえる。

恐らく今日の学校の話は琢真の事で占められていた筈だ。それは決して琢真に好印象を抱いている発言では、決してなかった事は

考えるまでもない。

なので、その新しいクラスに入っても、恐らく琢真はかなり浮く事になるだろう。一応どのクラスに行っても友人は居る。とは言え、今後も変わらぬ付き合いをしてくれるかは謎だ。

(いや、楽天的考えは止そう。恐らく皆敬遠するに違いない)

だとすれば、当然学校に行きにくくなる。いくら琢真でもそんな目に終始晒され続けていては、気がおかしくなるだろう。

そうなれば、もう学校に行く事もできないかもしれない。その時は…………。

学校を辞めるか。

そう決めた琢真に迷いはなかった。ない筈だった。

重大な決心だったが、心には小波一つたつてはいない。

だが、その場合に問題となるのは両親だった。母親はともかくあの頑固な父親がそれを許すとは思えなかったからだ。

ただそればかりは、何と言われようがどうしようもない。恐らくぶん殴られるだろう。それも仕方ない、我慢して受け入れようと琢真は思った。

頭を下げて何とか転校は無理でも、通信制の学校に入れてくれるようをお願いするつもりだった。

それが無理なら働くか……と言っても、その場合何の技術もない中卒になる琢真が働けるような場所が、そうそう見つかるとは思えなかったが。

『でもきつと芳垣君はいつか大物になる気がするよ』

以前、そう言って微笑んでくれた莉理の顔が琢真の脳裏に浮かぶ。残念ながらそうなった場合、その言葉を真実にする事は出来なそうだった。

そんな自分に対して、琢真は思わず笑った。

もし学校編入が認めてもらえたなら、卒業まではもうこんな事が起こらない様に大人しくしておき、卒業後はこの街を離れて人の多い都会にでも行こう。そこでなら琢真の存在など人の波に埋もれてしまっただろう。気にする人など誰もいない。琢真を知っている人など誰もいない。そんな中でならまた一からやり直せる気がする。

もしやり直せて、その生活が上手く軌道に乗ったら修司や愛にだけは自分の事を連絡してもいいと、琢真は思っている。

修司は恐らくその頃には良い大学を出て、良い会社に入ってることだろう。いや、大学に残って研究していると言うのも修司にはあつてる気がする。

愛はどうなるのか分からないがモデル業なんてのはピッタリだ。容姿は良く明るいので、さぞかし人気が出る事だろう。写真には性格は写らないから。

莉理は……夢に向かって頑張っているに違いない。いやその頃には実現しているかもしれない。彼女にどんな未来が待っているかは分からないが、きっとどの道も明るい光で満ち満ちていることだろう。

と、琢真はそこまで考えて、

(何だ……仮に学校を辞める事になっても決して悪くないな)
という事に気付く。

琢真はちよつとばかり苦労する事になるかもしれないが、だがそれは今自分の身に起こっている問題が、仮に起きてなかったとしても同じ事である。

何だかどん底にいる気がしていたが、全然そんな事はない。

どんな道でも明るい未来へ続く道は決して無くなったりはしないのだ。ただ、その道が細かいか、または見え難いつてだけだ。

ならばわざわざ辛い思いをする事が分かっている学校になど、もう行く必要は無い。

(俺だけじゃなく、他の皆まで嫌な気分になんてさせてしまつからな)
帰って池山から処遇を聞いたら、親にその事をお願いしよう。
失うものなど少ししか無かった。そう思うと一気に琢真の心が浮
き立ってくる。

ようやく周囲を見渡す余裕も湧いてきたが、さっきまでと比べて
格段に明るくなっていくように感じた。

帰路はいつの間にか大方の工程を終えており、今琢真の目の前に
ある角を曲がればもう家は直ぐそこだった。心持ち軽い足取りで、
角を曲がって家の前の道に出る。

琢真は何故か、修司達が待っているような気がしたが、そんな事
も無く家の前には誰も居なかった。特にそれについて何も思う事は
なく、そのまま家に向かって進み家の玄関の前の柵の扉に手をかけ
た所で、

『……………それじゃあ、きっと後で後悔しちゃうよ?』

と、琢真は誰かに声を掛けられた気がした。

消えそうな微かな声だったが、不思議と聞き取れなかった部分は
無かった。

ただ内容は聞き取れたのだが、話しかけられたとはっきり断定す
ることも出来なかった。

その声の主を探そうと、琢真は家の前の道を再び振り返り
時が凍りついた。

振り返った琢真の視線の先には、琢真と莉理の姿があった。もっと正確に言えば、小学生の頃の琢真と莉理の姿だ。

その少女は餓鬼の琢真の手を掴んで、真剣な表情で咎める様に見つめていた。

その餓鬼は、少女に掴まれた手を必死に振りほどこうと、もがいている様だった。だが少女はそんな猛烈な拒否にも、全く手を緩めようとはしないまま、まるで叱る様にその餓鬼を諭していた。

『だから……逃げちゃ駄目だよ！絶対に今逃げたら駄目だよ！』
『うるさい！おめーには関係ないだろ！！』

餓鬼は吠えるように彼女を威嚇する。

鬼気迫る形相だったが、どこか僅かに不安が見え隠れしている。

『うん、私には関係ないよ……。でも、それじゃきつと、芳垣君が自分のこと嫌いになっちゃうのは分かっているの！』

(黙れ、何でそんな事がお前に分かんだよ)

『黙れ！何でそんな事がお前に分かんだよ！！』

琢真が心の中で思った台詞と全く同じ台詞を、その餓鬼は吐いた。自分を呼び止めた少女に飛びつく様にして、両手で思い切り突き飛ばしながら。

彼女がどんな思いでその台詞を告げているか、その時の餓鬼は全く知らない筈だったが、全てを知っている今の琢真からすると、慥

愧に耐えない。

『分かるよ!! 私も……私も同じだもん!!』

少女は身を転ばせ膝をすりむいていたが、そんな自分を全く省みずに、餓鬼に訴える様に言った。

少女の独白に、餓鬼は僅かに心を乱したようだった。

『だから分かるの! 自分が嫌いで嫌いで、大嫌いになって……』

少女はゆっくりと立ち上がりながら、ピンクのリストバンドを付けている自分の手首を、そっと隠すように押えた。だが言葉に詰まったのは一瞬の事で、再び強い光を帯びた目を餓鬼に向ける。

『だから、だから今逃げるのは絶対に駄目!!』

『う、うるさいうるさい!! じゃあどうしろって言うんだよ!?!』

怒りと悲しみで一杯になっている餓鬼は、その感情を扱いかねて、瞳を潤ませながらも必死に声を張っていた。

『大丈夫だよ! 勇気を出したらきつと大丈夫! そしたらきつと全部上手くいよ! 私も手伝うから!! だから……』

少女はそう言って、小さな手を餓鬼に差し出した。

実際には、全部上手くいってたなんて事はなかった。そのまま、絶対になくしたくなかったものを、なくしてしまう事もあった。だけ。

『一緒に、頑張ろう?』

その時のその言葉がどれほど欲しかったか、どれ程餓鬼を勇気付けたのか、彼女は知らないだろう。

その時のその言葉が支えとなり餓鬼の力となって、後に起こる全てに耐えられた事を、彼女は知らないだろう。

餓鬼は、何の返事もしなかった。

その代わりに、少女から差し出されたその小さな手を、まるで壊れ物を扱うかの様に手を震わせながら、そっと握り締めたのだった。

少女はその握り締めてきた手に満足そうに柔からく微笑むと、その手を引きながらもう一度餓鬼を……琢真の家まで連れてくる。

家の前まで来ると、餓鬼の手を引つ張り背中を押して、自分の前に立たせた。

途端に心細そうに振り向いた餓鬼に、少女は静かだが力強く言葉を掛ける。

『大丈夫だよ。だから……絶対に負けないで』

琢真を……琢真の家の方見つめながらそう言った後、再び餓鬼の顔をしっかりと見つめる。

餓鬼……少年は、顔を引き締めなおすと、今度は自分自身の確かな足取りで少女と共に家の中に消えていった。

それは、琢真の大切な記憶だった……。

動悸が止まらなかった。

あの時と同じ場所に立ったのが原因だったのだろうか。何が切欠で突然思い出したのか分からない。

ただ。

最後の言葉が、彼女の全ての言葉が、まるで今の自分に発せられているように琢真は感じた。

少女の最後の言葉によって、少年は最後には幼いなりにも男の顔

をしていた。今、自分はどんな顔をしているのだろうか？ そんな事を琢真は思う。

あれから何年も過ぎて、力も付いて、体もデ力くなった。あの頃と比べて、比較にならないくらいに成長し強くなった筈だ。

そう思っていた。

『……逃げちゃ駄目だよ！ 絶対に今逃げたら駄目だよ！』

彼女の言葉を思い出し、

『学校を辞める事になっても決して悪くないな』

ついさっきまで考えていた自分の結論を思い出す。

どう考えても逃げだった。現状に押され、逃げ回っていたあの頃の最初の自分と全く同じだった。

自分はまだ、何も出来ていない。何も彼女に返せちゃいない。それなのに

『そうだ、これ以上は考えなくていい』

見捨てようとしていた。

修司達がいるから自分は何もしなくて良いと、自分に言い訳までして。

『分かるよ！！ 私も……私も同じだもん！』

少女はあの時、自分の身を切られるほどの痛みを感じていたに違いない。自分の過去を、再び思い出させられるような出来事だった筈だからだ。

なのに、少女は逃げなかった。逃げないどころか、琢真の手助け

までしてくれた。

どれ程の強さを持っていれば、そんな事ができるのか。

(…………いや違う。そうじゃない)

『大丈夫だよ！ 勇気を出したらきつと大丈夫！ そしたらきつと全部上手くいくよ！！』

彼女は、どんなことがあっても大丈夫な強さを持っていた訳じゃない。ただ、彼女は決して引いてはいけない所を知っていただけだ。だから彼女は自分の中にある勇気を振り絞って、歯を食いしばって琢真を助けてくれたのだ。

『じゃが あの子の事だけは…………本当に頼む』

琢真は老婆の言葉を思い出す。老婆も彼女と同じだった。

老婆の予知が本当に正しいのか分からない。そんなものが可能なのかも分からない。なので、琢真は老婆を拒絶してしまった。

だが、老婆はそれでも決して今は引いてはいけない所だと知っていたのだらう。

琢真に非難されて罵倒されても、それでも頭を下げた。

自分も感じていたのではなかったか？

『いつか大変な事が起こる』と、直感で感じていたからこそ、老婆に話を聞きに行ったのではなかったか。そんな引いてはいけない事だと感じていたのにもかかわらず、些細な事でそれを見失い、琢真は最後まで意志を貫けなかった。

彼女の身に百パーセント危険が起きるかどうかなんて事は問題じゃない。

彼女に危険が起きるかもしれない。ただそれだけで、琢真が体を張る理由は十分な筈だったのに。

(俺は)

どれ程馬鹿なのだろう。どれ程愚かなのだろう。

自分は今間違はなく、とんでもなく醜悪な顔をしているに違いなかった。あれからデカくなっただのは体だけで、心はまるで成長できていない。

あの頃の少女にはもちろん、少年にさえ達して自身いなかった。

琢真はまだ莉理に何も返せていない。それどころか、あの時の礼さえ、まだ莉理に伝えられてない。

『彼女を護る』と、あの夜誓った筈だ。

『必ず護ってみせる』と、つい昨日も誓った筈だ。

そして、『俺が絶対助ける』と、あの時誓った筈だ。

(なのに俺はっ！！)

「あああああああああああああああああああああ」

琢真は自分の底から湧き上がった衝動に抗うことなく、そのまま感情に従い、叫び声をあげながら自分の頭を家の塀に激しく打ち付けた。

(俺はっ！)

一度では足りずもう一度。

(俺はっっ！！)

更にもう一度。

(俺はっっっっ！！)

四度目の一撃で、視界が赤いカーテンで覆われた。だが気にせず更に打ち付ける。何度も。何度も。

痛い。堪らなく痛い。痛い。痛い。止められなかった。

そのまま打ち続けて、血塗れになり、意識が暗転するまで続けようと、更に大きく振りかぶったその激情は、

『有難う』

その記憶の中の言葉が脳裏に浮かんだ事により、ようやく静まった。

それは一体誰の発した言葉を思い出していたのか……琢真自身にも分からなかった。しかし、琢真への惜しみない感謝と優しさに溢れていたソレが、琢真の自虐を押し止めたのだった。

額から垂れ流れる血液は、瞼と言う堤防を決壊させ目の中に入り込んで、そのまま涙と共に顎先へ押し流されている。

その涙は果たして、異物が流れ込んだ事による体の反応で流れているのか、痛みによるものなのか、それ以外の理由で流れているのかは琢真には分からなかった。

ただ、この胸を覆いつくす郷愁に似た感情が、琢真に徐々に冷静さを取り戻させていった。

(……もう迷わない)

血で襟元が赤に染まっていたが、痛みは全く感じなかった。

どころか、意識が徐々にクリアになり思考が洗練され、体はどこまでだって走り続けられそうな程活力に溢れ、何より不転の意志が琢真を強く包み込んでいた。

(今度こそ俺は)

琢真は成長した少女を、莉理を、例えば自分に何があるとも今度こそ決してぶれたりせず最後まで護ると、幼き日の自分に、幼き日の少女に、そして　に、固く誓った。

「アンタその顔どうしたのっ!？」
「何があったっ!？」

その日の夜、莉理を送り届けた後、琢真の家を訪ねて来た愛と修司が、家の前で出迎えた琢真の顔を見るなり発した言葉だ。

その後、血だらけで家に帰ってきた琢真を見た母親は血相変えて心配した。だが、ひとまずの応急処置が終わり、丁度その時会議が終つたらしい池山からの電話で今日の事がある程度聞くと、池山からの電話をそのまま放り投げ、琢真に猛烈な説教を始めた。

そのあまりの怒声により事態を察したのか、必死に向こう側で叫んで止めてくれた池山の取り成しにより、何とか母親は落ち着いてくれた。

母親は、その被害者の女の子の家に謝罪に行きたいと池山に頼んでいたが、この話はあちらの親御さんには連絡しない事でその女の子と話が済んでいるのでそれは教えられないと、池山は突っぱねたらしい。その後数十分に渡る問答の末、ようやく母親は納得し、くれぐれもその少女にお礼を伝えてくれるようお願いをして琢真に電話を代わった。

池山は苦笑いしながらも、今日会議で決まった事を教えてくれた。琢真の処分は起こした問題の深刻さから言つと、極めて軽いと思われる謹慎三日間だけだった。

余りの処分の軽さに理由を尋ねると、最初はもつと重い処分が下される筈だったが、意外に多くの先生がそれに反対してくれたお陰

でそういう結果になったと池山は言った。

国語の先生方に戻ったらお礼を言っとけよと冗談めかして言っていた。ただ、誰より奮闘してくれたのは池山本人であろう事は琢真も分かっていた。

池山はその事について何も言おうとしなかったもので、琢真もそれに関しては特に指摘はしなかった。ただ、心の中で何度も感謝の言葉を投げかけていた。

他の直接的処分は、毎日二十枚の反省文を書くことだけだったが、間接的処分として、やはり琢真のクラスの移動が検討されると言う事だ。だが、今の所他のクラス担任が琢真を敬遠しているようで、その決定にはもう少し時間が掛かるらしい。

その事で池山は琢真に謝ってきたが、元々覚悟していた事の上、池山には感謝こそすれ恨みに思う事などある筈もない。なので、それを伝えたところ、池山は「お前は俺が担任として指導したかったがなあ」とどこか寂しげに笑った。

不覚にも琢真は瞳が潤んでしまった。何とかそれには耐えて、最後に池山にお礼を言い今日の連絡を終えた。

終わった後しんみりしていた琢真に待ち受けていたのは、母親と丁度帰ってきた父親による執拗な追及だった。

だがどんなに叱られ殴られ罵倒され諭されても、全く理由を言わない琢真に何か思うところがあつたのか、ようやく解放される。今日は晩飯抜きだと言っていたが、琢真が昼から何も食べていない事を聞くと、母親が何も入っていないお握りを一つだけ作ってくれた。空腹と言う調味料はあつたものの、別にいつもと比べて特別美味しかった訳ではなかった。しかし、琢真は今日のこの握り飯の味は恐らくずっと忘れる事はないだろうと思つた。

そのまま部屋に戻り反省文を書いていたところに、愛達が尋ねて来たのだった。

その頃には父親に殴られた顔がかなり熱をもって腫れてきていたので、額の包帯と合わせて、琢真の顔はかなりユニークな事になっていたのだった。

愛達はその怪我の理由を、始めは何故かもつと物騒なものと考えていたようだったが、琢真の話聞いて片や爆笑、片や鼻で笑われるという事になった。

その事がともすれば深刻な感じになりそうだった空気を和らげてくれたのか、いつも通りの三人に戻る事が出来た。

先ず琢真は、昼間に老婆から聞いた話を二人に話した。

愛は修司から『死』について聞いてしまった様で、隠していた事を咎められた。琢真が頭を下げて詫びると、戸惑ったような声で許してくれた。

まあ、お陰で話す内容をオブラートに包む事に頭を悩ますことなく、そのまま伝える事が出来るのは助かった。今回の話はどう包もうか琢真は頭を悩ませていたからだ。

辺りはひっそりと静まっております、家の前には街灯はないので家中から漏れる微かな明かりと、月明かりだけがそれぞれの顔を照らしている。

そして、元々人通りの少ない場所なので、こういった話をするのには都合が良かった。

『今週中に路上で体を何かの金属に貫かれて死ぬ』

琢真は老婆から聞いた新たな予知を、二人に伝える。

新しい情報は『金属に体を貫かれる』と言う部分だけだったものの、急に生々しくなった内容に流石に愛は顔を顰めた。

琢真はその情報を告げる前に、昼間婆さんに対してとつてしまった態度についても二人に話して聞かせていた。二人に懺悔する事で、自分の罪悪感を少しでも減らしたいと言う情けない理由がその根底にあるに違いなかった。しかし、それでも話すのを止める事が出来

なかった。

二人は神妙な様子で琢真が話す間、何も口を挟まずに、ただ黙って話を聞いていた。

全てを吐露し終えた後、二人は口を揃えて「馬鹿だな」と言ってきた。その裏には同情、叱咤、慈しみ……そう言った感情だけが見え隠れし、非難の調子は全くなかった。

琢真は何だか尻の穴まで見られたような気分になり、とても恥ずかしかった。とは言え、そんな二人への感謝の念が損なわれる事にはならなかった。

だが、その話のお陰もあってか、二人は老婆の『予知』についての真偽はともかく、老婆が本気で自分達にそれを告げていて、かつ本気で彼女を助けようとしてくれるという事は信じてくれたようだった。

なので二人とも、新たな情報を伝えても内容の凄惨さに反応するだけで、それをデタラメだと頭から決め付けるような態度は二度ととらなかった。

琢真が出来る話を全て終わると、それを引き継ぐように今度は修司が険しい顔で話を始めた。

「俺以外のストーカーだって!？」

彼女にストーカーとも言える存在が、自分以外にもいると言う事を聞いて、琢真は思わず叫んでしまう。

言われてみれば確かに、あの貼り紙の主は自分を……つまりは推理を付けていたことになると思う。衝撃冷めやらぬ胸中の最中、老婆の予知と話を結び付けてしまうのは、当然の事だった。

ここに来てようやく、琢真は雲を掴むようだった老婆の予知の方向性が見えた気がした。

「じゃあ、まさかそいつが藍田さんを」

『死なせることになる原因か』と続くはずだった台詞は、外に出

される事なく喉の奥で消してしまった。それを口にしてしまうだけで、莉理にそれが起こってしまうのを認めるような気がしたからだ。だが、修司は琢真の問いに「それはまだ分からない」と前置きしてから、

「だがもし仮に老婆の話が正しいとして、そいつの存在がそれに丸つきり無関係だと考えるのは、時期的に考えても浅慮と言うものだろう」

と自説を述べた。隣を見ると愛もその言葉に頷いていた。

「待て！！ 早まるな！！」

修司が声を荒げる。

話を聞いて、慌てて莉理の家に向かおうとしていた琢真を制止する声だった。

「これが落ち着いていられるか！！」

莉理に迫る影の存在を知って、ジツとしているというのは琢真には不可能だった。

自分は彼女を護ると、今度こそ誓ったのだから。

「いいから、落ち着きなつて！！」

愛が琢真の腕を掴んで引っ張り、自分の体を使って家の扉に押し付ける。

琢真は少しもがいたが、愛が本気で留めようとしているのを悟り、大人しくする。

落ち着いたのが分かったのか、修司が軽く頷く。

「藍田の護衛は俺達でやる。だからお前は大人しくしている……。それに今お前に出てこられると色々と話が面倒になる」

そう言っつて、授業中ずつと考えていたという話をする。

どうやら愛は既に知っている話らしく、修司の話には反応せず、琢真が再び飛び出して行ってしまうことを警戒しているようだった。

修司が言っつには、今琢真が彼女の周りを今までのようにうるつき

始めて、もしその事がそのストーカーにばれた場合、今度はどんな手段を取るか分からない、と言う事だった。

琢真からすると『上等』以外の何でもなかった。が、今度は直接彼女に矛先が向くかもしれないと言われては、大人しくせざるを得なかった。

ただ、それでも彼女を見護れないのは辛く、何とか護衛できないかと焦れている琢真に気付いたのか、

「大人しくしときなつて！ それに今誰かに見つかったら今度は謹慎どころじゃ済まないよ！？」

愛に叱られる。

そして、気を逸らすためにか琢真が帰った後の事について、愛が知りえた事を話し始めた。

先ずクラスメイト達は、琢真が学校を去ってから最初是非難轟々で騒いでいたそうだった。しかし、時間が経つにつれ、徐々に皆冷静さを取り戻していったらしい。話の焦点も『アイツ最低』から『何か理由があったのかな』に移っていったそうだった。

と言つても、まだ琢真を許せるような心境ではないらしく、弁護しようとする微妙な目で見られたとの事だった。

中でも高橋と田中だけはまだ怒り冷めやらぬという様子で、琢真の事を怒り続けているらしく、当事者の莉理がそれを宥めるといっておかしな事になっていたらしい。

琢真は個人的に気になつてきた金子達の事を聞いてみた。いつも騒々しく騒いでいる奴らが今日に限ってはしんみりとしていたそうだった。

（あいつらが……）

原因は明らかだが、今の琢真にはどうする事も出来ない。心の中で詫びておいた。

なお、他のクラスの琢真への印象は相変わらず良くない感じのままらしい。休み明けが少しだけ億劫だった。

次に愛は莉理のことを話す。

彼女はあれから池山達に呼び出されて、事情を聞かれたそうだが、高橋達と田中が同行したらしい。愛も行くつもりだったそうだが、高橋達に自分との関係を警戒されていて付いていけなかったと、笑う様に言った。

愛はやんわりとした表現で言っていたが、恐らく実際はもっと辛辣な事を言われているに違いない。

休日に遊ぶほど仲が良かった相手に警戒されるような事になったのは、間違いない。琢真の所為だった。しかし、そんな事はまるで触れずに明るく笑っている。

日頃は少しでも恩を着せられるような事があると、それをネタに色々要求してくる愛は、こういう場合に限っては全くそんな素振りを見せようとはしない。相変わらずカツコイ女^{ヤツ}だった。そんな愛だからこそ琢真は頭が上がらないし、それが人気がある所以に違いなかった。

話は戻り、莉理は呼び出されてから思ったより早く帰ってきたそうだ。

まあそれはそうだろう。彼女自身は何も知らないのだから。

ただ愛は、高橋達が席を外している隙をぬって、事もあろうに莉理本人に確かめたらしい。呼ばれた理由、聞かれた内容、それにどう答えたか等、聞き直って全部聞いたと、愛は笑いながら言った。

彼女がそれに戸惑いながらもきちんとして答えてくれた話によると、呼ばれた理由は、琢真が何でこんな事をしたか知らないかを聞く為だった。

当然そんな事は知らないの、「分かりません」と答えたところ、あの嫌らしい生活指導の教師達が執拗に確認してきたらしい。それは高橋達や池山が非難する事で、とりあえずは収まったそうだ。

(あのクソども……)

琢真はいつかあの教師達に、目にモノ見せてやろうと心に決め、

続きを聞く。

更に莉理は他には何か最近気付いた事はないか、と言うようなことを質問されたらしい。それには莉理ではなく高橋達が代わりに答えたとさうだ。最近誰かに見られているような気がしていると、少し前に莉理から相談されていた事を。

実はこの事は愛も土曜日一緒に遊んだ時に相談されていたらしい。その時は莉理は琢真の事を感じているのだからとばかり愛は思っていたので、特に心配する事態でもないと考えていたそうさうだ。

それは仕方ないことだろう。琢真の事を知っていたのでなお更、琢真以外にも付けている人間がいようとは思わずに奴らは、証拠を得たともかく、その話を聞いて琢真と結びつけた奴らは、証拠を得たと喜びながら去って行き、事情聴取は終わったそうさうだ。

そして、それらを話してくれた時の莉理の事も愛は口にした。

莉理が言うには、琢真の事は最初は動揺してしまっただが、今は怒っても悲しんでもいないという事だった。

ただ、どうしてそういう事をしていたのかという理由は知りたいたらしく、逆に愛に尋ねてきたそうさうだ。それに対して愛は「いつか教える」とだけ答え、その言葉に、彼女は「わかった」と納得してくれたと愛は言った。

そして、その後で琢真の事は騒ぎ立てるつもりがないという事を池山に話し、話を大きくしない様にと、なんと莉理の方からお願ひしたと言ったのださうだ。

その異例のお願いに、池山は最初非常に驚いたそうさうだ。やがて落ち着くと「その通りにさせて貰う」と彼女に頭を下げ礼を言ったとの事だ。

夕方の池山の話で『話が済んでいるので騒ぎにしない』と言っていたのが、まさかそうさういう経緯だったとは知らず、琢真は改めて莉理に驚かされる事になった。

そして、更に彼女を護ろうさうという意志が自分の中で燃え上がった

のを感じた。

愛からの話は以上だった。

愛から話を聞いている間、修司はムツツリと黙り込んで何かを考
え込んでいた。愛の話が終わったタイミングで突然口を開き「お前：
…藍田を護衛したいか？」と琢真に尋ねてきた。

「もちろん」

即答した琢真に、まだ言ってるのかと愛が再びムツとした顔を浮
かべる。だが、修司はそれを無視して、自分の眼鏡のガットを片手
で抑えながら「そうか」とだけ言った。

修司は意識して行っている事ではないようだが、長年付き合っ
ている琢真にはその癖が、何かを企んでいる時に行われるものだと知
っていた。

なので琢真は、次に発せられる話に期待する。

それは二人の恒例行事だった。

修司はそのいつにも従い、ゆっくりと話を続けた。

「ふむ……ならば」

その後暫くの間、三人以外には誰もいない夜の闇に、静かな修司
の声が響くのがあった。

(1)

1

『水曜日』

琢真は朝から掛かってようやく二十枚に渡る反省文を書き上げた。今日の分は昨日書いたので、今書いていたこれは明日の分になる。何時、何に時間を取られるのか分からないので、早めにやっておく事にしたのだ。

勉強もこの熱心さでやってれば今頃はもっと良い順位だったかも……と思わないでもないが、まあそれはそれこれはこれだ。

ふと部屋の隅に置いてある時計を見ると、丁度帰りのHRが終わる時間帯だった。

(そろそろか……)

琢真は一度大きく毛伸びをして、椅子から離れる。そして、この後に備えて軽く準備運動をすることにした。体を解しながら昨日の事を思い返す。

『これ以上事態を複雑にしない為に、お前は放課後までは大人しく自宅に居ろ』

それが昨晚あの後、修司に指示された事だった。

琢真は概ね了解したが、一点だけ承服できない事はあった。それは朝の通学中の護衛についてだ。当然如何するつもりなのか確認はした。

それによると、先ず護衛に関しては愛が送り迎えするという事だった。

愛は初耳だったようで、それを聞いて憤慨していた。だが、修司の冷たい目と琢真の縋る様な目に屈し、渋々了解した。

ただ、琢真としては愛だけでは不安だったものの、「『犯人』が目につきすぎる朝っぱらから活動するとは考えられない」という事だったので、渋々納得する事にした。

なので琢真は今日一日、修司の言葉に従い模範的謹慎生を演じていたのだった。

念入りの柔軟運動が終わって体が火照ってきた頃に、家電のベルが響き渡る音が聞こえてきた。恐らく池山の定時連絡の電話だろう。そう思って部屋を出て電話の所まで行くと、先に電話に出ていた母親が電話口を押さえながら「先生よ」と小声で受話器を渡してきた。

先ず、池山は今日の一日の琢真の行動について聞いてきた。琢真がきちんと謹慎している事を聞くと安堵の声を上げた。

どうやら琢真は余程大人しく出来ない人間だと思われる様だ。後は雑談のような話をしただけだった。最後電話を切る直前に「そくだ忘れていた」と、池山は明日の学校の予定を話した。

明日学校に行かない自分には関係ないのでは？ と琢真は思った。何でも先月行われた修学旅行で撮られた写真を選ぶのが明後日までで、クラスでまだ選んでいないのは琢真だけだと言う事だった。

修学旅行は先月行われたばかりだったが、何故かとても懐かしく感じた。

単に後で行こうと思って忘れていただけなので、写真は正直欲しいと思った。

しかし、今の事態ならば仕方ないと諦めようとしていた琢真に、「写真が欲しいのなら明日は無理だが明後日の放課後、謹慎中だが例外として担任が同伴する事で何とか学校に来て選べるように手配する」と、池山は言った。

「お願いします」と言う言葉が喉から出かかるも、護衛の事を思

い出し、非常に残念だったが琢真はその話を断った。写真を選んで
いる時に、彼女に何かあつては、自分は恐らく一生後悔する事にな
るだろうからだ。

池山は琢真が迷惑を掛けるのを心配していると思つたのか「俺の
事は気にしないでいいぞ？」としきりに言った。だが、あくまで辞
退の態度を変えない琢真に、「とりあえず明日もう一度聞く」と池
山が告げて、本日の連絡が終わつた。

電話を切る直前に池山が「頑張れよ」と琢真に言つてきたのだが、
意味を確かめる前に電話が切れた。何を頑張れば良いのか分からな
く、恐らく池山本人も特に何かを指して言っている訳ではなかつた
のだろう。ただ、苦笑と共に何故かとても意欲が湧いてくる気がし
た。

その『頑張れ』は莉理を護る事だと勝手に解釈することにし、琢
真が一人燃えていたところに、愛からの連絡が入つてきた。

「あ、もしもし」。今から莉理の家に向かうわ」

愛はそれだけを告げると電話を切った。

行動開始の合図だった。

琢真は急いで居間に向かい、夕飯の支度をしていた母親に、「今
から勉強するから暫く部屋に来ないでくれ」と、母親が持つていた
オタマを取り落とす程驚愕させてから部屋に向かう。

部屋に入り鍵を掛けると、予め隠しておいた靴を履き窓から外に
出て、音を立てない様に静かに家の塀を乗り越えた。

外に出たのは今日始めてだった。日頃外に出ても暑いと思うだけ
で他に思うことはない。ただ、家に謹慎しておくことを要求されて
いる身の上で外に出ると、何故か妙な開放感を感じてしまった。

だが、直ぐに自分の役割を思い出し、走って目的地に向かう。そ
れから、五分かからずその場所には辿り着いた。

周囲にまだ愛達の姿が見えないことを確認すると、琢真は急いで
その場所の敷地内に入り、その隅にひっそりと隠れるように置かれ

ているベンチに腰を下ろす。

このベンチは昔からずっと変わらない。その事が琢真を少し安心させた。

そして家から被っていた帽子を深く被り直し、顔がなるべく見えないようにしながら周囲の様子を探り始める。

その場所……愛のマンションの前で莉理の帰路上にある公園には、小学生と思われる少年たちが携帯ゲームで遊んでいる他は、人の姿は見受けられなかった。敷地外の道路も探り、人通りは僅かにあるようだった。が、うちの学校の生徒の姿はなかった。

そのまま暫く周囲への警戒を続けていると、二人組みの少女の姿が視界の端に入ってくる。顔が判別できる位の距離まで近づいてきた所で、それが愛と莉理だという事が分かった。

緊張に胸がざわめく。怪しまれるような身動きはせず、琢真は公園の周囲の様子を探った。人は相変わらず小学生以外には居ない。二人はそのまま公園内に入ってくると、琢真には気付かずそのまま公園を横断して、莉理の家の方向に歩き去っていった。

だが、琢真はそれを直ぐに追う事はせず、その場での周囲への警戒を続けた。

『お前の役割は、藍田を監視している存在を探す事だ』

それが昨晚、修司から言い渡された琢真の役割だった。

修司はどうやら受動的に危険を待つのではなく、能動的に動いて危険を回避する方法を選択したようだ。その様子は今二人がプレイしている携帯ゲームでの修司のスタイルと同じものだった。莉理に対して愛がディフェンスだとするのなら、琢真はオフフェンスと言う訳だ。

琢真としては彼女を護るのは自分でありたかった。しかし、今『犯人』からのマークが外れている筈の身の軽い琢真が、オフフェンス

に徹するのがベストなんだと言い切られ、仕方なく納得した。
それで彼女の危険が減る事に繋がるならいいか、とも考え直した
からだ。

琢真の動きを具体的に言つと、まず『愛が莉理を誘導して、必ず
決まったルートで家に送り届ける』のを、『そのルート上に待機し
ておき、これまでの護衛位置から更に間を空けて、莉理を見守るの
ではなく、莉理の周囲を警戒して、彼女を監視している人間がいな
いかを監視する』のが琢真の取るべき動きという事であつた。

それを告げられた時、先に反応したのは愛だつた。「他人の行動
を誘導するなんて、そんなの無理よ」と。

だが修司に「お前いつも藍田と帰る時毎回違うルートを通つてる
のか？」と指摘され、暫しそれを思い出している様なそぶりだ静か
になつた。ただ、愛としては結局いつも通りであることに気付いた
のだろう。先程までの難色を示していた顔を一瞬で振り払い「おっ
けー」と軽く了承した。現金な奴だつた。

その問題は揉める事無く解決したから良かったが、琢真は容易に
納得は出来なかつた。

何故なら、その『ルート上』の待機しておく場所として、公園を
挙げられたからだ。学校から公園までは歩いて二十五分は掛かる。
幾らなんでも遠すぎてその間が心配過ぎた。

ところが、その琢真の反論も、
『学校に近すぎると生徒の目が多く、どこでお前が見つかるか分か
らん。それでももしその情報が『犯人』に伝わりでもしたら、お前の
身軽さという利点が無くなるだろうが』

と冷静な口調で修司に却下され、立ち回りから服装までを指示さ
れたのだつた。

二人が去つて二分程度過ぎた頃に、ようやく琢真は動き出す。

二人の姿と思しき影を遙か先で捉える事ができた。目から三・四

十センチ離れた位置の小指の爪に、二人纏めて全身が隠れる程の小ささになっていたので、いざ何かあった時に直ぐには駆けつける事が出来ない距離だと、内心動揺してしまった。

だが、直ぐに自分の役割を思い出すと、その事を頭から振り払い、琢真は改めて周囲を観察した。

二人が去った後、公園付近に現れた数名の、うちの学校の生徒の姿を一人ずつ忘れない様に記憶する。中には知っている顔もあった。しかし、その事は今は忘れ私情の入らないよう監視に努めた。

特に、その中で二人と同じ道へ入っていった六人の姿を念入りに記憶する。構成は三人組の男、二人組みの女、一人きりの三組だった。

二人との距離的に、これ以上離れているのは問題の人物ではないと考え、その三組の後をゆっくりと追う事にした。

後を追いながら、こんな事で本当に見つけることが出来るのか？
そもそも全く違う場所から二人を監視しているんじゃないか？

等と、不安な気持ちは常に胸にあった。とはいえ、今出来る事は他にはないと思い直し、琢真は慎重に監視を続けていった。

(2)

2

「では二人とも、自分の役割は分かったな？ 明日からが本番だ。慎重に行動してくれ」

二人は同時に頷きかけて、同時に眉を顰めた。

(何だ？)

自分の役割は双方とも認識できていると思っていたが……二人がそんな表情をする意図が分からず、修司もまた眉を顰めた。

「いや、さ」

「俺達の役割は分かったけど……」

二人は僅かに言葉を溜めると、怪訝そうな表情で声を揃えて尋ねてきた。

256

「お前は何するんだ？」

(はあ、全く馬鹿な奴らだ。そんな事決まってるだろうに……)

修司は頭の回転の遅い友人達に一息溜息を吐くと、仕方ないのでその問いに答えてやった。

「俺は『犯人』が誰なのかを別口から調査する」

3

修司は昨夜の晩の事を反芻する。

昨日の時点では二人にまだ話していなかったが、修復した貼り紙や愛の話によって幾つか分かった事があった。

先ず修復した貼り紙について。修司が特に注目したのはその中の二枚だった。他のものは路上で琢真を遠目から隠し撮りしている画像で、どこで撮られたのか特徴が少なく特定に時間がかかる。

だがその中の一枚だけ、琢真がメインではなく、莉理を大きく捉えているものがあつた。

貼り紙の殆どは遠目からのブレ画像だった為、それだけが他よりもかなりはっきりと像が分かる画像となっており、異彩を放っている。

普通に考えると、それは隠れて望遠で撮影されただけのように思う。ただし、そうすると少し腑に落ちない点が思い浮かぶ。

それは、どうして琢真を望遠で撮影しなかったのか、と言う事だ。

琢真の画像は、ある程度琢真を見慣れている人間ならまあ判るという感じである。しかし、今回の『犯人』の目的は琢真の事を周囲に広めて莉理から引き離す事だった筈だ。

なのはどうして、望遠で撮影できるのにもかかわらず、琢真の画像をそれで写さなかったのか。最悪誰も琢真だと言うことに気付かないという可能性を考えなかったのか。同じフレーム内に収めたかったと言うこともしれないが、全部が全部そうする必要もあるまい。

二人を撮ったデジカメが違うと言う可能性もあるが、じゃあどうしてデジカメを代えたのかは説明が付かない。

なので、修司はこう考えてみた。

『犯人』は望遠なんてしなかったのではないかと。

もう一枚は、その被写体ではなく背景が気になった。

その画像は、私服の琢真が莉理の家の前に居るところを写している。なので、恐らく日曜に撮ったものだろう。写り込んでいる街路樹の影から判断すると、夕方に写されたものだと分かる。ただ、

冷静に考えると納得いかない部分がある。

莉理の家は駅前まで続く緩い勾配のある坂の中腹に建てられている。学校に行くにしろ図書館に行くにしろ、違う道を好んで通らない限りは、家の前の坂を下っていく事になる。自然、帰り道はその逆の筈だ。

だが、その琢真の画像は、坂の上から撮られていることが判る。それは少し妙だ。

日曜の夕方。琢真は莉理を探して図書館から藍田の家に向かった筈である。普通琢真を尾行してその光景をデジカメに撮りたい場合、背後から追っていかないだろうか？

何故、まるで待ち構えている様に坂の上から撮られているのか。幾らなんでも、琢真の進行方向に合わせて前を移動して撮影していたとは考えにくい。それだと琢真に姿がバレる危険性が高すぎるからだ。

という事は、予めその坂の上のポイント付近に居たと言う公算が高く、つまり『犯人』は既に莉理の家とその周囲を既に把握している可能性がある。

ただ、そうなるると一つの疑問が湧く。

何故『犯人』はそんなポイントを選んだのか、と言う事だ。

画像を見ると、撮影した場所は莉理の家より坂の上方の路上であることが分かる。

そんな場所で隠れるように撮影して、人が通りかかる危険性を考えなかったのだろうか？

琢真の話を以前聞いていたので、修司は昨日莉理を送った際に確認しておいたのだが、何故『犯人』は家の正面にある、『売家』という一目に付かない絶好の撮影ポイントに潜んでおかなかったのだろうか。

琢真がそこを常用している事を知っていた訳はない。琢真がそこ

に隠れたのは金曜日と日曜日の二回だけでどちらも早朝からだ。もし仮に知っていたとしても、人目に付くよりはそこに隠れて、もし琢真が来た時にはそのまま家の裏手に周り逃げ出せば良いだけだ。そちらの方が、よほど危険性は低い筈だ。

なので、ここで発想を変えてみる。

つまり『犯人』は忍び込まなかったのではなくて、忍び込めなかったのではないか、と言う事だ。

次に、愛の話の中で一部気になる箇所があった事を修司は思い出す。

そしてそれは恐らく、『犯人』の動機を知る上での手がかりになるかもしれない。

その箇所とは、愛が先週の土曜日の時点で最近ストーカー気配を感じるといふ事を相談されていた、と言う部分だ。

琢真が莉理を護衛し始めたのは先週の金曜日からである。そしてその一日後に相談されていたと言うが、たった一日で人の視線に気づくものだろうか？ また、気づいたとしてもそれが見られている、という発想に至るだろうか。

と言う事は、これは時間的に考えて莉理が感じていたのは琢真ではなく、『犯人』の事だったと考えるのが妥当だ。

では、『犯人』は一体いつから莉理を付けていたと言うのだろうか。

彼女の話信じるのであれば、先週の土曜日の時点で、『最近』感じるようになったと言う事である。そこから遡って三週間も四週間も昔の話ではないだろう。

なので、先々週位前から先週の木曜日までの間に、何か『犯人』が莉理に対して決定的な悪感情を抱く切欠があったと考えるべきだ。つまり、その期間に莉理に対して起こった出来事を調べていけば、自ずと『犯人』の動機に、如いては『犯人』自体に繋がっていくに違いない。

だが、それを詳細まで調査するには修司と愛だけでは手が足りない。そして、琢真は手伝う事は出来ない。だとすれば、どうするか。

その答えとして修司は今、琢真達の教室に訪れているのだった。

4

「そりゃあ、俺達だって琢真が理由無くあんな事をしたとは思っちゃいねえ」

佐藤の言葉に、金子が頷く。

「うん、琢真君はそんな人じゃないよ」

「そんな事は分かってる、分かってるが」

佐藤は一旦言葉を切り、他の面々と顔を見合わせる。その表情を見ると、全員同じ意見の様だった。

「理由も教えて貰えずに、それでも手伝えってのは何か違うんじゃないか!？」

佐藤が吼える。それに合わせて皆も頷いていた。

言いたい事は分かる。佐藤の言っている事は正論だ。逆の立場なら修司も同じ事を言っただろう。

だから、言った。

「琢真が、このままではただのストーカー扱いされてしまう。

仮に謹慎処分が解けたとしても、生徒の間に広まったソレは消す事は出来ずに卒業までその汚名は続くだろう」

そこで一度言葉を止めて、修司は全員を見る。

五人とも悲痛な顔で、俯いていた。

「流石の琢真もかなり落ち込んでいた」

琢真からあの老婆に怒りのままに当り散らしたと言う話を聞いたが、正直修司には信じられなかった。

修司は琢真のそんな姿を、少なくとも琢真と親しく付き合うようになってからは一度も見たことがないからだ。決して浅い付き合いではない筈の修司でもだ。

つまり、それほどまでに琢真はこの件に深く傷ついていたのだ。恐らく本人の自覚以上に。

そして、だからこそ

「ただ、それを何とかすることが可能かもしれん。だがそれには、俺だけではどうしても手が足りない。つまり……お前達次第だ。お前達次第で、琢真の環境を全て元通りに出来るかもしれない」
そうしなければいけなかった。

愛が莉理を囿に使うような作戦に乗ったのもこの為だった。そうする事でこの事件は始めて解決したと言えるのだ。

告げるべき事は告げた。『力を貸してくれ』とは言わない。そんな事で手を借りたとしても意味はないのだ。

なので、最後に一言。

「で、お前達はどうする？」

とだけ、修司は言った。

全員、感情の見えない顔で何かを暫く考え込んでいた。やがて、皆次々に深い息を吐く。

そして、お互いに顔を見合わせて

頷き合って、修司に視

線を向けた。

皆を代表して、佐藤が口を開く。

「分かった。俺達は何をすればいいんだ？」

爛々と輝き出したその十個の瞳には、先程までの動揺一切がどこにも存在しなかった。

昨日に続き、自分の家にやってきた愛を、琢真は家の前で迎える。愛は莉理を送り届けたついでに家にお邪魔していた。そして、彼女の門限の二十時を過ぎるのを待ってから一度家に帰り、その後琢真の家を訪ねてきたのだった。

琢真はあの後、莉理の後ろを歩いていた生徒達を遠巻きに観察しながら、彼女の家の前まで進むと、『売家』の庭先に忍び込んで、愛が帰るまでずっと家の周囲を警戒していた。

ただ、今日のところは特にその成果は無く、怪しい人影は見当たらなかった。

そして、琢真は愛が帰るのを待ってから慎重に自宅に戻った。誰かに見られて面倒な事になる可能性を考えての事だ。

本当は、琢真は今日の深夜になるまで『売家』の庭先にいるつもりだった。だが連絡を取った愛曰く、莉理は老婆の言っていた話を事の他信じており、今週は夜はなるべく出歩かない様にするつもりだと言っているそう。それに加え、不幸中の幸いと言うか琢真のストーカー騒動の事もあって、彼女が夜出歩く事はないという事だった。

自分の事がそんな風にプラスに転じたのは悪いジョークの様にも感じる。ともあれ、これにより彼女が外に出る事はない事を確信したので、琢真も家に戻ったのだった。

愛が来てから僅かの時間を置いて修司も現れたので、早速報告会を行う。

先ず愛が今日は無事に乗り切った事を報告する。特に変わった事

は感じられなかったと言った。

次は修司の番だったが、「『犯人』に関する情報はまだ掴めていない」と報告した。

まあ仕方ないだろうと琢真は思った。しかし、愛はそうは思わなかったらしい。「頼りない」だの「仕事しろ」だの修司に罵倒を始めた。

それにカチンときたのか、修司も愛に言い返し　いつもの言い合いに発展する。心境によるものか、何だか懐かしさに似たものを感じ、琢真はその様子を止めることなく眺めていた。

いつの間にか笑っていたのか「何で笑ってるんだ！」と、二人は同時に矛先を向けてきた。琢真は何故かそれがつばに入ってしまった、そのまま爆笑に発展してしまった。

突然苦しむほどに笑い出した琢真を、最初は恨めしそうに見ていた二人だったが、やがて馬鹿らしくなったのか「ふん」と互いにそつばを向いていた。

ひとしきり笑った後、今度は琢真が報告を行った。今日数人の生徒を見たが怪しい人間は居なかった、と。

ただ、修司はそれを予想していたのか、「問題は、明日明後日にまた同じ人物を見るかどうかだ」と返してきたので、何も言わず頷いた。

「他には？」

修司が最後に尋ねる。

何かあったか自分の記憶と相談して　一つだけ思い浮かんだ。

この問題とは関係ないので伝えておこうか迷う。だが、自分の状況を知ってもらっていた方が良くかもしれないと思い直し、琢真は夕方の池山の話伝えることにした。

「明後日、学校に呼ばれている」

そう切り出した琢真に、二人は眉を顰めた。

何でそんな表情をするのか始めは分からなかった。少し考えて理由が思いついたので、琢真は「違う」と二人の想像を否定する。

恐らく琢真の謹慎処分についての話だと考えたのだろう。謹慎中に呼び出されると言うのは良い話なのか分からなかったため、そんな表情になったに違いない。

「そうじゃなくて、修学旅行の写真を選ばせてくれるらしい」

修学旅行の写真を選ぶのが明後日までだから、明後日の放課後、池山同伴なら学校に行って選んでもよい事にして貰えるそうだ、と詳細を教えた。

「ビックリさせないでよ」

「全くだ」

二人は安堵の表情を浮かべて苦情を言う。

そして「まだ選んでなかったのか」呆れていた。写真選定は先々週の月曜から行われていたからだった。

「だがまあ、明後日の護衛作業があるから、結局その話は断った」その事を琢真が話すと、二人……特に愛は気の毒そうな表情を浮かべた。

「何なら明日、アタシが選んどいてあげようか？ ……貸しで」

最初の部分だけでは柄じゃないとも思ったのか、無理やり付け足すように要らない部分を加えて、愛が言った。だが、正直その申し出は有り難かったため琢真は『借りで』お願いした。感謝の言葉も一緒に。

ただ愛の気持ちは嬉しいが、一つだけ言っておかないといけない。「俺の事を考えてくれるのは嬉しいが、今は俺のことより藍田さんを第一に考えてくれ」

と言う事をだ。愛は少し気分を害したように柳眉をしかめた。しかし、特に何も言わずにコクンと頷いた。

そこで今日の話はこれで終わりと考えたのか、「では明日も今日と同じ手筈で」と踵を返そうとした修司を呼び止める。

そう、琢真には修司にも一つだけ言っておく事があったのだ。

「何だ？」

「お前、もう一人のストーカーの事をいつの間にか『犯人』って読
んでるけど、それ止めてくれ」

「ん？ 何故だ？」

「『犯人』ってのは罪を犯した人を指して言うんだろ？ 今追っ
ている人間を『犯人』って言うと、何か藍田さんがいつかソイツに何
かされてしまうみたいで、気に入らねえんだ」

感傷に過ぎない事は分かっていたが、今回の問題の場合『感じ』
つてのは大事な事に思えていたのだ。

「確かにそうね。気に入らない」

愛が琢真の言葉に同意する。

「なるほど……。まあ『犯人』と言う呼び方は便宜上のものだから
問題ないが、では代案を言ってくれ『貼り紙を貼った人物』等では
不便で仕方がない」

(代案か……)

「犯罪者予備軍ってのは？」

どことなく楽しそうに愛が提案する。どつやら遊びのように思っ
ているらしい。

その案はあっさり修司に却下される。

「長い」

「少女X」

続けて愛が提案する。

何故『X』なのかは分からないが、愛のセンスだろうか？ それ
ともインスパイアだろうか？

「女とは限らん」

「少年X」

懲りずに愛。

「意味は正しいが、一般的には年少の男という意味で使われている
ので、それだと紛らわしい」

「少年少女X」

「意味が分からん」

「ことごとく提案を却下されるので腹が立つたらしい。愛は修司に「じゃあお前が案だせ」と怒鳴り始めた。

また目の前で喧嘩されるのは、もう面倒でしかないので、

「単に『X』で良いじゃねえ？」

と、琢真は提案し、修司の了解を得た。

愛は面白くないと愚図っていたが、二対一ではどうしようもないと諦めたのか、渋々その案を認めた。

そうして、水曜日の夜は過ぎていったのだった。

『木曜日』

琢真の席だけがポツンと浮いている。

主の居ないその机の上は、微妙な騒動を起こしたのにもかかわらず綺麗なままだった。考えるだけでも胸糞悪いけど、通常なら心ない人間にラクガキなどをされてもおかしくない問題だったとも思う。でも、どんなに琢真の事を微妙に思っていたとしても、流石にうちのクラスにそんな奴はいないようだった。それを改めて認識し、嬉しくなると共に今の現状が悲しくもなった。

チラリと、莉理が那奈美達と教室で食事しているのを横目で確認してから席を立つ。

「あれ？ 愛どうしたの？」

一緒に食事を取っていたクラスメイトがいきなり立ち上がった愛を見て、不思議そうな声を上げた。愛は「ちょっとね」と曖昧に返事をぼかし、そのまま教室を出た。

目的の場所は職員室だった。昨日琢真にお願いされていた事を今のうちに果たしておこうと思ったのだ。

西校舎に渡り職員室に入る。見渡すと教師達の大半はまだ食事中だった。

そんな彼らを尻目に愛は池山の席に向かう。池山は滅多に職員室に來ない愛が突然現れた事に少し驚いているようだった。

「すみません、たく……芳垣の修学旅行の写真を選ぶのに代行を頼まれたんですけど……」

愛が来た目的を告げると、理解を目に表し「そうか」と微妙な表情で頷いた。

そして「選び終わったら選定用紙と一緒に持って来てくれ」と視聴覚室の鍵を取って来てくれたので、それを受け取りながら頷き返した。

その足で西校舎四階にある視聴覚室に向かう。

すると階段に差し掛かった時に、売店から戻ってきていたらしい修司と丁度鉢合わせた。これは運が良い。

「今から琢真の写真を選ぶから、アンタも来なさいよ」

愛が低姿勢でお願いしたのにもかかわらず、修司は面倒そうに首を振った。

「断る。お前一人で十分だろう」

愛は元々一人で選ぶつもりだったし、修司にはちよつとつき合わせて楽をしようという程度の思惑で頼んだ事だった。のだが、そう無碍に断られると少し腹が立った。なので、愛は強引に修司の手を引っ張って、視聴覚室まで連行する事に決めた。

「お、おいこら貴様！ 話を聞け！」

何やら修司が喚いていた。でも、いつもの事なので愛は無視する事にした。

7

視聴覚室のドアの鍵を開けて中に入る。

閉め切られている教室の中はかなり蒸し暑く、愛は一步踏み入れた途端に選ぶ気が失せるのを感じた。

（琢真には悪いけど、適当に選んでとつと終わらせよう）

修司はまだブツクサ言っていた。

修司は顔は確かに整ってはいるので、内面を知らない女の子に人気は有る。しかし、こういうねちっこい部分が、性格を知った女の子に敬遠される理由だった。ただ琢真と違って女の子に好かれようという気は全く無い様なので、本人は全く気にしないだろうけれど。「アンタは琢真の写真が写っているのをそっちから選んでいつて」「ちっ、分かった。……ん？ 待て。じゃあお前は何するんだ？」愛が修司に全部押し付けて怠けるとでも思っているのだろう。修司は咎めるような目で質問してくる。

相変わらずこういう事に鈍い男だ。

「もちろん決まってるでしょ？ 莉理の写真を選ぶに決まってるじゃない！」

写真を受け取った時の琢真の動揺を思い浮かべながら答えたので、愛は思わず微笑んでしまったかもしれない。それを考えると少し琢真の写真を選ぶ意欲が湧いてきた。

だが、修司は愛の微笑には、ジト目を返してくるだけで何も言わなかった。

視聴覚室の壁に張り出されている写真を修司は右から、愛は左から回って選ぶ事になった。流石に数が多く、教室の壁グルリと写真で覆われている。

(クラス毎に分けてくれてたら楽だったのに……)

以前、自分の分を選んだ時にも思った事を、愛は再び考えながらも、写真に視線を走らせ続けた。

他人の写っている写真を探すと言うのは、中々に難しい。自分ならその背景を見るだけで、その場所に行った事があったかどうかは直ぐに分かるので写真の選定が楽なのだが、他人だとそうはいかない。

写っている被写体一人一人見るのは非常に大変だった。

そうして、見始めて何枚目になっただろうか。愛はようやく莉理の姿が撮られている一枚を発見した。どこかへ向かっている男子

生徒達を背景に、カメラ目線ではにかむ様に莉理が微笑んでいる。その莉理を挟み込むように那奈美と翔子の姿もあった。どちらも笑っている。

とりあえず愛は、今自分とは軽い冷戦状態にある二人は置いていて、莉理の姿を見つめる。

莉理は愛の目から見るととても可愛らしく映るのだが、琢真以外の男に人気がある訳ではなかった。莉理の良さを知っている愛にはそれがどうも納得がいかない。周りの男達の見る目の無さには呆れるばかりだった。

そういう意味では琢真は流石と言うしかない。人を外見で判断しようとはせず、内面を重視する琢真らしい選択だと思う。

ただ、琢真は昔からそういう性格だったと言う訳ではなかった。まだ幼かった頃は乱暴で人の特徴を探りあげて悪し様に言うような、糞餓鬼だった。

なので、愛は正直その頃の琢真の事は非常に嫌っていた。修司も間違いなくそうだったと思う。琢真は所謂ガキ大将だったので、面と向かってそういう態度を表す事はしなかったけれど。

でもそんな琢真は、ある時を境に急にそんな態度を周囲に取る事は無くなっていった。何があったのかは愛には分からない。その頃の琢真の事は嫌っていた事もあって、愛は事情をよく知らなかったのだ。

ただ、徐々に琢真は落ち着いていき、そしていくつかの出来事を経て、三人は段々と親しくなっていた。

そんな事を思い出していた為か、愛は自分の手が少し止まってしまっていたのに気付いて、その写真の番号を控えてから再び選定作業を再開した。

その後、目が疲れてくるのを感じながら作業を続け、数枚目の莉理の写真を見つけた際に、何かちょっとした違和感を感じた。

(何だろ?)

少し考えてもそれが何かは分からなかったので、愛は気にせず残りの写真を見て周る事にした。

しかし、その次に莉理の写真を見つけた時に、愛はようやく自分が感じていた違和感の正体に気付いて愕然としたのだった。

「…………ふう、こっちは終わったぞ」

修司の疲れたような溜息が聞こえてくる。

「可哀相だが、琢真の写真は全体写真以外一枚もない……。見切れている写真は数に入れるのか？ それを数に入れば多少はあるんだが…………」

修司がそう尋ねて来ているのは聞こえていたが、愛は返事をしなかった。

「しかし…………こうして調べてみて気づいたが、お前の写真がやけに多くないか？ 何か作為の臭いを感じるんだが…………」

そんな修司のボヤキには答えずに、愛はひたすらに写真選定を行っていた。

「そんなに真剣見入るような程のものでもないだろう？」

少々呆れた調子で言ってくる修司に、愛は勢いよく振り返る。

「ちよつと、これ見てみて!!」

飛びつくように修司の腕を掴むと、ある一枚の写真の前に引っ張って行く。

そして、写真中央にあさつての方向を見ている莉理が写った写真を指し示した。

それをジッと、黙って見つめていた修司だったが、

「ふむ…………まあ写真映りはそれほど悪くないのではないか？」

などと、全く的外れな事を言ってくる。

(こいつ、自分の興味がない事だとかことん頭を使わないわね!)
「違う!!… その後ろを見てみなさい!!」

愛がそう怒鳴るように言うと、修司は渋々言う通りに、莉理と数

名の生徒が写りこんでいる写真を眺めた。

「じゃあ、次はこれ見て！！」

そう言っ、別の莉理の写真の前に連れて行く。その写真はある店先のベンチで休んでいる莉理と那奈美達が写っていた。

「後ろよ」

修司は言われるままに、その写真を数秒見た後、愛が何を言おうとしていたのかに気付いた様だった。

面倒そうだった目は、鋭い輝きを放つ目に切り替わっている。

「他の写真は？」

「全部じゃないけど、殆どそう」

愛は端的に修司が欲している情報を返してやった。

修司は自分の目でも確認したかったのか、愛に他の写真の場所を聞きながら一通り莉理の写真を見て周った。

「こいつは確か……F組の？」

「そう。確か『尾登』って苗字だったと思う」

莉理の写真の背後のその殆どに、尾登の姿が写りこんでいたのだ。莉理の方を見つめるその様子は、問題のストーカーだと愛に思わせるには十分だった……。

昨夜同様、再び三人は琢真の家の前に集合する。

三日続くと流石に三人とも報告に慣れてきており、スムーズに進行した。

と言うか、何も報告するような事が無かったからとも言えるかもしれない。

愛は昨日と変わらず問題なしで、琢真も特に怪しい人物は見かけなかった。変な中年は居たが『X』とは関係ないだろう。

「で、昨日と同じ人物は見かけなかったか？」

琢真はその修司の問いに答える。

実は昨日と同じ人物は、居る事は居た。ただその人物は……。関係ないとは思ったが、一応その人物の事を伝えておいた。

「ふむ……」

と、発するだけで、それに対して修司は特に何か言う事は無かった。

そんなやり取りをしていると、痺れを切らしたように愛が怒声を上げる。

「そんなことより、修司！！ アンタあれからアイツの事ちゃんと調べたの!？」

「もちろんだ。周辺を調査してみたが、アイツは特に問題のある生徒ということも無く、ストーカーをするような人物ではないと言う事が分かった」

「何よそれ!？ それって何にも分かってないのと一緒じゃない！ 絶対アイツには何かあるわよ!！」

突然の言い合いに、琢真は一人取り残されていた。
訳も分からず、混乱している琢真に気付いたのか、愛が事情を話し始めた。

「何だよソイツ!! どう考えても怪しすぎるだろ!!」

琢真は愛の話を聞き終えるなり、怒りの咆哮を上げた。

莉理の写真の殆どに写りこんでいるというのは、どう考えても偶然ではない。

修学旅行の写真はどこで撮るかもいつ撮るかも、調べてみれば撮影者の自由だ。それなのに、高確率で映りこむなんておかし過ぎる。彼女の後をつけていたのだとしか思えない。クラスが同じと言うのならそれもまだ分かるが、全然違う『F組』だと言うのだ。

(これはもう何か深い理由があるとしたか………ん?)

その生徒イコール『X』が琢真の中で確定しようとしていた時に、何かが引つかかった。

(何だっけ?)

「ほら!! 琢真もそう言ってるじゃない!! どう考えても『尾登』は怪しいわよ! 外面は良い人そうだけど、そういう人間に限って内面は怪しいのよ!」

(ん? 尾登………? どこかでその名前を聞いたような………?)

「お前のそれは、ドラマか何かの受け売りだろう? 確かに中にはそういう人間も居るかもしれんが、実際は良い人間そうに見える人間の大半は良い人間だ。そして『尾登』もそっちの類の人間だ」

(尾登………尾登、尾登………?!)

「何でそう言い切れるのよ!?!」

「奴の性格を調査したからだ」

どこかで見たとようなやり取りを二人が始めていたが、それどころじゃない。

ようやくその名前をどこで聞いたのか思い出した琢真は、思わず叫び声を上げる。夜の静寂さの中、琢真の声が周囲に響き渡った。

「尾登だよ!! 思い出した!」

その言葉に、喧嘩開始五秒前だった二人は怪訝な顔で琢真を見つめて、同時に尋ねて来る。

「何をよ?」「何をだ?」

そんな二人に、琢真は以前莉理に告白した男が居た事を話す。その男の名前が確か『尾登』だったという事を。

琢真がその事を話し終わると、二人はムツツリと黙り込む。

「その話に、間違いはないのか?」

ポツリとそれだけを修司が確認してくる。

「多分……間違いはないと思う。高橋に聞けば確實だが、多分間違いない」

「ふむ、そうか……」

それきり黙りこんで、二人は琢真を見つめる。

嫌な予感がしたが……琢真は甘んじて受けることに決めた。

「愛、やっていいぞ」

「そうね。アタシもそうしようと思って……たっ!!」

『た』の部分で、愛がその場から弾ける様に琢真に突っ込んでくる。そして抵抗する間もなく取り押さえられてしまう。正しくは、コブラツイストをかけられているとも言おう。

このコブラツイストは、以前愛が琢真を実験台にして完成させた必殺技の内の一つでもあった。当然、痛い。

「ギブギブギブ! ごめん! いやスイマセンした! ホント! マジで!」

「ああ? 何も知らないで、写真に興奮した、アタシが、馬鹿みたい、じゃない!!」

愛は言葉を切りながら断続的に力を込めてくる。マジで、痛い。「そうだな琢真。これはお前が悪い。そんな大事な事を言わないでおくとはい……反省しろ」

修司は助けようともしないで、琢真を冷淡な目で見据えるだけだ

った。

「だ……お、俺も、忘れて、たんだ！！ 仕方ないだろ!？」

そんな琢真の嘆願には二人の心は動かされなかったようだ。

「ふむ、開き直りか……愛、まだ足りないらしぞ？」

「そうね、じゃあ本気で行くわ」

そう言うつやいなや、グギギ、という骨の悲鳴が聞こえてきた。

「ぐぎゃああああああああああああああ」

そのまま暫く愛の拷問という名の、やはり拷問は暫く続いた。

その間、夜の間に琢真の苦痛の悲鳴だけが響いていた……。

それから、琢真の話聞いた修司が念の為、今の話を確認するよ
うに愛に頼んだ。愛は嫌がったが、そういう事を言っていられない
とも分かっていたのである。渋々高橋に連絡を取っていた。

「莉理も教えてくれれば良いのに……」

と、ブツブツ呟きながら。

愛がそう言うのには理由がある。

最初高橋に連絡を取るのを嫌がった愛は、事もあるうに莉理本人
に電話していた。ところが、彼女はどんなに頼んでもその事の詳細
を全く教えてくれなかったそうだ。

あの時の莉理の様子を思い浮かべながら、彼女ならそうかもしれ
ないと、琢真は一人頷いていた。明日の高橋と田中の無事を祈りな
がら。

そうして、繋がったらしい高橋と何やら喧嘩腰に連絡を取ってい
る愛を遠巻きに見ていた琢真に、修司が執拗に確認する。

「もう他に何か隠している事はないのか？」
と。

だがそう言われて直ぐに思い出せるのであれば、そもそもさつき
の事を黙っていたりはしない。なので、既に修司が知っている事知
らない事関係なく、先々週の木曜日辺りからの事を話した。

修司も知ってる内容が殆どだった筈だが、特に何も言わず静かに

自分の話を聞いていた。

そして丁度件の『尾登』の告白の事を話し終えた時に、愛が電話から戻ってくる。何やら渋い顔をしていたが、一応言質は取れたようだ。

告白したのは『尾登』で間違いそうだ。そして、あの時琢真は色々あつて聞くのを忘れていたが、告白の真実を今聞くことが出来た。どうやら、尾登が莉理に告白して振られたと言つのが真実らしい。それを聞いて、尾登には悪いが琢真は少し心が浮き立つのを感じる。

愛は今の電話での苛立ちをぶつける様に、尾登に対して非難の声を再び上げ始めた。

「だから、コイツが振られた腹いせにストーカーしてたのよ!!
それか、振られたけどどうしても忘れられなくてしてるって可能性もある!」

そのどうにも興奮している愛に、修司は冷静に指摘する。

「だが、修学旅行が行われたのは、振られる前の話だぞ?」

「んなの関係ないわよ! じゃあつまり、元々ストーカーだったのよ! これはもう奴が『X』で決定よ!」

「しかしそれでは……」

そのまま、ああでもないこうでもない二人して言い合い始める。琢真もそれを聞くとはなしに聞いていたが、冷静になって考えても琢真にはどうしても尾登が『X』だとは思えなかった。

「俺は、尾登は違うと思う」

「だから二人にそう告げた。」

「何でよ!?!」

「好きな子に告白するのって……勇気があるだろ? 正直、俺にはとても無理だ」

何を言い出すのか図りかねている表情で、二人は琢真を見つめる。そんな二人を見て、琢真は続けて言う。

「だけど、アイツはその勇気を振り絞って告白したんだ。振られる

かもしれないのに。それでアイツは結局振られちゃった訳だけど、それでもアイツは颯爽と去って行ったよ。その潔さには正直どっちが告白したのか、結果がどうなったのか俺には分からない程だった」
「……………」
「……………つまり、そんな男がストーカーをすとは思えない、と言う事か？」

修司が言葉を引き継ぐ。それに琢真は深々と頷いた。
「愛なら分かるだろ？　それがどんなに勇気のいる事かを」

愛にそう話を向け、琢真が同調を求めたのには訳がある。

愛はその容姿もあって非常にモテるので、告白された回数も数知れない。しかし、今まで愛が首を縦に振った事は一度も無かった。その所為で、心無い人間には愛がお高くとまっていると揶揄される事もあるが、実は違う。

その事を知っている人間は恐らく、それに毎回つき合わされている琢真だけで、修司も知らない事だ。　実は、愛は自分から告白した事が今までに何度かあった。

ただし、今まで愛に彼氏が出来た事はない。つまり、振られ続けている訳だ。

重ねて言うが愛は非常にモテる。モテるのだが、ただ何故か愛が好きになった相手からは、その効果を得られないのだ。愛も既にそういった自分の特性に気付いているのか、振られた後はいつも力なく笑っただけだった。

だからこそ、愛には尾登の事が分かる筈だった。

愛は琢真の言葉に何か感じ入っている様子だった。溜息を一度吐くと、「アタシにその話題を振るな」と一発琢真を殴ってから、

「まあ、そう言われればそうかもね」

と、琢真の意見に一応は賛同したが、

「ただ、好きすぎて訳分からなくなったのかもよ？　こうして写真に写ってるんだし」

と言う反論も付け加えて答えた。

先程より尾登への表現が丸くなっているので、根っからの決めつけから言っているのではなさそうだった。

確かに写真に写っているのは事実なので、それをどう答えたものが琢真が返答に迷っていると、それまで二人のやり取りを黙って聞いていた修司が口を挟んでくる。

「とりあえず、尾登の事は置いておこう。この問題にはまだ調査が必要だ。それより琢真、先程の続きだ。他に知っている事を話せ。些細な事も全てだ」

尾登の事を棚に置いておくのは琢真も賛成だったので、先程中断した部分から再び話し聞かせた。尾登の告白の後の話だ。

莉理から逃げ隠れて、彼女のプレッシャーが凄くて、高橋達が脅されて、誰もいない四階から植木鉢が落ちてきて、修司と一緒に老婆を探して、スナックに行つて、修司が老婆を見つけて、修司が倒れて、修司を担いで公園に行つたと、順に話して聞かせた。

愛だけは全くそれらを知らないからか、いちいち突込みを入れてきたので、話し終えるまでにやたらと時間が掛かってしまった。

「あの子はそういう話題を面白半分にするのは嫌がるからね〜」話の中で愛が気になったのはそこだったのか、高橋達の脅された件を苦笑していた。それを聞き咎め、愛に質問する。

「やっぱり……そうなのか？」

「うん。あの子くらいのもものよ？ こういう話で楽しもうとしないのは」

「藍田さんは優しいからな。そういう話で人を笑いものにするのが嫌なんだろ」

莉理ならそうに違いない。彼女はそういう事はしない人だ。

「さあどうかしらね……」

ただ、琢真の反論に意味ありげに愛が言葉を逸らす。

その様子が気になり「今のどういう意味だ？」と聞くが、愛は「

さあ？」とすつとぼけてばかりで何も答えようとはしなかった。口元が少し歪んでいるところを見ると、面白がってふざけている様子も見えるが……それでも琢真は確認を止める事は出来なかった。

二人が緊迫した？ 問答していると再びしかめっ面の修司に催促されたので、琢真は続きを話し続け、そして今週の月曜日までを話し終えて今日の報告会を終える事になった。

その間修司はずつと何事かを考え込んでおり、一言も話さなかった。

解散する直前に、琢真は大事な事を思い出し二人に告げる。

「婆さんの話だと明日明後日乗り切れば大丈夫なんだ。二人とも

……頼むな」

そう、明日明後日が正念場だった。まだ『X』の事は何も分かってない。しかし、それでも琢真は彼女を護ろうとする意志に少しの陰りも存在しなかった。

なので、『頼む』と言う部分にその想いの全てを込めたつもりだった。

二人はそんな想いを受け取ってくれたのか、琢真の言葉に力強く頷いた。

修司は昨日の琢真の話で、どうしても気になった部分があった。尾登の告白の事ではない。

それは、植木鉢が落ちてきたという部分だ。

なので修司は、その植木鉢が落ちた場所、植木鉢が置かれていた場所を、午前中の休み時間を利用して調べていた。

ただ、植木鉢がベランダ置かれていた教室……美術室は鍵が掛けられており、美術の教師が中にいるか、用事がある時以外は開ける事はできないそうだった。

修司は選択授業は美術ではなかった為に、その事を知らなかった。その為、先程の休み時間では目的を果たすことが出来ず、次の休み時間に入ると同時に鍵を教師に借りに行った。日頃教師達の信頼を受けるように行動している為、特に大した理由を言わずとも頼んだ教師は鍵を貸してくれるよう美術の教師に取り計らってくれた。

美術の教師は二つ返事で鍵を貸してくれたが、鍵を貸している人の名前を書いているノートに自分のクラスと名前を書くことを要求してきた。そうしないと誰に貸したか忘れる為だそうだ。特に拒否する理由もないので、修司はそれらを記入して鍵を借りた。

そうして、常日頃の行動というのはこういう時に生きてくるといふ事を再認識しながら、修司はベランダにある植木鉢の様子を観察していた。

植木鉢はベランダの隅に置かれている、ひな壇のような階段状の棚の一段に三つずつ置かれている。修司は花の知識には乏しいので、ここで栽培しているのが何の花なのかは分からなかった。

植木鉢はどれも同じサイズもので形も同じだ。なので、恐らく落ちたという植木鉢も同じものだったに違いない。

その落ちた植木鉢が置かれていたと思われる、ひな壇の一番上の真ん中だけがポツカリと開いていた。

最上段にある植木鉢に植えられている花の花弁部分は、ベランダの柵より高い位置にあった。植木鉢自体は柵の高さよりも幾分下である。

琢真は、落ちてきた時突風などは吹いてなかったと言っていた。修司の記憶を確かめてみても、あの日強く風が吹いた事はなかったと言つ事実には齟齬はない。

つまり、風で落ちた訳ではない。であれば何故落ちたのか？

どうやら琢真はその事を、莉理に差し迫る危険の象徴として不可思議な出来事と捉え、老婆の予知の信憑性を高めていったようだが

.....

そんな事はありえない。

風もなければ、置かれていた場所が傾斜上だったということもないので、植木鉢が一人でに落ちるなんて事は物理的にありえない。

つまりその落ちた植木鉢は、何者かが意図的か偶発的にか分らないが、ともかく人間の手が介在し落とされたという事だ。

もし意図的に落とされたと考える場合、そこにはどんな思惑があるってだろうか。

植木鉢は三人の間に落ちたそうだ。一体誰を狙ったものなのか。展開からすると莉理と思われるが。

まあ何にせよ、悪感情があったことには間違いない。

そしてその時、彼女達を狙いえた人物は.....

切欠

私が初めて彼を意識したのは、中学の頃の事だった。

子供の頃からずっと大人しくて引込み思案だった私は、クラスでもまるで目立たない存在だった。成績はともかく、運動神経は壊滅的、性格は暗いでは、そうなってしまうのも仕方ないだろう。

今の私には少ないが友人はいる。だけど、その頃の私には話し掛けてくれる子位はいたものの、友達と胸を張っていえるほどの存在はいなかった。

周囲の女の子達が異性の話題ではしゃいでいる時も、それに加わることなくずっと一人でいればそうなるう。

だけど特に私は、その事に悲観してはいなかった。自分の世界が守られてさえいれば満足だった。

そんな私には、たった一つだけ趣味がある。それは日頃の事、外の風景、そんなものを題材に詩を綴ることだった。

別に誰に見せるわけでもない。ただひっそりとそれを行えてればそれで良かった。

だけどある日、家に帰って詩を書くこととした時に、詩を綴っていたノートをどこかに忘れてきてしまった事に気づいた。

もしあれを誰か自分以外の人間に見られたりしたら、恥ずかしくて死んでしまう。

だから、もう日は暮れかけていたけど急いで学校に行き、自分の教室に急いだ。私が置き忘れるとすれば、ここ以外に考えられなかったからだ。

夕日の色で染まった教室に入ると、そこには一人の男子生徒が居た。椅子に座って、何かを読んでいる様だった。

どうしようか迷う。男の子と二人きりの教室なんて怖かった。

こちらにはまだ気づいていないようなので、こっそり出直そうと決め教室を出ようとしたけど、運悪く扉に体をぶつけてしまう。

その音で私に気づいたのか、その男の子は私に話しかけてきた。

その男の子は同じクラスで、密かに女の子の中でも人気があるという事くらいは私も知っていた。

ただ私とは世界が違うような気がしていて、今まで特にそういう感情を抱いた事はなかった。恐らく一度も会話した事はないんじゃないかなかったか。

その男の子が私に尋ねる「忘れ物？」と。

その優しい声の響きに緊張したけど、何とか「ノートを……」と返す事が出来た。

しかし、こうなったら逃げ去ることは出来ない。勇気を振り絞って自分の席に向かい、ノートがあるかを調べる。

だけど、どこを探しても見つからない。

私は教科書を置いて帰ったりはしないので、それはすぐに分かった。

じゃあ、どこに落としたの？　と思わず青ざめてしまう。

もしあれを誰かに拾われて、もしそこに書いている内容が皆にバラされてもしたら。そうなったら私は……。

思わずその時の様子を想像し、涙が溢れそうになったが、ふと目に止まったものがある。

それは男の子が持っているノートだった。

私がそれを見ていたのに気づいたのか、「ん？　あ、これ君の？」と私にそれを渡してくる。

恐る恐る受け取り中を見ると、それはやはり私の詩の書かれたノートだった。

血の気がさあと引くのが分かった。

このノートを読んでどう思われただろう。気持ち悪いと思われたに違いない。そんな感情が渦巻いていたからだ。

けどそんな私に、勝手に読んだ事を謝った後で「何か素敵だね、思わず魅入っちゃったよ」と、彼が微笑みながら言った。

一瞬何を言われたのか分からなかった。

彼はもう一度私に詫びると、「また明日」とそのまま教室を出て行った。彼が教室から姿を消して、ようやく何を言われたのかを理解する。

動悸が治まらなかった。

このノートには私の想いの全てが記載されている。

それを認めてくれたという事は、それは私の世界を認めてくれたということ。

という事は……。

恐らく、今顔は真っ赤になっている事だろう。

そしてそれは、家に帰っても続いたままだった。お母さんから風邪を引いたと間違われた程だ。

その日以来、彼を目で追うことが多くなった。

彼の笑い顔、すねた顔、怒った顔、そんないくつもの顔をずっと見ていた。

そんな自分の行いが分からないまま、ある日ふとノートを何気なく読み返した時、私のノートにはいつの間にか彼の事を表現した詩で溢れていることに気づいた。

その時、ようやく私は悟った。

私は、彼に恋をしているという事を。

『金曜日』

修司は持っていた携帯を皆の中心にある机の上に置く。

これで準備は整った。

「準備は良いか？」

携帯の先にいる琢真に尋ねる。

『ああ、こっちはいつでも良い』

「では、始めるぞ」

放課後、修司は最後の打ち合わせと称して、琢真達の教室にメンバーを集めていた。

修司、愛、渡辺、佐藤、そして電話の向こうの琢真の五人だ。

莉理を送っている筈の愛がここに居るのは、莉理が今日は一時間だけ部活の方に顔を出したいと言う事でそちらに行っている為だった。

当然後で愛と合流する事になっている。面倒ではあったが、そのお陰で今こうして打ち合わせの時間を設けられているのだ。それに関してでは良かったと言えよう。

「よう……琢真。何か久しぶりな感じだな」

「だな……琢真元気してた？」

おずおずといった感じで、佐藤と渡辺が琢真に話し掛けている。

ああいった事があった為か、流石に少し緊張しているのが見られる。

『ああ、こっちは変わりない。そっちはどうだ？ あれから何か無

「かつたか？」

一方琢真は、そんな様子を微塵も滲ませず答えていた。

本来は気を使われるべきは琢真の方の筈だ。ただ、琢真の事を信じ切れていなかった手前、彼等がどうにも気後れしてしまうのも無理はない。

とは言え、それから数度やり取りを行う内に、次第にいつもの調子が出てきたようだ。

恐らく琢真がいつもと変わらない態度を取っていたのが功を奏したのだろう。今はあの時の互いの様子をネタにして笑い合っていた。そして三人は全てのわだかまりを払拭するかのようには爆笑し始める。

最初は見ていて微笑ましくもあつたが、あまりにそれが長く続いたので、それまで三人の様子を傍観していた愛が「長い！」と怒鳴りその場を収めた。もちろん拳を介して。

都合は良かったので蹲る佐藤達を横目に見ながら、修司は話し始める。

「今日これからの作戦を説明する」

『その言い方……何かいつもの馬鹿騒ぎの時みたいだな』

電話の向こうの為、一人愛の被害を免れた琢真がそんな声を上げる。

意識はしていなかった。言われてみれば確かにそうだったかもしれない。

「いいじゃねえか。そっちのが俺達つばいだろ？」

頭をさすりながら、佐藤がそう不適に笑った。

『そう……だな。そうかもな！』

琢真もその意見を認め、一瞬空気が和やかになりかける。

「だが今までとは違い、今回は失敗は出来ない事を忘れるなよ」

と、修司が釘を指すと、再び場が引き締まった。

見渡すと、全員真面目な顔で頷いていた。

それに修司は満足し、再び話し始める。

「まず最初に俺の考えを言っておくが、俺は予知など信じてはいない。ただ、半ば信じているお前達に合わせて老婆の話に沿って話を言するならば、重要なのは今日だ。今日乗り切ればあの話を真実にしないで済むだろう」

その発言に琢真が疑問を呈す。

『何でだ？ 今週って事は明日もあるだろう？』

そう言って来るのは予想していたので、修司は直ぐに返答する。

「いや明日は気にしなくて良い。明日はどつとでもなる」

と、愛の方を見ながら答える。

その視線の意図に気づいたのか、愛が納得の表情を浮かべた。

「ああ、なるほどね。またアタシに一日中莉理の相手をさせようって訳ね？」

『そうか……なるほど』

「その通りだ。だから今日を乗り切れば……」

『藍田さんは助かるってことか……そうか……』

琢真が感慨を感じているかの様な声で続きを引き取った。

琢真の短くも長い護衛が終わるのだ。そういう心境になるのも無理はないだろう。

愛も何ともいえない顔で、机に置かれた携帯を見つめていた。

だが、この輪に入ってこれなかった渡辺と佐藤は「何を言ってるんだ？」と疑問を浮かべていた。なので、修司は簡潔にやるべき事だけを教える。

「ともかく、藍田を今日一日護りきる、と言う事だ」

前回佐藤達に協力を要請した時に、琢真はストーカーをしていたのではなく、彼女を護っていたという事だけを教えていた。当然何故護っていたのかを聞かれたが、それには修司は答えなかった。ただ修司が問い詰められても言わない事は分かっていたのか、五人と

もそれ以上は何も聞いてこなかった。

その時の対応と同様に、佐藤達はその修司の返答に「分かった」だけ答え、何も聞いてこなかった。

「ではそれに際しての各自の役割を話すが……と言っても、琢真と愛はいつもと同じだ。ただ今日は慎重に行動してくれ」

「了解」

「分かった」

「渡辺と佐藤は、琢真とは別に藍田の護衛を頼む。ただ決して近づき過ぎないようにな」

「ああ」

佐藤はすんなり頷いた。渡辺は頷きながらも今はこの場に居ない金子達の事を尋ねて来た。

「あいつ等は今は別の役割で動いてもらっている」

『何の役割だ？』

琢真は気にしていたが、「お前は自分の役割に集中しておけ」とだけ返して修司は返した。その内容は自分だけが知っておけばいい事だからだ。特に琢真も不満の声は上げなかった。

時計を見るとそろそろ良い頃合の時間だった。莉理ももう直ぐ戻ってくる事だろう。

「全員何かあったら俺への連絡は忘れるなよ。ではそろそろ配置に付いてくれ」

そうして言った修司の合図に、

「了解」「了解」

皆は力強く言葉を返してきた。

琢真と通話が切れ、佐藤と渡辺が待機場所である東門へ向かった後、自分から莉理を呼びに行こうとしていた愛を修司が呼び止める。「何よ？」

行動開始の合図を出しておきながらまだ何かあるのか、と言うよ

うな怪訝の表情で愛が振り返る。

「お前には伝えておく。俺の調査は終わった。そろそろ『X』を燻り出す事にする」

これは琢真には伝えられない事だったので、あの場では言えなかった。

愛は始め何を言っているのか分からないという顔だった。しかし、唐突に閃きを得たのか不快そうな表情を浮かべた。

「……今日からやるの？」

と言っ愛の問いに対し、

「ああ。そして恐らく今日で終わる」

そう、修司は言い返した。

しかし、結局。事態は修司の思惑通りに進むことはなかった。

2

修司の胸糞悪い話を聞いた直後に、戻ってきた莉理と合流すると、どうにも気まずい思いが湧いてきてしょうがなかった。

あんな話をした修司には非常にイラついていたが、それを理由があるとはいえ認めた自分も同罪だという事は、愛も分かっていた。

もちろん修司だって、好きでそんな事をやるうとしている訳じゃない。

(これは仕方なくなのよ……)

そう呟けば免罪符が貰えるという訳では決してなかったけど、表面だけでも心の平穏を取り戻すには有効だったようだ。

ただそういう後ろ向きの姿勢だったのに、その罪悪感のお陰か莉理を護ろうという意志は逆に強まった気がする。

修司は莉理を囮にして『X』を釣り上げるつもりだ。

今日中に終わらせると言っていたけど、そう上手くいくのだろうか？

愛は仮に莉理を一人きりにしても『X』が現れる事の保証にはならないと思っている。

だけどそんな事を修司が考えていない訳はないので、何か根拠がある筈だ。

そんな事を思いながら歩いていたので、莉理が先程から自分に話しかけていたのに愛は気付くのが遅れてしまった。

「愛ちゃん！」

突然の大音量に、我に返ると同時に驚きの声を上げてしまう。

「な、何よ！？ 驚かせないで」

「あ……ゴメン」

声を荒げたのが恥ずかしかったのか、莉理は顔を赤く染めていた。辺りを見るといつの間にか玄関を抜け、東門に差し掛かろうとしているところだった。

「何？」

「那奈美とさつき部屋に行った時偶然会って、今日は一緒に帰ろうって。もう直ぐ来ると思う」

「那奈美……？」

愛は思わず渋い返事をしてしまう。

昨日の莉理の事で電話した時に、冷戦状態でいるのは止めようと話してはいた。とは言え、昨日の今日でいきなり元通りになるのは無理だった。今日も朝ちよつと挨拶ただけで、那奈美とは一度も会話していない。

「駄目かな？」

上目遣いで愛を見上げてくるその様は子犬のようで可愛かった。返事にちよつと詰まってしまう。

正直微妙な関係になっていくということもだけど、一番の問題は那奈美が同行することで、今日の作戦への支障がないかどうかだっ

た。

そればかりは愛には予想が付かない。なので、修司に確認するべきか少し迷う。だがその時間が無駄だったのか、気付くと「おい」と叫びながら那奈美が玄関の方から走り寄って来ていた。

琢真の謹慎が解けるまでは、愛が莉理と一緒に帰るといのは那奈美も渋々だが賛成している事だった。なので今、愛が隣にいる事は予想がついていた筈だ。

それなのに一緒に帰ろうと言うのは、那奈美の方はもう愛に対してのわだかまりはないという事の証明だろうか。

那奈美はそのまま合流すると、莉理と会話した後、愛に少し目配せをしてきた。

(とりあえず莉理の前では、もういつも通りでいようという事ね…)

その案には特に反対する理由もないので、愛は努めていつもと同じにしようと決めた。

「え？ 那奈美。今日携帯忘れてたの？」

「うん、そうなんだよ……自分もさつき気付いたんだけどね」

東門を出てから三人肩を並べて帰っていた。特に他意はなく、自然と莉理を挟み込む形になっていた。

主に話題を振っているのは那奈美で、それに相槌を打つ莉理、それを聞きながら時折突っ込みを入れる愛という構図になっていた。

愛と那奈美のポジションがいつもと違うだけで、特に雰囲気に変わりは無かったので居心地は悪くなかった。

今日は翔子は居ないけど、それはそんなに珍しい事ではない。あの子は放課後はいつも遊びまわって、部活に入っている莉理と下校を一緒にする事は滅多にない筈だったからだ。

そのまま、暫く三人で談笑しながら歩いていった。

最初は心配だった那奈美の存在だったけれど、特に支障なくここまで来れていたの、心配しすぎだったかなと愛は苦笑した。

矢先の事だった。

やはり那奈美は存在は、今日に限っては凶だった。唐突に、那奈美が買物に付き合っつて言い出したのだ。

愛は慌ててそれを断らせようとすも、その前に莉理が答えてしまふ。

「うん、あんまり遅くならないならいいよ」

「ホント？　ありがと」

もう二人の中では合意が取られてしまった。

だが、それだけは拙い。非常に拙い。この先のポイントで琢真や修司も控えているのだ。

なので、愛は何とか考え直させようと、

「きよ、今日は止めた方が良くないんじゃない？」

とか、

「ほら、今日はもう金曜日だし、ら、来週にした方が良くないと思うわよ？」

とか、

「そういえば、翔子は？　翔子にお願いしてみたら？」

とか、

「莉理は門限あるんだから、何があるか分からないよ？　もう帰っておいた方が良くないんじゃない？」

等と、自分でも良く分からない理由で考え直すように、あれこれ言ってみたものの、どの意見にも二人は感銘を受けなかったようだった。

それどころか、那奈美は徐々に苛立ち始めていた。何でそんなに嫌がるの？　ってことなんだろうけど、気持ちは分かるけどもこちらの気持ちも察して欲しかった。

なお、翔子は今日用事があると言っつてとつくの昔に帰っつてしまっつていた様だ。こんな大事な時に使えない友人に愛は内心腹を立てる。莉理はそんな二人を不安げな様子で見守っつていたが、どっちに付

いたものか迷っているようだった。

だが、那奈美は愛の様子は構いなしに、

「そんなに言うなら莉理と二人で行くから、愛は来なくてもいいよ」と、莉理の手を引つ張り駅の方に歩いて行ってしまった。

冷戦状態にあった事が、間違いなく尾を引いていた。

このまま行かせては拙すぎる。

「ま、待って。アタシも行くわよ、行きます！」

愛にはそう言って後を追う以外、出来ることは無かった。

3

『だから、ゴメンって。那奈美が強引に連れてっちゃってるからどうしようもないのよ』

紛らわしいので緊急時以外は、修司を介して連絡をする事に決めていた筈なのにもかかわらず、突然電話が掛かってきた愛からの『怒らないで聞いてね』という前置きから始まった話を聞いて、琢真は思わず怒鳴り声を上げてしまわずにはいらなかった。

怒るに決まっていた。

莉理をいつもと同じコースに誘導すると言うのは、今日無事に彼女を護衛する上で、必要不可欠のことだったからだ。

ただ、怒ってばかりいても仕方がない。もう事態は動いてしまっているのだ。

とりあえず琢真は、愛に高橋がどこに向かっているのかを聞き出して貰ってから電話を切る。

自分達がそこに行くまでは彼女を頼む、と言いつ残して。愛は申し訳ないとは思っているのだろう。そのお願いには殊勝な返事を返してきた。

琢真はいつもの公園に潜んでいたが、こうしてはいられない。急

いで愛が伝えてきた目的地に向かうことにした。走りながらこの事を修司に連絡する。修司は作戦の司令塔役を担っているからだ。

「コールで繋がる。流石に修司は危機感を感じてくれているようだ。」

その修司に今愛から聞いた話を伝える。修司も初めはその事に苛立ちの声を上げたが、直ぐに冷静さを取り戻すと、

『状況は分かった。お前は直ぐに向かってくれ。あと着いたらもう一度連絡を頼む』

早口にそう琢真に指示してきた。

「了解」とだけ返し琢真は連絡を終える。莉理の近くに控えている筈の佐藤達がどうしているのか気になった。ただ、そちらは修司に任せて自分は一秒でも早く目的地に向かうべきだと思い直し、琢真は全力で街の中心部に向かった。

道中、ちらほらと下校中の生徒とすれ違う。知っている顔がなかったのは幸いした。

謹慎は三日だったが、最終日の放課後を過ぎれば謹慎が解けるのか、それとも0時を回らないと駄目なのかが、琢真には分からなかったからだ。

この前莉理を探しに走った時を思い出すと、もう足が疲労で覆われていた頃の筈だった。その時の爆走で多少は鍛えられたのか？以前よりはずつと足取りは軽かった。

しかし、それでもこの蒸し暑さの中で体力が奪われないという事はない。少しずつ確実に琢真の息は上がっていった。

息が上がりが始めた頃に、ようやく大通りの通りが見えてくる。あの通りまで出れば、街の中心部である駅はもう直ぐそこだった。

愛の伝えてきた目的地は駅南にあるCDショップだったので、駅まで行けばもう目と鼻の先だ。その事を思いやり、再び両足に力を込めようとしたその時、どこからか琢真の名を呼ぶ声があった。

正しくは呼ぶなんて可愛いものじゃない。怒鳴りつけるようなそ

んな声だった。

そして琢真はその怒号にはよく聞き覚えがあった。嫌な気配がヒシヒシと伝わってきていた。足は止めずにその声の方向へ顔を向けた。

そこには予想通り、琢真に向かって爆走して来る池山の姿があった。

まだかなり離れているのに加えて、どうして私服の琢真が判別できたのかは分からないが、あの様子だと間違いなく捕まればそのまま拘束されてしまうのは分かった。それを証明付けるように、怒声がこちらまで響いてきた。

「芳垣~~~~！ お前~~~~謹慎中に~~~~出歩くとは~~~~どういっつもりだ~~~~！！」

明らかに自分を判別しているので、知らない振りをするのは無理なのを確信し、仕方なく琢真はその池山に向かって返答する。

「謹慎は！！ 三日じゃないですか！！ もう！！ 終わりだろ！！」

これで納得してくれるよう期待を込めて叫んだ。が、池山の意見は違ったらしい。

「何だと！？ ふざけるな！！ 謹慎は三日と言つのは！！ 今日一杯までだ！！」

大分声が近くなってきたおり、池山はしきりに「止まれ」と怒鳴っている。

通行人が何事かとこちらを見ているのには気付いたが、気にしている時間はない。

「用事があるので！！ 無理だ！！」

と、琢真は池山の静止に対して声を一度叫び返すと、後はもう何も言わずに逃げるだけだった。

日がゆっくりと落ちていた街を背景に、池山の怒声をBGMにして、琢真は街の中心部になだれ込んでいった。

突然携帯が振動する。

恐らく今日は電話は掛かりっぱなしな一日になることが予想されたので、ポケットには仕舞わず手に持つておくようにしていた。

その為、修司は直ぐに電話に出る事が出来た。

「どうした？」

『

「ふむ……分かった、じゃあそのまま尾行を頼む」

そう告げて修司は通話を切った。

今の電話は、ある人物の尾行をお願いしている金子からだった。尾行対象に動きがあったと言うことで、それは少し修司の予想外の事だったのだが、まあ誤差の範囲だった。

気にすることもないと考えていた矢先、再び携帯が振動する。

「何だ？」

『修司大変だ！！ 今愛から連絡があつて、藍田さんがルートから逸れて駅南のCDショップに向かつてしまったらしい』

「何だと！？ どういう事だ！？」

電話は琢真からだった。その内容に修司は思わず語気が荒くなる。動揺収まらないという声で、琢真が事情を説明する。

何故こんな大事な時に高橋なんて余計なファクターの介在を許したのか！

と、修司は愛に電話して小一時間問い詰めたくなつたが、それは全て終わってから回そう。

「状況は分かった。お前は直ぐに向かってくれ。あと着いたらもう一度連絡を頼む」

そう琢真に伝える。

莉理の行動は、先程とは違う、完全に修司の想定外の出来事だった。非常に拙かった。実際の作戦中にはある程度の突発的要因が入り込む事は、今までの経験から修司も分かっていた事だった。しかし、これに関しては計画自体が瓦解しかねない問題だった。

ただ、まだ方向修正は可能だ。

無論、それは莉理の存在を護衛下に置いているという絶対の前提の上の話だが。

なので、琢真との通話が終わるなり直ぐに、修司は渡辺に連絡を取る。

繋がる何よりも先に、莉理の事を監視できているかを確認した。

「ああ、大丈夫だ。ちゃんと姿を捉えてるよ」

その一言でホッと安心する。それならば問題がない。

急な質問に少し戸惑っている渡辺に、「引き続き尾行を頼む」とお願いして連絡を終えた。

今の情報を琢真に伝えてやろうかとも思ったが、駅南に到着すれば連絡が入る筈なので、後でいいかと考え直していると、再び携帯が振動する。

『

「……何!？」

その電話は、修司達にとって吉と出るか凶と出るか、今の状況では分からなくなった報告だった……。

5

「うわっ、何でこんなに人が多いの!？」

駅前に着くなり、愛はその人ごみの多さに驚きの声を上げてしま

う。

金曜日の夕方という開放感に満ち満ちた日であるのは分かるけど、今日の多さは異常だった。

「あ、愛ちゃん聞いてないの？」

「え？ 何を？」

「今日の夜から『お祭り』が始まるんだよ？ 本番は明日からだけど」

（お祭り……あ！）

莉理に教えられて直ぐには何の事が分からなかったが、携帯のカレンダーを見て愛はようやく理解する。

毎年この時期になると行われている祭りだった。最近は色々あって愛はその事をすっかり忘れてしまっていた。確かに駅周辺を冷静に見回すと、まだ少なかつたがポツポツと屋台の姿も見えた。

それならこの人ごみの多さも頷ける。

今の時間帯は愛達と同年代の姿が多いようだった。恐らく学校帰りに友人達と寄り道しているのだろう。その事自体は別に良かったが、ただこの事が今日の護衛に影響がないかだけが心配だった。

琢真達も今日の事は忘れていたのではないだろうか。

そんな人ごみの間を抜けるように、三人は駅を通って南側に移動する。お目当てのCDショップはその直ぐ先にあった。

駅南は駅北よりも人で溢れていた。出ている屋台の数も北より多い。

「人多いなー」

那奈美が嫌そうな顔でそんな事を呟いている。

お前の所為だろ、と愛は言いたくなる。だが、グツとここは我慢する。あれから何とか機嫌を直して貰えたのに、また損ねてしまっても馬鹿らしいからだ。

そうして、ようやく目的地に着いた。

店内は祭りの影響か、いつもよりも人が多かったが人ごみと言う程ではない。

人ごみはあまり得意ではない莉理は、それに少しホツとしている様子だった。

那奈美は早速お目当ての今日発売というアルバムを探しに行き、莉理もそれに付いて行った。愛はどうするか迷ったが、琢真達に連絡を取りたいと思って同行はせずに、ただ逸れてしまわない様に入り口を出て直ぐの所で、琢真に電話を掛けた。

ガラス張りの店の外から、莉理達の姿を見ながら琢真が出るのを待つ。

でもどれ程待っても、琢真は電話に出なかった。

(何やってんのよ!!)

焦りから徐々に腹が立つてくる。

日頃は滅多にしないご機嫌取りをしていたり、予想外の展開に動揺していたのが原因なのかもしれない。

一向に出ない琢真に苛立ちながらも、愛はリダイアルし続けた時、道路を挟んだ奥の歩道に翔子の姿が見えた。どうやら一人の様で、一体何しているのかと一瞬思ったが、そんな場合ではないと思っ直し視界から消した。

そのまま何度やっても繋がらないので、愛は仕方なく修司にかけようと思っ直した時、買い物が終わったのか二人が出てきてしまった。

「お待たせ、じゃ帰ろっか」

「ああ……えーと、そうね……」

了承しそうになって、それが拙い事に気付く。

もし、琢真達が自分達の姿を確認できていなかったら、このままだと入れ違いになってしまう可能性があったからだ。

「あ、ごめん！ ちょっと待って！ ちょっと連絡しないといけな
い……え!？」

琢真達に連絡を取る時間を貰おうと、二人に断わりながら愛が携帯を見ると、

『充電してください』

の文字が液晶中央に表示されていた。

(こんな時に!?)

そう言えば昨日充電するのを忘れていたかもしれない。十数秒後、無常にも電源が落ちてしまった。

(ど、どうしょ!?)

二人携帯を借りるかどうか迷ったけど、この後何度電話する事になるか分からないと思い、愛は苦渋の選択でコンビニに充電池を飼いに行く事に決めた。

コンビニがここから直ぐ近くにあるのは、不幸中の幸いだった。

二人にその事を伝え、絶対に先に帰らないで待っていて、と念を押してから愛はコンビニに向かった。

6

非常にしつこい池山を何とか振り切る事に成功し、琢真はようやく駅南に辿り付く事が出来た。

どれくらいロスしたのかが気になり駅の時計を確認すると、思ったよりも経過していなかったものの時間は既に一九時前で、空にあった夕日が隠れて徐々に夜が訪れようとしていた。

周囲の人の多さに最初は何事かと思ってしまったが、出展されていた屋台を見て以前見た張り紙を思い出した。

こんな時に重なるなんて運が悪いと思わずにはいられない。

この人の多さではかなり近づかないと莉理を護ることはできないだろう。ただあまり近づきすぎても気付かれる恐れがある。

どうするべきか困った。ただ、何はともあれ先ずは彼女達を発見する事が先だ。その事はそれから考えよう。

琢真はそう思い直し、急いでCDショップに向かった。

CDショップの前で、もう度重なる護衛によって見慣れた莉理の後姿を視認できた時には、ホッと胸を撫で下ろさずにはいられなかった。

何とか無事に見つけられた事に安心したのもつかの間、琢真の表情は曇った。傍に居る筈の、愛の姿が見えなかったからだ。そんな琢真の動揺を他所に、莉理は駅とは反対方向に歩き出した。

（一体どこに行ってるんだ？ 愛は何処へ行った！？ それに高橋は？）

状況が良く分からない。愛の話では高橋もその場にいる筈だったところが、今見る限り高橋の姿もどこにもなかった。

とりあえずどういふ状況を確認するため、携帯を取り出す。

すると、十数件の電話が掛かって来ていた事に気付いた。それらは全て愛からだった。恐らく池山に追われている時にかかってきていたのだろう。全く気付かなかった。

一番最新のものを選択しリダイヤルする。だが、何コール待っても愛には繋がらなかった。

（何やってんだ？ 出るよ！！）

そう怒鳴りたかったが、琢真は我慢して辛抱強く愛が気付くのを待った。しかし、やはり愛が出る気配はない。

仕方ないので莉理後をつけながら、今の状況を修司に報告する事にした。

『なるほど……分かった。お前はそのまま尾行しろ。俺からも愛に連絡を取ってみる』

修司も愛から何も聞いていないのか、琢真の報告に驚いていた。

愛の考えが分からず不安になる。とは言え、修司の言う通り自分

に出来るのはそれだけだ。

「分かった」

と返答して電話を切り、琢真はそのまま莉理の後姿を追った。

莉理を発見したのは道路を挟んだ逆側の歩道からだった。が、流石にそれでは何かあった時に咄嗟の行動がとれないので、今は気をつけながら同じ歩道の少し後ろを歩いていった。

悪いジョークの様な話であるが、連日の経験により琢真は人を尾行する事に手馴れてきていた。それが分かり琢真は思わず自嘲の笑みを浮べる。

ただそのお陰で、今は全く気付かれる様子はなかった。

莉理はそのまま駅からどんどん離れていき、周囲の人も徐々に少なくなっていくた。

(どこに行くつもりだ?)

莉理は駅から躊躇いなく遠ざかって行き、やがて人通りの少ない路地裏に消えていった。

全く意味が分からない。だが、仕方なく琢真もその後を追っていった。

「なるほど……分かった。お前はそのまま尾行しろ。俺からも愛に連絡を取ってみる」

琢真の了解を聞いた後で、修司はすぐさま渡辺達『藍田護衛チーム』に連絡を取る。数コール後渡辺が出たので、莉理の姿を確認出来ているかを修司は先ず確認した。

渡辺は心持ち声を潜めるように、

『ああ、こつちも藍田さんが移動しているのは見えてるよ』
そう答えてきた。それならば良い。

「分かった。引き続き尾行を続けてくれ。後、琢真がその近くにいる筈だ。もしお前らの方がそれが確認できたら、琢真とは違う場所から護衛するように動いてくれ」

そう告げて、渡辺の了解の声を聞いた後、通話を切った。

(愛め……どういっつもりだ!?)

憤りは治まらない。が、怒りは思考を鈍らせる事になるので、数度深く深呼吸して無理やり気持ちを落ちつける。

修司は心が静まってきたのを自覚してから、愛に電話をかけようと通話ボタンに指を掛けたのと同時に、金子からの連絡が入ってくる。

『ごめん修司君。商店街までは姿は見えてたんだけど、人ごみで見失っちゃった!』

「何!?!」

琢真から駅まで祭りが行われている事は聞いていた。

正直、今日がその日だったとは全く知らなかった。

修司の手落ちとも思えるが、そもそも駅には行かない予定だったので、やはり根本的な原因は愛にあると言える。

本格的に多くなるのは、行事が行われる明日からというのは不幸中の幸いだった。とは言っても、人が多いのには変わりはない。

「すまんが……何とか探し出してくれ」

なので、金子の苦労は僥ばれたものの、修司としてはそう告げるしかなかった。

『うう………了解だよ』

少し呻きながらだったが、金子は理解を示した。

本当は金子は何かあった時の為の『藍田護衛チーム』に入りたい程の運動能力を持っている。しかし、如何せんその巨体が尾行には適さない。修司は仕方なく、尾行の警戒が一番緩いと思われる人物の尾行を頼んでいたのだった。

金子との連絡を終えて、今度こそ愛に電話をかける。だが、何コール待っても愛は電話に出る事はなかった。

8

(………遅い！)

祭りの影響で店内は大勢の客で溢れている。

見るとバイトの交代が上手くいってないのか、その大勢の客を一人で捌いているようだ。その所為で遅々として人の列は減らず、店内を客の列でぐるっと一周することになっていた。携帯の充電池一つ買うのに、かれこれ十分も待たされている。

愛はイライラしていたが、深く息を吐き続ける事で何とか精神を保つ。

そうして遂に「お次の方どうぞー」と言う、半ば疲れたような店員の声と共に愛の番が周ってきた。待った時間の五十分の一にも満たない時間で購入を終える。

何だか非常に馬鹿らしくなった。でもこれでもう大丈夫だと、愛は頭を切り替える事にした。

愛は店内を出るとすぐさま充電機のパッケージを破り捨て、携帯に差し込む。

そうして、ようやく莉理達の下に向かった。

いざ二人の居る場所に到着すると、そこには
莉理の姿が無かった。

那奈美が愛の姿を見つけ、「遅いぞ」と半眼で苦情を言ってくる。だが、そんな場合ではない。

「り、莉理は!?!」

愛は慌てて那奈美に尋ねる。

だが、那奈美はあっけらかんと、

「莉理? 何か門限がそろそろ拙いって言うから、先に帰したよ」と、のたまわった。一気に愛の血の気が引く。

琢真とはまだ連絡が取れていない。今自分が離れたら誰も莉理を護衛していない事になるんじゃないか? と考えた後で、愛は渡辺達の存在を思い出す。今や、彼等が護衛してくれている事に期待するしかない。

そんな愛の様子を莉理が居ない事の不満と捉えたのか、

「何だよ、自分がいるからいいだろ?」

と、待っててやったんだ感謝しろよ、と言うような顔で那奈美が言う。

いつもなら、いくらでも感謝してやる。待っててくれたお礼にイチゴのタルトを奢ってやっても良い。

ただ、今、愛はそんな那奈美に対して言いたい言葉は一つだけだった。

それは。

「この、馬鹿っ!?!」

もう那奈美には構ってられない。急いで琢真か修司に連絡を取る必要がある。

そう思い、携帯の電源を入れようとすると、まだ充電が十分じゃないのか中々入らない。このままじゃ拙い。

背に腹は変えられないので、愛は自分の言葉に呆然としている那奈美に携帯を貸してくれとお願いする。

「だから、今日携帯忘れたんだって」

使えない事を言ってきた。再度愛は、最大級の「馬鹿」をお見舞いする。

あまりの大声に、周囲に居た通行人も何事かとこちらを見ていた。何で愛が怒っているのか恐らく分かっている。那奈美に、莉理がどっちに行つたかを聞く。その後愛はその方向に向かって全力で走り出した。

背後で那奈美が何か喚いていたが、今の愛に気にする余裕は無かった。

9

(おかしい……)

この辺りはこの時間帯あまり治安の良い場所ではない。

そんな人気のない裏通りに、莉理は歩を進めていた。

莉理がこの様な場所に足を踏み入れるとは思えなかった。琢真は焦りと驚きでどうしても冷静さを保てないでいた。通行人も殆ど居ないので、身を隠す事が出来ない。その為、かなり間を空けての護衛になっている事もその要因の一つかもしれない。

その小さい莉理の後姿を追いながら琢真は慎重に歩く。莉理の周囲とそして自分の周囲を警戒しながら。もう以前と同じ轍を踏む訳にはいかない。

琢真は冷静に落ち着いて行動するつもりだったが、突然莉理に訪れたその光景を見て思わず駆け出さずにはいられなかった。

「見知らぬ男二人組がふらっと現れて莉理に近づいたかと思えば、その内の一人がいきなり彼女の腕を引つ張るようにして抱きかかえたのだ。」

恐らく突然の事態で訳も分かっていないのだろう。彼女は抵抗しようとしていない。

「何してんだコラああああ!!」

琢真はそう叫びながら、全力で莉理を捕まえている男にタツクルをかます。

「ぐはっ!!」

そのまま吹っ飛んだ男と、こちらの事を驚いた目で見ているもう一人の男を眼前に、莉理を背後に庇いながら割って入った。

男達は間近で見ると如何にも不良然とした、冗談の通じなさそうな人相をしていた。少し怯みはしたものの、莉理を背中に感じ気力を振り絞り、琢真は男たちと対峙する。

突然起こった事に思考がつかないのか、もう一人の男は最初は啞然としていた。やがて理解が追いついたのだろう。その人相の悪い顔を更に人相悪く歪めた。タツクルで吹っ飛んだ男も、胸をさすりながら剣呑な目で立ち上がっていた。

それらにきつく睨み返しながら、琢真は背後の莉理に声を掛ける。「大丈夫? 藍田さん。ここは俺が何とかするから、急いで逃げて

!!」

「……………」
流石に二対一では分が悪すぎる。琢真としては急いで莉理に逃げた欲しかったが、彼女はまだ事態から我に返っていないのか、背後の気配は消えなかった。

その様子に焦れてしまい前方の男達を牽制しながらも、背後の莉理に逃げ出すように強く言おうと、琢真は肩越しに一瞬だけ振り返

る。

「何してるんだ、早く逃げ出せ……って……」

だが、そこに居たのは莉理ではなく、『ブルドックのような女』だった。

その女は、呆然とする琢真に「頭やばくね？」などと言いながら、男達の背後に隠れるように回り込んだ。

男達もその女にいい所を見せようとも思ってるのか、一段と視線の強さが増すと共に、琢真を怒鳴る声も一段と大きくなった。男達が何を言っているのかはイマイチ聞き取れなかったが、その尋常じゃない怒りだけは琢真に伝わってきた。

今回の事は確かに琢真が悪い。人違いで暴力を振るった形になっているのだ。

彼等の怒りも当然だ。ただし、今はこんな事をしている場合じゃなかった。この女が違ったと言う事は、本物はどこか別の場所にいるのだ。

さっきのCDショップだろうか？

琢真はかなり頭がテンパッていたが、急いで戻らないといけないう事だけはハッキリしている。

その為、何としてもこの場を離れたかったが

「こっち来いやー!!」

怒り狂った男達がそれを許してくれる筈も無く。

そのまま琢真は路地裏の死角に引つ張りこまれる。

「すまん。人違いだった。本当にすまん。今度幾らでも付き合おうから、今だけは勘弁してくれないか!？」

何とかそう嘆願してみるが、答えは無言の拳だった。腹に深々と突き刺さったそれが、琢真の酸素を一瞬にして奪う。

そのまま顔に、腹に、肩に、腕に、何度拳を受けただろうか、それでも男達の暴力は収まる気配を全く感じさせないまま、更に苛烈さを増していく。

(…………このままじゃ…………やばい)

身に走る痛み、苦痛の声を上げながら、琢真はこれ以上続いたら意識が保てなくなることを自覚する。

そして、自分の意識を刈り取るに違いない男の大きく振りかぶった一撃を、何とか堪えようと目を瞑って必死に身を硬くする……………
…幾ら待ってもその衝撃が琢真に伝わってくる事は無かった。
数秒待って、琢真はゆっくり目を開ける。

琢真が目を瞑る前に見たのは、怒りで訳分からなくなっている男、笑いながら自分を殴っている男、その様子を楽しげに見ている女と言う光景だった。

しかし今は、自分を庇うようにして立っている男二人、それに警戒するように対峙する男二人、イラついた表情の女。という光景に変わっていた。

「大丈夫か琢真!!」

琢真を庇ってくれているのは、佐藤と渡辺だった。

男達は突然現れたガタイの良い佐藤を警戒しているようだった。

一定の距離を開けて近づいてこようとはしない。

琢真は二人に助かった、と礼を言っただけで支えられながら身を起こしたが、ふと気付く。

「お前ら…………どうして!?! 藍田さんは!?!」

琢真が居なくても二人もここに居ると言う事は、今彼女の傍に居るのは愛だけという事になる。何かあった時に愛だけでは厳しい。何だかんだ言っても愛も女の子なのだ。

渡辺達は琢真の問いに、

「ここにいる理由は、恐らくお前と同じだよ……………」

申し訳無さそうな、疲れたような顔を浮かべながら答えた。隣を見ると佐藤も困ったような微妙な顔をしている。

そう言われると、琢真も何も言えない。見間違えたのは自分も同じだからだ。

だが、このままではいられない。

「すまんお前ら……」

ここを頼んでいいか、と続けようとした琢真の言葉は、俺達に任せて、お前は藍田のところにいけ」

佐藤の言葉によって遮られる。渡辺も隣で頷いていた。

「悪い、助かる」

そう二人に礼を言い、琢真は再び駅前に向かおうと駆け出そうとする。ただ、その前に一つだけ言わなければいけない事を思い出し、こちらを睨みつけている女に向き直る。

渡辺も佐藤も、琢真が何を言いたいのか分かったのだろう。同じように女の方向を向いた。

そして

「「「紛らわしいんだよっ！」「」「」

と言う、三人の怒声が、裏路地中にこだましたのだった。

「好きな女を見間違うなよ!!!」

以前全く同じ言葉を吐いた気がするが、以前と決定的に違つのは修司の怒りが込められている、という点だ。

琢真は不良にボコられたと言うが、話を聞く限り自業自得である。なので修司は琢真の傷の心配などは全くしていなかった。ただし、莉理の事は別だった。

琢真だけならともかく佐藤達も見間違つていたとなると、今は彼女を護衛している人間は愛しからない事になる。こうなったら愛と何としても連絡を取る必要があった。

「俺も連絡を取ってみるが、お前も何としても愛と連絡を取れ!!!」
そう怒鳴るように告げて、修司は一方的に通話を切る。

この場合先ず確認しないといけない事は

「そっちはどうなっている？ 今どこだ？」

急いで吉田達に連絡を取る事だった。

「何だと!? ……藍田の姿はお前らの場所から見えないか？」

そうなるとその事が心配だ。そのため確認したが、答えは否だった。

「もし、藍田の姿が見えたらお前らの一人は藍田に付くようにしてくれ……ああそつだ。あとくれぐれも見つかるなよ？」

吉田と山口にそう言い付けて、連絡を終えた。

どうも後手後手になっている感が否めない。

各人とも本意ではなく状況がそれを許さないのは修司も分かっているが……。

何とか冷静に努めようと、修司は今日何度目かの深呼吸をした。

11

人ごみを押しのけるようにして駅構内を駆け抜ける。

周囲の人達が迷惑そうにこちらを見ていたけど、今は気にしないようにする。

そうして、人の反感をかいながらも、愛は何とか駅北に出ることが出来た。

莉理がここからどこを通過って帰ったのか。

単純に考えれば大通りをそのまま進んで行った筈だけど……。

愛はそう考えながら、流石にもう携帯がつくのではないかと期待を込めて電源を入れてみる。

(……………起動した!!)

起動音を上げながら、ようやく、ようやく携帯が起動した。

それとほぼ同時に、修司から電話が入ってくる。愛は間髪入れずそれに出た。

『やっとな繋がった!! お前今までどうしてたんだ!?!』

出た瞬間、修司の怒鳴り声が携帯から響いた。

確かにこの件は自分が悪いので、その事については愛は何も言い返せなかった。ただ、琢真が莉理を見間違えて見失ったという話に関しては別である。自分も莉理の傍にいられていない事を棚上げして、愛は琢真を罵倒した。

「何やってんのよ、アイツは!! どうやってたら好きな子を見間違えられるの!? ふざけてんじゃないわよっ!!」

『……………まあそれに関しては同意する』

「し、しかも佐藤達まで!! じゃあ今は莉理一人つきりじゃない

「！！ どうすんのよ！！ あいつ等がちゃんと尾行してくれてる事を期待してたのに！！」

「いや、それはお前と連絡が取れなかったからだろ……ん？ 待て、お前今非常に由々しき事を言わなかったか！？ 藍田が一人きりだと！？ どういう事だ。説明しろ」

修司の問いに怒鳴り返すように、こちらの状況を説明する。人ごみの中で怒鳴っているの、愛は周囲の視線を一身に浴びていた。だが完全に頭に血が上っている愛は全く気にしなかった。

「どうしよう？ どうすればいい！？」

どう動くべきか分からず、愛は修司に縋る。

「藍田に連絡を取ってみる。携帯は充電できたんだろう？」

「そっか！！」

目から鱗だった。そう言えばその通りだ。

どうやら自分は頭に血が上り過ぎて冷静になれていないようだ。

(ともかく莉理と連絡を取らないと)

まだ修司は何か言っていたが、愛は気にせず携帯を一方的に切った。

(お願い……出てよ……)

即座に、頼むような思いで莉理に電話をかける。神様仏様を始め、思いつく限りの神様全てに祈っていた。

そのお陰かどうかは不明である。五コール後に莉理と繋がった。

「あ、愛ちゃん。先に帰っちゃってゴメンね。私……」

その平和そうな声を聞き、愛は体全体で安堵した。体中の力が抜けそうになる。

莉理は愛の電話が先に帰った事に対する苦情の電話だと思ったのか、繋がるなり謝ってきた。

「いや、そんな事はどうでもいいから！！ それより莉理今どこにいるー！？」

目下確認すべき事柄はそれしかない。

『え？ 今の場所？ うーんと……』

じれつたい。早く早くと心が急いでいたが、愛は必死に宥めて返答を待った。

『今私がいるのは……え？ きゃっ！』

答えようとした矢先、突然莉理が短い悲鳴を上げた。

愛の心臓がドクンと跳ねる。

「どうしたの!? 莉理!? どうしたの何があった!? 莉理答えて!？」

だが、莉理から返答は無かった。

何故なら、愛の携帯の電源が再び落ちたからだった。物言わぬそれとなつた携帯を憎憎しげに睨みつけるも、内心の焦りはその感情を遙かに凌駕していた。

(どうしよう!! どうしよう!? どうしよう!?)

動悸が止まらない。

頭を抱えてへたり込もうとした愛は、その前に後ろから誰かにガツと腕を掴まれていた。

「愛!! やつと見つけた。 藍田さんと連絡が取れたのか!？」

そこには、ここまで全力で走ってきたのだらう、何故か体中ポロポロで顔は青く腫れ上がっていた琢真が、息を切らしながら立っていた。

愛にとって、今ほど琢真の登場が嬉しかった事はなかったかもしれない。

「愛!! やつと見つけた。 藍田さんと連絡が取れたのか!？」
修司からの連絡を受けて、駅北に出た所で愛の姿を確認し、近づ

いて腕を掴みながら琢真は声をかけた。

振り返った愛は顔中に不安を貼り付けていた。嫌な予感がした。いつもの冗談じみた予感ではなく、本当の意味での嫌な予感だ。

話を聞いて、琢真はそれが正しかったことを知る。

「悲鳴だつて？ 藍田さんの！？」

愛に聞いたことなので確認する必要はなかったが、それでも思わず問い返してしまう。

「そうよ！ どうしよう琢真！？」

今までこんなに焦っている愛を、琢真は見ることがない。

最後の悲鳴を聞いたことが、よほど心配を煽っているのだろう。しきりに「どうしよう」を連呼している。完全に取り乱していた。

気持ちは分かる。琢真も完全にパニックだったからだ。

それでも、対応が考えられたのは、彼女を護ると誓った意志がそうさせたのだろう。

「藍田さんが帰るとしたら、どの道を通るか分かるか？」

明確な判断材料を与えてやると、愛も我に返ることができたのか、騒ぐのを止める。一転して落ち着いた声で、琢真の問いに答えた。

「普通に考えたらこのまま大通りだけど……。今日は人が多いからあの裏道を取ってる可能性もある。あの子は人ごみが苦手だから」

(二ルートか……)

「分かった。俺は裏道から追うから、お前は大通りから彼女を追っ
てくれ」

琢真の言葉に愛が神妙に頷いた。

その愛に、自分の持っている携帯を渡す。

「今度電源がついて彼女の番号を確認したら、俺の携帯で彼女に電
話かける。俺のはまだ当分持つから」

「分かった」

愛が頷くのを
見てから、

「あと、修司に今の状況を教えといてくれ」

そう言い残し、琢真は裏道に向かって駆け出した。

上空にはもう夕日の姿は地平の彼方にしか拝めなかった。琢真の周囲には夜の闇が訪れている。

だが、まだ顔の判別は可能だ。今のうちに何としても彼女を探さなくては……。

(頼む……無事でいてくれ、藍田さん!!)

事態はどうなっているのか、琢真に愛の居場所を伝えてから一向に連絡がないのに苛立ちを覚えつつも、修司は一体どうするべきか迷う。

だが、ここを動いてどうなるのか、どこに移動するのが最善か分からない以上、自分が動こうと事態に良い影響を与えられる筈もない。

つまり修司が動いても何の意味もない。ならばここにいる以外ないのだ。

そんな分かりきっている事を、修司は何度も考えながらその度に自嘲している。

事態は明らかに修司の手を離れてしまっている。当初の予定などもはや見る影もない。唯一の救いの材料があるとすれば、吉田達が対象を見失ってない事だけだ。

その人物さえ見失ってなければ、最悪自分が莉理を護ることはできるかもしれない。

そんな思考に修司が没頭していると、手の中にある携帯が振動した。

(誰だ!?)

修司は期待を込めて液晶の画面を見る。

そこには待ち^{琢真}に待っていた人物の名前が表示されていた。急いで通話ボタンを押し耳に当てる。

「遅いぞ! あれからどうなった!? 愛とは合流出来たのか!?!」
『……修司、悪いけど琢真じゃないわ。アタシよ』

「愛!？」

もう一度液晶の画面を確認すると、やはり琢真の名前が表示されている。と言う事は琢真からの携帯からかけられたのは間違いないでも、電話の相手は愛だった。

どうして琢真の携帯をお前が持っている？ 等聞きたいことは色々あったが、

「藍田はどうした？」

今はそれだけを確認した。

愛はどうやら移動中らしい。荒い息遣いが聞こえてくる。

いまいち要領を得ない愛の説明だった。ただ、大方の事態は理解できた。

(琢真と連絡が取れないのは良くないが……まあこの場合仕方ないか……)

「分かった。お前はそのまま大通りを……」

直進してくれ、と続けた言葉は、直後愛の驚愕の悲鳴によってかき消された。

「愛!？ どうした愛!！」

だが、愛からの返事はなく、通話はそのまま切れる。

愛が悲鳴を上げるなど、尋常な出来事では考えられない。何か深刻な出来事が、愛の目の前で起こったのだ。

修司は慌ててかけ直そうとする。しかし、その行動を起こす前に金子から電話が差し込まれた。

(こんな時に!!)

と思ったが、出ないわけにはいかない。語気が荒くなってしまっているのはどうしようもなかった。

「どうした!？」

そんな修司の荒い声に、一瞬躊躇った風な金子は、おずおずと報告をしてきた。

『修司君。ターゲットは見つけたよ。今は駅南の本屋にいるよ』

「駅南の本屋……そうか……」

その情報に、修司は頭が冷静になっていくのを感じた。今その場所にいるのであれば、その人物は『X』ではない。分かつてはいたことだが、確証が得られた事は状況を一步前進させた。

次に考えることは、金子をどうするかだ。その人物が関係ない以上、金子に張り付いて貰ってもあまり意味がない。

(こっちに戻ってもらおうか)

とも考える。しかし、何かに使えるかもしれないと考え直し、金子にはそのまま張り付いて貰う事にする。

『うん、分かったよ』

金子は了解し、通話が切れた。

金子の監視している人物が『X』でないと言う事は、修司の推理の確かさを証明する事になった。

恐らく『X』はアイツで間違いないだろう。

そう自分の考えの確かさを確信してから、修司は再び愛に連絡を取った。

愛の悲鳴が何を意味するのか。『X』の正体が分かったとしても、莉理が無事でなければ、何も意味がないのだ。

最悪の想像を振り払いながら、修司はそのまま愛と繋がるのを待ち続けた。

14

目の前の光景に呆然としてしまう。脳裏に琢真から聞いた、あの占い師の話が浮かんでいた。

『莉理が今週中に死ぬ』

正にそれを連想させる出来事が目の前で起こっている。その為愛は柄にもなく思わず悲鳴を上げてしまった。

大通りの歩道に車が一台乗り上げて、道路傍のお店に突っ込んでいた。もう事故から時間が幾分経っているのか、救急車も到着していた。周囲に人だかりの輪ができている。

莉理と逸れてまだそれほどの時間は経っていない。もし莉理が巻き込まれているんだったら、普通に考えれば救急車の到着は早すぎる。ただ、この場所から一番近くにある病院は目と鼻の先だ。到着していてもおかしくはない。

そんな最悪な想像が思い浮かび、愛は一步も動けないでいた。

祭りの影響で人がいつもより多いのが原因だろう。人の輪はびっしりと歩道を埋め、愛の場所からでは、事故にあった人が誰なのか、救急車で運ばれようとしているのは誰なのかがよく見えなかった。

足がすくむ。鼓動の音も煩いくらいだった。

だけどそれでも勇気を振り絞り、愛はゆっくりと人の輪に近づいて周囲に居た人に事情を知らないか尋ねた。

話しかけたのは中年の男性だったが、運良く一部始終を見ていた人だったらしい。訳知り顔で事情を話してくれた。

どうやら飲酒運転による事故だそうだ。急に対向車線を越えたかと思っただけのまま歩道に乗り上げて店先に突っ込んだのだと言う。そんな話をどこか得意げに話してくれる。だが、愛が聞きたいのはそんなことではない。

「ひ、被害者は？ 巻き込まれた人とか、怪我をした人は居るの？」

男性は愛の剣幕に気圧されたように引きつった顔を浮かべて、

「え？ け、怪我人だったら……あ。今運ばれている人だよ」

そう言っつて、指を刺すのも悪いと思っただらう。顎先を軽く振った。

ただ、愛の背では良く見えなかったので、申し訳ないが男性の肩を借り、背中に強引に負ぶさるようにして両肩を手で掴んで腕を伸ばす。

男性は抱きついた時に、動揺したような声を上げていたがそれは

無視して、愛は人垣の上から今運ばれているという人を見つめる。

「……………」
「う、運転手だそうだよ。さっき救急隊員の声が聞こえてきたけど、鞭打ちらしいね」

下から男性の声が聞こえてくる。

その話の通り、今救急隊員に担架に乗せられ運ばれているのは、運転手と思われる中年のおっさんだった。

「他の被害者は？」

「いや、お店ももう閉まってたらしいから、それは居なかったそうだよ」

「そう……良かった」

「？」

どうやら莉理とは関係なかったらしい。愛にどっと安心が襲ってくる。

そのまま男性の肩を降り、「ありがと」と礼を言ってその場を離れた。

その時、修司からの電話が琢真の携帯に掛かってくる。

『愛！ さっきの悲鳴はどうした！？ 何があった！？』

修司の声には心配の色で彩られていた。そんな修司に事情を説明する。

「だから、多分莉理は裏通りを進んだんだと思う。多分莉理が通った時はもう事故は起こっていた筈だから」

『そうだな。その可能性は高いだろう』

愛の予想に修司も肯定する。

もう琢真は合流しているのだろうか？ 自分もそちらに移動すべきか、修司に尋ねる。

『いや、そちらは琢真に任せて、お前は念の為にそのまま進んでくれ。反対側の歩道は封鎖されていないのだろうか？』

修司の言葉を聞いて視線を送ると、片側が封鎖されているので人

の数は多かったが、反対側は通行可能なようだった。
移動は大変そうだが。しかし、修司には了承の返事を返した。
電話を切ると、その人の波に向かって愛は再び走り出した。

15

日の暮れかけた裏通りは、その元来の薄暗さと合わせて、街灯の明かりでもなければかなり近づかないと人の顔など選別できない程の暗さだった。

駅近くの所はまだちらほらと人の姿も見かけていたが、ある程度離れると人とすれ違うことは殆どなかった。

走るのにはそちらの方が好都合だった。しかし、そちらの方が拙い事もある。

琢真は先程の愛から聞いた話を思い出していた。莉理は電話が切れる直前、悲鳴を上げていたというのだ。

何が起こったのかは分からない。もしかしたら大した事ではなかったのかもしれない。だが、この胸を騒がす焦燥が嫌な想像を掻き立てて止まなかった。

『X』に襲われたんじゃないか!? という想像だ。

その場合、周囲に人が居ないというこの状況は非常に拙かった。

そんな不安に思考を支配されていた為、傷ついた体は悲鳴を上げていたが足を止める事はできなかった。

やがて道が三つ又に分岐している場所に辿り着く。中央は工事中的に立て看板が立てられているので、莉理が通った可能性があるとするれば右と左のどちらかになる。愛ならいざ知らず、まさか莉理が看板を無視して突き抜けるとは思えないからだ。

左を進むと大通りに入る。右に進むと住宅街へと続く道だ。どちらからでも彼女の家に進むことは可能で、後は可能性の問題だった。

左右の道を確認して　　琢真は左に進む事に決めた。

左を少し進むと大通りだという事を考えると、右側は薄暗く女の子が選ぶとは思えなかったからだ。

そして左の道に入り数メートル進んだ所で、

「待て……」

と言う声が琢真の耳に届いた。

聞き覚えのある声に思わず振り向く。

声のした場所には、街灯の明かりに照らされた老婆の姿があった。また発作が起きたのか、両手を地面につけて立ち上がるうとしない。それを見て、琢真は慌てて駆け寄り老婆を助け起こす。近くで見るとやはり老婆の顔は苦痛に歪んでいた。心なしか息も荒い。

「婆さん大丈夫か!？」

琢真の言葉に、老婆は正に必死に顔を上げる。

「……ワシの事は……ええ。……それより」

そこで虚ろな瞳に力を込めて、琢真に縋るように掴まって来る。

「い、今。あの娘がそこを走っていった……。じゃが、その後ろを何者かが付けるように後を追っておった」

「何!？」

『X』だろうか。

だが、そうであるうとなかろうと、どちらにせよ尋常な話ではない。
い。

「藍田さんはそいつから逃げていたのか!？」

「いや、あの娘はその人物には気づいておらん様子じゃった……」

老婆は首を軽く振りながら、右への通路を指し示した。

「この先じゃ……。それほど時間が経っておらん。お主ならすぐに追いつくじゃろ……。申し訳のうが、ワシは追いかけてようとしたんじゃが、体がついてこんかった……。すまぬ」

老婆は自分の体を恨めしそうに抱いた。

「そんな事はない、婆さんが教えてくれて助かった!　後は俺が何とかする!」

前会った時の琢真とは違う。

必ず助ける。その思いを込めて老婆を見つめた。老婆はそんな琢真を、どこか羨ましそうに見ていた。

「頼む……。二人は最初の角を左に曲がって行った。……嫌な気配が消えぬ、何としてもあの娘を助けてやってくれ……。頼む……。もう二度とワシは……」

老婆は不安そうな顔で、そう囁くように言った。

どうして老婆がそこまで莉理のことを心配する様になったのか、その言葉の続きを聞きたかったが今はそんな場合ではない。

だから琢真は、その事に対する感謝と、以前罵倒した事に関する謝罪の気持ちを込めて、

「ああ、任せろ」

一言だけ、力を込めて返した。今はこれ以上言葉は要らない。

彼女に危険が迫っているという事を聞いて、体中の痛み、疲れそんなものは完全にどこかへ吹き飛んでしまった。

老婆をそつと離すと、琢真は振り返らずに彼女が消えていったという通路に向かって駆け出した。

全速力を維持したまま最初の交差点を左に曲がる。

その時どこからか声が聞こえたしたが、気にせず駆け抜けた。

その通路には街灯の明かりはなく、目を凝らさないと無理だったが、かなり先に二つの人影が歩いているのが微かに見えた。

琢真から見て手前の影は、どこか挙動不審に蠢きながら前方の影に近づこうとしている。前方の影はそんな背後の影の存在に気づいていないのか、警戒なく進んでいるようだった。

あれが莉理だろうか？

背後の人影が老婆の言っていた、怪しい人物なのか。

もう少し近づかないと正体は分からなかったが、大声を上げようかと一瞬迷う。人違いだったとしても笑い話で済む。だが、即座にその案は却下し、走るのを止めて早足に代えて気配を消して近づくる事にする。

もし、あの影が莉理と『X』だった場合。自分の行動がどんな劇的な変化を招くか分からない。最悪、取り乱した『X』が莉理に危害を加えないとは限らないからだ。

後ろの影を凝視しながら、琢真はゆっくりとただ可能な限り速く近づいていく。

その影は徐々に前の影と間を詰めているようだった。影の姿が徐々に同じ大きさに重なっていく。

(もう少し……)

もう少しで前の影の服装が確認できる。うちの制服を着ていたら莉理と断定して行動してもいいだろう。こんな時間にこんな裏道を歩く生徒が、そうそう居るはずもない。

前の影は近づいてくる影に気づく素振りもなく、そのまま前方の交差点に達しようとしていた。それを見て、背後の影が一気に間を

詰めていた。

交差点といつてもあの辺りは道は狭く、車は一台がギリギリ通れるほどの幅である。空き家と思われる建物と、今の通路に隣接して建てられているビルの高い塀の所為で、周囲からは死角となつていて、人通りもないので通路に人の姿は頼めない。この暗さもあつて、何か事を起こすのであれば絶好の場所だった。

前方の影はそのまま左に左折する。その時、ようやく影の横顔を捉える事が出来た。

（藍田さん！！）

微かに除いた横顔は、見間違える筈もない彼女だった。

その彼女に嬉々とした様子で、忍び寄る足を駆け足に代えて、何かを掴むように手を伸ばしながら後を追おうとした背後の影を。

。 莉理を追つて交差点を曲がる前に、何とか掴む事に成功した。

彼女を追う事に集中していたのだろう。突然背後から掴まれた事に驚き短い悲鳴を上げていた。

その人物を引っ張りそのまま、ビルの塀にその顔を押し付ける。もがいていたが、腕の関節を決めるとすぐ苦痛の声を上げて大人しくなつた。この蒸し暑さにも関わらず、長袖の服を着ている。その点だけ見ても怪しい人物だった。

「なぜ彼女を追っていた!？」

精一杯のドスを効かせながら、琢真はその人物に問う。

「……………」

だが何も答えようとしない。

なので、掴んでいる肩を塀から引っ張り、再びビルに叩きつける様にして押し付けた。

ドン。

と、体が塀にぶつかった重い音と共に「ぐぎゃ」と醜い悲鳴が上げる。

「もう一度聞く、何で彼女を追っていた!？」

「……し……知らん。何の事だ？」

理由は分からないがこいつは間違ひなく莉理を追っていた。なのに白を切るうとする。どう考えても怪しい。

だが、こいつは『X』ではない筈だ。少なくとも修司が考えていた『X』像とはかけ離れている。

何故なら

その人物を振り向かせ、今度は胸倉を掴みあげて壁に押し付けた際に苦しそうに歪んだその顔は、髪の薄い中年太りしたオッサンのものだったからだ。

修司の話だと『X』はうちの生徒だという事だった。

(だとしたら、彼女を追っていたこの男は一体誰なんだ!?)

「おい、質問に答える! 何故彼女を追っていた!？」

「く……苦しい」

怒りの所為で琢真は手加減が出来なかったし、するつもりもなかった。男は苦痛に顔を歪める。それは男が事情を吐くまで続けるつもりだった。が、琢真がそれを中断する事を余儀なくされた。

不意に琢真の背中に突き飛ばされたような衝撃が襲い、路上に倒れこんでしまったからだ。完全に意識外からの攻撃だったので、全く受身を取ることは出来なかった。

だが男を逃がすわけにはいかない。急いで立ち上がろうとした琢真だったが、何者かが上から押さえ込んだ為、それも叶わなかった。

「誰だっ!？」

邪魔をするな、と琢真は稼動域限界まで首を回し、自分を押さえ込んでいる人間を睨み上げる。

「何をやってるんだ、芳垣!？」

池山だった。

「せ、先生!? 先生! 放してくれ!!! そいつは……!!!」

必死にもがきながら嘆願するが、池山の力は一向に緩まなかった。万力で抑えられているかのようになり、全く動けない。

「……先生？ 学校の先生ですか？ 助けてください。その少年に襲われて……何もしていない私にいきなり暴力を振るったりして！」

「何だつて!？」

男は卑屈な声で池山に助力を願っている。

「ふざけんな!! 何を言ってるやがる!! てめえが……!!」

どこまでも白を切ろうとする男に血が上り、琢真は立ち上がるうと力を込める。しかし、それも池山に潰された。

「芳垣どういう事だ!? お前今謹慎中なんだぞ!？」

その声は、こんな問題を起こして退学にでもなりたいのか! と暗に告げていた。

「違う!! 先生! そいつは今藍田さんの後をコツソリつけてたんだ!! そいつは怪しい!!」

池山に抑えられている為、体の自由は効かない。なので唯一自由の利く口で琢真は必死に池山に訴えた。

「私が人を付けていた? どこにそんな人がいるんです? どうせ親父狩りでもするつもりだったんでしょっ!？」

男は池山の存在があるからか、先程までとは一転して強気な態度をとる。

(こいつは……)

琢真は怒りでどうにかなりそうだった。

池山は二人様子を見比べていたが、やがて琢真の腕に自分の腕を絡ませながらゆっくりと琢真を起き上がらせた。

その様子に一瞬ビクツと身を引く男だったが、腕を掴まれている事に安心したのか、再び嘲笑を顔に貼り付けていた。

「こいつが、とんでもない事をしてしまった様で……。本当に申し訳ありませんでした。こいつを指導する立場にある担任として、深くお詫びさせていただきます」

男に向かつて、池山は深々と頭を下げる。

琢真も頭を強引に抑えられ、下げたくもない頭を下げらされていた。

「そうですね！ 気をつけてください！ そんな不良、然るべき処罰を与えてやって下さい！！」

齒軋りするほどの怒りが沸く。

このままこいつは逃せない、何としても捕まえて白状させないと。だが、顔を上げた池山はそんな琢真を置いて、真剣な顔でとんでもない事を言い出した。

「はい、こいつには人を襲おうとした罪を贖わせさせなければなりません。ご足労をおかけしますが、一緒に交番までこいつを連れて行きましょう」

その言葉に焦ったのは琢真だけではなかった。

何故か男も同様に、目に見えて分かる程焦り出していた。

「い、いえ。そ、そこまでは、するつもりはないので……以後気を付けて頂ければ……。あ、私は急ぎますので後はお願いします……」

男はドモリながらそう言って、この場を去ろうとする。

(警察を嫌がっている……?)

今警察に行けば、明らかに琢真に非があると判断されるだろう。

男が彼女を付けていたのは間違いないが、証拠はないのだ。

(なのに、なぜそこまで嫌がる?)

その事を伝えようと池山の顔を見る。池山は感情の読めない顔で言葉を続けた。

「いえ、実はこいつは今謹慎中の身なのにもかかわらずこんな問題を起こしたのです。反省の色なしという事なので、警察に連れて行くのも当然の事です」

「ぐ……い、いえ……。そ、そこまでしなくても……未来ある若者ですし……」

しどろもどろに答える。

男の額から汗が噴出し、顎先に流れ落ちていた。

「お優しい方です。こいつの事を案じてくれてるのですね。そんな善良な方を襲った罪は償わせなければいけません」

「あ……いえ……そこまでは……」

「交番で事情を少し説明していただくだけで結構です。それ以後はお手を煩わせたりしませんよ……。それとも何か、交番に行くのが拙い理由でもおありですか？」

それまでは正義感の強い人の良い教師を演じていた池山だったが、最後の台詞を吐く時には何ともいえない凄みを全身から醸し出していた。

隣で見ている琢真ですら、それにギョツとしたのだ。真正面で中てられている男は、そんなどころじゃあるまい。

激しく動揺した素振りを見せて 何気なく上着のポケットに手をつっ込んだのを、琢真は見落とさなかった。

「何持つてやがる!？」

実は先ほどから池山に掴まれていた腕は、単に添えられている程度の力になっていた。琢真は咄嗟に男に飛びつき、その腕を掴み上げる。

その手には……女性もの下着が握られていた。

「……下着？」

予想外のものに、池山と二人で思わず呆けてしまう。

男はその一瞬の隙について、脱兎の如くこの場を逃げ去っていく。数瞬遅れて、

『え？ 痴漢撲滅……？ 何すかこれ』

『んー、俺も良くわかんないんだけど、店長に頼まれてたの忘れててさ』

以前バイト先で木村とやり取りが、琢真の脳裏に浮かび上がった。

「せ、先生！！ アイツ痴漢魔だ！！ 最近この辺に出るって言う！」

池山に向かってその事を叫び教える。

池山もその存在を知っていたのか、理解の色を顔に浮かべると、そのまま物凄い表情と勢いで男を追っていった。

琢真も慌てて追ったが、とてもその速度には追いつかない。

体育教師の池山と、中年太りしたオッサンでは運動性が違いすぎる。たちまち池山に追いつかれて、袖口を掴まれたかと思うと、その直後物凄い勢いで男の体が跳ね上がり、次の瞬間にはそのまま背中から地面に叩きつけられていた。

（なんつーすげえ、背負い投げ！！）

男はそのあまりの衝撃に意識を失ったのか、ぐったりと目を回していた。

その様子を見届けて、池山が立ち上がる。

「先生……………信じてくれたんだな」

琢真の胸には、自分の言葉を信じてくれた事に対する、感謝の気持ち溢れていた。

「何を言っているんだ。当たり前だろう。教師が自分の生徒を信じんでどうする」

池山は、何を馬鹿な事を言っているんだという表情で首を振った。そんな池山に、

「……………俺は、あんな事件を起こした生徒だぞ？ 嘘を付いてるかもしれないじゃないか」

琢真はそんな言葉を投げかける。しかし、池山は不適な表情を浮かべると、

「その時は……………一緒に責任を取ればいい。大人ってのはそう言うもんだ」

笑いながらそう言った。

不覚にも、琢真は池山を格好いいと思ってしまった。同時に何か熱いものが胸を打つ。

「……悪いがお前、ちよつと一っ走り交番に行つて、警官を連れてきてくれんか？」

「あ、ああ良いけど、つて言うか、携帯で通報すれば……」

そこまで言いかけて、琢真は今がそんな状況でない事を思い出した。

（そつだ!! 藍田さん!?!）

そして、「俺は今、携帯持つてなくてなー」などと言っている池山を置き去りに、「先生、後は任せた!」と言い残すと、琢真は再び彼女が消えていった方に向かって駆け出した。

背後から焦つた声で自分を呼び止める池山の声が聞こえてきたが、心の中で詫びながらも、琢真は決して速度を緩める事はなかった。

間話 公園

少女は家路を急いでいた。

帰路途中にある公園にたどり着いた頃には、周囲は夕暮れの橙から夜の紺へと移ろっており、辺りに設置されている街灯も灯り始めている。

いつもなら下校中の学生や帰宅中の会社員などの姿もあるのだが、今日に限っては人っ子一人見受けられない。その事が微妙に焦燥感を煽るのか、自然と足早になってしまっていた。

公園を横断し、出口付近に差し掛かったところで少女は一息入れる。

公園の中央に設置されている時計を見て、どうやら門限に合いそうな事が分かったからではなく、単に息が上がってしまったからだ。

一旦足を止めて、乱れた息を整える。普段あまり運動しないため直ぐに体力が切れる自分の体を、少女は恨めしそうに見つめた。

誰もいない公園に、少女の呼吸音だけが響く。

数度の深呼吸により息を整え、再び歩き出そうとした時に、何か微かな物音が聞こえてきた気がした。思わず立ち止まりゆっくりと左右を見回す。特に変わった様子はない。

気のせいだったと、少女は気を取り直して再び歩き始めようとした矢先。

「藍田さん……」

急に背後から声を掛けられる。小さな声だったが、シンとした公園に音量を阻害するものではなく、少女の耳にも届いた。

驚きから足は止まってしまっても、悲鳴を抑える事には成功する。
動悸が乱れた胸そのままに、恐々と振り返ろうとするが。
少女に出来たのは、勢いよく迫ってくる煌めきを、視界の端に映
す事だけだった……。

その人物が莉理に向かって、何かを突き刺そうとした腕が伸びきる前に、修司はその肩を掴み引く事に成功する。

「きゃっ」

莉理がそれから僅かに遅れて反応して、地面に尻餅をついた。予想していた通り、その人物は修司が潜伏していた公園で事を起こした。

直前に掛かってきた愛からの、莉理の居場所を知らせる連絡もあり、こうして間一髪だったが修司は彼女に危害を加えられるのを防ぐ事が出来たのだった。

「危ないところだったな」

修司はそう声をかけて、莉理の手を取り助け起こす。

その人物は、持っていた鞆の中に慌てて何かを隠した。

修司はその様子を見ていたが、特に何も言わなかった。

その人物……『X』の周囲には、修司とそして吉田と山口の姿があった。

三人で『X』を囲むようにしながら立っていた。その輪の中からこのまま出すつもりなど欠片もなかった。

少なくとも莉理がこの場に居る間は。

「やはり、君だったか」

『X』はそう呟いた修司を、憎憎しげに睨み付けている。

「え？ な、何？ や、矢向君？」

莉理は一人、何が起こったのか分からないのか、疑問符を頭の上に浮かべている。

だが修司は何も教えてやるつもりはなかった。琢真はそれを望むに違いないからだ。

「何でもない。藍田。お前はそろそろ門限なのだろう？ 急がなくて良いのか？」

「え……でも……？」

莉理は『X』の事を心配そうに見る。『X』はその視線から避けるようにそつぽを向いた。

「ああ、大丈夫お前は気にしなくて良い。俺は少し用があるんだ。安心しろ、もうすぐここには愛も来る」

その言葉に安心したのか、まだ良く分かってない顔だったが、修司達に別れの言葉を告げると、足を少し引きずる様にして莉理はゆっくりと公園から出て行った。

（転んだ時に膝でも擦りむいたのか？）

修司は少し気になったものの、その程度なら許容範囲だろうと思いつく。そのままでは『X』に何をされていたのか分からなかったのだ。

『X』は、莉理を横目で見送っていた修司に、「どうしてここに居るのか」という目を向けている。

それはそうだろう。『X』は、修司の事を全く考慮していなかった筈だ。

修司が莉理を送って行ったのは琢真が謹慎処分を受けた一日だけで、それ以後に行った情報収集活動でも表立って行動した事はないからだ。

「藍田は帰らせて貰ったが問題ないな？ 彼女を傷つけるのは本意ではないのにな」

もちろん琢真の、だ。

正直修司は莉理の心まではカバーできないし、するつもりもなかった。琢真がそれを望むからの配慮に過ぎない。

まあ、修司の内心がどうであれ、『X』自身には全く関係のない

事だ。計画が失敗したという事実は、『X』にとって変わらない事実だからだ。

『X』は前方の修司を警戒しながら、三人の輪を逃げ出そうと世話しなく視線が動き、隙を探っている。

しかし、それを許すほど三人も鈍臭くはない。

吉田も山口も厳しい目で『X』を警戒している。万が一にも逃げられない。

「……女の子一人相手に、良い趣味ね」

『X』はその状況に開き直ったのか、修司を睨み付けながらそう呟いた。

いかにも女の子然とした容姿だが、胆力はあるらしい。堂々と構えており、もう逃げようとはしていない。

「……今、悲鳴を上げたらどうなるのかしら？」

その言葉に、吉田達がギクリとビクついていた。

それを目で制しながら、

「ふむ……それをして困るのは、君の方ではないのか？」

修司は冷静に返す。

正直、ハツタリだった。どう見てもこの状況で人を呼ばれて困るのは修司達だ。

だが、そういう不安は彼女には見せない。

『X』に対して何か秘密を握っていると思わせることで、その行動を防ぐ為だった。

修司のハツタリは通じた。『X』は警戒の目を強くしながら、違う事を探ねてくる。

「私を……付けてたの？」

「ああ……そうだ。人を付けると言うのは、君だけの専売特許と言う訳ではない」

「そうね……アナタの友人の変質者芳垣もいるしね」

互いに冷笑を浮かべながら言葉の応戦をする。

「な、何ていう沸点の低い争いだ……」

「お、俺たち向きじゃないな……」

修司達の様子を隣で見ている『X監視チーム』の二人は、怯えながら囁きあっていた。

その様子を横目で一瞥して、修司は再び『X』を見る。

身長之差から見下ろす形になっていたが、彼女はそれに気圧されている様には見えなかった。

「藍田に付きまとうのは、もう止めてくれないか？」

彼女と舌戦を行うのは楽しそうではあった。しかし、今はそんな時間をかけてもいられない。なので、修司は単刀直入に切り出した。

「何の事かしら？」

『X』は白を切る。

「私は、あの子の落し物を返そうと思っただけよ」

そう言って、地面に置いていた鞆から一冊のノートを取り出した。

（あれが、琢真が言っていた藍田のノートか……）

「そうか、じゃあ俺が藍田に返しといてやろう」

「いえ、これは日記のようだから、男の子には渡せないわ。あの子に悪いもの」

「ふむ、そうか……？ それもそうだな」

「分かってくれた？ じゃあ……」

修司の賛同の声に活路を見出したのだろう。

だが、それは甘いというものだ。ここで逃がす訳はない。

「だから、それはアイツから返して貰おう」

修司は、莉理が出て行った出口とは反対の出口を顎で示す。

そこには、ほうほうの態で近づいてくる愛の姿があった。

「アイツは藍田の友人だ。しかもこの後彼女の家に行く用事がある。アイツに渡して貰うのが良いと思うが？」

勝手に愛の用事をでっち上げる。が、効果はあった様で舌打ちこそしなかったが、『X』は苦々しい顔を浮かべ、ノートを持つ手は震えていた。

「はあはあ……。莉理は!？」

愛の第一声はそれだった。声が緊張している。よほど心配だったのだろう。

「無事に帰った」と教えると、目に見えて安心しているのが分かった。

そして、どっと疲れが襲ってきた様な表情になるが、『X』の姿を見て再び気を張っていた。

「何でこの子がここに……?」

愛は予想していなかった人物の登場に眉を顰めていたが、やがて驚きの声を上げる。

「……あ、え、何? まさか……この子が『X』だったの!?!」

修司は、その正体を愛には教えていなかった。

改めて一同の視線が集まったその焦点位置には。

以前莉理と下校していた、文芸部の少女の姿があった。

「さあ、こいつにノートを渡してくれ」

修司が少女に向かって、何かを言う。

(ノート？ 何？)

少女は震える手で、愛にそのノートを渡してきた。

正直、愛はこれが何なのか意味は分からなかったが、とりあえず空気を読んで受け取っておいた。

「すまん」

「私、これでもう用事ないから……」

少女は、礼を言う修司に冷たい一瞥をくれて、そのまま愛が入ってきた公園の出口に向かおうとする。

だけど、それを通せんぼする様に吉田と山口が前に回りこんだ。

そして彼女の背中に、

「もう一度言おう、藍田に近づくのは止めてくれないか？」

修司が声をかける。

そうだった。意外な顔につい毒気を抜かれてしまっていたけど、こいつは莉理をつけて、琢真をあんな目に合わせた張本人なんだという事を思い出す。

愛は抜け気味だった気合をもう一度込めながら少女の返答を待った。

「だから、何の事が分からない」

「さつきから、嘘ばっか付くな！ 俺達はずっと君が藍田をつけているところを見てたんだよ！」

本当に知らないのでは、と愛が思ってしまう程淡々と嘘を吐く態

度を見て、吉田が怒りの声を上げていた。

(そうか、吉田達は彼女を監視していたのね)

という事は、修司はもしかしてとっくに『X』の正体に気づいていたという事だろうか？

だとすれば、何故自分達に黙っていたのか、と愛は怒鳴り散らしたくなった。今は何とかその衝動を押さえ込む。

「だから、ノートを渡すタイミングを図っていたって言うてるでしょ……！」

少女にそんな大きな声が出るとは思っていなかった愛は、思わず首を竦めてしまう。

(虫も殺さぬ……いや、虫は殺してそうね……。まあ、いつもはそんな大人しそうな感じなのに)

莉理の傍にいるのを見かけるとの時とのあまりの違いに、愛は少し恐怖心を抱く。

こんな一面を持っていたのかと。

(ん？ 莉理の傍に……そうよ！ この子莉理の友達じゃない！ それなのに莉理を狙ってたって言うの？)

「ふむ……。幾つか聞きたい事があるんだが、いいか？」

「もう帰るって言うてる！」

修司の問いに、拒絶の意を表す少女だったが、そんな事はお構い無しに修司は続けた。

「君は修学旅行の写真を、いつ選んだ？」

「はあ？ 忘れた。……もういい？」

「君はそう言うだろうと思って、予め君の友人に話しを聞いてきた。先々週の月曜日を選びに行ったらいいな？ 張り出された当日に行くとは、よほど自分の写真が欲しかったのか？ それとも、それ以外の写真か？ 例えるなら……好きな男の写真など」

「アンタには関係ない！ それに当日行くのなんて珍しくない！ 皆行ってる！」

その通り。愛も当日に見に行っていた。

「こつこつというのは雰囲気だ。写真が張り出されたから、ちょっと行ってみようっていう。」

女の子は大抵当日に行ってたと思う。期間直前まで行っていない人なんて、男でも一握りしかないんじゃないか。

欲しい写真莉理のが有るくせに……。琢真には呆れるばかりだ。

「ふむ……ならば仕方ない、違う話をしよう。先週の木曜日の話だ」
「……………」

今までは帰ると煩かった『X』が、突然黙り込んだ。

先週の木曜日に、何かあったのだろうか。

「君のクラス、2・Fの木曜日の最終授業は、選択科目だな？」

「時間割見ないと分からない」

「調べたから間違いない。そして、君は美術を選択している」

「……気持ち悪い」

少女は心底気持ち悪そうに、修司に侮蔑の目を向けていた。

確かに自分の事を、自分が知らないところで調べられるのは気持ち悪い事だろう。

愛も経験があるのでその気持ちはよく分かった。

「そして君は、その日は日直だった。なので、美術の先生に授業で使った花への水遣りを頼まれていたね？　ただ帰りのHRがあるの
で、君は放課後にそれを行う事にした」

「………だったら何？」

何を言うつつもりなのかと、少女は警戒するように修司を見ている。

修司は僅かに間をおいた後、言った。

「その日の放課後。美術室のベランダの下に居た藍田に、植木鉢が落下してきたらしい……。これは君の仕業だな？」

愛もその話は聞いていた。琢真が言っていた話だ。

（だけど、この子が落としたですって!?!）

愛は信じられない思いだった。見ると吉田達も同じような顔をしている。どうやら吉田達もただ少女をつけさせられていただけで、事情は聞いていないらしい。

「はあ？ 何で私がそんな事を？ 知らないわよ」

全くの事実無根な話だ、と言う風な口調で少女は否定する。

愛も流石にそれは無いんじゃないか、という視線を修司に送る。

「恐らく、これは君が周到に計画して行った訳じゃない。突発的な衝動だった筈だ。計画していたとすると、あまりに杜撰過ぎるからな」

「……………」

「君は水遣りの最中。ある出来事を目撃してしまった。それに激しく感情が乱され、落とした。もしかしたら故意にはなかったのかもしれない。その出来事の衝撃が大きすぎて、思わず落としてしまったという可能性もあるだろう。当てるつもりもなかったんじゃないか？」

「……………知らない。放課後なら美術部員かもしれないでしょ」

修司はその少女の言葉に、一度ため息を吐く。

僅かに黒ぶち眼鏡を指で調整すると、再び話し出した。

「話は少し変わるが。その落とした植木鉢どうなったと思う？」

「知らないわよそんな事。私は関係ないって言ってるでしょ!？」

「高橋や田中ならそのままにしておくだろうが、藍田は？ 落ちて壊れてしまったそれを、どうしたと思う？」

「……………」

「藍田は律儀に、美術の教師に花が潰れてしまった事を報告しに行き、割れた植木鉢はその教師と一緒に処理したそうだ。その割れた植木鉢はそのままゴミ捨て場に捨てた訳だが、君は学校のゴミ回収日が何時か知ってるか？」

「……………」

そう言われると、いつ回収されているのかは愛も知らない。

以前は焼却炉で燃えるゴミは燃やされていたそうだけど。燃えな

いゴミは？

「可燃ゴミは、水曜と土曜日の週二回。不燃ゴミは木曜だ。大体昼過ぎに業者に回収されているらしい。そしてこの植木鉢は、放課後に割れた。当然、その日の回収は無理だったろう」

「……何が言いたいのか？」

「鈍いな。つまりもしその植木鉢が、まだ回収されていなかったとしたら？ しかも保管されているとしたら？ 探すのは意外と簡単だったらしいぞ？ 割れた植木鉢はそれしかなかったらしいからな」

「ゴミを漁ったとしても言うのだろうか？ 修司が？ 愛は驚く。」

「人に見られて恥ずかしかつたんだぞ！ もう二度とゴメンだ！」

「どうやら修司に押し付けられたらしい、吉田が叫んだ。」

基本的に、吉田は琢真以上に汚れ役を押し付けられている。

全愛が泣いた。

「偶然落ちたのなら仕方ないだろうが、ワザと落としたのなら話は別だ。立派な傷害罪だ。警察にこの植木鉢渡していいのか？ 警察で指紋を調べたら、どの指紋が新しいかなんてすぐに判るぞ？ 吉田には余計な指紋が付かない様、皮手袋の上にゴム手袋を付けさせていたから、一番上の指紋は美術教師のものだろう。藍田や高橋、田中のもあるかもしれない。じゃあその下は？ しかも、君はその時間帯に水遣りを頼まれていた」

そうなると、彼女が植木鉢を落としたと、警察が考えてもおかしくない。

「この事実を告げられて動揺しているのかと思って少女の顔を見ると、彼女はどこ吹く風の様子で淡々と言った。」

「植木鉢を落とした事は認めるわ。でも手が滑っただけよ？ 藍田さんを狙ったなんてとんでもない」

（さつきは知らないって言うておいていけしゃあしゃあと、この女……）

そろそろ、愛も彼女の本性が分かってきた。この女は性質が悪い。

「貴方はさつきから私を犯人扱いしているけど、動機は何よ？ 私
が友達の藍田さんにそんな事をする理由があるっていつの？」

確かにその理由は愛も聞きたかった。

愛がこの少女に感じていた印象は、莉理とは仲良しという感じでは
なかったけど普通に友達、というものだったからだ。どうすれば
その友達を、襲うなんて事を考えられるようになるのか。

「例えばだが……。君は好意を抱いている異性がいるのではないか
？ 例えば……。同じクラスの尾登とか」

「……………！！」

修司の仮説に、少女は体を硬直させたように見える。

(なるほど男か……)

それならまあ、分からないでもない。

あくまで友達を敬遠する、というところまでだけ。

(でも、ここで尾登が出てくるとはね……)

愛の中でストーカー犯から一転、ストーカーの想い人に転進した、
尾登の事を思い浮かべる。

確かに悪くない素材なので、彼女が惚れていてもおかしくはない。

「……………別に、好きじゃない」

そう答えた時には、少女はさつきまでの無表情な顔に戻っていた。

「ふむ……。そうか。ちょっと待ってくれ。少し電話を掛ける」

は？ いきなりこの男は何を言い出すのか？

愛が分からなかったので、当然少女も分からなかったのだろう。

怪訝そうな顔をしている。

修司はそのままどこかに電話を掛け始めた。

「俺だ。……。ああ、接近して声を掛けてくれ。そして電話に出てく
れるよう頼んでくれないか？ ああ、頼む」

そこまで言うと、修司は耳に当てていた携帯を戻した。

「君に言っておく事がある。今回俺達が尾行していたのは君だけじ
ゃない。今回のターゲットは三人だった。君と、藍田、そしてもう

一人。誰だか分かるか？ 今その人物に電話に出て貰うから、もう一度同じ台詞が聞きたい」
「えっ!？」

この場にも作戦会議の場にもいなかった金子は、どうやら尾登の尾行を担当していたらしい。少女もそれに思い至ったのか、先程までの様子とは違って変わって無表情でも怒りでもない、初めて動揺している声を上げた。

「ふむ……そろそろ交渉を終えた頃か。直に掛かってくるな」
「……………やめてよ」

少女はか細い声で、止める様に願う。

「ならばもう一度聞こう、君は尾登に好意を抱いているな？」
「……………」

少女は肯定こそしなかったが、この状況で否定をしないと云う事は、肯定したのと同じである。

女の子だけならいざ知らず、関係の無い男達の前でそれを明かされたこの時ばかりは、愛はこの少女に対して同情の念が沸く。
そして思っ。

(やはり、この男は……ドSだ)
修司

「これが君の動機だ。ああ、安心していい。先程の電話は嘘だ。明日の天気も聞いていた。明日は晴れだそうぞ？ 良かったな祭りが中止にならなくて」

「……………」

少女は、修司を睨み殺さんとする程の視線を向けている。

これは仕方ない。愛でもそうするに違いない。

「恐らく、君は修学旅行の藍田の写真を見たんだろう。最初は藍田の写真が何となく目に止まっただけなんだろうが、その内に君は気づいた。尾登が彼女の写真の殆どに写っている事に。ただ好きな相手だ。尾登がストーカーだとは考えなかった。君はこう考えた。尾登は藍田が好きなんじゃないか、と」

「……………」
愛には推測が当たっているのか当たってないかは、少女の虚ろな目からは判断できない。

「だからどうしても、藍田の事が許せなかった。なので君は藍田の事を尾行し始めた。弱みでも握ろうとしたのだろう。そしてこの頃に、デジカメを友人から借りたな？ ああ、否定しても無駄だ。言質は取っている。もしかしたら藍田と一緒に帰った時に、隠れて撮影した……なんて事があったのではないか？ それを何かに使おうと考えて」

「……………」
「まあ、最初はその程度だったのだろうが。その内に君は、尾登が藍田に告白している現場を見てしまう」

「……………」
僅かに、少女の瞳が怒りの色で彩られた気がした。

その時の事を思い出していたのだろうか。
「ただ君は、美術室……四階に居て、二人の声が聞こえなかった。そして尾登があまりに毅然としていたので、遠目に見ても告白の結果が分からなかった。下で見ていた琢真も、人伝に聞くまでは勘違いしていたらしいからな。君も同じだったのだろう。だから君は更に尾行を続けた。ただし、今度は弱みを握ると言うより、結果を知る為だ」

「……………」
「ただ、それから何日も続けている内に、尾登の告白が失敗した事が分かってきた。それはそうだ。告白が上手くいっていたとしたら、その後一緒に帰ったり、噂が聞こえてきたりしない訳は無い」

尾登は一部の間の女子内で人気がある。もし付き合いだしたとしたら、噂にはなった事だろう。

少なくとも、愛の耳には入ってきていたのは間違いない。

「ただそうすると、それはつまり尾登が振られたという事だ。君は次第に腹が立ってきた。藍田が尾登を傷つけた事を許せなかったか

らだ。自分が好きな人を、あつさり振った事も」

まるで少女の内面を覗いていた様な事を言った後、俺には理解できない感情だが、と真面目くさった顔で修司は続けた。

「だから何とか、藍田にその事を思い知らせようと決めしたが、君はその内に琢真の存在を知る」

ようやく琢真が出てきた。

修司や少女はもちろんの事。吉田や山口が必死に内容を理解しようと努めている様子の中、既に愛は半ば観戦モードに移行していた。口を挟める材料がないからだ。

「さぞかし邪魔だったろう。その所為で藍田に何も出来ないのだから。なので、琢真の姿を持っていたカメラで撮影し、それを張り出した。職員室に貼ったのは琢真を除外する為。藍田の教室に貼ったのは藍田を怯えさせる為。2・Fに貼った理由はよく分からないが、恐らく生徒間でこの事があまり噂にならずに問題が大きくなる事、恐らく生徒間での噂を操作しやすい自分のクラスに貼った……というところか」

「私は……貼り紙なんて貼ってない」

ここで久しぶりに発言した少女だったが、その言葉を発する力は弱かった。

「今週の火曜日の早朝、君の姿を見た奴が居る。そいつは部活の朝連で校庭にいたらしい。どうして東門から入ったんだ？ 正門からだ」と教師に見つかるでも思ったのか？ 校庭にサッカー部が居た事に気づかなかったか？ まあその時は校庭の隅で筋トレをしていたそうだからな、その所為だろうか」

「……………」

「だが、サッカー部の方は違った。そんな時間にサッカー部や野球部以外の生徒が来るのは珍しいそうだ。しかも女子だ。皆どうしたのかと凝視していたらしいぞ……そうだったな？ 山口」

「ああ、間違いなく、その子だ」

ここで初めてスポットが当たった山口が、ハッキリと頷く。山口はサッカー部だった。

「そんな時間から、君は何してた？」

修司の言葉に反論の光が見えたのか、少女は声を荒げて言った。

「職員室に貼ったって言うてるけど、教師はどうしたの？ まさか教師がいる中で堂々と貼ったとでもいの！？」

「教師は居なかったはずだ」

「職員室に教師が居なかったとしたら、鍵はどうやって開けたの？ ちなみに私は、その日はただ早く目が覚めたから、図書室で勉強していただけよ」

確かに教師が居れば見つかってしまいうし、居なければ職員室は開いていない。

どちらにせよ、あの忌々しい貼り紙を貼る事は出来なかった筈だ。(うーん。……あ。分かった！ きつと教師を抱きこんだのね！?)

そうすれば貼る事は可能だ。問題はその教師が誰かという事だが

……。

自分の推理が正しいのか、愛は修司の言葉^{答え}を待つ。

「いや、君は貼る事ができた。何故なら、職員室のドアの鍵は、その時壊れていたからだ」

全然違った。予想の斜め上に行く答えだった。

流石にそれは無いだろうと、愛は非難の目を向けるが、修司はそれを無視した。

「その日の鍵担当の教師が登校したのは、七時頃だそうだ。その前に貼るのであれば君には十分可能だ。この時のドアは君が壊したのか？ だとすると流石に手馴れたものだな。なにせ二回目だからな」

「え？ どういうこと!？」

観戦モードで居ようと決めていた愛だったが、思わず疑問を発してしまった。

(二回目？ 職員室のドアを、この子が二回も壊したって言うの？)
修司は相変わらず糞真面目な顔で、事実を淡々と告げるように話している。

『君が壊したのか？』などと疑問系で聞いているが、修司はもう確信を持っているのだろう。それに、教師の出勤時間なんてどうやって調べたのだろうか。

こいつのこういう所が、愛は本気で恐ろしい。

「そのままの意味だ。先々週の木曜日、緊急職員会議が開かれた。それが行われた理由は、職員室で管理していた二年の期末考査のテスト原案が盗まれた、という事が分かったからだ」

「テスト原案!？」

「マジでか!？」

「羨ましい!! …… あっ!」

傍聴席の三人は、同時に驚きの声を上げた。

ただ、愛だけはつい本音が出てしまう。

それに修司は軽く頷く。

「話し合いの結果、作り直す事になったが、決められた範囲内で出題できる問題などはそう多くもない。教師が出すべき問題というのは決まっているからな。それについては、今回のテストで急激に成績が上がった生徒が居ないかに目を光らせておこう、という事で話は収まった」

(つまり、例えばアタシが今回のテストでヤマが当たって、良い点取ったら疑われるかもしれないって事!?)

愛と同じ事を考えているのか、吉田達の顔も曇っていた。

まあ、そんなヤマが当たるわけは無いのだけだ。

そう言えば、確かその日は琢真達が馬鹿をやらかして、琢真だけが捕まった日だった。そんな事があったから、池山の説教時間が短かったのだろう。

「職員室の鍵が壊されたのは、その前日の水曜日のことだったらしい。学校帰りに当番の教師が気づいたそう。なんでも、強力な接着剤が鍵穴に塗りこまれていたとの事だ。ただ、その時は当番の教師はさほど気にせずそのまま帰ったらしい。事態に気付いた翌日の夜に、慌てて鍵を業者に頼んで付け替えて貰ったそうだが……再び壊された。発覚したのは今週の月曜日だ。なので、壊されたのは日曜日だろう。そして今回も同じ手口だった。同一犯に違いない。その事で琢真の件と合わせて、緊急会議がまた開かれたらしい」

今週の月曜は、あの忌まわしい琢真の騒動が起きた日だ。あの事件の裏で、そんな事も起きていたと言ふ事は知らなかった。

まあ、生徒にそんな問題を知らせる訳も無いんだけど。

だけど愛は気になった事がある。

「ちよつと待つてよ、その二回目の時の当番の教師はそのまま帰っちゃったの？ また盗まれる事になったのかもじゃないの！？」

だとしたら、教師の危機管理にも問題があるんじゃないかと思う。「うちの高校の機械警備……侵入者を探知するセンサーの事だ。それは午後九時半から午前六時半の間作動する事になっているらしいのだが、どうもその教師は、その正確な時間を知らなかったらしい。今年の春ここに赴任したばかりの教師だったのが災いしたな。その教師は帰りはその時間まで残っていたそうだが、警備が終わるのは午前七時だと思っていた。七時にはちゃんと来たそうだが……その間の三十分間に、貼り紙を貼られたという事だ。まあ、貼るには十分な時間だろう」

事実は下らない事だった。

仕方ない様な気もするが、やはり危機感はまだあまり感じられない。

「教師達は男が犯人だと思っていて、特に問題児の琢真は怪しまれていた。だが、あんな貼り紙が貼られていた訳だからな。教師達も琢真はそれには関与していないと判断するしかなかったそう。それからすると君は全くのノーマークだったろうな。さぞかし工作がやりやすかった事だろう。いつ行った？ 人通りの激しい休み時間

か？」

「……………」

「とにかく、そういう訳で君には可能だったのだ。月曜の朝に来て教師が居なかったのには驚いたのか？ 天の助けとでも思ったか？ さぞかし痛快だったろう。自分の思い通りに琢真が処分を受け、邪魔者が消えた」

修司の言葉に、冷たさが含まれていた。琢真の事を思い出していたのだろうか。

愛も少し抜けていた気が、戻ってきた気がした。琢真がその後どんな葛藤を覚える破目になったのかを思い出したからだ。自然に目に力が入る。

そんな二人の様子に動じることなく、少女は心無い瞳で修司を見つめていた。

「次は藍田を何とかするだけだ。もうその手順は固めてあった事だろう。盗んだ答案を、盗んだ藍田のノートには喜んで、教師の目の届く所に置いておけばいい。そうすれば藍田は処分を受けて、この場合最悪退学だ。だが、そうなったら藍田は転校してしまうか、もしくは家に閉じこもってしまうかもしれない。それだと君は藍田に何もする事が出来ない。だからまだ仕掛けなかった。最後に直接彼女に何かしたかった訳だ。君は隙を伺った」

ハッと、愛は自分が手に持っているノートを思い出す。

このノートにそんな重大な意味合いがあったとは思わなかった。

思わずノートを持った愛の手が震える。

果たして修司の推理が正しいのか、この中を開ければ分かる筈だ。しかし、愛は今はまだ止めておいた。

「だが琢真を排除したら、今度は愛が邪魔をし出した。君は焦り、苛立ちは頂点に達しただろう。今まで以上に監視して、隙を探らずにはいられなかった。白を切っても無駄だ。ここ数日、君が藍田の周辺をうろついているのを、何度も見た人間がいる。自分の姿を誰かが監視しているとは、夢にも思っていなかっただろうな？」

その目撃者は琢真の事だ。愛も琢真が少女を何度か見たと、修司に報告しているのを聞いている。その時は、全く関係ない人物だと思っていたのだが……。

しかし、その事より気になる事がある。

(もしかして、アタシも危なかった?)

だとしたら、それが分かかっていて自分を人身御供に差し出したのか、この男は。

今日だけで、愛の修司に対する悪感情は、有頂天で留まる事をしない。

そんな愛の心の内を知らずに、修司は続けた。

「そうして尾行を続けてようやく、今日初めて藍田が一人になった。君は歡喜に包まれた事だろう。同時にここがチャンスだと思った筈だ。来週からは邪魔者も再び戻ってきてしまうからな。まあ結局それは、俺の手の中で踊っていたに過ぎないんだが」

修司は偉そうに言っているが、これに関しては半分ハツタリである。

今日の二転三転とする状況は、確実に修司の手から零れ落ちていたに違いないからだ。

だけど、ここまで調べた事に対する花を持たす意味で、愛は生暖かい目を向けておくに止めた。

「大分語ったが……もうこれ以上何か言う必要は無いな? 君が、この事件の黒幕だ」

それから暫く、少女は俯いたまま黙りこんでいた。

修司に暗躍した張本人である事を告げられ、動揺しているのだと愛は思った。

だが。

「……さいのよ」

「ん？ 何だまだ何か言いたい事が……」

修司が往生際が悪いとでも言うように尋ねたが、最後まで言葉を発する事は出来なかった。

「うるっさいのよ！！ この変質者どもが！！ 人の事を隠れてかぎまわったりして！！」

突然湧き上がった少女の金切り声に、続きを奪われたからだ。

そのまま絶叫は続いた。

「そうよ！！ アイツム力つくのよ！！ あの女！！」

あの女とは莉理の事だろう。血走った目で、憎憎しげに虚空を睨みつけている。まるで何も無い空中に、莉理の姿があるとでも言うように。

「いつもいつもいつもいつも親切ぶって！！ 拳句に尾登君をたぶ

かして！！ 何様のつもり！？」

「お、おい、落ち着……」

「ぎゃあぎゃあぎゃあぎゃああ煩いのよ！！ 何でアンタは邪魔するのよ！？ ちよっと罰を与えるだけじゃない！！ 何が気に食わないの！？」

「い、いや、罰とは……」

少女の怒りは、落ち着かせようとした修司に飛び火している。そのあまりの逆切れように、修司は少し腰が引けてしまっているよう

だ。先程までとは違い、声に力が無い。

「あの女は害虫なのよ！！ ノート返しなさいよ！！ 好きでもない男を誑かせて！！ アイツを追い出してやるんだから！！ あんな奴どっかいけばいいのに！！」

もう無茶苦茶だった。支離滅裂で、何を言っているのかもよく分からない。

体を振り回す様にして騒ぐばかりで、必死になだめようとする修司達の話なんてまるで聞いていなかった。

愛は恐怖さえ覚え始めていた。こんなにも人は狂えるのかと。今までこんなに錯乱する人間なんて、見た事が無かった。普段は大人しい女の子だと言う事も、恐怖を煽る原因なのかもしれない。

ただ、そんな愛の恐怖は、次の一言で吹き飛ぶ事になった。

「何であんな奴守ってるのよ！？ アイツを守ってる奴なんて糞よ！！ 全部糞！！ あんなブスのどこが好いんだか！ 守る価値なんて無いでしょ尾登君を誑かせた奴なんて！！ 何で邪魔するのよ！！ あんな奴死んじゃえばいいのに！」

カチンと、愛は脳内の撃鉄が打ち下ろされる音を聞いた。

（莉理を守っている奴が……糞？）

愛は、老婆の言う事を信じて右往左往していた琢真の事を思い出し、あんな事になって莉理が護れなくなつた際の落ち込んだ琢真の様子を思い出し、老婆に当り散らしたと懺悔してきた時の哀しげな琢真と、そしてその話の中の老婆の様子を思い浮かべる。

（あれが、糞って？）

愛は冷めた頭で、もう一度その少女を見る。ただ不満を喚き散らすのが煩い、醜悪なだけの女だった。何故こんな女を怖いと一瞬でも思ったのか。愛は自分が恥ずかしくなつた。

だから愛は、落ち着かせようと少女に語りかけている修司達を脇をすり抜け、喚く女の前に立ち、非難の目を向けてなにやら暴言吐いてくる少女を完全に無視して、その胸倉を掴みあげて、思い切り

頬を張った。

バシンツ、という音が、静まり返った夜の公園に響く。

その音は一度だけではなく、続けて二度、三度、繰り返された。

少女は何が起こっているのか分からない顔でポカンとしていた。

数秒後、自分が何をされたのかを悟ったのか、再び口を開いた。

しかし、声を発せさせる前に再び愛は頬を張る。黙ろうとするまで、何度も。

「お、おい。あ……愛？」

修司がおっかない様なものを見る目で愛を止めようとする。だが愛に一瞥されると何も言わずに黙り込んだ。

やがて、頬を押さえ涙を流しながらようやく黙った少女に、愛は静かに声をかけた。

「……アンタに出来る？」

少女はまた殴られると思ったのか、愛の声に一瞬ビクリと身を硬くした。

口を開こうとするが、何て答えればいいのか分からなかったのか、パクパクとまるで鯉の様に口を開閉するだけで、何も言葉にならなかった。

愛はそれに構わず話を続ける。

「アタシにはできない。自分を殺して誰かに尽くすなんて事は。その対象莉理に護っている事を告げないで、見返りを期待しないでただ護ろうとするなんて事は。アタシには絶対に無理」

それがアンタに出来る？ と、愛は少女にもう一度視線を向ける。ただ少女はそれには何も答えずに、赤くなった頬を手で押さえながら、怯えた目を愛に向けていた。

愛が何を言っているのか分からないのだろう。

「でも、あの二人は違う。あの二人はそれが出来る人間なの。どんな扱いを受けても、落ち込む事があっても、決してそれを止めようとはしなかった」

二人と言つても、この少女には誰と誰の事が分からないだろう。

この場で分かるのは修司だけだ。

でも、そんなのは関係ない。愛は少女に何かを分からせようとして言ってるんじゃない。愛はこんな女を諭して、改心させてやるうなんて優しい性格じゃない。

ただ、愛は言いたいだけだった。

「アンタはどう？ 出来る？ 出来ないよね？ 尾登が莉理に告白した事を、莉理の所為になっているようなアンタが」

尾登の名前に呆けていた意識を取り戻したのか、少女は涙の浮かんだキツイ目で愛を睨みつける。

「アンタ、尾登に告白した？」

「……………」

「つて、アンタが出来る訳ないか。でも尾登は違つたわよね？ ちやんと勇気を出して告白した。結果は振られちゃったけれど、去り際は颯爽としていたって聞いている」

「……………」

「立派だよな？ カッコいいと思わない？ だからアンタはそんな尾登が好きになつたんだよね？ 気持ちは分かるよ。でも……そんな尾登がアンタに相應しいと思うの？ 自分で。昨日までの友達を貶めて、拳句危害を加えようとするアンタに、彼が」

どう考えても不釣合だった。今の少女と、尾登では。

それは自分でも分かっているのか、少女はか細い声で何か言つてくる。

「……………でも、アイツは尾登君を」

「じゃあ付き合つたほうが良かった？ そんな訳はないよね、好きな人が自分以外と付き合うなんて考えたくないわよね？」

「そ、そうだけど……………」

「じゃあ、何でアンタはこんな事をしたの？ 尾登の為？ 違つたよね。ただアンタは莉理が羨ましかつただけ。そんな妬ましい思いで、莉理や、その周囲の人間を傷つけようとした」

「……………」
「そんな下らないことしか出来ないアンタが！ 尾登に相応しいと自分で思うの！？ そんな矮小なアンタが、あの二人の覚悟を、その尊さを、凄さを、どうして『糞』だと言えるの！？ ふざけてんじゃないわよ！！ アンタ何様よ！！」

愛は少女の両頬を両手で挟みこむように持って、顔を背けられないように固定し、息がかかるほどの距離で怒鳴りつける。

自分の行動が尾登に相応しくないと言う事は、自分でも分かっていたのか、少女はポロポロと涙を流し、しゃくり上げ始めた。やがてそれは嗚咽に変わっていった。以後はもうただ泣くばかりで、喚こうとする様子さえなかった。

愛はふと熱くなっていた自分に恥ずかしさを覚え、少女の顔から手を離す。と、何故か怯える様な目を男三人が向けてくる。

「お、俺は絶対。愛ちゃんは怒らせないようにする事に決めたよ……」

吉田がそんな事を言う。他の二人も恐る恐る頷いていた。

そんな彼らに、愛は誤魔化すような笑いを浮かべる。

「あーと……。柄にもないこと言っちゃったわね……」

説教のような事をするなんて自分らしくない。

(そんなつもりじゃなかったんだけど……)

ただ、言いたい事を言ったら少しスッキリした。そうすると、頭が冴えてくるのを感じる。この問題は結局、どうするのがいいのかわかった気がした。

そもそもの問題は、少女がウジウジと悩んで、尾登に告白できずにいるのが原因だと愛は思った。それをどうにかしないと、例え今この場で反省しても、またいつか今度は別の人間に怒りを抱かなくとも限らない。

恐らく、修司は少女のやった事を公にして、琢真の疑いを晴らす

つもりなんだろう。だが、流石に愛はそこまでする気にはなれなかった。

確かに犯罪紛いの事もやったようだし、これからしようとしていた事は最悪だけど、その根源にあった理由は、同性として全く気持ちに分からないでもないからだ。

それに、愛達は別に『良い子』という訳じゃない。教師や警察に突き出して罪を償わせようなんて事は、愛達のカラーでもない。

琢真の汚名を晴らせないのはアレだが、きつと琢真は莉理の誤解さえ解ければ満足に達しない。

それには愛が尽力してやればいいだけだ。莉理ならきつと分かってくれる。

ならば自分がすべき事は

「いいわ、分かった！ アタシがアンタの手伝いをしてあげる」

愛の言葉に、少女は「へっ？」と泣いて俯いていた顔を上げる。

「だから、アタシが、尾登に告白する後押しをしてあげるって言うてるの」

「そ、そんな……そんなの無理よ！」

少女は憑き物が落ちたように、普段の顔に戻っていた。泣きそうな顔でイヤイヤしながら後ずさって行く。でも、愛はその手を掴んで逃がさない。

愛から逃げ出そうと必死にもがいているが、その弱い力では愛から抜け出すのは無理と言うものだった。

「いいから、いいから」

愛がそう言いながら微笑み、尾登にここ公園に来てくれる様に金子に伝えて貰う事を、修司に願うする。

修司は愛と必死に何事か騒いでいる少女を見比べて、困惑した表情を浮かべていたが、やがて金子に電話をかけた。

数分後、尾登から了承の承諾を得た、という連絡が入ってきた。

それを聞き、この場から逃げ出そうとしていた少女が居たが、愛

が腕を掴んで捕まえているのでそれは叶わなかった。

そんなやり取りを終えると、丁度公園に駆け込んでくる人影があった。

愛の腕の中にいる少女は、尾登がもう来たのかと緊張して固まっていた。ただ公園中央の電灯に照らされたのは琢真の姿だった。琢真はその勢いそのまま自分達の所まで走ってきて、ようやく立ち止まる。

息も絶え絶え、体も限界という感じで、それでも尋ねてきた。

「あ……藍田さんは、どうなった!？」

「藍田なら無事だ。もう既に、自宅に向かっている」

少女に視線を向けながら、修司がその問いに答えた。

「藍田さんが……帰った……」

修司は安心させようとしていた様だったが、琢真の顔はすぐれない。

まだ何か、気にかかることがあるのだろうか。

やがて、琢真は自分を貶めた張本人が目の前に居るにもかかわらず、何も言わずに再び走り出し公園を出て行った。恐らく莉理の様子に気がなっただらう。

もう全ての元凶は、抑えたと言うのに……。

修司も眉をひそめて琢真を見送っていたが、とりあえず気にしない事にしたらしい、少女に再び向かい合った。

「もう少しで尾登が来る……。その前に、先程持っていたものを渡してくれないか？ あんな物騒な物は、女子が持つ物ではない」

そう言っつて、修司が手を差し出す。

愛には何の事か分からなかったが、少女は違ったらしい。

鞆の中に手を入れて、何かを取り出した。

「こ、これのこと？ で、でもそんなに危なくないのよ？ ほ、本当よ？ 電圧だつて下げてるんだから」

少女はそう言いながら、黒いスタンガンを二度起動する。

バチバチと、眩しい煌めきが愛の目に入ってきた。

「危ないからやめなさい！」

愛はそのスタンガンを取り上げ、修司に放り投げる。

修司はそれを受け止めると、呻く様な声を漏らした。

その様子が気になったので、「どうしたの？」と修司に尋ねる。

「いや……少し気になるだけなんだが、俺はこれを刃物だとばかり思っていた」

「はあ？ それがなに……」

と言いかけて、愛も琢真の話思い出した。

『今週中に路上で体を何かの金属に貫かれて死ぬ』

と言う、占い師の予言を。

『何かの金属』と言う話を聞いていたので、予知を信じていない修司でも、それが刃物の様なものだという先入観が植えつけられていたのかもしれない。

誰かが莉理を狙っている。老婆の話。刃物で莉理を傷つけようとしている。と言う風に考えてしまったとしても、無理のないことかもしれない。

だけど、少女が持っていたのは刃物じゃなかった。

（と言う事はつまり、占い師の予知はこの事を指していたんじゃないって事？）

修司は「誤差の範囲だ」と頭を振っているが、愛は嫌な予感が抑えられなかった……。

間話 追慕（1）

1

琢真はお祖母ちゃんっ子だった。

今でこそ母親は専業主婦になっているが、琢真が幼い頃は共働きしていた。

なので必然的に幼い琢真の世話は、当時一緒に住んでいた祖母が担っていた。

祖母は若い頃は厳しい人だったらしいが、祖父が亡くなり、息子が成長し、年をとってからは人が変わったように穏やかになったと言い、琢真が見た祖母はいつもにこやかに微笑んでいるような人だった。

琢真が学校のテストで悪い結果だった時も、琢真が学校で殴り合いの喧嘩をした時も、決して怒ることなく「そうかそうか」と笑ってその話を聞いてくれた。

祖母は、いつも琢真の味方だった。

琢真が悪さをして両親に叱られた時にも、間に入ってそれを取り成してくれた。

自然、琢真は祖母に懐くと共に、祖母は自分が何をやっても許してくれる人間だと、そう誤解をするようになったのも、物心付いてからそう遠くない頃の事だ。

その思いを抱いたまま、琢真は成長していった。

まだ小さい頃は、どこに行くにも祖母は付いて来てくれていたし、琢真も祖母の手を引っ張るようにして連れまわしていた。

祖母はそれにいつも「たっくんは速いね〜」と笑いながら、腰の少し曲がった姿勢で琢真に従っていた。

ただ、年齢を重ねて徐々に学年が上がっていくにつれ、徐々にそ

の存在が煩わしくなっていた。祖母は琢真の足についてこれないから思う存分遊べない、祖母といえるのを友達に見られるのが恥ずかしい。そんな理由からだった。

その事を初めて告げた時、祖母がとても悲しそうな顔をしたのを、琢真は今も覚えている。正確には、今ならそれを思いやることができ、慙愧から自分の身を砕きたくなくなってくる。

だが、当時の琢真は最初こそ気まずそうにしたものの、すぐにそれを忘れ、祖母を置いて友人と遊び回っていた。

そして、それから半年程経った頃だろうか。

学校で授業参観が行われた。

母親に来てくれるようにお願いしたが、今は仕事が忙しいから悪いけど祖母に行って貰う、と言って来てはくれなかった。ただ、なおも愚図る琢真を父親が叱ったので、渋々聞き入れた。

当日、自分の両親が来てくれるかとドキドキしながら待つているクラスメイト達を尻目に、琢真だけはそんな感情を持ってないでいた。寧ろ自分だけ年老いた祖母なのが恥ずかしくて、来ないでくれと願ってさえいた。

しかし、琢真の願い虚しく祖母は現れた。余所行きの着物を着て、どの親よりも早く。

この辺の子供は、着物を着ている人を見る機会は今までなかったのか、突然現れたその着物姿の老婆に、誰もが驚いていた。今思うと、クラスメイト達の食い入るような視線は、老婆であることを馬鹿にしていたというのではなく、ただ着物が珍しくて見ていたのだと分かる。

だが、その時の琢真は恥ずかしさに襲われ、クラスメイトの誰もが老婆を、強いては自分を馬鹿にしていると思ひ込んでいた。

授業は無事に終わった。

祖母は琢真に話しかけてくるような事もなく、その老婆が自分の祖母である事も特定されるような事もなかった。そのまま学校は終

わり、保護者会が教室で行われていた。

正直助かった、と琢真は思った。

これでいつも通りに明日が始まると、意気揚々と家に帰った。

その下校途中、校庭で一人のクラスメイトとバツタリ会う。それは大人しく運動神経も鈍いため、クラスでもあまり目立たない、そんな少年だった。家はわりと近い為遊んだ事もあったが、最近あまり自分から話しかけたりしていなかった。

ただその時は、気分が良かったので「何しているんだ」と声をかけた。

その少年は母親を待っているのだと答えた。面倒だけど一緒に帰る約束なのだと。

その言葉に、晴れていた気分が突然に曇っていった。

恐らく琢真は、この目立たない少年にも両親が来てくれていた事に嫉妬したのだろう。その為琢真は、はにかむ様な笑みをうかべていた少年を、突き飛ばした。

少年はその衝撃で倒れこみ、何が起こったのか分からないという表情を浮かべていた。それを見て更に苛立ちは募ったが、その場では何もせずにそのまま家に帰った。

次の日から、琢真のその少年への嫌がらせは始まった。

と言っても、靴を隠したり、教科書に落書きしたり、殴ったり、そういう事はしなかった。琢真がした事は、皆で遊んでいる時にそいつだけ混ぜてやらない、というだけだった。

だが当時ガキ大将だった琢真の影響力とでも言うのか、徐々にその少年と遊ぼうとする人間は減っていった。やがて、少年が教室で一人ポツンとしているのを何度か見かけ、琢真は満足だった。

特にそうなる事を予想して始めたことではなかったが、自分の力が強くなったような気がして嬉しかった。

なので、その自分の強さを誰かに話したいと思い、家に帰って祖母に話した。

最初は久しぶりに孫が自分に話しかけてくれた、という風で喜んでいた祖母だったが、琢真の話を聞くにつれて表情は曇っていった。琢真はこの時本当に、祖母は「たっくんは凄いな〜」と称えてくれると思っていた。

しかし、琢真に向けられたのはそんな称賛の声ではなく、今まで聞いた事のない厳しい叱責の声だった。いつも浮かべていた笑顔は見ると影もなく、険しい鬼の様な表情を浮かべていた。そして一度だけ頬を張られ「謝っておいで」と厳しい口調で言われた。

突然の祖母の変容に琢真は驚いていたが、徐々に持ち直すとそれには従わず何か祖母に怒鳴って部屋に閉じこもった。

驚いていた。あのいつも自分に優しくかった祖母が、あんなにも怒る事があるとは夢にも思っていなかった。祖母は何があっても自分の味方で、自分を何より可愛がってくれる存在だとばかり思っていた。

なので、祖母に殴られた事は、物凄い裏切りに感じていた。完全に逆切れだが、琢真は冷静になる事は出来ず、祖母に対しての理不尽な怒りを抑える事は出来なかった。

後に聞いた話だが、祖母はこの後菓子折りを持って、その少年宅に頭を下げに行ったらしい。余所行きの一張羅を着て。

ところが少年は、琢真が思っていた程琢真のしたことを気にしてはいなかったらしく、親にも誰にも自分がそういう風にされている事は言っていなかった。突然現れた老婆に家族皆で驚いてしまったと言う事だった。

少年の母親は事情を聞いて、「本人が特に気にしていないので気にしないで下さい」と苦笑しながら言ったそうだ。自分の息子の図太さに呆れていたのだろう。

その言葉を聞いて、祖母は深々と頭を下げると少年に「ほんに強い子やねえ」と優しく頭を撫でながら微笑んだと、成長した少年は感慨深げに言っていた。

少年に対しての悪感情はもう既になく、琢真の中にあるのは自分を裏切った祖母への怒りだけだった。

そのまま、祖母と口を聞くことなく一ヶ月も過ぎた頃だったか、

ある日突然、祖母が倒れた。

第一発見者は、近所の主婦だ。

夕飯の買い物で買い忘れたモノを買いに行こうと商店街へ向かった帰り道に、家の前で倒れている所を発見したらしい。祖母は声をかけても返事はなく、苦しそうに呻くだけだったと言う。

その時琢真は、外で遊んでいた。夕飯の時間が近づき一人二人と帰っていく中、一人最後まで残って夢中になって遊んでいた。だからきつと、祖母は夕飯時になっても帰ってこない琢真を、心配して探しに行こうとしていたに違いなかった。

連絡を受けて会社から帰ってきた両親と一緒に、病院に向かった。琢真は特に何も思っていなかった。そんな深刻な話だとは思っていなかったのだ。

だがそんな琢真を嘲笑うかのように、事態は深刻だった。

末期癌だったらしい。

既に体中に転移してしまっていて手の施しようがない、と医師は言った。

今まで普通に生活していたのが不思議だと、驚いていた。ずっと凄い痛みに襲われていたのに違いがないのにと。

今にして思う。

琢真が祖母を敬遠せず、ずっと近くにいたら結果は違ったんじゃないだろうか、と。祖母の体のサインに気づけたのじゃないだろうか、と。

その事を改めて後悔した時には、もう全てが遅かった。

だが、当時の琢真は頭を捻っていた。

驚愕し言葉を失くした両親とは違い、琢真はその医者は何を言っ

ているのか解らなかつたのだ。

「どういうこと？」と無邪気に尋ねる琢真に、ただ悲しそうな目を向けてくるだけで、両親は何も答えてくれなかつた。

それから暫くして、母親が長期休暇を取った。

琢真は最初はそれに喜んだ。母親が自分といつも一緒に居てくれるというのが新鮮だつたからだ。しかし、蓋を開けてみれば、母親は祖母の世話に病院に行つたきりで、琢真と顔を合わせるのは面会時間が過ぎた後で、琢真としては今までと何も変わらなかつた。

その事に不満を覚えていた為、琢真は母親に催促されても一度もお見舞いに行かなかつた。

裏切りの事もあつたからだ。

そのまま時が過ぎ

ある日両親が琢真を居間に呼んで、真剣な顔で話を始めた。

その話が行われたのは、祖母の余命一ヶ月が告げられた日の夜の事だつたらしい。以前、家を大掃除した時に出てきた、祖母の遺品を見て、当時を思い出すような様子で母親が教えてくれた。

両親はもうすぐお祖母ちゃんと会えなくなるから、顔を見せに行つてあげると真摯に琢真に語りかけてきた。お祖母ちゃんも凄く会いたがつているから、と。

両親は、一度も『死』という単語は使わなかつた。

恐らくそれを言つと、差し迫つた事実を突きつけられる様で嫌だつたのだらう。

流石に、頭の悪い琢真も、この時ようやく気づいた。

祖母が死んでしまう、という事に。

その事に思い至つた時、体は緊張し足は震え立つことも儘ならなかつた。

母親はそんな琢真の様子を見て泣きそうな顔で、そつと抱きしめてくれた。親父はただ黙して、琢真を見つめていた。

次の日、母親に連れられて祖母の見舞いに行った。もう残り、数えられる程度しか行えないお見舞いに。

実際に会って、何を言おうかずっと考えていた。

学校の事、少年の事、好きなテレビ番組の事、そしてずっと無視していた事。

色々な話せる材料が頭に浮かび　　愕然とする。

昔は何かある度に祖母に話をしていた為、祖母に話していない話題なんて殆ど無かった。それくらい祖母に何でも話していた。なのに、今はこんなにも話せる材料がある。

その事が、琢真に痛切に現実を教えたからだだった。

そんな思いの中、ともかく今までの事を謝ろうと、そう決めて病室に入った。

しかし、久しぶりに祖母の姿を見た瞬間。琢真は逃げ出していた。母親の静止の声に、振り返る事なく。

怖かった。物凄く怖かった。

元々痩せていた祖母が、更に痩せ細り、皮と骨だけになっているその姿を見て、初めて『死』の気配を感じたのだ。『死』とは一体どういうものかが、解った気がした。

脇目も振らずそのまま病院を抜け出し、ただ闇雲に走っていた。走る事で、今見た光景を全て置き去りに出来るとでも言うように。

気づいた時には、公園に居た。

そのまま公園のブランコの所まで歩き、そこに座る。

ゆっくりとブランコを揺らしながら、必死に脳裏の光景を振り払おうとする。

だが、染み付いたソレは中々消えずに、いつしか絶叫していた。大声で叫べば、全て声と一緒に出て行ってくれと思ったのだ。

琢真が莉理と初めて話をしたのは、そんな時の事だった。

間話 追慕(2)

2

突然に自分の前に誰かが立っている気配がして、地面を見ていた顔をゆっくり上げる。

そこには、確か今は隣のクラスの女子が立っていた。

去年は同じクラスだったけど、オレからは一度も話しかけた事は無かった。向こうから掛けられたことも無い筈だけど、正直覚えていない。

いつも暗くて目立たない。下の名前も知らないし、どんな声をしているのかも覚えていない。

オレにとつて、その程度の女子だ。

だからいきなり、その女子に話しかけられのには少し驚いた。

「……だ、だいじょうぶ？」

それが、その女子が初めてオレに言った言葉だった。

今の自分は、こんな女子に心配される程酷い様子なのかと思ったけど、今の自分にはそれすら余計なことだった。

だから、「うるせー！！ どうか行け！！」と追い払った。

しかし、その女子は「でも……」とか言つて、中々そばを離れようとしなかった。

オレがそれを教えたのは、そう言えば事情が分かつて、オレをほっとしてくれると思つたからだ。

そうすれば、また忘れる作業に戻ることができる。

なので、一言だけ教えてやった。

『お祖母ちゃんが死ぬんだよー！！』

とだけ。

女子はやっぱり驚いたようだった。その顔で少し後ろに下がって、こっちをジッと見つめていた。

この様子ならこれでどっかに行く。オレはそう思ってた安心した。だけど、女子は驚いた顔を元の顔に戻すと、さっきまでと比べて凄く真剣な表情になって、「事情を話して」とオレに近寄ってきた。その剣幕には驚いたけれど、次第にうざくなり、女子を突き飛ばして目の前から退かすと、公園を走り去った。

そのままどこをどう歩いたのか覚えていないけど、夕方頃に家に戻った。

母さんは既に家に帰っておりオレを出迎えた。でもさっきの事は何も言っていないで、もうすぐ夕飯だから手を洗ってくるように言われた。

その事が、病室での自分の態度を、責められているように感じた。母さんは食事が終わると一言だけ、「明日も会いに行っておあげね」とポツリと言った。

それには何も返さないで、オレは部屋に逃げるように戻った。

次の日、学校から帰ると早速家を出た。

病院に行ったんじゃないかった。

いや、最初は行こうとしたのだけど、途中でどうしても昨日の光景が思い浮かび、足が進まなかった。だから、途中で引き戻し、昨日と同じに公園に向かった。公園に着くと、またブランコに座った。それからどれ位ボーっとしていたか分からないけど、気づくといつの間にか昨日の女子が隣のブランコに揺られていた。

オレが女子に気づいたのが分かったのか、「こんにちは」と静かに挨拶してくると、オレの方に体を向けて「事情を話して」と言うてきた。

今日学校で偶然顔を合わせた時には何も言わなかったので、もう

忘れたのだとばかり思っていた。

顔を見ると何かをずっと考えているような、そんな真剣な表情だった。

だから教えてやった。上手く伝えられたかは分からないけど、全て何もかも。

正直、もうどうでも良かった。話せばスッキリするかも、とその程度だった。

やっぱり、全て話すとスッキリした。

なので、気分よく家に帰ることが出来た。女子も追ってこなかった。

その夜、明日からお祖母ちゃんが家に帰ってくることを聞いた。病気が治ったの!? と目を大きく開いて聞いたけど、どうもそういう事ではないらしい。

母さんは悲しそうに首を横に振り、最後に家に戻りたいとお祖母ちゃんが願ったからだと教えてくれた。

オレはどうしたらいいのか分からなくなった。

その日は、学校から直接公園に向かった。

今家に帰れば、お祖母ちゃんが居る筈だ。

どんな顔をして会えばいいか分からなかった。なんて言えばいいのかも分からなかった。

このまま時間が過ぎればいい。いつの間にか、そう願うようになっていた。

今日もまた女子は現れた。

だから教えてやった、お祖母ちゃんが家に帰ってきたことを。

女子は驚いていた。

なので、それが治ったからではないことも教えたかった。

女子は驚いていた。

そして驚いた顔のままオレに言った。「じゃあ、どうしてここに居るの?」と。

返答にしばらく迷ったけど、教えてやる事にした。「今のお祖母ちゃんに、何て言ってしまうか分からないからだ」と。

そう答えると、女子はむっつりと黙り込んだ。

そうして夕方になり、そろそろ家に帰らないといけない時間になった。

帰りたくなかったが仕方ない。ずっとここに居るわけにもいかな
いからだ。

ブランコから立ち上がったオレを、女子が隣で見上げてくる。

「帰るの？」

「そうだ」

「……お祖母ちゃんに、何て言うか決まったの？」

「決まった」

そんな話をする。

その内容が知りたいのか、公園を出て行こうとしていたオレの後を追ってきていたので、めんど臭くなって教えてやった。

「もう何も言わないことに決めた」

家が見えてきた。

ドクンドクンと、心臓の音が早くなってきた。

その音を聞きながらゆっくり歩いて、やがて家の柵の前にたどり着いた。

一度小さく深呼吸して　　そして、後ろを振り返る。

そこには女子の姿があった。公園からずっと黙って付いて来ていたのだった。

不気味には思わなかったけど、もう家だ。これ以上は、付いてこさせるわけにはいかない。

「ここオレんちだから、お前もう帰れよ」

そう乱暴に言って、家の柵に手を乗せる。

その時、女子が突然オレの反対側の手を掴んで、ぼそりと言った。

「……それじゃあ、きつと後で後悔しちゃうよ？」

消えそうな小さな声だったけれど、不思議と聞き取れなかったところは全く無かった。

3

お医者さんの言う通り、丁度一ヶ月でお祖母ちゃんは亡くなった。直ぐに葬式が行われて、親戚みんなに見守られて、二日後には骨と灰になった。

オレはその間は、全く泣かなかった。

気を抜くと出てきそうになる涙を必死に我慢して、誰よりもオレを愛してくれて、誰よりもオレの事を解っていてくれたお祖母ちゃんの事を、ずっと思っていた。

誰よりも大切だったお祖母ちゃんとのお別れに涙を流しては、お祖母ちゃんが安心して旅立てないと、そう思ったからだ。必死に笑おうとして、だけど泣きそうになって、多分かなり変な顔になっていると思う。

母さん達ははまだ色々やる事があつたらしいから、一人火葬場からタクシーで家に帰ってきた。

母さんから預かっている鍵を使って、ドアを開けて家に入る。

そう言えば最近慣れていたけど、お祖母ちゃんが居た頃はドアの鍵なんて開けた事が無かった事を思い出す。いつも家に帰ればお祖母ちゃんが居たからだ。

「ただいま」と誰も居ない家に向かって呼びかける。

「おかえり、疲れたろう？」そう言つて、夏は麦茶を、冬は暖かいお茶を出してくれたお祖母ちゃんはもう居ない。

まず手洗い場で手を洗い、そしてうがいをする。
毎日お祖母ちゃんから言われていた事なので、もう習慣になっ
てしまっている。

それを言われる度に「分かってる！」と返していた頃が懐かしい。
部屋に戻ってみたけど、何もすることが思いつかないので、居間
に行ってゲームをする事にした。

いつもゲームをする時は、目が悪くなるからテレビから離れてや
りなさいと注意されていたけど、もう注意してくる人は居ないので、
今日は思いつきり近づいてやってみた。

一時間後、何だか目が痛くなつたのでゲームを止めた。

お祖母ちゃんの言う通りだった。もうこれからは、ゲームをする
時は離れてやる事に決めた。

ゲームを止めると、することが無くなつたのでテレビを付けて見
ただけど、アニメもお笑いもやっていない。つまり、今の時間は興味
のある番組は何もやっていなかった。

お祖母ちゃんと一緒にテレビを観て、お祖母ちゃんが理解できな
かった所を教えてやるのがオレの日課だった。これからはそれもし
なくていいから、じっくり見れるようになるな。

仕方ないので、家中をブラブラと歩き回った。

歩き慣れた家なので、目をつむって歩いたら仏壇に迷い込んだ。

仏壇の横の壁には、自分が生まれるずっと前に亡くなったお爺ち
やんの顔写真が飾られている。これからはその隣にお祖母ちゃんの
写真も飾られるのだろうか。

だとしたら、お祖母ちゃんも寂しくない。少し安心した。

安心したらお腹が減った。

母親にお腹が空いたら何か買いなさい、と貰っていた千円札の存
在を思い出し、再び家に鍵を掛けてから、外に飛び出した。

小学校の通学路の途中にある駄菓子屋に走る。

そこでベビースターを二個、うまい棒を五個。店の前にある自販

機でコーラを買ってから、公園に向かった。

公園には、小さい子供を連れている近所のオバサン達と爺さんがいるだけで、オレと同じ年の子供は居ないようだった。

ブランコに座りたかったが、そこは子供に占領されていたので、公園の隅っこにあるベンチに向かった。

そこに座ると、早速今さっき買ったお菓子を食べる。モグモグとプシュツとコーラを開けて一気に飲み干そうとしたが、喉にきつくて無理だった。少し口からこぼれてしまう。

袖でぬぐった後は、公園内にいた、ある親子を何となく見ていた。はしゃぐ子供を母親が笑いながらあやしている。

それを見ながら、オレもあんな事をしていたのかなと昔を思いやった。

オレをあの子に当てはめた場合、オレの場合は母親役はお祖母ちゃんになるだろう。

年寄りのお祖母ちゃんをちっちゃいオレが、あちこち振り回している。そんな光景が目に見えたので、オレはいつしか笑っていた。

声を上げずに、

静かに、

たくさんのたくさんの水滴を、

目の奥から垂らしながら。

そんな風に笑っていた。

そのまま笑い続けていると、いつの間にかオレのベンチの隣に、藍田が座っていた。

オレには何も言わないで、ただオレと同じように親子を見つめていた。

見てみぬ振りをしているつもりなのだろうか、その優しさに、さつき以上に俺は笑った。

それから、

お祖母ちゃんの声を思い出し、笑った。

お祖母ちゃんにご飯を食べた事を思い出し、笑った。

お祖母ちゃんと楽しく話していた事を思い出し、笑った。

お祖母ちゃんと一緒にテレビを観たことを思い出し、笑った。

お祖母ちゃんに褒められた事を思い出し、笑った。

お祖母ちゃんに怒られた事を思い出し、笑った。

お祖母ちゃんが一張羅で授業参観に来ていた事を思い出し、笑った。

お祖母ちゃんが骨と皮だけになっていた姿を思い出し、笑った。

お祖母ちゃんに、笑った。

お祖母ちゃんと、笑った。

お祖母ちゃんを、笑った。

お祖母ちゃんも、笑った。

お祖母ちゃんが、笑った。

お祖母ちゃんが、

お祖母ちゃんが、

お祖母ちゃん。

そして、あの後勇気を出してそれまでのことを謝って、泣きながら死なないでと無茶を言ったオレに、皺くちやの顔をもっと涙でくしゃくしゃにしなから、

「たつくん……有難う」

と、笑ったお祖母ちゃんを思い出して

もう一度、笑った。

全力で彼女を追っていた。

何か嫌な予感がするという直感が、琢真を突き動かしていた。

修司は彼女が無事だと言っていたが、自分の目で無事を確認しないと、とてもじゃないが心は落ち着かない。だが、その逸る思いとは裏腹に、徐々に肉体は自分の言う事をきかなくなっていく。

間の悪い事は重なるものなのか、公園を出てから最初の交差点で、横から飛び出してきた自転車に体ごと突っ込んでしまった。

全力で走っており、肉体もギリギリだったので琢真は堪える事が出来ず派手に転んでしまう。剥き出しの肘は思いつきり擦れ、血が噴き出していた。

それに意識を取られたのは一瞬で、再び走り出そうと足に力を込めたが、上手く入らない。琢真は何か立ち上がったものの、もはや同じスピードで走る事は適わないことは自分でも分かっていた。

だが、それでも琢真は追わなくてはいけない。

なので、その転がっている自転車が目に入ってきたのは必然の事だった。

持ち主を見ると、ぶつかった衝撃で投げ出されて地面に叩きつけられたのか、苦痛にうめいていた。木村だった。

「いてえ……何だよ一体……ってああ！？俺のエリーゼがあっ！？」
「……ん？何だ吉垣ちゃんかよ……気を付けるよちゃんと周囲を……」

木村は自分の自転車を撫で擦りながら、琢真を咎めようとする。しかし、それを聞いている余裕はなかった。

「すみません！ 木村さん！ その自転車貸してください！！」
琢真はそう頼み込む。なんとしても足が必要だった。

だが、木村もそれは了承しない。つい先日大金を叩いて買ったばかりの高級自転車なのだ。おいそれと人に貸すわけがなかった。

普通なら。

木村は何か気づいたように、琢真の表情をジッと見つめ

「……………しゃあないな。よく分かんが、分かった。乗ってきな
渋い顔で認めた。琢真の真剣な表情に何か重要な事態が差し迫っ
ていると気づいたのだ。

「すみません助かります！ この借りは必ず！！」

「ああ。期待してるよ…………。あと、エリ―ゼは壊すなよ？」

琢真はニヒルに笑う木村に深々と頭を下げると、木村の自転車を
漕いで、移動を再開した。

自転車に乗り換え、格段に速度は上がったがそれでも疲労困憊の
肉体が治った訳ではない。足が攣りそうになるのを必死で耐えなが
ら、彼女の家を目指していた。やがて後輪を引きずるようにして直
角に曲がりながら、彼女の家前の坂に出た。そのまま猛然と坂を
上り始める。

疲れた足ではこの坂は辛かったが、今はそれすらを気にする余裕
は無かった。

顔を上げて莉理の姿を探す。

すると、彼女の家の前辺りに、うちの制服を着た女の子が立っ
ているのが見えた。

（藍田さん！！）

はつきりとは見えないものの、莉理の家の前にいるのだ。恐らく
間違いない。

だがどうしたのか、足を押さえて立ち止まっているように見える。
理由は分からなかった、が、命に別状が無いのなら問題ない。と、

彼女の姿を視界に納めることが出来た為か、琢真は少し安心する。

だから、琢真を追い越していった歩道ギリギリの所を通っている、トラックの存在に気づくのが少し遅れてしまった。

それに意識が向いたのは、ガタガタと、何か異質な音が聞こえてきたからだ。

その発信源である大型の貨物トラックの、頑丈そうな貨物の押さえが歪んで、今にも外れそうな程揺れている様子が街灯の明かりで照らされていた。

それを見て、琢真の体中の毛が総毛立つ。

何がアレに載せられているか分からない。

だが、恐らくアレが莉理への『死』に繋がっている事を、直感的に悟ったからだ。

「藍田さああああああああん」

絶叫する。

大声を出して彼女に早くその場から離れさせようと警告する。

ところが、莉理は琢真の声に気づき、逆にその場に立ち尽くしてしまった。

「駄目だあああ！！ 離れろっ！！」

琢真は喉が潰れそうな程の大声で莉理に呼びかける。

もう莉理の体をハッキリ認識できる距離まで来ていた。あと少しだった。

ただそれは莉理も同じだったのか、琢真の顔を見て不思議そうな表情を浮かべていた。

その場に立ちつくしたまま。

しかし、莉理に琢真の焦燥は伝わらない。そんな莉理に、琢真はもう一度離れるように叫ぼうとしたところで、異質な音が周囲に響き渡る。

琢真は視界の端で捉えた。貨物の押さえが、遂に弾け飛んだのだ。その数瞬後、貨物の荷台の扉が左右に大きく開いて、その中から大小の鉄筋が滑り落ちるように出てきた。その所為で重心が崩れたのか、バランスを取れないトラックが、一度大きく左右にふらつく。そして、右から左にふらついた反動で、その中の鉄筋が勢いよく歩道に向かって降り注ごうとしていた。

その進路上の歩道には、莉理の姿がある
。「え？」

その表情を恐怖で彩った莉理が、呆然とした声を上げた。気がした。

琢真にはよく聞きとれなかった。

それは、琢真が大声で叫んでいたからだ。意味ある言葉ではない。何か胸のうちから出てきた何かだった。

「うあああああああああああああああ」

全速力でこいでいる自転車を飛び降りるように乗り捨て、転がりそうになるが必死に耐えて、その勢いを維持したまま坂を駆け上がり、驚いている莉理の手を掴むと、立ち居地を入れ替えるように思いつきり坂下に向けて引つ張った。

勾配もあるからか、莉理はなすすべなくそのまま転がるように落ちていった。

だが、琢真にはその様子を見ることは出来なかった。

何故なら、琢真の視界全部を大小の『死』が覆い尽くしていたからだ。

その瞬間、琢真の脳裏に様々な顔がよぎる。

厳しくもひょうきんな母親。いつも厳しい父親。しかめっ面で琢真に小言を言ってくる修司。いつも我侷を言って琢真を困らせる愛。必死に琢真に助力を願ってきた老婆。いつも一緒に馬鹿をやった金子達。莉理の事で琢真をからかう高橋と田中。いつも頭から湯

気を出して琢真を叱っていた池山。ノリの良かったクラスメイト達。琢真に親切にしてくれた木村。

皆の顔が浮かんでは消え、浮かんでは消えていく。

そして残った最後の時までの刹那の時間、彼女と大切だった存在が琢真の脳裏に浮かび続けていた。

それと共に、幼き日の想いと幼き日の誓いが、琢真の頭の中で蘇る。

（藍田さん……君は俺が絶対……）

そのまま黒くなっていく視界の中で、その最後まで莉理の無事を願い続けて　　琢真の意識は途絶えた。

間話 追憶

公園は夕陽の光であふれている。

もうあの親子の姿も無い。

そんな中、二人で隅っここのベンチに座ったままで、公園の地面に小さな影を落としていた。

「芳垣君……ありがとう」

「えっ？」

いっぱい笑ったことであろう落ち着いたオレが、藍田にお礼を言うより先に、藍田からお礼を言われてしまう。

藍田の励ましのお陰で、オレはお祖母ちゃんの『死』から逃げないでいられ、お祖母ちゃんがその後亡くなってしまっただけで幸せそうに笑っていられたと言うのは、ぜったい間違いなかった。

なので、その事に何千、何万回『ありがとう』を言わないといけないのはオレの方だった。藍田がそれを言う理由が分からなくて、驚きの声を上げてしまう。

「どうして藍田がお礼を言うんだ？ お礼を言わなくちゃいけないのはオレなのに」

そう尋ねると、藍田は静かに話してくれた。

藍田と、藍田のお祖父ちゃんの話。

藍田もオレと同じだった。

両親が二人とも働いていて、大好きなお祖父ちゃんがいて、そのお祖父ちゃんが死ぬほどの病気になったと言う。

もうすぐ死ぬ事と医者に言われて、最後の時間をオレのお祖母ちゃんと同じように、自宅で過ごしたんだそう。そして藍田もオレと同じ様にお祖父ちゃんの『死』が納得できなくて、お祖父ちゃん

と話すのを嫌がってしまったらしい。

ここまでではオレと同じだったけど、オレと藍田では全然違っていた事がある。

オレには叱ってくれた藍田が居たけれど、藍田にはその時叱ってくる人が居なかったという事だ。

だから藍田はお祖父ちゃんをずっと遠ざけて

そのまま、お祖父ちゃんは死んだ。

お祖父ちゃんは最後まで私とちゃんと話したいと言っていたらしい、と藍田は小さい声で言った。

初めは気にしないようにしていたけど、ジワジワとその事が藍田を責める様になって、やがて自分のしたことに後悔して、胸の痛みでどうしようもなくなって、そして

藍田は下を向きながら、リストバンドを外して自分の手首を見せ てくれた。

「……………」

オレはそれに、何も言えなかった。

藍田が居なければ、オレもそうになっていたかもしれないのだ。

その後、藍田は仕事を辞めた母親や、父親や周りにいる人に励ましてもらえて、何とか元に戻る事が出来たのだそうだ。でも、それでも時々後悔を思い出し、自分が嫌になる事が何度もあったらしい。実はオレに話しかけた時も、丁度その時だったそうだ。

藍田は少しでもその思いから逃げるために、何か悩んでいるように見えたオレに声を掛けたのだと言った。そして「そんな理由で、ごめんなさい」とオレに謝った。

そんなの気にしなくていいのに。

だけどオレの話を聞いて、オレの姿が少し前の自分と同じに見えるて、どうしてもほっとけなくなったそうだ。

そしてオレを説得して、オレと一緒にお祖母ちゃんと会って、お

祖母ちゃんの『有難う』を聞いた時に、まるで自分のお祖父ちゃんにそう言っただけのように感じたらしい。

すると、自分のした事をお祖父ちゃんにようやく許して貰えたと思えるようになって、気持ちがお楽になつたと言っただけだ。

「だから、私の方が『ありがとう』なの」

「……そっか」

でも、それじゃあオレは藍田に助けられっぱなしだ。

オレは『ありがとう』という言葉だけで、終わらせるわけにはいかない。

だから

「もしいつか、藍田が何か困っていた時とか落ち込んでいた時は、今度はオレが絶対助けるよ！」

鼻息を荒くして、オレはそう約束した。

それは何よりも大事な『絶対』だった。

藍田はその言葉に驚いて、「そんな事しないでいいよ」と断ってきたが、オレが絶対引くつもりがないことが分かったのか、最後には笑って言った。

「うん分かった。じゃあ、その時は……お願い」

日々

『月曜日』

長かった一日も、ようやく終わりを迎えた。

放課後になり、皆沈んでいた空気を払拭するかのようになり、賑やかに騒ぎ始める。

教室では昨日一昨日と行われたお祭りで撮った、携帯写真の見せ合いが行われ始めたようだ。殆どのクラスメイト達の顔は明るい。

高橋達も窓際の席に座って楽しそうに笑い合っている。

いつもの三人で、もしかしたらその中の一人が欠けていた事になっていたかもしれないなどは、その様子からは微塵も感じる事は出来ない。

「あれが琢真の望んだ結末だ……。そう沈み込むな」

「分かってる……。それは分かってるけどさ……。これじゃ琢真があんまりにも……」

その光景を見ながら、修司と愛が寂しそうに呟き合った。

明るい雰囲気で包まれている教室の中、この二人の周囲だけは異質な空気を放っている。

「確かに可哀相だが……。あの光景を護ることが琢真の望みだったんだ。きっと……。この結果に後悔はしていないだろう」

修司の推測に、

「そうね……。これがきつと……。琢真の望んだ結末だったのよね」
愛が哀しげに頷く。

「ああ……。そうに違いない」

「琢真……。アンタはきつと……」

琢真はその猿芝居をどこまで見ようか迷ったが、際限が無さそうなのでここで止めておく事にした。

「勝手に人が死んだ風に語り合うな」

「おお、琢真生きていたか」

「あら琢真、元気？」

今朝会った時から、ずっとこんな調子だった。

朝はこの二人に加え、悪乗りした金子達も一緒だったので更に手に終えなかった。どうやら、それほど琢真に死んでいて貰いたかったらしい。

「大体ね……アンタなんで生きてるのよ？」

一昨日から琢真が何度も言われている台詞だ。見も蓋も無いが、まあその事については琢真も同意見だった。

「さあ……何でだろうな？」

琢真は奇跡的に助かっていた。

どころか、傷らしい傷も負っていなかった。

伝え聞いた話によると、鉄筋の殆どは自分の体を逸れるかのように体のすぐ横の地面に突き刺さっていたらしい。残りの鉄筋は、あの時乗り捨てた木村の自転車が体に被さる様に乗っかり、盾の役割を担っていてくれたお陰で、直撃を避けられていたそうだ。

サドルや車体が鉄筋をガードしてくれており、それがなければ琢真は間違いなく重傷を負っていたに違いないとのことだった。

らしい、そうだと憶測が続いたが、それもその筈で、琢真が覚えてるのは莉理の代わりに剥き出しの鉄筋の山が自分の頭上に降り注いだ、という所までだからだ。

情けなくも琢真はその時気絶してしまい、次に目が覚めた時は病院の病室だった。

琢真が病院に居たのは、家の前から物凄い轟音が響いてきたので家の前に出てきた莉理の母親が、娘と、その同級生と、その惨状を

見て、慌てて救急車を呼んだためそうなったと言っ話だ。

愛と修司は、胸騒ぎがしたため所用を済ませてから、琢真の後を追ってきたそうなのだが、家の前の惨状を見た時には血の気が引いたらしい。

丁度救急車が自分や彼女を乗せて出発しようとしている時だったので、泡食って無理やり救急車に乗り込んだのだそうだ。その場に居た吉田達が言うには、その時の二人の様子はかつて見たことがない程青ざめ、取り乱していたとの事だ。

だが、いざ診断してみれば、琢真はかすり傷だけで健康体そのもので……。

それが恨みをかって、朝からの 正確には土曜日に目を覚ましてからだったが 悪乗りにつかっていたのだった。

「婆さん曰く、あの日は俺が死ぬ運命の日じゃなかったから、助かったんじゃないか、って言う話だったが……」

異常無しと診断された病院からの帰り道、琢真は老婆と再びバツタリ顔を合わせる事になった。

老婆に先程の事故の事を話そうとしたが、何故か老婆は既にその事を知っていた。曰く「視えた」らしい。

話を聞くと、それが視えたのは、丁度琢真が莉理を助けた頃と思われる時間と一致していた。

老婆は感慨深げな顔で、莉理を助けられた理由の推測と、恐らくもう問題ない筈だと言っ保証を琢真に告げた。

ただ、老婆もこのような事態は初めてな為、一応明日まで警戒はしたほうが良いかもしれないと言っ事だった。なので、次の日は一日、愛に莉理の傍にいてくれるように頼んで、琢真はその周囲で見守っていた。だが結局、老婆の言葉通り何も起きる事はなかった。

「ふん、ナンセンスだ」

「まあ、何でもいいじゃない、もう大丈夫って事なんだから」

相変わらずの修司に、珍しく突っかかる事無く愛が取り成す。

いつの間にか、愛の老婆に対する表現が丸くなっているのを琢真は感じた。

何か心境の変化でもあったんだろうか？

ただ、確かに老婆の話は、あんまりな理由である。なので、琢真はそれとは違った理由を考えていた。

自分が助かったのはきつと。

「しかし、あの老婆はまだこの街に居るつもりなのか？」

修司の疑問は琢真も抱いた事で、老婆と別れる時に同じ事を尋ねた。

老婆はその頃にはすっかり元の偏屈さを取り戻しており、

「ふんっ、小僧には関係ないわ！ …… まあ暫くはシャボンにおけるじゃろっ」

と、ツンデレ調の台詞を吐きながら去って行った。

琢真が老婆から聞いたそのままを話すと、愛も修司も顔を歪めた。恐らく、良からぬイメージを想像したのだろう。

「何三人で変な顔してんの？ …… まあいいや。ねえ、これから料理の快気祝いと、莉理がお祭りに行けなかった代わりに皆で遊びに行こうって話してるんだけど、三人とも参加しない？」

唐突に、三人の中に田中が割り込んでくる。

この後の事を考えているのか、表情は明るい。

「アタシは良いわよ」

真っ先に答えたのは愛だった。

この二人……それと高橋も、少し前までは琢真の所為で冷戦状態になっていた筈だった。しかし、今ではそんな事があった様子を微塵も感じない程、すっかり元通りの関係になっている。

もちろん理由があった。それは田中が、あんなに憤っていた琢真をも遊びに誘っている理由にも繋がっている。

結論から言うと、琢真のストーリーカー疑惑が払拭された為だった。

それには、修司の暗躍と池山の行動が大きく絡んでいた。

あの日、池山は何とか痴漢魔を交番に連行する事が出来て、その時の事情聴取の際に、捕まえたのは自分ではなく琢真だと言う事で話していたのだ。

その所為で、明日。琢真は警察から感謝状を受け取る事になっている。

琢真は捕まえたのは池山じゃないかと抗議をしたが、最初に発見したのはお前だと言う理由で、池山は自分の発言を曲げようとはしなかった。

その話は今日の朝、自分の新しいクラスを聞いていない事を思い出し、職員室を訪ねた琢真に池山から告げられた。更に、池山は同じ話をクラスでも披露した。

当然クラスメイト達は首を傾げた。ストーカーの筈の琢真が、痴漢魔を捕まえたというのが繋がらなかったのだろう。

そこに修司の謀を授かっていた金子達が甘い嘘を付く。

つまり、莉理を本当にストーカーしていたのはその痴漢魔で、琢真は偶然その気配を感じて彼女を護ろうとしていただけ、という嘘だ。

じゃあ、あの写真は？ という疑問ももちろん拳がった。だが、そこは『X』の行動を一部利用して答えていた。

痴漢魔は琢真が莉理の周りをうるついで知っているのを知って、邪魔者を排除しようと貼り紙を学校に忍び込んで張ったという話になっている。

流星に信じなかったクラスメイト達だったが、山口が白々しく、「そつえば、朝練している時にそんなオッサンを見た気がする」という発言をしたので、一気に話に信憑性が増したようだった。

その効果を期待していた為か、山口だけは朝登校した琢真に近づかずに、他のクラスメイト同様、警戒している振りをしていた。

琢真はその事は全く知らされていなかった為、山口の様子には酷

く困惑していたのだった。

ともかく、それにより琢真の風向きは変わり、かつ莉理本人が琢真に普通に接してきたので、結局皆話を信じ込んでしまった。

そのお陰で、クラスメイト達に謝られた挙句、今皆の中で、琢真は莉理を痴漢魔から身を挺して守った勇敢な漢、という認識に変わっている。琢真が皆に問い詰められた際に何も言わなかった事も、勝手に良い様に解釈してくれているようだ。

なお、クラスも被害者である筈の莉理を始めとするクラスメイト達が、琢真のクラス移動撤回を願ってくれた事と、痴漢魔逮捕協力の事もあって、琢真は元のクラスのまま居られる事になった。それは素直に嬉しかった。

だが、あくまでその話はクラスメイト達の間だけで浸透した話で、他のクラスや教師達は全く知らない事だ。なので、まだ琢真に対しての視線には冷たいものも多かった。

ただ修司曰く、別に何もなくても生徒間では徐々に美談として広まっていくから、その内周りの見る目も変わる筈だと言うことだった。

痴漢魔とはいえ、全く関係のない罪を押し付ける事に抵抗を覚えただが、この話は教師までには広まらないだろうから、問題ないという修司の言葉に少し安心した。

それにその話を広めておけば、『X』の事を表ざたにする必要もなくなると、愛も積極的に賛同していた。

。そう言えば、その『X』はあれからどうしているかと言うと

「あ。あの子、今尾登と歩いていったわね」

「ふむ……。あんな事件を起こしておいて、いい気なものだ」

「るっさいわね〜！ 良いじゃないのよ、琢真が許してるんだから。アンタがどうこう言う話じゃないでしょ!？」

「何を言う！ その所為で俺達が……」

「下らない！ 大体アンタは……」

何やらいつも通りの言い合いが始まってしまふ。

『X』は琢真が莉理を追って公園を離れた後、直ぐに現れた尾登に、愛によって無理やり告白させられたそうだ。

まあ、その場に居た金子の話からすると、もっぱら愛が話していたそうだが。

で、結局二人は付き合う事にこそならなかったものの、友人から始めようと尾登が提案した事が、今見た光景に繋がっていた。

尾登の隣で、恥ずかしそうに顔を上気させていたがとても幸せそうだったので、きつとこれで良かったのだろう。少なくとも、もう二度と彼女は誰かを傷つけようとは思わないに違いない。

なお、今回の彼女の暗躍を内緒にする代わりに、莉理に対しては今まで通り振舞う事を約束させていた。

ちなみに、尾登が莉理の修学旅行の写真の殆どに写りこんでいた事は、あの場で愛に追求されていた。

ただ写りこんでいた理由は、単に莉理への告白のタイミングを圖っていたからだというだけだったらしい。その様子を尽く撮影されていたのは不運だったとしか言いようが無く、尾登には同情せざるを得ない。

「ちょっと！ 二人とも喧嘩してないで、参加するか教えてよ！」

田中の苛立った声により、二人は争いを一時中断した。

フンツと互いに顔を背けあっている。

「三人とも参加で良いわ」

愛が勝手に答える。

琢真は特に不満はないが、修司は違つたようだ。再び眉をしかめ始めていた。

だが、何か苦情的な事を言う前に、

「そう言えば、翔子。アンタ金曜日何してたの？ 街で見かけたんだけど」

と、愛が田中に質問し、

「良くぞ聞いてくれました！！それがさあ、聞いてよ〜」

と、田中が愚痴を始めてしまった為、何も言わずにそのまま黙り込んでしまった。

琢真には何の話が分からなかったが、田中の話は……下らない内容だった。

田中はそれをひとしきり話し終わると、満足したように莉理達の元に戻っていき、後には疲れた顔の愛が残された。

田中から三人の参加を聞いたのか、高橋と莉理がチラリとこちらを見て微笑んだ。その莉理の笑みには、あの晩の恐怖の色は全く感じられない。

結局、琢真は事故の際にかすり傷程度でほぼ無傷だったのだが、莉理は違った。

と言っても、深刻な外傷があった訳ではない。それは膝と手に擦り傷がある程度だった。

ところが、琢真が引つ張った際、受身を取れず地面に頭を打ちつけて気絶していたらしい。

そして、病院に運ばれて程なくして目を覚めたのだが

「でも、莉理が何にも覚えてないっていうのは、アンタとしては残念ね」

と言う事だった。

莉理はその時の影響か、公園に入った後の記憶を失っていた。

ただ、他は何も異常がなかったため、土日の検査入院の結果、晴れて退院していた。

「何で俺が残念なんだよ」

状況が仕方なかったとは言え、自分の所為で折角の休日のお祭りをふいにさせてしまい、琢真としては彼女に申し訳ないと思ってい

たので、残念なんて思う筈もなかった。

なお、琢真は莉理が短い間とは言え記憶を失う事になったのは、自分の所為だという事で莉理の母親にも詫びたが、それには怒られるどころか感謝されてしまった。

琢真がそうしなければ、娘はどうなっていたか分からない、と言う事で。

「だって考えても見なさいよ？ 自分の命の恩人を自分が認識しているのと、人から聞かされて認識したのじゃあ、感謝の度合いが違うでしょ」

「ふむ……確かにな」

「もしかしたら、もしかしたかもしれないのに！」

愛がニヤケながら言った言葉に、修司が頷いている。

こいつらは、何も分かっていない。

「何言ってるんだ。もし覚えてたりしたら、あの時感じた恐怖とかが負担になっちまうかもしれないじゃねえか。良いんだよ、これで」
楽しそうに微笑んでいる莉理の顔を見ながら、琢真はそうキツパリと告げる。

その返答に二人はポカンと間の抜けた顔を浮かべた。

しかし、直ぐにそれを、修司は呆れた顔に、愛は笑みを浮かべた顔に変えると、

「……仕方ない。報われない琢真の為に、今日はパーっと盛り上がるわよ！」

愛が琢真の手を引っ張って莉理達の輪に連れて行くことし、修司が黙ってその後続いた。

それにより、金子達も近づいてきて
琢真達はいつもの賑やかさに包まれていった。

「あの……芳垣君」

どこに繰り出すかを、皆があーだこーだ揉め始めた中。莉理がそつと輪を抜け出し、皆の様子を遠巻きに眺めていた琢真に声を掛け

てきた。

「な、何？ どうかした？」

その莉理の行動に、琢真は思わず上擦ってしまふ。

「この前は事情がよく分からなくて、ちゃんとお礼を言えてなかったから……」

莉理は少し恥ずかしがっている様に、僅かに頬を上気させる。

そして。

「……芳垣君」

見上げるように琢真の目を見つめて、

「ありがとう」

と、優しく微笑んだ。

その莉理の笑顔には一点の曇りもなく、穏やかな日々を取り戻した事を、幼い日の誓いを守れた事を、琢真はようやく心から実感したのだった。

日々（後書き）

こんな見づらい文章を（笑）最後までお読み下さった方々、本当にお疲れ様でした。

そして、少しでも作品を読んでくださった方々、本当に有難うございました。

宜しければ、誤字脱字報告、気になる点、感想、評価などを頂けると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0048/>

リミット

2011年7月10日03時52分発行